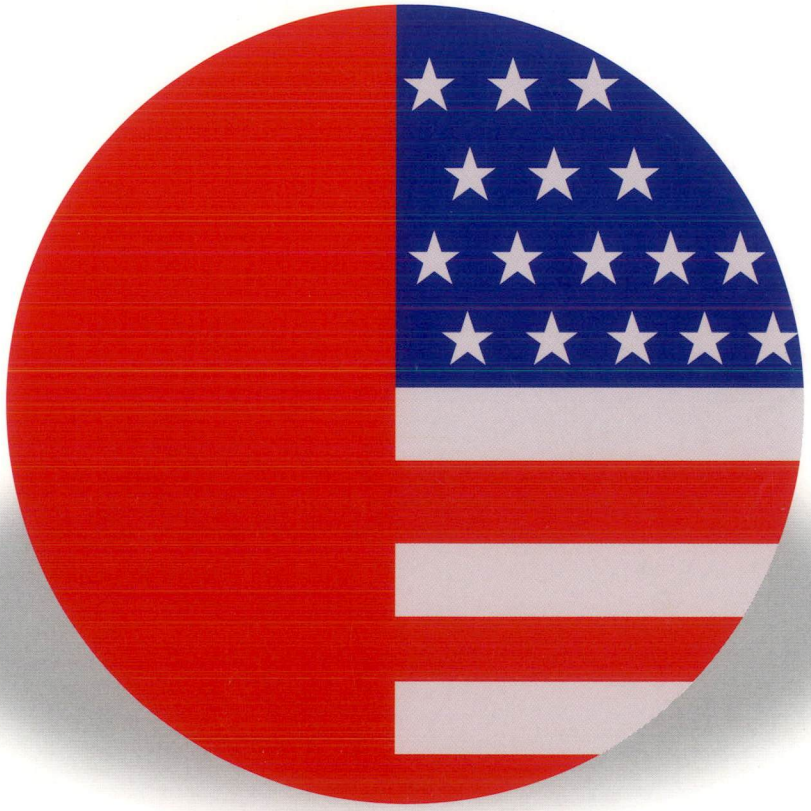
第60回日米学生会議
日本側報告書

The 60th Japan-America Student Conference



新たな潮流へ

～60回を通しての再考と創出～

Students Redefining Their Role through Insight and Action

第2回・16回日米学生会議縁の場所リードカレッジにて

達成感溢れるファイナルフォーラム後の集合写真

第 60 回　日米学生会議　日本側報告書

目　次

序　章　日米学生会議概要 …… 1
日本側実行委員長挨拶 …… 2
アメリカ側実行委員長挨拶 …… 3
日米学生会議の歴史 …… 4
宮澤元首相、キッシンジャー元米国国務長官談話 …… 5
本文中の略語について …… 5

第1章　第60回日米学生会議事業概要 …… 7
第60回日米学生会議事業概要 …… 8
参加者名簿　日本側 …… 10
アメリカ側 …… 11
メディアへの掲載 …… 12

第2章　事前活動 …… 15
第3回日米ユースフォーラム …… 16
第59回日米学生会議報告会 …… 17
東京講演会 …… 18
京都講演会 …… 19
春合宿 …… 20
英語ディベートワークショップ …… 24
アメリカンセンター講演会 …… 25
横田基地訪問 …… 25
KIPP Forum・Nano Japan英語ディスカッション …… 26
京都英語ディスカッション …… 26
防衛大学校訪問 …… 27
横須賀基地訪問 …… 28
直前合宿 …… 29

第3章　本会議・サイト活動 …… 31
ポートランド …… 32
ロサンゼルス …… 37
モンタナ …… 44
ボストン …… 55

第4章　本会議・分科会活動 …… 63
環境とコミュニケーション分科会 …… 64
法と社会分科会 …… 71
企業の社会的責任(CSR)と市民分科会 …… 77
科学と倫理分科会 …… 84
現代社会と伝統分科会 …… 90
悲劇の記憶分科会 …… 96
マイノリティと多文化社会分科会 …… 102

第5章　参加者の声 …… 111

第6章　アラムナイ・参加者の実像 …… 145
アラムナイ寄稿文 …… 146
数字で見る日米学生会議 …… 150

第7章　第61回日米学生会議概要 …… 153

第8章　日米学生会議にご協力いただいた方々 …… 157

序　章

日米学生会議概要

日本側実行委員長挨拶…… 2
アメリカ側実行委員長挨拶…… 3
日米学生会議の歴史…… 4
過去の参加者からのメッセージ…… 5
宮澤喜一氏
ヘンリー・A・キッシンジャー氏
本文中の略語について…… 5

日本側実行委員長挨拶

第60回日米学生会議実行委員会
日本側実行委員長　武田　尚樹

今一度、JASCの存在意義について考えてみたい。

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」

発足当初、当会議はこのような理念の下に開催された。その意志を引き継いだ学生によって、今年度の第60回まで継承され、日米の架け橋としての役割を果たしてきた。しかし、目の前には「世界平和」という大きな課題が未だ残っている。我々にとって、創立当初の目的である２国間の平和的関係に満足することなく、世界へ、そして未来へと目を向けていかなければならない時にきているのではないだろうか。

時代の変化とともにJASCの担うべき役割は変容してきたが、両国間の相互理解の重要性はいつの時代も変わることはない。しかしながら、アメリカにおける日本への興味・関心が以前よりも失われつつある「ジャパンパッシング」と言われる状況が憂慮される今、現地の学生はもとより、アメリカの一般市民に対しても日本の「良さ」を伝える努力を続けていくべきではないだろうか。また、日米という２国間の枠組みに捉われずに互いの文化、歴史、価値観の相互理解を図ることで、世界の中の日米という見方に基づいた考えを構築していくことが必要である。

第60回日米学生会議は、「新たな潮流へ～ 60回を通しての再考と創出～」というテーマの下で開催された。このテーマは、日米関係及び、日米学生会議の意義を問い直し、新たな価値を創出していくことを目的として設定したものである。そしてJASCを通して学生の立場から自身の考え方や価値観の根幹を見つめなおす機会を設け、自己の役割を再考することで多角的に世界を見ることを期待した。また当会議では、フォーラムにおいて学生の立場から社会に向けて意見を発信していく機会が多々あった。特定の利益に拘束されない我々の視点から率直に疑問を投げかけ、周囲に対し既存の価値観を問い直すきっかけを創り出したかった。

当初の目標はアメリカで大きなフォーラムを開き、一人でも多くの方々を招いて我々の行っている活動や議論している内容を知ってもらうことだった。しかし、予算の問題やアメリカで一般の聴衆を集めることの難しさと直面した。結局思い描いていたような何百人もが集まるフォーラムを開くことができなかったものの、少人数ながら、一人一人と意見を交換し、価値観を分かち合うことができたのではないかと思う。本会議でJASCの意義を一番感じたのが、モンタナでのWar and Peace Field Tripであった。そこではPeace Activist、第二次世界大戦従軍経験者、現役の軍人、地元の住民、そして日米の学生が大きな円を作り、戦争や安全保障についての意見を交わした。方法は異なるけれど、皆が平和を願って活動している。現役の軍人の方がPeace Activistに「I think people like you and I should talk more」と言ったときは感動した。JASCは小さな貢献かもしれないが、全く違う価値観が衝突し、分かち合うことができた瞬間だった。

もう一つの大きなJASCの意義というのが、“人の成長”であろう。1934年の会議発足以来、日米両国4000名以上の学生を輩出してきた。１ヵ月間の会議の中で学ぶことは多大であり、ときには挫折し、悔しさをバネに更に成長していくこともある。

大きな希望と夢を持って会議に挑んだ参加者にとって、大きな壁はいくつもあったと思う。思うように分科会が進まなかったり、ディスカッションで発言できなかったりと。私自身も「このような会議にしよう」と思いつつも多くの壁にぶつかった1年であり、自分の限界を感じることもあったが、学生のこれからの可能性を感じることも多かった。今回達成できなかった目標も、これを機に将来自身の力をつけることにより達成したいと強く心に誓っている。それはまさにJASCが与えてくれた“人の成長”というチャンスであり、他の参加者それぞれにもそういったことをぜひ感じてもらいたい。

JASCの存在意義というものは結局今分かることではないのかもしれない。20年、30年後に私たちが会議で得た経験を活かし、社会に、そして世界の平和に貢献しているかによって測られるものなのだろう。

最後になりましたが、第60回日米学生会議の開催に際して多大なるご協力を賜りました後援団体の皆様、ご賛助していただいた財団・企業の皆様、準備段階の勉強会でご指導賜りました講師の皆様、日頃から大変お世話になった国際教育振興会、ISC, Incの皆様、そして温かく現役の活動を見守って下さった会議OB・OGの皆様、1年間共に会議を一緒に作り上げた実行委員、そして会議で活躍してくれた参加者のみんな、また、会議成功のためご尽力いただいた全ての皆様へ、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

アメリカ側実行委員長挨拶

Samantha Scully
Chairperson, American Executive Committee
60th Japan-America Student Conference

I still clearly remember the hot August day in Kyoto, when we were elected as the Executive Committee for the 60th JASC. We promised to our predecessors that we would organize the best JASC. Of course, we had to then ask ourselves, how were we going to achieve the goal? Here, I would like to articulate a number of things that made the 60th JASC remarkably unique, successful, and significant.

"Students redefining their role through insight and action", our 60th theme strikes a different chord, especially compared to previous conventional JASC themes emphasizing the Japan-America relationship. In the 60th, we focused on the role of students in the Japan-America global framework. How can we as both a conference and a generation redefine what it means to be a student? How do we confront our limitations, and how do we expand our opportunities as students? As future global citizens representing Japan and the United States, we challenged ourselves to offer creative insight and meaningful action.

To commemorate our long proud history, we initiated the JASC Time Capsule Ceremony at Reed College in Portland. I cannot imagine another site more historically appropriate than Reed College, the site of the first American hosted JASC. The JASC alumni recorded their favorite JASC memories into the time capsule, and invited our entire delegation to a wonderful dinner to celebrate the 60th JASC. Once again, we witnessed how JASC continues to strive with the undivided support it receives from the alumni community.

The 60th JASC witnessed a couple of first times in addition to the time capsule ceremony. The 28 Japanese delegates were selected from a record high applicant pool of more than 250 applicants. Our cross-cultural engagement with the brightest future leaders of Japan was highly uplifting and rewarding. It was also the first time JASC visited Missoula, Montana. This was possible thanks to the generous invitation from the University of Montana and Maureen & Mike Mansfield Center. We were honored to have self-motivated delegates that helped coordinate an event with other important student organizations in Boston.

These are just a few of the many things that distinguish the 60th JASC from previous ones. In this comprehensive report, you will further discover not only what, but more importantly how we learned about the Japan-America relationship. Through active participation in a wide variety of cultural exchange, dinner receptions, academic roundtables, keynote speeches, host family experience, volunteer opportunities, business and government visits, we discovered numerous roles that need to be fulfilled to continue building the Japan-America relationship. We developed a stronger understanding of what it means to be a globally-minded student in today's world. Through presentations and discussions, we have not only inspired each other, but also the larger communities in Japan and the United States.

My final remark is wholeheartedly dedicated to all of the generous JASC supporters. The success of the 60th JASC would have been unattainable without your dedicated support and benevolent contribution. On behalf of the 60th Japan-America Student Conference, I express my deepest gratitude to you. Thank you.

Sincerely,

Samantha Scull

日米学生会議の歴史

日米学生会議は、1934年、満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念が掲げられた。当時の日本政府の意思と能力の限界を感じた学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協議会(国際学生協会の前身)を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも、4名の学生使節団が渡米し、全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢99名の米国側代表を伴って帰国した。こうして第1回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国(当時)への視察研修旅行も実施されるに至った。

日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後1940年の第7回会議まで、以下の通り日米両国で毎年交互に開催されることとなる。第3回(1936年)早稲田大学。第4回(1937年)スタンフォード大学。第5回(1938年)慶應義塾大学。第6回(1939年)南カリフォルニア大学。第7回(1940年)津田塾大学。しかし、太平洋戦争の勃発に伴い、日米学生会議も中断を余儀なくされた。

終戦後、会議復活の声が上がり、当時の学生とかつての参加者の努力により、日米学生会議は1947年に再開し、第8回を迎えることとなった。しかし、当時日本は占領下にあり、米国から学生を招くことが不可能であったため、在日米兵および軍属の中から、大学生の資格を持った者を選んでの会議再開であり、1953年の第14回会議まで日本のみで開催が続いた。翌1954年、第14回会議に参加したコーネル大学の学生の提案により、第15回会議が戦後初めて米国の同大学で開催することを決定した。しかし、当時の日本の経済状況では、日本側参加者の渡米費用を捻出することは容易ではなく、米軍の輸送機の提供を受け、15名のみの日本側代表が参加するに留まった。

これがきっかけとなり、日本に留まった参加者の中から「2国間関係のみならず、多国間で学生による交流が行われるべき」との声が強まり、日米学生会議を国際学生会議に発展的に解消することが決定され、同じく1954年、アジア地域の学生との会議を主目的に第1回国際学生会議が開催されることとなる。なお、国際学生会議は現在も、アジアだけでなくヨーロッパを含む諸国から学生を招集する形態で継続されている。一方の日米学生会議は、この決定により、1954年をもって、再び中断されることとなった。

1963年に至り、翌1964年が第1回会議創立30周年であることを機に、日米相互開催の形で会議再開を望む声が高まった。これを受け、第1回会議創始者が多数理事を務めていた国際教育振興会が日本側主催者としての責任を取ることで会議が再開することが決定された。第1回及び第2回の米国側参加者の努力もあり、1964年、日本側参加者77名と米国側参加者62名による、第16回会議が実現し、ゆかりの深いリードカレッジで開催されることとなった。1964年は、東京オリンピックが開催された年でもあった。

その後、日米相互開催の下、会議は継続されるが、1973年第25回会議において、当時の学生によって抜本的な改革がなされ、現在の会議の基本形態が整備されることとなる。それは主に、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎年の会議ごとにテーマを設定する、期間を1ヵ月間とする、などである。円が変動為替相場制に移行し、米軍が南ベトナムより撤退した1973年でもあった。

1978年には、戦前の日米学生会議参加者有志により、会議の継続に必要な経済的支援を主目的とする、国際教育振興会賛助会が設立され、会議永続への道

が開けることとなった。また、次いで第31回会議が開催された1979年には、米国においても戦前の参加者によりJASC, Inc.が設立され、米国側実行委員会をサポートする体制が確立された。

その後日米学生会議は、財団法人国際教育振興会とJASC, Incの協力の下、日米両国学生が主体的に企画・運営を担うという形態を取る中で、継続されることとなる。そして2007年度にアメリカ側主催団体であるJASC, Incは、ISC, Inc（International Student Conferences）と名前を変え、他国との学生会議開催も視野に入れ始めた。創設時と今日では日米両国を取り巻く環境は大きく異なり、会議の形態自体も変化している。現在の日米学生会議は、会議創設時の理念を受け継ぎつつも、時代の変化に対応し、今日に至っていると言えよう。

過去の参加者からのメッセージ

元内閣総理大臣宮澤喜一氏
1939、1940年日米学生会議参加者

As one whose own first involvement in Japan-U. S. relations was under the auspices of the Japan-America Student Conference in 1939, I can tell you honestly that it was one of the formative events of my lifetime. Having stood in your shoes more than fifty years ago, I sincerely hope that you will take full advantage of your participation in the JASC.

元アメリカ合衆国国務長官ヘンリー・A・キッシンジャー氏
1951年日米学生会議参加者

I had had little opportunity, in this post-war period, to meet and exchange views informally with Japanese people. The Japan-America Student Conference provided that opportunity, and from it came many valuable new perspectives on Japanese culture and society. It was also at that time that my interest was awakened in Japanese artistic and aesthetic traditions, and appreciation which remains with me to this day.

本文中の略語について

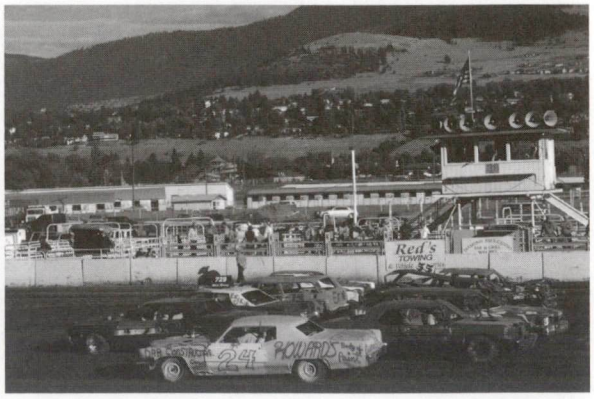
JASC（ジャスク）：日米学生会議（Japan-America Student Conference）の略。
JASCer（ジャスカー）：日米学生会議参加者。過去の参加者も含む。
ISC, Inc：アメリカ側主催団体であるInternational Student Confereces, Incの略。
EC：実行委員会、または実行委員Executive Committeeの略。
AEC：アメリカ側実行委員会American Executive Committeeの略。
JEC：日本側実行委員会Japanese Executive Committeeの略。
デリ、デリゲート：日米学生会議参加者。Delegate。
ジャパデリ：日本側参加者。
アメデリ：アメリカ側参加者。
アラムナイ：日米学生会議の過去の参加者。
サイト：本会議開催地の意味。ポートランドサイト等。
RT：参加者がいずれかに帰属する分科会のこと。Round Tableの略。
リフレクション：参加者が会議の感想や反省点を話し合う場。

NOW SHOWING

Japan-America Student Conference
Since 1934

ENTRANCE

The 60th Japan-America Student Conference


Red's
TOWING
ROUARDS

第１章

第60回
日米学生会議概要

第60回日米学生会議事業概要…… 8

参加者一覧　日本側……10

アメリカ側……11

メディアへの掲載……12

“Students Redefining Their Role through Insight and Action”
新たな潮流へ～ 60回を通しての再考と創出～

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念の下、1934年、満州事変を契機に悪化していた日米関係を憂慮していた4人の日本人学生が太平洋を渡り、日米学生会議を創設した。以後、太平洋戦争勃発に伴う会議中断をはじめ数々の困難を乗り越えながら、学生同士の率直な対話が相互理解を深め、平和の実現に貢献するという創設者の信念が継承され今日に至る。日米学生会議は創設時より学生独自による会議の企画、運営が行われ、毎年夏に日米交互で開かれる約1ヵ月の会議は、日米の学生による相互理解と友情を醸成する場であり続けた。

現在の日米関係は、歴史上最も成熟した2国間関係とも言われるようになり、創立当初の目的は達成されつつある。しかし我々を取り巻く世界に目を向けると、テロリズム、環境問題、貧困、民族問題など様々な問題が山積している。このような状況の中で日米両国は、良好な2国間関係のみに満足せず、「世界の中の日米」という視点に立った行動が求められている。一方で、数々の困難を乗り越えながら日米関係に寄与し続けてきた日米学生会議は、良好と思われがちな日米関係、国際交流の一般化、社会貢献を掲げる学生団体の増加など様々な要因によって差別化と新たな価値の創出が求められている。第60回日米学生会議は、“Students Redefining Their Role through Insight and Action”「新たな潮流へ～ 60回を通しての再考と創出～」をテーマとして掲げ、ポートランド、ロサンゼルス、モンタナ、ボストンで開催される。この記念すべき第60回会議を機に、日米関係、また日米学生会議自体を問い直し、さらなる発展への追求を目指す。

日米両国の学生は、文化や言語の壁を乗り越えながら、特定の利益に拘束されない率直な議論を交わすこととなる。その過程において、参加者は自身の考え方や価値観の根幹、そして社会の中における自身の役割を見つめ直す機会に遭遇するだろう。第60回日米学生会議では、分科会活動、フォーラム、フィールドトリップなどで個々人が主体的に行動する場を設けることにより、自身の考えや思いを積極的に発信していくこととなる。また、政府、地方自治体、NGO、NPO、有識者の方々及び会議参加者以外の学生との対話を積極的に取り入れ、共に再考する機会も創出していく。このように日米学生会議を通じて得られた経験や成長はそれぞれの参加者に蓄積され、築き上げた信頼と絆は様々な問題を解決する一助となり、必ずや世界に平和をもたらすための礎となるだろう。第60回日米学生会議は、学生独特の意見や考えを発信し、行動する場を設け、未来への強固な基盤を創出することにより、新たな潮流を生み出す会議となることを目指す。

事業概要

【主催】
財団法人　国際教育振興会

【企画・運営】
第60回日米学生会議実行委員会

【後援】
外務省、文部科学省、米国大使館、日米文化センター、財団法人　国際ビジネスコミュニケーション協会、社団法人　日米協会

【本会議期間】
2008年7月28日（月）～ 2008年8月22日（金）

【開催地】
ポートランド、ロサンゼルス、モンタナ、ボストン

【参加者】
日本側36名（実行委員8名を含む）
アメリカ側26名（実行委員8名を含む）

本会議概要

第59回日米学生会議の参加者から選出され、発足した実行委員会が、日本側の主催団体である財団法人国際教育振興会、米国側はISC, Incの協力の下、本会議開催のための準備活動を行なう。参加者が決

定した後、所属分科会のテーマに関するレポートを作成し、講演会や勉強会、合宿などを事前に行ない、夏の本会議に臨む。

本会議では、日米各36名、合計72名の学生が約1ヵ月にわたって共同生活を送る。本会議の主な活動として、討論が中心となる分科会、各種のフィールドトリップ、終盤に開催されるフォーラムなどが挙げられる。参加者が7つの分科会に分かれ、第60回会議のテーマである「新たな潮流へ～60回を通しての再考と創出～」の下、ディスカッションを行なう。また、フィールドトリップでは、各自の視野を広げ、現実に即した議論をするための基礎とし、討論の充実化を図る。さらに、本会議では議論にとどまらず、ホームステイやフォーラムなど積極的に地域の方々との交流を図っていく。フォーラムでは、分科会での討論の結果など本会議の成果を社会に向けて発信する。

本会議終了後には、参加者は会議の内容を報告書にまとめ、第60回日米学生会議の総括とする。各参加者は、本会議で得られた経験を胸に社会へと巣立っていく。

【分科会】

本会議において活動の中心となる分科会は7つ設けられており、日米双方からなる参加者が、本会議期間を通じて議論を重ねる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪れるなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。なお、第60回会議における分科会は以下の通りである。

・環境とコミュニケーション～自然と共生するために～
Communicating Environmental Ethics: Media Mindset and Ecological Inspiration
・法と社会
Comparative Law and Society
・企業の社会的責任（CSR）と市民～社会発展への新たな視点～
Corporate Social Responsibility in Development
・科学と倫理～真に豊かな社会形成を目指して～
Ethics: Holding Science Accountable to Humanity
・現代社会と伝統～調和と共生の模索～
Exploring the Relationship between Tradition and Modernity
・悲劇の記憶～歴史認識と教育の役割～
Memory of Tragedy: Examining Vehicles of Bias, Education and Peace
・マイノリティーと多文化社会
Minority Issues: From Social Discrimination to Social Contribution

【フィールドトリップ】

分科会の議題や各開催地に関する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGOおよび研究所などへ訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることができる貴重な機会であり、現実に即した議論をするための基礎とする。

【Special Topics】

テーマが既に決められている分科会とは異なり、参加者が個々の興味や便宜に沿った議論を自由に設定し、異なる視点から議論を行なう。参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見力、論題設定能力などを養う。同時に、より広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想の獲得により、会議をより充実させる。

【Conference Wide Discussion】

分科会では扱わないテーマを対象とし、日米学生会議OB、OGや専門家をゲストスピーカーとして招き、第60回会議のテーマである「再考と創出」を掲げ、既存の事柄への問いかけをするとともに、新たな潮流へと向かう可能性について参加者と共に考えることを目的とする。

【Conference Wide Reflection】

参加者が一同に集い、会議中に感じた悩み、不安、感動、喜びなど、様々なことを自由に話し合う。自分の思いを全体に伝え、また他者の思いを共有することで、自己を振り返り、他の参加者との相互理解を促進することを目的とする。

【ファイナルフォーラム】

会議の最終開催地、ボストンで行なわれる。本会議における分科会の発表など、第60回日米学生会議の成果を提示していく。現代社会が抱える問題を来場者と共有し、会議の成果を社会に発信することを目標とする。

第60回日米学生会議日本側参加者名簿

日本側実行委員	大学	学部・専攻	学年	RT
武田尚樹*	慶應義塾大学	経済学部	3年	
李 凌叡**	東京大学	法学部	4年	Law
伊関之雄	京都大学	経済学部	3年	CSR
呉 宣咏	早稲田大学	国際教養学部	3年	Minority
高野恭平	岐阜大学	医学部医学科	5年	Science
竹内菜緒	国際基督教大学	教養学部国際関係学科	3年	Environment
廣田隆介	慶應義塾大学	法学部政治学科	4年	T&M
渡辺恭子	広島市立大学	国際学部国際学科	4年	Memory

＊は実行委員長、＊＊は副実行委員長を示す。

日本側参加者

明石恵美子	慶應義塾大学	法学部政治学科	4年	Memory
李 鎭河	東京大学	工学部電子工学科	4年	Science
居鶴有未恵	一橋大学	国際・公共政策大学院公共法政プログラム	修士課程2年	T&M
伊藤昂介	慶應義塾大学	法学部政治学科	2年	CSR
今矢涼子	同志社大学	法学部法律学科	4年	Law
大井あゆみ	慶應義塾大学	法学部政治学科	4年	Science
小野 元	京都大学	総合人間学部	2年	Minority
金光慶紘	東京大学	工学部システム創成学科	4年	Environment
後藤昌也	千葉大学	医学部	6年	Law
坂本朋美	京都大学大学院	農学研究科森林科学専攻	博士課程1年	Environment
新宮清香	東京大学	法学部	3年	T&M
神馬光滋	国際基督教大学	教養学部国際関係学科	2年	Minority
高畑乃枝	国際基督教大学	教養学部社会科学科	3年	Memory
竹内友里	東京大学	教養学部文科一類	2年	CSR
田中 豪	東京大学	教養学部文科一類	2年	Minority
中村玲奈	慶應義塾大学	法学部政治学科	3年	Environment
仁平理斗	早稲田大学	国際教養学部	4年	Environment
比嘉慎一郎	静岡大学	工学部システム工学科	3年	Memory
廣瀬祥子	立命館大学	国際関係学部国際関係学科	4年	CSR
誉田有里	慶應義塾大学	法学部政治学科	2年	Law
松尾恵輔	早稲田大学	法学部	3年	T&M
松本秀也	慶應義塾大学	商学部	3年	T&M
盛島正人	上智大学	比較文化学部比較文化学科	4年	CSR
安川瑛美	慶應義塾大学	文学部人文社会学科	4年	Minority
油井英孝	東京大学	経済学部経済学科	4年	Law
横山雄一	東京大学	教養学部文科一類	2年	Science
渡辺千尋	上智大学	文学部英文学科	4年	Memory
渡邊ともね	東京医科歯科大学	医学部保険衛生学科	2年	Science

Law=法と社会、Minority=マイノリティと多文化社会、Science=科学と倫理～真に豊かな社会形成を目指して～、
Environment=環境とコミュニケーション～自然と共生するために～、T&M=現代社会と伝統～調和と共生の模索～、
CSR=CSRと市民～新たな社会発展の視点～、Memory=悲劇の記憶～歴史認識と教育の役割～

第60回日米学生会議アメリカ側参加者名簿

アメリカ側実行委員	大学	学部・専攻	学年	RT
Sam Scully*	Bowdoin College	Asian Studies	Junior	
Hidemi Tanaka**	Macalester College	Political Science	Junior	CSR
Jessa Hutchins	Fashion Institute of Technology	Textile Marketing	Junior	Law
Bethany Marsh	University of Washington	Japan Studies	Graduate	Memory
Josh Schlachet	Cornell University	Asian History	Senior	Environment
Aya Nakanishi	University of Pennsylvania	Psychology	Junior	Minority
Joshua Turner	University of Hawaii at Manoa	Japanese	Senior	T&M
Nancy Yang	Harvard University	E. Asian Studies	Junior	Science

＊は実行委員長、＊＊は副実行委員長を示す。

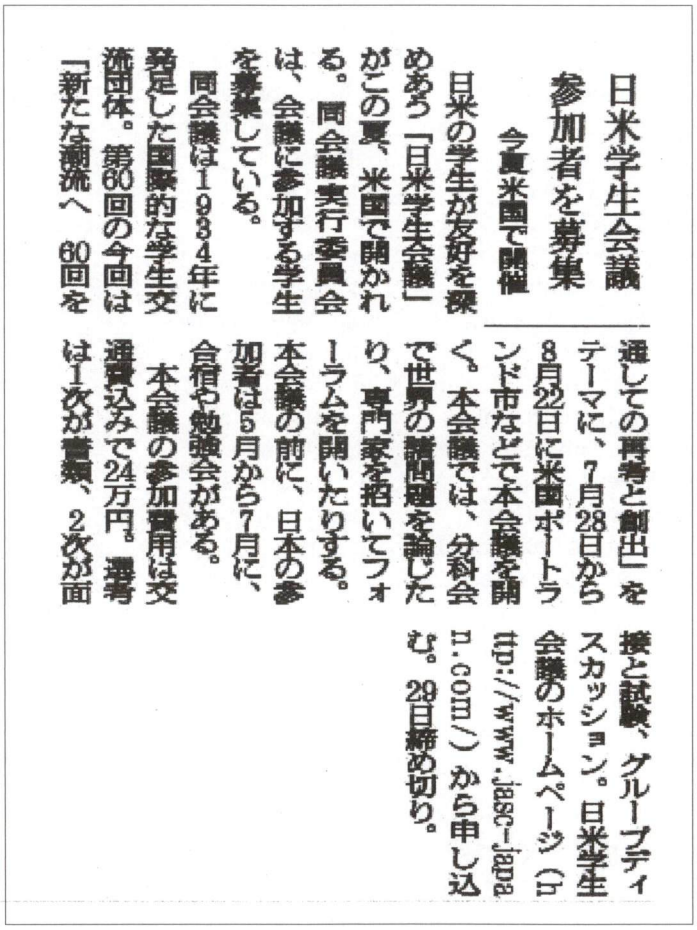
アメリカ側参加者

Neal Akatsuka	University of Hawaii at Manoa	Anthropology	Junior	Science
Robert Cooper	Kalamazoo College	East Asian Studies	Sophomore	Environment
Jon-Michael Durkin	University of Akron	Political Science	Junior	Environment
Kayoko Hirata	Cornell University	Urban Studies	Freshman	Environtment
Elizabeth Jones	Bowdoin College	Self Defined	Sophomore	Environment
Ji Eun "Karen" Jung	Dickinson College	Int'l Business	Freshman	Minority
Chien Lam	Mount Holyoke College	Int'l Relations	Sophomore	T&M
Hannah Lemmer	Smith College	East Asian Culture	Sophomore	Memory
Fausia Pagwuni Mahama	Dickinson College	Int'l Business	Sophomore	Minority
Colin Moreshead	Wesleyan University	East Asian Studies	Freshman	Science
Rebecca Norton	Willamette University	Linguistics	Senior	Law
Edward Phillips	University of Washington	Japanese Ling.	Junior	CSR
Gregory Schuster	University of Redlands	Global Business	Sophomore	T&M
Yuichi Shimokawa	Winona University	Global Studies	Sophomore	Memory
Catherine Simes	Wellesley College	Int'l Relations	Freshman	Law
Rachel Staum	Harvard University	East Asian Studies	Junior	Memory
Peter Weldon	University of California, LA	Education	Graduate	CSR
Charity Yoro	University of Hawaii at Manoa	Int'l Business	Senior	Minority

メディアの中の第60回日米学生会議

第60回日米学生会議実行委員会は、より多くの方に日米学生会議の存在を知っていただくために、様々なメディアを通した広報活動を行ってきた。本会議中にも取材を受け、記事として取り上げていただいた活動やイベントもあった。以下に掲載するのはその主なものである。

・『朝日新聞』2008年2月22日「第60回日米学生会議参加者募集」
・『日本経済新聞』2008年2月25日「人脈追跡～学生会議日米の懸け橋～」
・『中日新聞』2008年6月10日「きらり～医師像求めて米国学生と討論」
・『Missoulian』2008年8月8日「Missoula to host Japan America Student Conference」



日米学生会議
参加者を募集
今夏米国で開催

日米の学生が友好を深めあう「日米学生会議」がこの夏、米国で開かれる。同会議実行委員会は、会議に参加する学生を募集している。

同会議は1934年に発足した国際的な学生交流団体。第60回の今回は「新たな潮流へ　60回を通しての再考と創出」をテーマに、7月28日から8月22日に米国ポートランド市などで本会議を開く。本会議では、分科会で世界の諸問題を論じたり、専門家を招いてフォーラムを開いたりする。本会議の前に、日本の参加者は5月から7月に、合宿や勉強会がある。

本会議の参加費用は交通費込みで24万円。選考は1次が書類、2次が面接と試験、グループディスカッション。日米学生会議のホームページ（http://www.jasc-japan.com/）から申し込む。29日締め切り。

『朝日新聞』2月22日

Missoula to host Japanese student conference

Missoula has been chosen as one of four cities (the others are Seattle, Boston, and Los Angeles) to host the 2008 Japanese-American Student Conference on Aug. 8-15

Seventy students, half from American universities and half from Japan, will stay with host families for three days, where the emphasis is on sharing cultures, building friendships and learning about Missoula. Part of the program will be to explore thoughts and ideas on war and peace between cultures.

Many JASC students and hosts will participate in a Jeannette Rankin Peace Center-sponsored candlelight walk to commemorate Nagasaki day on Saturday, Aug. 9.

The walk begins at Jacob's Island Park and follows the river trail to the Orange Street Bridge crosses and returns via the Higgins Avenue Bridge to the Peace Center for refreshments. The public is invited to participate. Bring a candle in a jar to Jacob's Island or any other point along the way.

『Missoulian』8月8日

きらり

医師像求めて　米学生と討論

第六十回日米学生会議が七月二十八日から約一カ月、ロサンゼルスなど米国内を回り開かれる。岐阜大医学部五年の高野恭平さん(二三)は、実行委員として準備に奔走している。

参加者は両国から三十六人ずつ。科学倫理や、法と社会などをテーマにした七つの分科会を中心に進んでいく。「昨年参加して米国の学生たちとの討論や、ちょっとした会話がすごく刺激になった。この流れに身を置いておきたくて今年の実行委員に立候補した」

当然、医師を目指している。「さまざまな人から刺激を受けて、目指すべき医師像を確立したい」と前向きに語る。

『中日新聞』6月10日

人脈追跡

学生会議　日米の懸け橋

OB・OG、国際分野で活躍

第二次世界大戦前、悪化した日米関係を学生の手で修復しようと始まった「日米学生会議」が今年で第六十回を迎える。昨年亡くなった元首相、宮沢喜一をはじめ、会議参加がきっかけとなり、日米や国際分野で活躍するOBやOGは数多い。

「会議に出なかったら、仕事はせず、家庭に入っていたでしょう」。三十八年前を思い起こすのは米人材紹介会社、コーン・フェリー・インターナショナルの日本法人社長、橋・フクシマ・咲江だ。ソニーなどの社外取締役として知られる。

一九七〇年に清泉女子大学からスタンフォード大学で開かれた会議に参加。教育問題の分科会に加わった。「一番驚いたのは米側の女子学生が自分の意見をはっきり言っていたこと」。日本では考えられなかった。

運命の出会いも待っていた。当時はまだ日本への関心が低く、米側から動員されたのがスタンフォード大学の日系三世の学生、グレン・フクシマ（58）だった。彼は翌年、慶応大学に留学。次の日本会議の実行委員となった咲江は彼に応援を頼み、その縁で二人は結ばれた。

「入念に準備し、一我々日本人は」と語る姿は学生会議とよく似ていた。後に米通商代表部日本部長を務めたフクシマは日米交渉の様子をこう語る。日本政府の対応に戸惑う米政府代表に彼が日本の事情を解説しておかげで交渉が円滑に進んだ。

参議院議員の広中和歌子も人生が変わった一人だ。会議は戦争で中断したが、戦後に復活、とりあえず日本で開かれるようになった。そこに参加した彼女は米国留学を思い立つ。

男女同じ立場で議論

「米国には女性が活躍する場があった」。そんな米国の姿を伝えようと翻訳に携わり、ハーバード大学教授、エズラ・ヴォーゲルが書いた『ジャパン・アズ・ナンバーワン』を翻訳、ベストセラーとなった。ハーバード大学に移ったフクシマと結婚した咲江も翻訳を手伝った。

学生会議は男女ほぼ半々で開かれ、多感な時期を一緒に過ごすことから、カップルも多数誕生した。宮沢も夫人とここで出会う。「日米結婚会議といわれた」とグレンは照れるが、半面、女性が男性と対等に議論し、自信を付ける場でもあった。

「米側は国際政治分科会の日本代表が女性であるのに驚いていた」と語るのは衆議院議員の猪口邦子だ。上智大学から参加し、エール大学に留学。母校の国際政治の教授となり、軍縮会議の議長を務めるなど「学生会議が人生の進路を決めた」。

世界銀行を経て、一橋大学の教授となった井伊雅子も会議のOG。医療経済の分野でアジア諸国と交流、地方分権改革推進委員会などの委員も務める。

民間から交流促進も

外務省にはOBが多いが、民間で交流に携わる人も多い。三菱商事相談役の槙原稔（78）は日米財界人会議の九〇年代後半の日本側議長だが、副議長を務めたのが富士銀行頭取だった橋本徹（73）だ。「彼が後輩とは知らなかった」と槙原は笑う。

槙原は現在、日米の有識者による「日米文化教育交流会議」の日本側委員長を務める。そこに一緒に名を連ねるのがNHK副会長の今井義典（63）。今井は「報道など米国のオープンな姿勢に驚き、ジャーナリストを志した」と振り返る。

三井物産の元副社長で、槙原や橋本と米国駐在仲間の天野順一（75）は学生会議自身のOB会長だ。「米側には後の国務長官、ヘンリー・キッシンジャーもいた」と友情の大切さを語る。日本にベンチャー育成のサンブリッジを設立、文字通り懸け橋を目指すアレン・マイナー（46）も米側の参加者だ。

熟筆や評論活動で日米の懸け橋となった参加者も多い。アポロ11号の月面着陸の同時通訳で知られる国弘正雄（77）、英文毎日の記者を務めた評論家の竹村健一（77）、英語教育にも尽力した小林薫（76）などだ。

中東関係のテレビ解説でおなじみの放送大学教授、高橋和夫（56）や『ブッシュのアメリカ』を著した朝日新聞論説委員の三浦俊章（50）、『買ってはいけない』などで環境問題を訴える船瀬俊介（57）、脳科学者の茂木健一郎（45）らもいる。

日米経済摩擦をくぐり抜けたフクシマや槙原らは「米国の関心が中国に向いた今こそ、日米のきずなが一層重要になる」と言う。現在は国際教育振興会が主催するが、日米学生会議のOB・OGが役に立つのはこれからかもしれない。

（編集委員　関口和一）

国際分野で活躍する日米学生会議の主な参加者

大企業経営者
槙原　稔　三菱商事相談役
天野順一　元三井物産副社長
八城政基　前新生銀行会長
橋本　徹　ドイツ証券会長
グレン・フクシマ　エアバス・ジャパン社長
橋・フクシマ・咲江　コーン・フェリー日本法人社長
女性
学者・研究者
井伊雅子　一橋大学教授
高橋和夫　放送大学教授
小尾敏夫　早稲田大学教授
茂木健一郎　脳科学者
政治家
国弘正雄　元参議院議員
猪口邦子　衆議院議員
広中和歌子　参議院議員
小林　薫　産業能率大学名誉教授
三浦俊章　朝日新聞論説委員
ジャーナリスト・評論家
竹村健一　評論家
今井義典　NHK副会長
船瀬俊介　環境問題評論家
ベンチャー経営者
アレン・マイナー　サンブリッジ社長
内古閑　宏　ヴィジョネア社長
八木　健　ペイビュー・アセット・マネジメント社長
外資系企業
徳末哲一　ファストサーチ＆トランスファ日本法人社長

『日本経済新聞』2月25日

第２章

事前活動

事前活動とは……16
第3回日米ユースフォーラム……16
第59回日米学生会議報告会……17
東京講演会……18
京都講演会……19
春合宿……20
英語ディベートワークショップ……24
アメリカンセンター講演会……25
横田基地訪問……25
KIPP Forum・Nano Japan……26
英語ディスカッション
京都英語ディスカッション……26
防衛大学校訪問……27
横須賀基地訪問……28
直前合宿……28

事前活動とは

第60回日米学生会議の事前活動は、2007年11月の第3回日米ユースフォーラムから始まった。新しい参加者が決まる前は、日米学生会議の存在を世に伝えるため、そして実行委員が運営経験を積むことを目的として行われる。参加者が決まった後は、講演会、レクチャー、コミュニケーション講座、英語ディスカッション、米軍基地訪問など多岐に渡る、本会議をより充実させるための諸活動を行う。本章では、これらの事前活動の様子を紹介する。

第3回日米ユースフォーラム

日時：2007年11月2日（金）
場所：日本外国特派員協会
共催：JASCジャパン、社団法人日米協会、日米教育委員会
後援：東芝国際交流財団
テーマ："The Evolving Japan-U.S. Relationship: Reassessing Bilateral Security in a Multilateral, Global Framework"
パネリスト：武田尚樹（第60回日米学生会議日本側実行委員長）
Andrew Ruffin（第59回日米学生会議アメリカ側実行委員）
角田亜紗子（第59回日米学生会議日本側参加者）
Michelle Cheng（フルブライト研究生）
モデレータ：David H. Satterwhite（日米教育委員会事務局長）

講演会概要：日本外国特派員協会にて安全保障をテーマに、120名以上の来場者を迎えて、第3回日米ユースフォーラムが開催された。4人のパネリストは日米という枠組みを超えた多様なバックグラウンドの下に、それぞれの経験や大学での専攻を活かし異なる観点から発言した。

「日米同盟においてアメリカが一歩引く可能性」、「被爆国・投爆国から見た安全保障へのアプローチ」、「日米同盟において日本が主体的になることの重要性」、「各個人が日米同盟において問題意識を持つことの重要性」などの発表が各パネリストからあり、その後聴衆を交えての質疑応答の際には、パネリストと来場者との間に活発な意見交換が行われた。安全保障の分野に留まらず、環境・教育・貧困の問題に対して日米の2ヵ国がどのように取り組んでいけば良いのかという議論へと発展していった。

当日は高円宮妃殿下にもご臨席を賜り、英語スピーチを頂戴し、共催者団体の関係者の方々からお言葉をいただいた。

懇親会では、声楽家のメニッシュ純子氏によるJASCソングのコンサートがあり、学生と来賓の方々との懇談が行われた。

▲パネリストの4人

◀120名を数えた来場者

高円宮妃殿下との一枚▶

【実行委員後記】

本フォーラムを通して、自身の日米間の安全保障に対する認識が向上したのは言うまでもない。そして何より感銘を受けたのが、「学生の意見が多くの人の刺激になる」というレセプションの際に駐日米国公使のRon Post様からいただいたお言葉。例え専門知識はなくとも、学生の立場から率直な意見を発信していくことは決して無意味なものではなく、新鮮な意見は多くの方々に影響を与えることがある。本フォーラムで発言できたことは、日米学生会議を運営するにあたって大きなモチベーションとなった。　（文責：武田尚樹）

第59回日米学生会議 ～前年度の報告及び講演会～

日時：2007年12月8日（土）
主催：国際教育振興会
基調講演：松原仁氏（衆議院議員）
場所：慶應義塾大学三田校舎　法科大学院棟　ディスタンスラーニング室

概要：第59回日米学生会議の内容を様々な人たちに知っていただくこと、またこのイベントを通して一人でも多くの方に応募していただくことを目的として、前年度の報告及び講演会を開催した。

はじめに日米学生会議の主催団体である国際教育振興会の大井理事長の挨拶から始まり、次に基調講演として、民主党拉致問題対策本部副部長の松原仁衆議院議員に学生間の国際交流の意義について話していただいた。一度休憩をはさんだ後、第59回参加者による本会議の総括があり、最後に第60回実行委員から本年度の会議の概要や応募要項の説明が行われた。

【実行委員後記】

日本側で日米学生会議が開催された年は、報告会を行う義務はない。また、やるとしても中心となるのは本来前回の夏に実行委員を務めた者たちである。しかし、夏が終わるとともに、そのうち3人が海外に留学し、また別の3人が国家試験を受験予定であったため、報告会開催の有無は自然に私たち第60回実行委員の意志に託された。「第59回の報告会をやろう。」どこからともなく聞こえてくる声。私たちの想いは既に決まっていた。刺激にあふれた今年の会議を皆に伝えたい、応募者の数を増やしたい。さまざまな思惑がそこにはあっただろうが、私はそんなことよりも、もう一度あの心地好かった雰囲気に触れたい、ただそれだけの理由だった。59回の参加者に会い、空気を、そして思い出を共有し、ただ二度と戻らないあの夏を慈しみたかっただけなのかもしれない。

やることを決めるまでは良かったが、報告会の準備は他の様々な仕事と並行しての行わなければならず、正直楽ではなかった。不慣れな実行委員の仕事に戸惑ったり、報告会の会場や講演者がなかなか決まらなかったりと、例を挙げればきりがない。しかし、その度に、必ず誰かが手を貸してくれた。それは同じ実行委員であったり、アラムナイの方であったり、身近な友人であったりした。そして、決して完璧ではなく、言うなればつぎはぎのような感じであったが、なんとか12月に報告会を開催できた。

報告会後、私は確かな満足感で満たされていたと同時に、如何ともし難い虚無感も持ち合わせていた。報告会を通して第60回日米学生会議の新たな鼓動を感じられ、確かな手ごたえがあった。新しい参加者が来る。さまざまな妄想が私の脳を過ぎり、幾

▲松原氏による講演

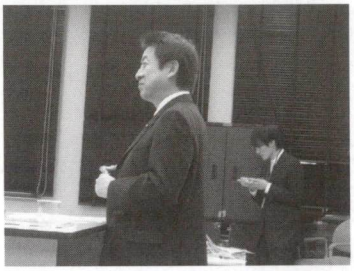
度も私は気持ち良くトリップしていた。また同時に、昨年度の夏の終わりも感じていた。昨年度の参加者に会い、時間と空間をともにすることでまたあの夏に戻れることを期待していた。しかし逆に、皆に会い、話を聞くことでもうそれが過去のものであることを再認識させられる破目になった。時は進む。それを皆の成長した姿から感じ取ってしまったのだ。

思いのほか早い時間の流れに戸惑いながらも、止まっていた時計の針を少しずつ現在時刻にあわせ、私は現実を受け入れた。そして、それは今年の夏を強く意識することを意味する。時間は一方向にしか進まない。いや、正確に言うと我々が未来と呼ぶ方へ時間が進んだ時にしか脳は世界を認識できない。失ってしまったものを埋めるため、私は未来へと歩を進めることにした。満たされないままでいたくない。次こそは永遠に薄れない会議を作ろうと強く自分に誓った。　（文責：高野恭平）

東京講演会

日時：2月17日(日)
場所：一橋大学
主催：第60日米学生会議実行委員会
基調講演：塩崎恭久氏(衆議院議員)
テーマ：「日米関係と人的交流」

講演会概要：塩崎恭久氏講演会「日米関係と人的交流」では、塩崎氏が高校時代、アメリカへ留学されていた時のお話や、官房長官時代、外交をするにあたって感じたこと、また今年日米学生会議でアメリカに行ったときに見てきて欲しいこと、学んできて欲しいことなどをお話していただいた。最後にはQ&Aセッションにおいて憲法9条についてなど、激しい議論があり、会場は盛り上がりと熱気に包まれていた。また、これに併せて、第60回実行委員から今年開催される会議のスケジュールや応募概要など参加説明会も行った。当日は、アメリカ開催時に参加されたOB・OGの方々にご協力いただき、アメリカ開催の様子について第58回会議の様子のビデオ上映などを交えながらお話いただいた。57回参加者、58回実行委員を務められた山田さんからは学生会議に参加する人達の多様性の素晴らしさ、違う価値観がぶつかり合うことなどをお話していただき、同じ代の波多野さんからは分科会のお話や学生会議のアカデミックな部分についてお話していただいた。最後には55回参加者、56回実行委員長を務められた飯田さんからアメリカ大統領選挙の時に日米学生会議に参加する利点など、アメリカ開催の魅力をたっぷりとお話していただいた。


◀言葉に熱の籠る塩崎氏

会場の様子▶

【実行委員後記】

朝9時半、第60回実行委員を始めOB・OGからなる講演会スタッフは、一橋大学に集合しランスルーや最終的な打ち合わせなどを行いました。準備段階では58回会議の様子を収めたビデオが再生できないなど、テクニカルな面でトラブルがありながらも、無事13時過ぎに開会することができました。OB・OGの皆様、休日にもかかわらずお仕事でお忙しい中駆けつけて素敵なスピーチをしていただき、本当にありがとうございました。

第60回参加説明会が終了に近づき、塩崎様が地方でのお仕事を終え、羽田空港から国立まで予定通りご到着されるとお電話がありお迎えにあがりました。裏話ですが、講演会の前半は飛行機が遅れていないか、渋滞に巻き込まれていないかなど不安でし

たが、予定通りご到着され、安心いたしました。塩崎様、お忙しい中日米学生会議のためにお時間を割いていただき、また大変貴重なお話をありがとうございました。

最後の懇親会も大変多くのご来場者が残られ、会議に関する質問にお答えさせていただきました。テクニカルな話だけでなく、会議の苦労話や楽しかった思い出などについても聞かれ、去年の会議を振り返ることができ、私自身も楽しませてもらいました。

まだ寒さが厳しい時期、会場まで足を運んでいただいた方々、講演会にご協力していただいた全ての皆様にこの場をお借りして改めて実行委員一同心より御礼申し上げます。　（文責：渡辺恭子）

京都講演会

日時：2008年2月4日（月）
主催：第60回日米学生会議実行委員会
講演：村田晃嗣氏（同志社大学法学部教授）
テーマ：「日米関係：今後の日本がとるべき行動」

講演会概要：村田晃嗣氏講演会「日米関係：今後の日本がとるべき行動」では、現在注目を浴びている米国の大統領選挙、そして日米朝関係並びに日米中関係について独自の視点で分かり易く、具体例も交えながら講演をしていただいた。日米学生会議に参加するに当たり、このような3ヵ国間関係の重要性は忘れてはいけないとご指摘いただいた。また、日々変化の激しい政治の世界を逐次追っていくためには、新聞が公表する「1週間予定表」を自分の手帳に記録しておくことで、様々な事象の裏側が鮮明に見えてくる、といったことも教えていただいた。日本が今後取るべき行動としては、技術・環境・公衆衛生に関して世界の中で発言力を高めていくべきであると主張されていた。

講演終了後は、2人の第59回会議の参加者による5分間のスピーチと、第60回会議概要を詳細に説明し、関西方面への日米学生会議の浸透という目的を果たすことができた。

【実行委員後記】

今日は待ちに待った講演会の日。実行委員として一人京都に取り残されてしまい、丹念に今日の講演会のために色々な媒体（インターネット、口コミ、携帯）を通して宣伝を行ってきた。最終的には40人の学生の皆さんに来場していただいた。興奮のあまり、実行委員同士との事前の準備は怠ってしまったが、やはり本番には強いのであろうか？実行委員と手伝いに来てもらった第59回参加者のみんなは機敏に与えられた仕事を全うしてくれた。

本日の前半は講演会である。関西系のテレビでは連日顔を見かける「有名教授」の村田晃嗣氏は、経済学部の私にとっても明瞭かつ簡潔に様々な政治的事象を説明してくださった。時折混ぜる冗談や雑学で学生の興味を引き、大変有意義な時間を過ごせたと感じている。複雑かつグローバルに動く政治の世界を上手く分析するには、幅広い見識と情報が必要であることを思い知らされた。「日米中」関係といえども、具体的な事象や歴史的視点も必要になるからである。改めて、自分の知見が不十分であることを実感させられた。質疑応答でも活発な議論がされたことは、学生に村田氏の議論が正確に伝授されていた証拠であろう。前半の1時間はあっと言う間に終了した。

後半は、第59回会議参加者によるスピーチと第60回会議の概要説明を行った。京都大学農学部の吉川真由さんと立命館大学大学院の土岐吉史さんは、明瞭な、そしてパッションに溢れたスピーチで来場者に会議のアピールをしてくれた。そして、遥々東京と岐阜から来てくれた武田実行委員長と高野実行委員により、関西では到底通用しない漫才ネタを混ぜながら、第60回会議の概要と魅力を伝えてもらった。試験期間前のお忙しい中、多くの大学から来場してくださった学生の皆さん、そして講演会場の施設提供をしていただいた京都大学国際交流センター所長の森純一教授には、この場を借りて御礼申し上げます。　（文責：伊関之雄）

◀59回参加者のスピーチ

講演会に聞き入る来場者▶

春合宿

5月4日～5月6日にかけて、代々木のオリンピックセンターにて第60回日米学生会議参加者が初めて一堂に会する春合宿が開催された。2泊3日という短い期間の中で、自己紹介、アイスブレーキング、先輩方による講演会、異文化コミュニケーション講座、CIEE生や早稲田のSILS生との英語ディスカッション、アラムナイの方々を招いたレセプション、そして分科会活動やプレゼンテーションなど、盛りだくさんの内容であった。参加者は寝る間を惜しんで親交を深めると共に、英語の練習や分科会の議論にも明け暮れ、本会議に向けて幸先の良いスタートを切ることができた。

○OB講演会

戦後すぐの第8回会議に参加された岩崎洋一郎氏と、第42回実行委員長の金井隆氏をお招きし、講演会を行った。岩崎氏からはJASCの歴史や若者へのメッセージを中心に、金井氏には本会議という1ヵ月が人生にどのようなインパクトを与えるかというテーマに沿ってお話いただいた。

▲講演中のアラムナイの方々

◀熱心に質問する参加者

【参加者後記】

アラムナイの方々が築き上げてきたJASCの歴史の流れの中に身を置けることに、緊張と嬉しさで一杯になった。JASCの歴史について少ししか知らなかった私にとって、アラムナイの方々のJASCの歴史に関する話は目から鱗であった。特に、戦後すぐに会議を復活させようと奔走した、第8回参加者である岩崎洋一郎さんの日米関係への熱い思いに胸を打たれた。また同時に、多くの困難を乗り越えてJASCを築いたアラムナイの方々のご尽力に恥じない第60回参加者に、自分はなれるだろうかと身が引き締まった。そして、激励会では岩崎さんと席が近かったため、アメリカという国、今までのお仕事についてなど貴重なお話を聞かせていただいた。その際、私の稚拙な質問に対して、寛大に接していただけて嬉しかった。

アラムナイ講演を通し、私の働きが、今までのアラムナイの方々の姿と重なるよう、JASCを通し世界をよりよいものにしたいと強く思った。

（高畑乃枝）

○ディナーレセプション「ようこそ先輩」

様々な年代の日米学生会議参加者・実行委員の方々を招いて、立食パーティーを行なうのが本企画の概要である。第60回の理念は今までの日米学生会議を再考すること。そのためのとっておきの情報源が、実際に過去の会議にご参加された先輩方の体験談である。合計で40数名の先輩方に参加していただき、会の後半には小さなグループになって各人が個人的にアドバイスをいただくなど、有意義な3時間を過ごす事ができた。（伊関之雄）

▲先輩方を囲んで

○Communication Workshop

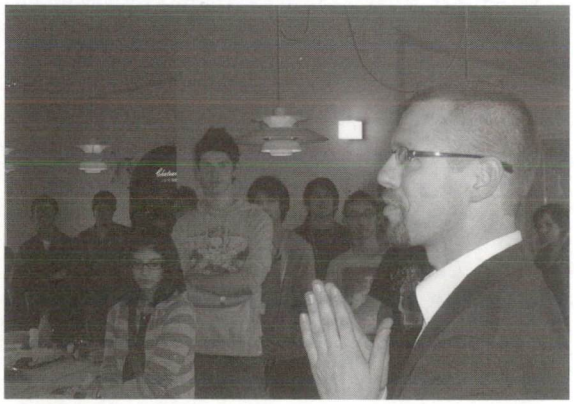
講師：Vital Japan小田康之氏

Vital Japanより小田康之氏をお招きし、夏に1ヵ月間アメリカで過ごす参加者のためにコミュニケーションワークショップが開催された。文化圏によりコミュニケーションに対する考え方が異り、日本はハイコンテクスト（文脈を読む、または主語を省くなど）な文化であるのに対し、アメリカはローコンテクストな文化であるので、その差に気をつけながら議論を進めると良いというアドバイスをいただいた。他にも、対人関係を築く上での第一印象の重要性を教わり、初対面での挨拶の仕方や、握手の意味などを習い、夏に向けてのかなり有意義なワークショップであった。Vital JapanのURLは（http://vitaljapan.com/）。（廣田隆介）

○English Discussion Session×CIEE&SILS

このセッションは多くの参加者にとって、日米学生会議に入ってから自分の英語スピーキングを試す最初の機会だった。CIEE&SILSの留学生たちは、黒色人種／黄色人種／白色人種と、多様な背景を持つ人たちで、皆ネイティブだったために非常に良い交流相手となった。全員が集まるとJASCの学生は留学生たちにアプローチし、Communication Workshopで学んだ西洋式自己紹介（握手）を実践する事が出来た。後に、留学生はそれぞれ興味のある分科会に混ざり、JASCerと分科会ごとに話し合いをした。後に立食パーティーを行い、ここでは必死に学術的な事を話そうと奮闘するジャパデリもいれば、留学生との共通の趣味を発見し話し込む人や、後のリフレクションで自分は一言も話せなかったと反省する人もいた。いずれにせよ、一人一人のジャパデリにとって、英語コミュニケーションに対するモチベーションを高める良い機会になった。

（神馬光滋）



▲懇親会スタート

○分科会発表

春合宿のトリの行事として、各分科会が3日間で話し合った成果を発表し合うセッションを設けた。初日から始まった議論をまとめて、他の分科会メンバーの前で発表することで本会議までに行なう議論の修正や反省点を考えられる絶好のチャンスである。各分科会は、あまり時間が足りない中でプレゼンテーションを作成して独自性のある発表を行い、

それらに対して他の分科会参加者からは鋭い質問が飛び交い、我々実行委員が時間の関係上泣く泣く止めなければならない程の熱のこもったセッションとなった。

（伊関之雄）

▲プレゼンテーションの一幕

○春合宿に参加して

3日間の春合宿は、Life Changing Experienceの序章だったように思われる。

初日の朝、皆スーツを着ながら、日米学生会議の起源、歴史、今後のあり方の展望、そしてOBの方々による講演を聞いた。すなわち、日米学生会議の「理念」、コアバリューを真剣に吸収するプログラムである。そこで、大きく感じたのは、我々が背負っている責任であった。象徴的なのが、色々なニュースで取り上げられていた「ジャパン・パッシング」である。日本の政治的・経済的な国際的地位が、徐々に影響力を失ってきているため、アメリカを始めとする先進諸国は、日本よりも中国の方に目を向けているというニュースである。こういった影響もあり、第60回日米学生会議では、「発信」「行動」「挑戦」などがテーマとして上げられており、自分も日米学生会議の一員として、この目標に達するための責任を果たしていこうと改めて決心した。

一方で、初日の後半では、日米学生会議で、実際に何を行なうかの説明を受け、日本側・アメリカ側のExecutive Committeeのビデオ紹介なども見て、理念から生まれてくる日米学生会議の雰囲気や文化、そしてこれから自分が1ヵ月アメリカで過ごしていくだろうことを想像して、身震いがしたほどでもあった。

2日目からは、60回参加者がメインに行なう「Communication Workshop」や「English discussion」「Round Table Discussion」などが行われた。ここでは、実際に仲間とコミュニケーションしながら、1つの方向性に向かっていくプロセスを実感できたと共に、今後1ヵ月一緒にいることができたら、どのようなことを学べるのだろうかということも考えたりした。夜には打ち上げもあり、食事を交えながら、色々と日米学生会議にかける意気込みや、今後どのような会議を作っていきたいかという、カジュアルな話をすることで、さらにお互いの距離が縮んでいったように感じた。

そして、最終日、皆のRound Tableでどのようなことをしていくかという発表があり、その後にリフレクションが行なわれた。皆が真剣に発表し、厳しい質問を投げかけ、涙を流している人もいて、最も時間が早く流れ、充実した時間だったと思う。

この春合宿を通じて一番良いと思ったことは、日米学生会議には遠慮しないで、本音で議論するといった文化があることである。そのために、特有のジェスチャーがあり、質疑応答時間があり、色々と話し合う時間が設けられているのだろう。今後の事前活動、そしてアメリカで過ごす1ヵ月が本当に楽しみになった。

（油井英孝）

○参加者による一言感想

・たった3日間だったにも関わらず、内容が濃く、充実した合宿でした。他の参加者と予想以上に仲良くなることができたし、RTでの話し合いの時間もしっかりあったし、それ以外のOBやOGや留学生などと知り合うことができ、本当に知ること、学ぶことが多い3日間でした。（明石恵美子）

・“J” u実した3日間、疲れた眠い…でも夢中！
“A”ツイ議論、もっと勉強します！
“S” uテキな皆に興味津々！
“C” oれから楽しみ！
縦も横も熱く固く結びついたJASCerになれて良

かった。皆からの刺激を元に問題意識を持って、私も発信していきます☆　（居鶴有未恵）

・この春合宿で感じたのは、ジャスカー一人一人の個性の強さでした！（笑）初日から熱く語り始めたり、ぶっとんだ自己紹介したり、マフィアがいたりと皆の個性を掘り下げるだけでも、1ヵ月は必要だなと思いました笑　（伊藤昂介）

・多くの人からの刺激にのみ込まれ、思いやりに包み込まれた3日間。素敵な出会いに感謝して、浮き彫りになった自分の課題に取り組みたい。（小野 元）

・春合宿が終わって、「プチJASCシンドローム」を患っている。ジャパデリ36人全員が魅力溢れ、話しても話しても話題は尽きない。早く来て欲しい本会議。終わって欲しくない60th JASC。　（金光慶紘）

・JASCでの議論は面白かったし、OBや勉強会から新しい何かを吸収するのは楽しかった。JASCの持つ“人”という財産を感じとることができた。これから、もっとJASCの持つ可能性を引き出していきたい。　（後藤昌也）

・国際交流を通じて視野を広げたい、が応募理由でしたが、早くも春合宿だけでこれまでの人生で最も世界が広がった気がします。JASC恐るべし。こんなにもエネルギー溢れる個性的な面々と知り合えたことに感謝です。（坂本朋美）

・まさにJASCの幕開けにふさわしい春合宿だった。JASCの先輩方の熱い思いや、JEC・AECの60回への意気込みに刺激され、分科会の議論の中で新たな自分を発見し、これから私にしかなれない真のJASCerになりたいと思いを新たにした。（新宮清香）

・合宿参加者全員の第一印象が良かったわけではない。ところが、その第一印象はすぐに塗り替えられた。みんな、「うまい」。そして、本質的に「良い」。切磋琢磨し合えるレベルに成長しようと思った春合宿であった。　（神馬光滋）

・私たち実行委員にとって春合宿は特別なイベント。もしかしたら本会議よりも輝かしいものであったかもしれない。不安が少し入り混じる、しかしそれでいて希望に満ち溢れる瞳たち。絶対本会議を成功させようと固く誓った日になった。　（高野恭平）

・冷静さを装っていたつもりだけど、私の心の中は最高潮でした。初めて会った人とでも、こんなに熱くなれる自分、そしてみんなを見つけたからー！　（高畑乃枝）

・他のメンバーの第一印象は、おとなしい&マジメだった。しかし、外国からの留学生との英語討論がひとたび始まれば、みんなの顔に生気が宿り、立て板に水のごとく英語を使いこなす。この会議の真髄に触れた瞬間だと思った。　（田中 豪）

・長かった広報活動、そして選考が終わり、ついに待ちに待った春合宿。広報担当だった私は、この日を夢に見ながら、実行委員の仕事をしてきた。参加者の期待を裏切らないよう、今後も全力投球で本会議準備に臨みたい。　（竹内菜緒）

・OBとの交流や講演を通してJASC参加者としての自分を意識し、モチベーションがあがった。英語ディベートやセミナーなど実践面も充実していて、何を課題に取り組んだらいいのか考える機会にも恵まれたと思う。　（中村玲奈）

・全体的に充実した内容の濃いイベントでした。フルーツバスケットや他己紹介による打ち解け、OBやOGを交えたレセプションでのJASCに参加していると言う自覚、留学生とのトークイベントでのRTの方向性の模索などこれからのJASCを盛り上げるきっかけとなったイベントでした。（比嘉慎一郎）

・合宿終了後、家に帰ってほっとすると何故か一気に涙が出た。3日間緊張し続け、メンバーからも強い刺激を受け、正直圧倒されっぱなしだった。JASCの重みを感じた、忘れられない春合宿だった。　（廣瀬祥子）

・「何かすごいことが起こるかもしれない」という、上手く言葉では表現できない予感が生まれた春合宿。こんなに人との距離が縮まって、こんなに色んな感情が押し寄せた2泊3日は初めてだったかもしれません。　（誉田有里）

・「8ヵ月間の努力は全てこの日のためにあったのだ」と、感慨深い60回デリとの出会い。本会議が本当に楽しみである一方、ここから時間の流れが一気に加速すると思うと、何だか寂しい複雑な心持です。　（廣田隆介）

・濃い3日間だった。素晴しい仲間と出会い、同時に、

彼らに刺激され自分の知らなかった自分にも向き合う事もできた。この仲間たちと一緒に米国で過ごす1ヵ月、どんな事が起こるか楽しみだ。

（松本秀也）

・就職活動終了後、入社までの1年間の予定を立てていたが、JASCの春合宿から帰ってきて、その予定をとりあえずすべて白紙にした。JASCにひと夏かけてみようと思った。（盛島正人）

・春合宿は、少しの緊張と大きな期待で始まりました。真剣な討論、楽しい会話を通じて、素敵な仲間と出会ったという実感とともに「夏が待ちきれない」「自分の何かが変わる」とさらに大きな期待でいっぱいです。（安川瑛美）

・春合宿では、日米学生会議の過去・現在を多く学んだ。日米学生会議が開始された時の理念、60年経った今でも受け継がれているものと変化したもの。今後、どんな未来を創っていけるのかを想像すると楽しみである。（油井英孝）

・日米学生会議で自分に何ができるのか、分科会はどうなっていくのか、皆とどんな風にこれから過ごしていけるのか。日米学生会議のスタートを体感し、胸の高鳴りを感じながらも、一方で戸惑っている自分がいた。（横山雄一）

・開会挨拶があっても、「始まり」を実感できなかった。しかし、分科会での議論や全体プログラムを通して、自分の胸中を語り意見を言い合う中でいつの間にか今度は終わりが来る事をすでに寂しく思っていた。（渡辺恭子）

・ワークショップで習ったPREP方式で！

P全員から情熱を感じ、刺激的な合宿！

R皆が意見を持っている＆周りの意見を素直に受け入れる！

E分科会では時間を忘れ議論！

P皆、情熱的！

今は本会議が待ち遠しい！（渡辺千尋）

・心から自分を成長させたい。そう願ったなら、自分を育ててくれる他人に正直な自分をあらわすこと。そこにホンモノの出会いがある。これが、私が春合宿で一番感じたことだ。（渡邊ともね）

英語ディベートワークショップ

日時：2008年5月10日（土）
場所：ココデシカ
講師：井上敏之氏

▲井上氏を囲んで

【参加者後記】

JASCのOBの井上敏之さんによる英語ディベート講習には、20人を超える参加者が集まった。井上さんはまず、参加者一人一人に講習の目的を聞き、日本語と英語を切り替えながら、ディベートの基礎から教えてくれた。

はじめに、1対1でのスピーチ練習では、PREP（結論・理由・例示・結論）を意識して、論理的な話し方を実践的に学んだ。続いて、「日本は小学校から英語教育を行うべきか」などについて、1対1のディベート練習を行った。

講習の最後は、4人１チームによるディベート対戦。テーマに対して賛成・反対に分かれ、それぞれ4人が基本的な主張、その補強、相手への反論、結論と役割を分担した。みな、講習で学んだ話し方をさっそく取り入れ、1分の時間制限に追われながら、チームの勝利を目指し、活発な議論を展開した。ユーモアにあふれ、説得力のある参加者の姿から、本会議までにどのような力が必要か考えられたと思う。

（小野 元）

（井上敏之氏のウェブサイトは、
http://www.speech-debate.com/）

アメリカンセンター講演会

日時：2008年5月15日（木）
場所：東京アメリカンセンター
講演：Sangmin Lee氏（在日米国大使館　安全保障政策課　課長補佐）、Kevin Olbrysh氏（東京アメリカンセンター副館長）
テーマ：「アジア系アメリカ人の政府における役割」

▲講師のお二人を囲んで

【参加者後記】

外交官の方とのセッション…「外交官」と聞くと、私には遠い存在であり“外交官らしく”どこか距離を置いたディスカッションの様子を想像していた。経歴を拝見すると、在韓米国大使館での滞在期間には北朝鮮の核問題を担当なさるなど、まさに最前線で活躍されている方を前に緊張は高まる。しかし、そんな緊張は不必要だと分かるのに長くはかからなかった。プレゼンテーションはアジア系アメリカ人とアメリカ社会の関係について、人口比に対するアジア系アメリカ人の社会的成功率の高さという現状の説明から始まり、その一方で直面するアメリカ人・アジア人両者から板挟みのジレンマ、アイデンティティー問題、アファーマティブ・アクションの是非といった社会的な話をしてくださった。私自身がマイノリティと多文化社会分科会所属なため、始終興味深いお話が聞けてとても有意義な時間であった。またさらに、結婚と文化の関係について実体験を交えたお話など身近で素朴な疑問にも答えてくださり、結婚において異文化間でどのような違いが生まれるかなどJASCerみんなの人生の先輩としてのアドバイスも、私たちの今後に大いに役立つだろう。

（安川瑛美）

横田基地訪問

日時：2008年6月6日（金）
場所：横田米軍基地
概要：JASCのOBでもあり、日米協会の会員でもある山本東生氏のご協力により、日本側デリゲート有志で横田基地を訪問した。日米学生会議の必須テーマである「世界平和」について、安全保障の側面から考える良い機会となった。

◀広報将校を囲んで

基地内のテレビ局にて▶

【参加者後記】

久しぶりの晴天の中、日本側参加者で横田基地を訪れた。福生駅から車で10分ほどのところに、突如「アメリカ」が現れた。東京ドーム150個分もの広大な敷地を持ち、基地内には至る所に星条旗がはためき、学校や教会、スーパーマーケットなどが並ぶ横田基地は、さながらアメリカの都市を丸ごと移送させたようだった。横田基地に到着して最初に放送局を訪れ、基地内での放送内容などについて説明を受けた。次に、広報部長のお話と質疑応答を経て若手米兵と昼食を共にした。自分と同世代の若者が一兵

士として日本に駐留しているという事実は日本人の私にとって幾分不思議に感じられた。その後、横田基地についての概要説明を聞き、最後に大きな基地内をバスで巡回し、基地を後にした。

戦後の日本の国防は米軍なしには語ることはできない。それにも関わらず、今まで私にとって米軍とその基地は遠い存在でしかなかった。今回、それを実際に目にする機会を得ることができて良かったと思う。基地の説明を受け、米兵と実際に話すことで、「米軍基地」という鉄条網の中の住人でしかなかった彼らの存在意義を改めて考え直し、評価し直すきっかけになった。これからもこのように市民と米軍が交流し、お互いについて考える機会が増えれば良いと思う。米兵の犯罪や、日米地位協定、「思いやり予算」など、日米関係に関して見直すべき点は沢山ある。冷戦は終結し、世界の構造は変化を遂げ、日本は世界有数の軍事大国となった。私たちは改めて、日本憲法9条、これからの日本の国防や米軍との付き合い方を真剣に考えてゆく必要があるだろう。　(明石恵美子)

KIPP Forum・Nano Japan 英語ディスカッション

日時:2008年5月12日(月)、5月22日(木)、5月29日(木)、6月4日(水)
会場:国際文化会館、さぬき倶楽部

概要:パッカード啓子氏のご厚意により、各界の第一線で活躍されている方々から生のお話を伺うKIPP Forumと、科学専攻のアメリカ人学生たちとの英語ディスカッションに、日米学生会議参加者もご招待いただいた。KIPP Forum初回では、朝日新聞主幹論説員の若宮啓文氏に日本政治の現状についてご講演いただき、その後学生の意見に対して丁寧に一問一答して下さった。Nano Japanは5月中旬にアメリカ人学生が来日したのを皮切りに、彼らの集中研修が終わる6月初めまでディスカッションを重ねた。

【参加者後記】

Nano Japanとは、アメリカで科学を勉強している学生が日本に短期間留学するためのプログラムである。彼らと5月から6月にかけて3回の議論と総括を行い、日米での教育制度の違い・地球温暖化・民主主義というテーマを扱った。

議論を通してその分野の複数の視点を知ることができた上に、議論の進め方の違いについても見えてきた。日本の参加者は自分の意見を綺麗にまとめてから話そうとするのに対して、アメリカの参加者はとりあえず自分の意見を述べてみることが多かった。大風呂敷を広げてみる議論のスタイルの方が、新たな意見を吸収しやすく、成長の機会が大きいように思えたので、今後試してみたい。

学ぶことが多かっただけでなく、ここから新たな交流関係も生まれた。麻布十番で、一緒にご飯を食べたことは良い思い出である。アメリカでの本会議1ヵ月に向けて弾みとなるだけでなく、自分を成長させ、新たな友人と出会うことが出来た貴重な機会だった。(大井あゆみ)

◀フェアウェルパーティの様子

京都英語ディスカッション

日時:2008年6月14日(土)
場所:京都キャンパスプラザ
講師:ダーニング舞子シャンドラ氏

東京での英語ディベートワークショップに参加できない関西JASCerの要望に応え、赤ちゃん同伴で通えるママさん英会話教室を開いているダーニング舞子シャンドラさんを講師に迎えての英語ディスカッション講座が京都で行われた。講座は簡単な自

▲ディスカションの様子

己紹介を済ませた後、プレゼンテーション→フィードバック→ディスカッション→反省会という流れであった。参加者は関西在住のJASCer3名＋京大生1名と少数だったため各人の発言する機会が多く、充実した1時間となった。

[参加者後記]

初めての英語ディスカッション講座に対する緊張は、JASCerとの久々の再会と、私と同年代のシャンドラさんの丁寧な指導のおかげですぐに解けた。自己紹介を兼ねたアイスブレーキングの後、早速「私のホームタウン」についてのプレゼンテーションを開始した。シャンドラさんは特に形式などは示さず、各自のスタイルで発表するよう促した。そこで参加者は故郷の自慢や嫌いな点、「そもそもホームタウンはどこか」を論じるなど自由に思いを述べた。発表後は各自が互いの発表について長所・短所を指摘しあうフィードバックが行われ、自分の話法を改善するよい機会となった。次に3対3に分かれてのディベート。お題は「バナナとリンゴ、どっちがいい？」である。今回は相手を言い負かすのではなく、相手の意見を尊重しつつ自分の主張を展開する「Friendly Debate」が重視された。ここでは相手を納得させる論理展開に加え、相手を引きつけるためのアイコンタクトやジェスチャーの重要性も学んだ。これらは本会議でよりよいディスカッションを行う大きな助けとなるだろう。　（坂本朋美）

（ダーニング舞子シャンドラ氏のウェブサイトは、
http://www.chandrababyenglish.com）

防衛大学校訪問

日時：2008年6月27日（金）
会場：防衛大学校

概要：防衛大学校側のご厚意により、課業日にもかかわらず毎年日米学生会議は防衛大学校を訪問し、学生との交流を重ねている。普段中々意見を交わすことのできない防大生と意見を交わし、将来の国防を担う彼らの責任感の強さに自らを戒めながらも、我々と何ら変わらない青年らしさも持ち合わせる彼らとの交流の素晴らしさは、日米学生会議をまたここに引きつける原因にもなっているのだろう。

◀防大生の優しいエスコート

日防学生会議序章▶

【参加者後記】

人間は、想像を許された生物だ。故に、僕らは脳みその中で、数少ない情報を用いて、対象の印象を作り上げてしまうことがある。そして、ホンモノに直面したときに、そのギャップに驚かされるのだ。僕は、防衛大学校研修において、まさにそのような経験をした。現実に存在する防衛大学校生は、僕の脳みその中の彼らよりも、「多様性」を兼ね備え、「聡

明」であり、僕らと同じように「日本のことを想い」、何より「大学生」だった。防衛大の全校生徒に囲まれそわそわしながら食べた昼食、「環境と戦争」についての熱い議論、互いの健闘を称えこれからの門出に乾かした瓶ビールという名の杯、、、全てが一生の思い出となった。僕は今この感想文を、アメリカに向かう飛行機の中で書いている。これから始まる会議への期待が高まる一方、その成果を早く防衛大学校の学生に伝えたいと思う。そのためにも頑張ろう。そして秋には東京の居酒屋で、日防学生会議だ!!

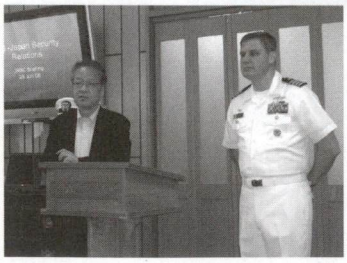
（仁平理斗）

横須賀基地訪問

日時：2008年6月28日（土）
会場：米軍横須賀基地

概要：OBでもあり、日米協会の会員でもある山本東生氏に再びご協力をいただき、横須賀米軍基地を訪問した。2年連続の訪問、そして前夜からの基地内宿泊を許可していただくなど、在日米軍横須賀基地の皆様には格別のご高配を賜り、この場を借りて御礼申し上げたい。

駆逐艦上で▶



◀山本氏とウィード司令官

【参加者後記】

横須賀基地内はあちこちで英語が飛び交い、建物は全て高さが低く横に長い構造であり、道路は広く、朝ご飯を食べたマクドナルドではドル表記で日本にはないメニュー項目があるなど、本会議前でありながら既にアメリカに来てしまったようだった。米国のために貢献する軍人の方々が母国にいる時と同じような気持ちで、同じような生活が出来るように配慮しているとのことだったが、そこに流れる空気まで忠実に再現しているようで、感激した。

まず係の方の誘導のもと基地内見学をさせて頂いたが、ヘリコプターの消火訓練の様子や、イージス艦内部のミサイル中央操作室の見学までさせて頂けるなど、基地のオープンな雰囲気に驚いた。日米が同盟関係にあるとはいえ、防衛に関することであるためもっと閉鎖的であるに違いないと思っていた私にとって、とても新鮮だった。

また、横須賀基地司令官のキャプテン・ウィードより日米同盟についてご講演をいただいた。質疑応答で中国の台頭を受けての日米関係の今後の趨向についてなど気になる事を遠慮なく次々と質問していると、一緒に昼食を食べていた若い米軍人のPaulに、“You ask such difficult questions!”と言われてしまった。しかしウィード司令官はとても丁寧に全ての質問に答えてくださり、日本をいかに自分が気に入っているか、日米の同盟がいかに強固なものであるか、そしてこれからも米国が日本の、そして日本が米国の一番の同盟国であり続けることがいかに重要であるかということなどを説明してくださった。ウィード司令官のおっしゃる通り、これからも日米両国の友好と固い絆が存在し続ける事を願う。

横須賀基地訪問研修は、日米関係や米国の安全保障についての知識と理解を深め、双方間の対話を実現できたという意味で、大変有意義な経験だった。

（竹内友理）

直前合宿

コーディネーター：高野恭平・竹内菜緒

直前合宿スケジュール

7月26日（土）　直前合宿オリエンテーション
本会議のスケジュール確認
スキット練習
サイトスタッフミーティング
7月27日（日）　スキット練習
スペシャルトピックス
フォーラム概要説明
サプライズプロジェクト（花火）
7月28日（月）　リフレクション
成田空港により出発（機内泊）

直前合宿の概要

参加者同士の絆を深める時間を意識し、直前なのであまり疲れないプログラムにするため、本年度から直前合宿を2泊3日にしようと考えた。直前合宿では、本会議に違和感なく入っていけるように本会議をイメージできるようなプログラムを多く組んだ。また、事前活動の参加率による温度差を減らし今抱える悩み不安などを共有できる場を設けることで参加者のコミュニケーションの活性化を図った。

7月26日　日本側直前合宿1日目

いよいよ直前合宿の日。昼を過ぎたころ、大きなスーツケースを引きながら東京大学検見川セミナーハウスに日本側参加者が集合した。はじめに実行委員から直前合宿に関する諸注意やスケジュールの確認などが行われた。その後、息つく間もなく、スキット（異文化紹介の寸劇）の練習や、これからの本会議の軸となる分科会の日本側最終準備をおこなった。

【参加者日記】

1ヵ月に及ぶ本会議に備えた大きなスーツケースと期待を抱き、千葉のセミナーハウスに到着。ジャパデリとの久々の再会にはしゃぎながらも、直前合宿が始まった。各サイトのスケジュールを確認してゆく中で、これから始まる本会議が現実味を帯びてゆくのを感じた。長い歴史を誇るJASCの一員であるという事実とまだ見ぬアメデリとの出会いに期待と緊張、不安が高まっていった。スケジュール確認後は、ポートランドで発表するスキットをグループに分かれて考えた。10分ほどの短い時間内のスキットにも関わらず、日米のユーモアの違いに配慮しつつも、日本文化を反映させ、日本特有の事柄を英語で説明することが難儀であることを悟る。その後、分科会の時間に今まで学んできたことを確認し合い、夕食の時間に至る。上げ膳や片付けを協力しながらやり、スキットの練習に深夜まで取り組む中で、どことなく皆の中に一体感が生まれてきた気がした。　（明石恵美子）

7月27日　日本側直前合宿2日目

この日は、まず分科会の時間を設け、アメリカに渡る前の最後の詰めを行った。その後、本会議の最新のスケジュールや各地で行われるフォーラムの詳細を実行委員が発表した。一度昼休憩をはさんだ後は、スキット練習やスペシャルトピックスなどを行った。夜にはリフレクションを行い、渡米直前に皆で不安を共有し合った。また、直前合宿の締めとして、実行委員からのサプライズ企画である花火を行い、夜遅くまで語り合った。

【参加者日記】

27日は本会議の前日であった。久しぶりにJASCerの皆と食べる朝食、試験の直後でかなり疲れていそうに見える顔もちらほら見える。けれども、久々にみんなと一緒だという感じがなかなか良く、明日は出国だという期待で落ち着かないながらさわやかである。朝食後は分科会タイム。それぞれどれだけ進んだのかチェックし合い、分科会によってはだいぶ扱うテーマや方向性も決まっていて安心する姿も見える。昼食の後はスキットについて話し合う時間。みんな素晴らしいアイディアを出してくる。さすがと思いながら自分はどんなキャラで行くべきかを真剣に迷い始める。その後はスペシャルトピックス。テーマはカルチャーショックだったはずなのに、気づいたら国際恋愛につ

▲出発前夜

◀いざ出発！

ドキドキの成田空港▶

いて盛り上がっていた。そして最後に花火大会。楽しみながらも、明日からアメリカ行くのをやっと実感し始め、妙な気持ちになった。今日も一瞬で眠れそうと思いながら部屋に戻った。　（李　鎭河）

7月28日　直前合宿最終日・出発日

午前中はこれから1ヵ月間に渡る本会議の意気込みを全員がひとりひとり発表した。その後、バスで成田空港まで移動し、15時35分に予定通りNW航空の便にてアメリカへ向かった。

【参加者日記】

ついに出発の朝。選考の合格通知を受け取ったときの「感動」、そのときから感じた「責任」と「不安」、それらの下での「ついに」の日なのに、待ちこがれた日であり過ぎて、実感を持て無かった。日本でする最後のreflection。慌しさや混乱を整理して自分と向き合える時間であり、そこで感じたことを仲間と共有できるこの時間が、すごく好きである。特にこの日は、出発前に一人一人の意気込みを確認しあう貴重な時間となった。私の目標は、「聴き役」から「聴かせ役」になること。普段から自分の考えを明確に伝えることに苦労している上に、言葉の壁がある本会議で満足のいく意見交換ができるか。正直なところ不安ばかり感じていたけれど、JASCの仲間と3日間合宿をする中で、意欲が不安を打ち消した。delegate発案のおそろいミサンガを腕に付け、いざ出発！！ 最後に、ECの緻密な準備や配慮につくづく感謝。本会議中は一人のJASC構成員として自覚を持って臨みたい。　（居鶴有未恵）

【参加者後記】

久しぶりに皆で顔を合わせての直前合宿。ここでは、主に現地でのフォーラムや日程の通知、アメリカ到着後2日目に行われるスキットの練習に当てられた。1日目はRTとスキットの打ち合わせ、2日目はRTとスキット、スペシャルトピックスやサプライズの花火「大会」が行われた。我々のRTでは、現地でのサイト説明や、メンバーによるRTに向けたプレゼンなどが行われた。皆本番に向けて、気合が感じられたのと、自分も含め物怖じせず意見を言える雰囲気があった。現地でアメリカの学生と議論する際もこの心構えを保てると良いなと感じた。スキットの打ち合わせでは、普段RTなどが違うメンバーとグループで話し合う機会がもて、非常に楽しかった。スペシャルトピックスでは、中国に関する議論を、他のRTの人達と話すことが出来て、非常に面白かった。直前合宿は、全体的にリラックスした雰囲気で、皆との交流も沢山することができ、直前の準備段階としてはとても良かった。OBの方たちが訪れてくれるなど、JASCの魅力を感じる事ができた。アメリカでの本会議が楽しみである。

（松本秀也）

第３章

本会議・サイト活動

ポートランド……32
ロサンゼルス……37
モンタナ……44
ボストン……55

ポートランド
7月28日～7月31日

サイトコーディネーター

高野恭平　竹内菜緒　Jessa Hutchins　Bethany Marsh

ポートランドサイトスケジュール

7月28日(月)	ポートランド到着
	ジョイントオリエンテーション
	日本領事館ウェルカムディナー
7月29日(火)	分科会活動
	開会式
	アラムナイディナー（リユニオン）
	スキット上演
7月30日(水)	ポートランドフォーラム
	ゲストスピーカー Mr. Jim Tagawa によるスピーチ
	オレゴン日系博物館見学
7月31日(木)	分科会活動
	JLPお好み焼きクッキング
	スカベンジャーハント
	スペシャルトピックス
8月1日(金)	LAサイトに出発

＊宿泊場所：リードカレッジ

ポートランドサイト理念

ポートランド、1935年アメリカで初めて日米学生会議が開催されたこの土地から私たちの旅は始まる。ポートランドは雄大な山々と穏やかな気候に恵まれ、自然の豊かさと都市の機能性が調和する街として知られている。このような魅力あふれる街である一方、この土地は日米間の暗い歴史も刻んでいる。日本人収容所などの第二次世界大戦の遺産。現在では強固な同盟を持つ2国ではあるが、日本とアメリカはほんの60数年前までお互いに憎しみあっていた。この土地で私たちはポートランドの魅力を堪能しながら、日米関係の過去、現在、そして未来について再考させられることになるだろう。

ポートランドサイトの目指すもの

ポートランドとは一体どこにあるのか。知らなかった参加者も少なからずいるだろうと思われるが、サイトの概要にあるように、この土地は西海岸に位置することから日本との関係が古くからあり、同時に日米学生会議にとっても、大変ゆかりがある土地である。第1回日米学生会議が開催されたあと、日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第2回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後日米両国で交互に開催されるようになった。第2回、第16回と開催されたその土地で、第60回日米学生会議においても最初のサイトとしておこなわれることになった。その土地で目指すものは、まず60回と続いている日米学生会議の歴史を辿り、会議の意義を再考すること。そして、その会議に参加する目的を改めてこの土地で考えること、である。

ポートランドサイトは、初めて出会う日本側参加者とアメリカ側参加者が打ち解けるためのアイスブレーキングと、出会ったばかりの参加者の友好を深めるための場でもある。日本文化の紹介と、参加者同士の交流を深めることを目的としてジャパデリ・リード・プロジェクト(JLP-Japadele Lead Project)と称した活動を行った。JLP活動では、日本側参加者が中心となり、アメリカ側参加者と日本の味「お好み焼き」クッキングを共同でおこない、参加者の交流を更に促進させる場を提供できたらと考えた。さらに、この土地では日米学生会議の60回を記念しての式典と称したリユニオンがおこなわれ、多くのアラムナイを招いての参加者間交流によって、日米学生会議の歴史を共に振り返り、現在開催する意義を考える場であってほしいという願いをこめて本サイトをコーディネートした。

7月28日(アメリカ時間)　日本側参加者到着

午前8時過ぎ、私たちを乗せた飛行機はポートランドの空港に到着した。入国手続きを済ませた後、

アメリカ側実行委員のAyaとJessaが出迎えてくれた。実行委員にとっては1年ぶりで感慨深い再会であり、参加者たちにとってはいよいよ本会議が始まると実感する瞬間であっただろう。それぞれの思いが交錯する中、アメリカ側実行委員が手配してくれたバスに乗り込み、リードカレッジに向かった。お昼頃、到着した私たちを出迎えてくれたのはアメリカ側参加者たちであった。事前に連絡を取り合っていたが、会うのは初めてである参加者が多く、照れくさそうに挨拶を交わしながら、すぐに始まるジョイントオリエンテーションのために、それぞれが泊まる部屋まで案内され、荷物を置き、初めて参加者全員がロビーに集合した。初めての全体イベントであるオリエンテーションでは、実行委員の紹介、参加者の自己紹介、ギフト交換などを行った。その後は、分科会ごとに屋外でサンドウィッチを堪能した。その際、サプライズで日本側実行委員からアメリカ側実行委員へ実行委員ポロシャツが贈られた。夕方はポートランドの日本領事館へ招かれ、総領事から開会のご挨拶を賜った。

感動の対面▶

◀JECからのサプライズプレゼント

7月29日　アラムナイイベント、スキット上演

午前中は分科会の時間であった。これが初めて顔を合わせる時間で、事前に話し合ってきた分科会の方向性を話し合ったグループが多かった。午後からは正装に着替え開会式を行った。JASCジャパンの天野会長と、ISC PresidentのMs. Robin Whiteより開会の挨拶を賜り、アラムナイの方々が日米学生会議に対する思いを紙に書きタイムカプセルを作った。その後、レストランでのディナーがあり、そこで伝統あるJASCソングを全員で合唱するなど、世代を超えた交流を行った。リードカレッジに戻ってからはスキットを披露しあった。

▲アラムナイの皆様

【参加者日記】

ポートランドの朝は、夏とは思えない寒さとピンとした空気に覆われます。今朝は分科会で朝食をとってから分科会タイム。初めてのアメデリとの分科会に少し緊張したけど、みんな社会への関心と問題意識をしっかり持っていて、初回からストレートに意見をぶつけあうことができた！お昼にはopening ceremonyがあり、JASCの新しい旗のもとで、スピーチとタイムカプセルイベントが行われた。その後には全体で集合写真を撮り、レセプションランチ。夕方にはスキット練習。いよいよ今晩が本番！と気合を入れて練習してから、Portland Downtownの外れにあるレストランでalumni食事会に向かいました。日米学生会議の開催が今年で60回目ということで、還暦を祝い、JASCソングを熱唱♪REEDに帰ってきてからはスキット発表！笑い声と歓声で会場が沸き、一気にデリ間の距離が縮まる素敵な夜となりました。スキットに登場した全てのキャラは味があり、みんな本当に楽しそうに演

じていた☆スキットはyoutubeにアップされています！　（今矢涼子）

◀アメリカ側参加者によるスキット

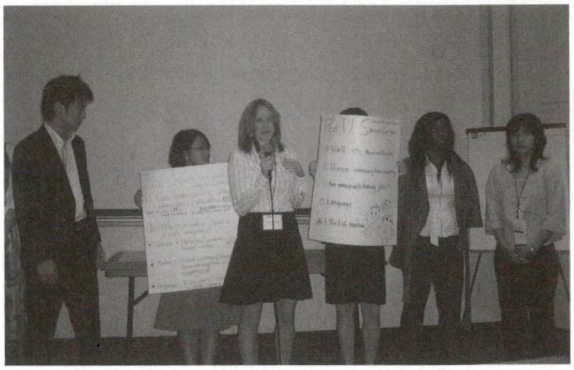
仁平君の熱演が光る！▶

7月30日　ポートランドフォーラム

この日はポートランドフォーラムと称して、1日かけて移民問題に対する見識を深めるイベントを行った。午前中、8つのグループに分かれ、それぞれが別々の議題について議論した。午後からは一つの会場に集まり、各グループが議論した内容の発表、ゲストスピーカーMr. Jim Tagawaによる講演などを行った。その後、ダウンタウンにあるオレゴン日系博物館を見学し、日系移民について勉強した。夕方からは、初めての自由時間が設けられ、参加者はそれぞれ買い物やダウンタウンでの夕食を済ませ、アメリカ側参加者に案内されながらポートランドの夜を満喫した。

班別のテーマとリーダー

GROUP 1: IMMIGRANTS ROLE IN CENTRAL GOV
リーダー：Colin Moreshead&田中豪
GROUP 2: IMMIGRANT LABOR
リーダー：Elizabeth Jones&廣瀬祥子
GROUP 3: ILLEGAL IMMIGRATION RESTRICTIONS
リーダー：Fausia Mahama&今矢涼子
GROUP 4: IMMIGRANT WOMEN IN SEX LABOR
リーダー：Rachael Staum&高畑乃枝
GROUP 5: AFFIRMATIVE ACTION
リーダー：Robert Cooper&後藤昌也
GROUP 6: SOLVING DISCRIMINATION
リーダー：Rebecca Norton&松尾恵輔
GROUP 7: COUNTERING ASSIMILATION
リーダー：Karen Jung&安川瑛美
GROUP 8: LANGUAGE BARRIERS
リーダー：Edward Philips&渡辺千尋



▲プレゼンテーションの様子

【参加者日記】

午前中は移民政策について、グループに分かれて議論し、簡単なプレゼンテーションを行った。午後は、オレゴンの日系移民博物館に行って、日系3世の白髪の紳士に話を伺った。高校時代に本で読んで、日系移民の苦難について知識としては知っていたものの、それを体験した人から直接話を聞くことは、全く違った意味があった。彼に、日米で戦争が始まった時どう思ったかを聞いた時のこと。彼は、“I was always loyal to the U.S”と言ったのだ。その答えを聞いた時に軽い驚きがあった。そう言っている彼の外見が、いわゆる日本人と何ら変わらないからだろう。戦時中は、さぞかし苦労しただろうと実感させられた。しかし、彼はその二重性を楽しんでいるようでもあった。外見と中身のギャップがあることで、壁に直面するというのは、歴史上の話ではなく、今も存在する問題である。日本人とは何か、多様性をどうすれば社会が受容できるか、考えさせられた1日だった。　（大井あゆみ）

7月31日　JLP、スカベンジャーハント、リフレクション

午前中は分科会の時間であった。その後、JLPとしてお好み焼きパーティーを行った。おたふくソース株式会社様のご厚意により頂戴したお好み焼きの粉を使い、事前に作り方を勉強してきた日本側のリーダーが皆をまとめ丁寧にお好み焼きの作り方や歴史を教えた。満足いくまで堪能した後は、スカベンジャーハントと称した一種のゲームを行った。これは事前に与えたれた暗号混じりの指示書に従って写真を撮り集めていくもので、正確に意図を読み取れば自然に観光名所を回れるようになっている。夜はスペシャルトピックスの時間を設け、参加者が考えた議論してみたいトピックについて話した。食文化についてなどとても固い内容から恋愛に対する価値観についてなど様々なトピックが挙げられ、参加者たちは思い思いに議論を楽しんだ。

【参加者日記】

午前中に2回目の分科会で集中した議論をした後のこの日の昼食は、日本側参加者企画のお好み焼きパーティー。私たちは久しぶりの日本食とあって、日本からスーツケースに忍ばせておいたお好み焼き粉とソースを手にやる気満々。日米で協力して焼き上げたお好み焼きの味は、アメリカ側にも好評だった。お腹がいっぱいになったら、外へ出よう！といい天気の中、班対抗スカベンジャーハントに出発。公共の場所で歌ったり、木に登ったり、JASCの人文字を作ったり・・・。実行委員から出題された数々の課題を、Portlandのダウンタウンでビデオにおさめた。レクリエーションとはいえ、負けず嫌いなJASCの面々。1番を取るために、観光そっちのけで全力疾走していたのが印象的だった。これらのイベントを通して日米参加者の距離はぐっと縮まったように思う。Portland最後の夜は、寮のラウンジで、遅くまで語り合う姿が多く見られた。　（小野 元）

お好み焼き作り▶

◀スカベンジャーハント

8月1日　LAサイトへ向けて出発

長かったようで短かったポートランドサイトが終わりを迎え、第2サイトであるLAへの出発に向けて、朝6時に眠い目をこすりながら日本側参加者はリードカレッジを後にした。

サイトコーディネーター後記

高野恭平

このサイトの計画を練る際、私たち実行委員が大切にしたこと、それは参加者に日米学生会議のことを深く知ってもらうことだった。アメリカで初めて日米学生会議が開かれたこの土地で、約70年の時を経て第60回という記念すべき会議が開かれる。このような歴史のあるサイトの焦点を日米学生会議の理解に合わせることは必然であったのかもしれない。

1934年に日米学生会議が始まって以来、第二次世界大戦など多くの受難にあいながらも、相互理解という変わらない理念のもと今日まで続いてきた。しかし、世界情勢は当時からは想像もつかないほど大きく変化した。1930年代、日米は今日のような確固たる関係を築けておらず、日米学生会議を開催すること自体、とても意味のあるものであった。しかし、現在日米関係は良好な状態を保っており、アメリカの関心は日本から中国や新興国へと移っているなかで、日米学生会議はその存在意義を見直す必要性に迫られている。ポートランドサイトを通して、私たちは参加者たちにこの問題を考えてほしかった。そして、この思いは大いにサイトの予定に反映されて

いる。

現状を把握し、変えていくためには過去を知ることがとても大切である。ポートランドに滞在中、私たちは幾度も歴史を振り返る機会を得た。歴代参加者によるリユニオンイベントでは新旧の参加者たちが入り交じり、それぞれの日米学生会議に対する思いを語り合った。移民フォーラムでは、日系アメリカ人たちの話を通して、1900年頃から現在に至るまでの日米関係を日米両国の視点から振り返った。

残念ながら、今年の日米学生会議ではアメリカ側参加者の数が例年よりも少なかった。これは日米学生会議、ひいては日米関係の存在意義が薄まりつつある変化の表れであろう。私たちは早急に適切な処置を行わなければいけない。私を含めすべての参加者が、この問題を真摯に受け止め、何らかの行動を起こしたとき、はじめてこのサイトは成功であったと言える。今後の参加者たちの活躍に期待している。

竹内菜緒

1934年に始まった長い歴史のある日米学生会議。そのなかで、初めてのアメリカ開催であった第２回日米学生会議の旅はポートランドから始まった。そして今年、60回目を迎えた会議が開かれる最初のサイトとして、またポートランドが選ばれた。

その土地で会議を行うことにあたり、アラムナイの方々が築いてきた日米学生会議の歴史とその存続の意義を「再考」する場と位置付け、日米両国のサイトコーディネーターと「4人5脚」でポートランドサイトの企画を行ってきた。

実を言うと、最初から再考に焦点を当てていたわけではなかった。ポートランドサイトのコーディネーターとなって間もないころ、アラムナイの先輩方が「ポートランドでリユニオンをしよう」と話を持ちかけてきた。正直、最初は「私たちの会議なのだから、自分たちで一からプランを考えたい」という思いから、あまり乗り気になれなかった。しかし、実行委員活動を通して多くのアラムナイと話すうち、段々とその考えは変わったのだった。

各世代の参加者との交流によって、世代を超えた日米学生会議の意義を「再考」できる最も適した場がリユニオンではないか、いつしか心からそう思うようになり、何よりもリユニオンを成功させようと心に強く誓い、スケジュールを組んできた。結果的に、開会式ではアラムナイの皆様に参加していただき、また、ポートランドにある素敵なレストランでのディナーにも招待してくださり、アラムナイの皆様の助けのおかげでとても素敵な思い出を作れたと思う。ディナーの場で多くのアラムナイの方々と参加者が談笑する姿、世代を超えた参加者がJASCソングを合唱する姿は、74年続いた会議の絆の強さを感じさせるものであった。

ポートランドは本来、第1サイトとして「疲れ過ぎないサイト」にする方針であったが、結果的には本当に目まぐるしく多くの企画が存在したサイトになった。まだ全員の顔と名前が一致しない最初の日に領事館ディナーを設けたり、１日に必ず二つ以上の企画を盛り込んだりと、相当ハードなスケジュールにも関わらず、参加者は文句一つ言わずに「お疲れ様」と声を掛けてくれた。サイトが終わった後にもらった数多くの参加者からの手紙は私の宝物となっている。

最後に、JASCの大先輩である天野様、梅崎様、中瀬様、大嵩様、竹内様をはじめ、ご協力いただいた多くのアラムナイの皆様、日本からポートランドまで足を運んでくれた多くのアラムナイの皆様には心より御礼申し上げたい。また、一緒にリユニオン企画をしてくれた武田君、59回から仲良しだった米国側実行委員のBethanyとJessa、そして1年間を通してサイトだけに留まらず最も一緒に仕事をして支えてくれた高野君に心から感謝の意を伝えたい。

▲ポートランドサイトコーディネーター

ロサンゼルス
8月1日～8月7日

サイトコーディネーター

武田尚樹　李 凌叡　Josh Schlachet　Joshua Turner
Jenka Eusebio

ロサンゼルスサイトスケジュール

8月1日(金)　ロサンゼルス到着
　　分科会活動
8月2日(土)　マイノリティーフォーラム
8月3日(日)　Beach Day
8月4日(月)　メディアフォーラム
　　Hollywood見学
8月5日(火)　比較政治フォーラム
8月6日(水)　Business Day
8月7日(木)　Greenberg Traurig Law Firm訪問
　　総領事館レセプション
8月8日(金)　モンタナサイトへ出発
＊宿泊場所：カリフォルニア大学ロサンゼルス校

ロサンゼルスサイト理念

ロサンゼルスはアメリカで人口第2位の西海岸を代表する大都市である。西海岸最大の商業、金融拠点であるのと共に、アメリカ最大の貿易港であり、対アジア貿易における役割は巨大だ。ハリウッドに代表されるエンターテイメント産業が常に世界をリードする一方で、電子機器、宇宙産業、バイオ産業など様々な最先端技術の成長も著しい。また、ロサンゼルスは民族多様性で知られ、特定の人種が過半数を占めていない数少ない都市でもある。われわれ参加者は超大国アメリカの活気の根源に触れるとともに、その代表的理念である多様性を肌で感じることとなる。

8月1日　ロサンゼルス到着、分科会活動

【参加者日記】

今日は初の移動日。アメデリとの出会いの場所、ポートランドを発ち、飛行機でLAへ。アメデリとジャパデリは別々のフライトで移動するため、朝起きた時にアメデリはもう居なかった。初めての別れ。数時間後に再会するのだとわかっていても寂しさで胸が痛かった。しかし、そんな寂しさもLAでアメデリの出迎えを受けた瞬間消え去った。やはりJASCはジャパデリ、アメデリが一緒に過ごす空間に織り成される物語なのだ。夕方からのRTはさすがに全員に疲れが見え、あまり生産的とはいかなかったが、その後のディナーで僕は復活した。UCLAのカフェテリアはリードカレッジよりも種類豊富でおいしい、と皆言っている。ここでまた更に、幸せJASC太りしてしまわないか心配だ。

（金光慶紘）

8月2日　全米日系人博物館訪問、マイノリティーフォーラム

マイノリティーフォーラム

【日時】 2008年8月2日（土）
【会場】 Japanese American National Museum
　　Aratani Hall
【テーマ】 Illusion and Reality: Re-examining Minority Issues in Japan and America
【概要】

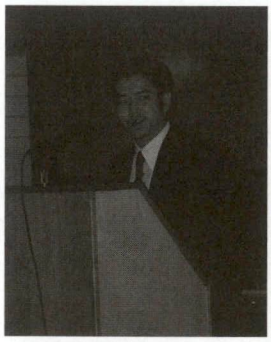
1．主催者挨拶
2．Curtiss Takada Rooks教 授、Victor Bascara教授、Edward B. Fowler教授からのスピーチとTeresa Williams-Leon教授のモデレーションによるパネルディスカッション
3．マイノリティー分科会からのプレゼンテーション
4．日米学生会議参加者、松本秀也とRebecca Nortonからのスピーチ
5．レセプション

特定の人種が過半数を占めていない数少ない都市として知られるロサンゼルスにおいて、マイノリティー問題についての知識を深める場を提供することをサイトコーディネーター内で決めていた。

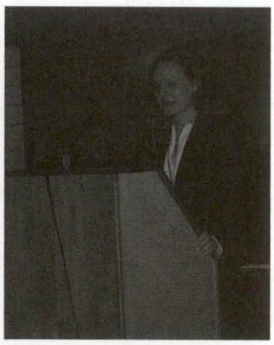
この日はJapan-America National Museumの協

力を得て、博物館内のツアーを提供していただき、またフォーラムにご協力していただいた。Rooks教授からは“On Being American: Our Ability to be Either And”というテーマのもと、アメリカ内での人種差別や大統領選での人種間の投票の動きなど、Bascara教授からは“Asian Pacific Americans and the American Century”と題し、アメリカの歴史内でのマイノリティーの動きについて、Fowler教授からは“Homogeneous Japan?”というテーマで、主に部落民などの日本国内でのマイノリティー問題についてお話をいただいた。その後、会場から質疑を受けて、教授と日米学生会議参加者内で活発な議論が行なわれた。

第二部に入り、今度は学生からのプレゼンテーションを行なった。マイノリティー分科会からはアファーマティブアクションの是非について、松本秀也からは部落民、Rebecca Nortonは自分の経験から個人的な視点で「マイノリティーであることはどういうことなのか」を発表してもらった。最後はレセプションにて、フォーラム参加者内でマイノリティーに対する意見交換が繰り広げられた。



▲日本側代表松本秀也



▲アメリカ側代表Rebecca Norton

▲マイノリティー分科会発表の様子

【参加者日記】

8月2日はJapan-America National Museumを訪問し、主に日米のMinority問題について学びました。午前中は、Museumの見学をし、日本人移民が差別を受けた話や、太平洋戦争時の日系人強制連行という悲劇の歴史を学びました。写真をはじめとする数多くの資料は印象的でした。昼には日本人街に行き、日本食を食べて日米の交流を深めました。日本人街は前年にねぶた祭りを行うなど日本文化を米国に伝える一端を担っています。午後は、Aratani Hall にて、Minority問題に関するForumを開きました。学生側から2名が代表して、部落差別といったMinority問題について発表しました。そして、3名の大学教授にMinority問題についてご講演いただき、より知見を深めることができました。この1日を通して、改めてMinority問題の難しさを痛感しました。　（後藤昌也）

▲ガイドから説明を受ける参加者達

8月3日　ビーチデイ

【参加者日記】

アメリカに来て初めての日曜日は，ビーチで思いっきり羽を伸ばす日となった。午前中はSeal Beachでサーフィン教室。大半のJASCerにとってサーフィンは初体験とあって、初めは皆サーフボードに立つこともままならず波と悪戦苦闘。しかし約2時間のレッスンで巧みな波乗りを披露する人もちらほら現れ、参加者はすっかりサーフィンの魅力

に取りつかれたようであった。午後はHuntington Beachへ移動してのフリータイム。日曜日ということでビーチは大変な賑いであった。海で泳ぐ人ビーチバレーに興じる人、ショッピングを楽しむ人と、JASCer全員、アメリカのビーチを満喫したようであった。集合時間に集まった皆の顔はこの１日ですっかり黒くなっていた。慌ただしく過ぎたこの１週間の緊張をほぐし、また明日から始まるハードスケジュールに取り組む英気を十分に養えたと思う。またアメデリとの親睦を深める上でも最高の１日であった。　（坂本朋美）

◀サーファーズ

ハンティントンビーチ▶での一枚

8月4日　メディアフォーラム、Hollywood見学

【日時】 2008年8月4日（月）

【会場】 University of California Los Angeles Royce 314

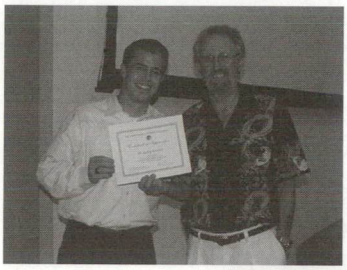
【概要】

1．アメリカでのヒットドラマ“Shogun”のスクリーニング
2．“Shogun”ディレクターJerry Londonとの Q&Aセッション
3．Seth Jacobowitz教授から“BRIC-a-Brac: Globalization and Genre in Miike Takahashi's City of Lost Souls”と題したプレゼンテーション。

映画・テレビ業界が有名なロサンゼルスにおいてフィルムの中で映し出される＜日本＞を、アメリカでのヒットドラマ“Shogun”を通してディレクターのJerry Londonとともに検証した。

また第二部ではSeth Jacobowitz教授をお招きして、グローバリゼーションによってメディアがどのように変わっていったか、“City of Lost Souls”の中で日系人がどのように描かれているかなどのプレゼンテーションして頂いた。

フォーラム後は参加者各々でHollywoodへ行きフリータイムを堪能した。



◀Shogunの監督 Jerry London氏と

ウォークオブフェイム▶

8月5日　分科会フィールドトリップ、比較政治フォーラム

この日は午前：分科会、午後：会議全体でのフォーラム、夜：スペシャルトピックスという構成だ。

分科会フィールドトリップ

通常は教室の中で議論を繰り広げる分科会だが、有識者との交流ができるように、また滞在地の特徴を活かした生の体験ができるようにと、フィールドトリップの日を用意した。街で博物館を訪問したり、日本経済新聞のアメリカ支局の方々に講演をしていただいたり、あるいは分科会間で共同セッションをしたりと、各分科会は普段と一味違う経験をすることによって新たな方向性を見出したようだった。

比較政治フォーラム

午後は参加者主導の比較政治フォーラムである。フォーラムの趣旨は日米両国の政治を理解し、学生が政治主体の一員となって何に貢献できるかを探るものだ。UCLAのTamanoi教授から市民の政治参加に関するスピーチを頂いた後に、下記のグループに分かれて議論を進めた。各グループのテーマは各会議参加者リーダーが、事前に検討を重ねてできたものである。議論後、全員で再び集まり、インフォーマルな発表会と質疑応答を行った。ここでは主に＜市民の政治参加とそのモチベーション維持＞が全体を通して大きな議題となった。

班別のテーマとリーダー
※カッコ内はリーダーを示す

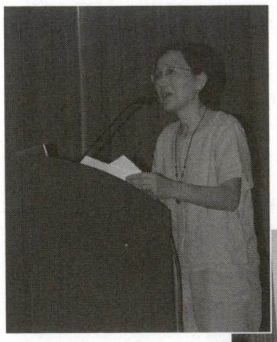
Group 1: Food Culture and Nationalism
（小野 元、Neal Akatsuka）

Group 2: How campaigns in the United States and Japan get swing votes
（大井あゆみ、仁平理斗、Jon-Michael Durkin）

Group 3: Health insurance, private or public?
（後藤昌也、Chien Lam）

Group 4: Why vote? - An exploration of political apathy
（竹内友理、Robert Cooper）

Group 5: Centralism and Autonomy
（盛島正人、Charity Yoro）



◀JASCアラムナイでもある玉野井氏

発表の様子▶

Group 6: US and Japan in International Organizations? G8 Summit
（横山雄一、Kayoko Hirata）

Group 7: Conservationists and the indigenous community
（油井英孝、Rebecca Norton）

Group 8: Gun Control（坂本朋美、Gregory Schuster）

スペシャルトピックス

スペシャルトピックスでは、人体の商業化、日本の将来、歴史問題といつもながら多様なトピックが出揃い、UCLAのキャンパスの中で議論する声が夜遅くまで響いていた。

8月6日　ビジネスデー

日米学生会議は各企業から支援を受けて成り立っており、また会議中のトピックでも企業を主体とした問題の解決策を議論している。何より、会議参加者の大半がその将来において企業に就職することになるのだから、ビジネスと日米学生会議の縁は切っても切れない。その一方で、学生の目から見た企業はやはり遠い存在であることも否めない。そこでLAサイトではビジネスと学生の接点を作ろうと試みた。その結果がこのビジネスデーである。班別の会社訪問、会議全体での港訪問、そして最後にはホテル会場で社会人との交流という三部立てである。

ビジネスで世界を股にかける社会人の方々を目の当たりにして、心なしか参加者の顔つきも緊張感を帯びていた。皆それぞれの進路について思いを馳せ、そして人生の先輩たちにアドバイスを求めていた。

【参加者日記】

いつものような真っ青でBrightな空とともに、1日の始まり。

今日はスーツを着てのBusiness Day。3つのグループに分かれ、それぞれ企業を訪問する。行き先はBall Corporation, So Cal Computer Recyclers, Stewart Filmscreen Corporation。私の行き場所は「缶」製作工場のBall Corporation。午後に全員で訪れたPort of Long Beach。有名な貿易港である。大量の缶と壮大な港との出会いのなかで印象的だったもの、‘責任と想いを持って働く人達の顔’。次の目的地に向かうバスの中。移動時間も充実させるJASCers。こんなに世界に多くの人がいるのに、こ

の人たちと出会えたことに運命を感じる瞬間。夕食は、Torrance Marriott South Bay Hotelで多数のビジネスマンたちとともにした。そこで印象的だった二つの顔、‘ビジネスマン(働く人)’としての顔と‘一個人としての顔’。

心地よい夜とともに、今日1日も終わる。

(渡辺ともね)

▲卓越したスクリーン会社で

◀貿易センターの屋上から

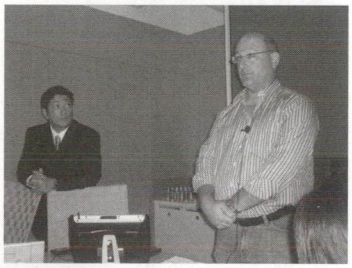
ビジネスレセプション▶の様子

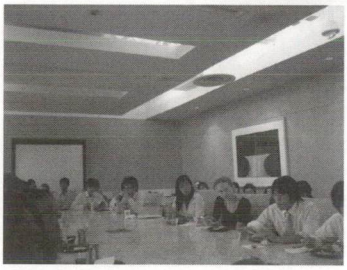
8月7日　法律事務所訪問、領事館晩餐会

ハリウッドという大きな文化産業を擁しているLAでは、それに関連するビジネスも発展する。著作権を扱う法律事務所はまさにその良い例だろう。この日は、午前に分科会に分かれて議論し、昼からGreenberg Traurig Law Firmを訪問した。本法律事務所は著作権法をセールスポイントとしているが、極めて大規模な総合的な事務所で、グローバルに展開している。

法律事務所では日本語が堪能なNaoki Kawadaさんを始め、総計4人の方からお話を伺った。内容は、音楽の著作権からTVビジネス、そしてリゾート開発に基づく業務にまで及んだ。また、具体的な業務のみならず、法律事務所の全体的な仕組み、法律業界のこれからの動きもお話してくださった。3時間に亘る訪問の中、始終Kawadaさんが同時通訳をしてくださり、難解な法律用語でも日本人参加者は理解できたようだった。今回の訪問は、法律という一般的に敬遠しがちな分野にも参加者が触れ、そして同時通訳による会議の可能性を示唆した。

トップ弁護士の方々▶

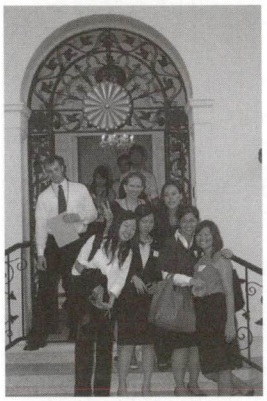




◀講演に聞き入る参加者達

夜は一同でロサンゼルス領事館に向かう。Ihara領事は歓迎スピーチにおいて現地の日本人街について言及し、将来韓国人と提携する可能性を述べた。自己の文化を保存することと、他者を疎外しないことが共存に繋がるという領事の考察に、参加者一同は大きな感銘を覚えた。その後も会議参加者は領事館職員と交流を深め、国際的な現場で働くことの意味をより一層感じた。

▲総領事に感謝状を贈呈



◀総領事公邸の玄関で

【参加者日記】

午前中に分科会内で議論をした後、午後は全米有数のGreenberg Traurig弁護士事務所を訪問した。業界全体の説明を受けた後、リゾート開発や著作権など各専門の弁護士(相談すれば時給700ドル程度)からの講義があった。それを仕切る代表は日本人弁護士であり、米国の最前線で活躍する彼の姿に大きな刺激をうけながら事務所を後にし、夜はロサンゼルス日本総領事邸でのディナーパーティーを楽しんだ。　(田中 豪　一部改)

8月8日　モンタナへ向けて出発

この日は恒例の早朝からの出発。4時半集合にも関わらず、参加者らは実行委員が朝食を配るのを傍から手伝い、水を運んでいた。会議を自分たちのものとして捉え、参加者としての主体性が垣間見えるひと時である。

会議も半分が過ぎたことになる。参加者は後半に向けての抱負を胸に、モンタナへと発つ。

【参加者日記】

月明かりに照らされながら、ジャパデリはUCLAを後にした。荷造りやお喋りでずっと起きていた人が多く、みんな眠そうな顔をしている。振り返ると、ジャパデリを見送り欠伸をしながら部屋へ帰って行くアメデリが見え、出発が早いジャパデリのために一緒に起きてくれていたのだと気付く。

夕方、ミズーラのホテルでアメデリと再会し沢山の“I missed you”とハグを交わしながら再び全員揃ったことにほっとしたが、その後すぐ2、3人ずつホームステイ先へ向かうことになった。JASCでは離れている間の時間が、私達の絆を更に強めているような気がする。

その夜私はミズーラの飛行場で誰かが呟いた言葉を思い出していた。『折り返し地点だね』。

JASCにいると、充実感と楽しさゆえについ、時間の流れを忘れてしまう。

「もう」2週間ではなく、「まだ」2週間ーそう自分に言い聞かせながら、眠りについた。　(竹内友理)

サイトコーディネーター後記

武田尚樹

第60回日米学生会議のサイトの中で一番の大都市であるロサンゼルスサイト。そんな中で参加者にはアメリカの政治、経済、文化について見識を深めてもらいたいと思った。しかし、ただ企業を訪問してレクチャーを聞いて勉強をすると言った単純なフィールドトリップだけでなく、なるべく参加者に、自ら考え問題意識をもってほしいと願った。

政治の面においては、マイノリティーフォーラムで分科会がプレゼンテーションを行ったり、比較政治フォーラムでは、グループに分かれてもらい、相互に発表をしてもらった。

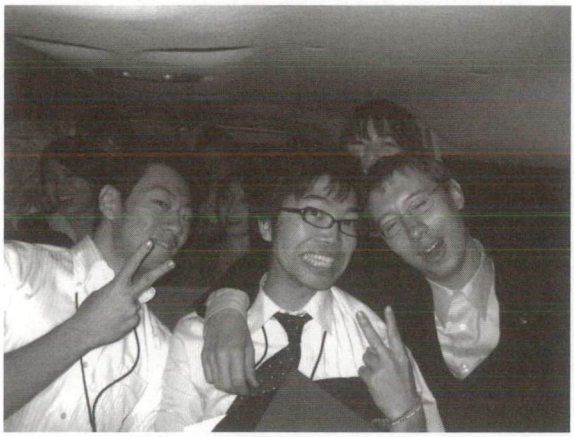
経済の面では、ビジネスデーの企業訪問後、アメリカに支店のある日本の企業や日米学生会議を賛助する企業の方々をお招きし、レセプションを開催した。参加者が食事を忘れ、企業の方々に積極的に質問を投げかけ、学生の立場からの率直な意見を述べ

ていたのが印象的だった。第60回日米学生会議が掲げていた1つの理念であるアメリカでの社会発信だが、パネルディスカッションやプレゼンテーションという形では行われなかったものの、このように個人個人が交流することにより実現できたのではないかと思う。

ロサンゼルスサイトコーディネーターでミーティングを重ねるたび、そこで実現したいことが増えていったため、計画時、移動日を除いたロサンゼルスで過ごす6日間すべてのドレスコードがビジネスフォーマルとなってしまったことに気がついた。そこで、丸1日をビーチデーにすることにより、その日は大都市での企業訪問やフォーラムから離れ、その土地特有の文化に触れつつ、西海岸の太陽をたくさん浴びリフレッシュすることが出来た。

最終的に、忙しいはずのロサンゼルスサイトも交通手段など効率性を見直すことによりフリータイムを十分確保することができた。LAサイトがアカデミックになり過ぎてしまうのではないかと懸念を抱いていたが、目的意識の高い参加者に救われ、上手くオンとオフの切り替えができた。この1週間で、参加者だけでなく会議外の方々から多くの刺激を享受できたのではないだろうか。

最後になったが、アカデミックな面でサポートしてくれた李、ユニークなアイディアで数々のイベントを立ち上げてくれたSchlachet、軍隊式で皆にしっかりと指示出しをしてくれたTurner、いつもサイト企画の相談に乗ってくれたJenkaに感謝の気持ちを述べたい。サイトをゼロから作ることは並々ならぬ努力を要したが、その中でも、1日1日と近づく本会議を想像しながらする皆とのミーティングはとても楽しかった。それぞれの努力が積み重なりあった結果の本番での達成感は一入だった。ありがとう。



▲LAサイトコーディネーターボーイズ

▲仲良しECs大集合

モンタナ
8月8日～8月14日

サイトコーディネーター

廣田隆介　渡辺恭子　Aya Nakanishi　Hidemi Tanaka

モンタナサイトスケジュール

8月 8日(金)　ミズーラ着
　　ホストファミリー対面式
8月 9日(土)　ホームステイ
　　Jeannette Rankin Peace Center
　　キャンドルセレモニー
8月10日(日)　ホームステイ
　　Western Montana Fair
8月11日(月)　分科会活動
　　Free Cycles Bike Building Workshop
8月12日(火)　戦争と平和コースフィールドトリップ
　　環境コースフィールドトリップ
8月13日(水)　分科会活動
　　Libby-Minamata上映会
　　スペシャルトピックス
8月14日(木)　環境フォーラム
　　ディナーレセプション
8月15日(金)　ボストンサイトに出発
＊宿泊場所：Campus Inn、Holiday Inn Express

モンタナサイト理念

雄大な自然に囲まれ、時間の流れが緩やかなモンタナ。人々はアメリカ西部の古き良き伝統を受け継ぐ一方で、環境問題や平和活動に力を入れる革新的な土地でもある。当サイトでは大都市とは異なるアメリカの一面を、ホームステイや環境フォーラム、戦争と平和コースフィールドトリップなどを通じて参加者に体感してもらう。そして人が自然との共存を図るここモンタナから、アメリカの原点とこれからを見つめ、多様なアメリカ社会への理解を深める事を目的とする。

8月8日　ミズーラ着、ホストファミリー対面式

アメデリの飛行機が遅れ、ジャパデリが4時間ほど先の到着となり不安の幕開けであったが、分科会の準備を始める者、不足する睡眠を補う者など、デリゲートが臨機応変に対応してくれたお陰で幸先の良いスタートとなった。アメデリの到着と共に待ち合わせ場所のDouble Tree Hotelに次々とホストファミリーが集まり、ミズーラ市長からのProclamationが読み上げられ、日米学生会議は正式にミズーラ市での約1週間の活動をスタートさせた。

PROCLAMATION

JASC
Japan-America Student Conference

WHEREAS, it is one of the responsibilities of the Mayor of the City of Missoula to recognize occasions of outstanding significance; and

WHEREAS, Missoula has attracted and will host the 2008 Japan-America Student Conference; and

WHEREAS, it is a pleasure to recognize and welcome such an outstanding and unique activity to the City of Missoula, as well as to herald the fact that this year's 60th Annual conference, and the 75th anniversary of the program, takes place at The University of Montana – The Maureen and Mike Mansfield Center; and

WHEREAS, Missoula salutes the 2008 Japan-America Student Conference, with the theme: "Students Redefining Their Role Through Insight and Action".

NOW, THEREFORE, I, John Engen, Mayor of the City of Missoula, in the State of Montana, do hereby proclaim August 8 – 15, 2008, as

JAPAN-AMERICA STUDENT CONFERENCE WEEK

in Missoula, Montana and call upon all residents of this city to join me in supporting this most noteworthy activity.

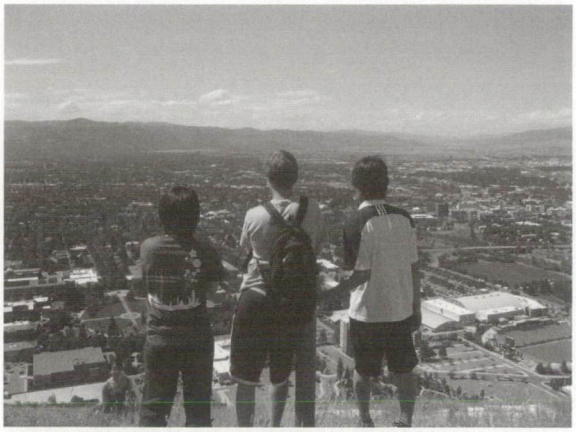
IN WITNESS WHEREOF, I have hereunto set my hand and caused the great seal of the City of Missoula, in the State of Montana, to be affixed at Missoula, Montana, this 19th day of June in the year two thousand eight.

▲日米学生会議週間開会宣言

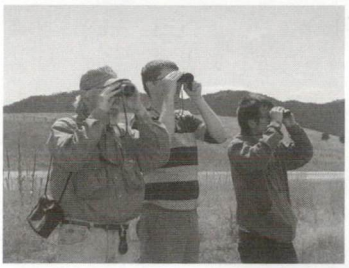
8月9日　ホームステイ、Jeannette Rankin Peace Centerキャンドルセレモニー

午後に予定されていた運動会が悪天候により中止されたため、デリゲート達は思い思いにホストファミリーとの時間を過ごした。中にはハンティングや、登山、川下りに繰り出した者もおり、モンタナの大自然を満喫する良い機会となった。

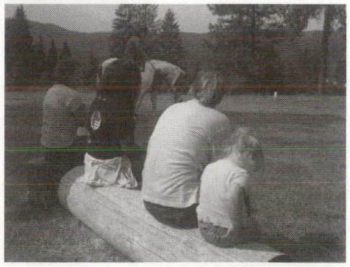
夕方には有志でJeannette Rankin Peace Centerが主催する、平和の蝋燭行進に参加した。63年前に長崎に原爆が投下された日を国籍に関係無く噛み締め、平和への思いを新たにした。



▲ミズーラ市が一望できるM山山頂からの眺望



◀バッファロー見学に出掛けた一行



ホストファミリーと▶乗馬体験

▲キャンドルセレモニーの様子

8月10日　ホームステイ、Montana Western Fair

午前中はホストファミリーとの最後の時間を過ごし、昼過ぎに日米デリゲートが再集合した。午後からはWestern Montana Fairに全員で繰り出し、移動遊園地やDemolition Derbyと呼ばれる自動車同士の破壊ショーなど、アメリカ中西部のワイルドな文化を体感することとなった。

【参加者日記】

午後は身支度を整えてモンタナフェアに向かう。オールドアメリカンの雰囲気漂う、小さな田舎の可愛らしい遊園地といったところであるが、流石は“アメリカ”、筆者を2時間激しい乗り物酔いで苦しめるなど実態はなかなかの強者揃いであった。園内でのダービー観戦の際には、日本ではみられないあの豪快さと、興奮して急に好戦的になった某アメデリに驚かされた。一日を通してモンタナの魅力を満喫し、JASCerとの絆を感じさせられる日であった。

（中村玲奈　一部改）

【ホームステイ感想】

「モンタナサイトで一番の思い出は？」

参加者のほとんどがこう答えるであろう。

「ホームステイ!!」

今回のホームステイは2泊3日。滞在先は直前まで秘密にされていた。私はどのデリとどのような家庭に滞在するのかとても楽しみであった。私はデリ2人とCharyn、Scottというカップルと犬6匹の家にステイさせていただいた。彼らは環境に対してとても熱心であった。それは生活のいたるところで垣間見ることができた。たとえば、ペットボトルは決して買わず、タンブラーを持ち歩く。道端のゴミを拾う。買い物では100%リサイクル素材の籠を持参。屋根にソーラー電池を設置。レストランの食べ残しは持ち帰るなど。私たちは本当の環境保全、エコフレンドリーな生活とはこういうことだと身をもって経験することができた。同時に私たちの環境に対する考え方は甘すぎると痛感した。

ステイ中企画されていた運動会が雨で中止になってしまったのは残念だったが、他にもたくさんのことを経験した。ポルシェで満天の星空の下をドライブ。大自然に囲まれてバルコニーでブランチ。 犬

たちと庭でフリスビー。(私は犬が苦手だったが)市場へ買い物。ハイキング。隣町の温泉。朝食に味つき昆布の卵焼きを作ったこと。

2泊3日と期間はとても短かったが、私たちJASCerはしばし会議のことを忘れ、ミズーラの大自然の中で生活している地元の方々と各々が有意義な時を共有した。その証拠に数日間、私たちはホームステイの話で持ちきりだった。

ホームステイ後も私たちの交流は続く。2人はホテルに遊びに来てくれ、Charynは環境フォーラムに参加してくれた。今でも彼らとたまにメールを交換している。このようにJASC中での出会いがこの先も続けばよいと思う。最後に、ECの皆、JASCerをとても温かく迎えてくださったミズーラの皆さん、ありがとうございました！(今度こそ運動会をしたいです。)　(渡邊千尋)

▲お世話になったホストファミリーと

8月11日　分科会活動、Free Cycles Bike Building Workshop

午前中は久々の分科会活動。ファイナルフォーラムが脳裏をチラつき、皆一様に分科会に対しての集中力が高まることで、意見の対立も先鋭化する。同時に会議も中盤に差し掛かり、疲れと睡眠不足で周りに対する配慮に欠け、ぶつかり合うことも増えてきた。そのような困難を乗り越えて行くことで、分科会としての団結力が高まっていった。

午後は一転変わって、リサイクル部品を使った自転車制作に取り組んだ。環境意識の高いミズーラ市ならではの取り組みで、誰でも無料で自転車を作ることができ、それを支援するボランティアの方々も意欲満々で、出来上がった自転車は街の中で共有されているという。JASCerはそのような先進的な取り組みを学ぶと共に、純粋にモノ作りの楽しさを味わっていた。

【参加者日記】

8月11日、午前中はRT活動。Final Forumまで後1週間と迫っている事から各RTとも気合が入ってきていることが分かる。我がRTも最終的な方向性を決める議論をした。さすがにここまで来るとそれぞれの思い入れが交錯し、最初は前に進まなかったが何とかまとめる事が出来た。

午後からはworkshopで『Free Cycle Shop』という、廃棄された自転車を修理して使えるようにするイベントに参加した。多くの者が久しく持っていないであろうスパナやペンチをなれない手つきながらも扱う姿は、どこか懐かしいような新鮮なような感じがした。

友人と試行錯誤を繰り返し完成させた自転車は不恰好ではあったがちゃんと動き、それに乗って受けた風の心地よさと言ったら今まで体験した事の無い程に気持ちが良かった。このworkshopを通してリサイクルの大切さへの意識、地元住民との楽しい交流ができ私は非常に満足して眠りについた。

(比嘉慎一郎)

8月12日　戦争と平和コース、環境コースフィールドトリップ

この日は2つのグループに分かれて、それぞれのテーマでフィールドトリップを行った。それぞれ最先端の場所はデリゲートの知的好奇心を刺激し、いつも以上に質問の手が挙がっていた。夜はダウンタウンでのフリータイムを設定していたが、皆自主的にホテルに残り、分科会の作業を進めていたことが印象的であった。

戦争と平和コース

引率担当：渡辺恭子　Hidemi Tanaka

1. Missoula Peace Park, Jeannette Rankin Peace Center, Fair Trade Store

Jeannette Rankinは全米で初めてアメリカ議会に選出された女性であり、そして、第一次世界大戦に参戦反対の票を果敢にも投じた人として知られている。彼女の意志を継ぎ活動に取り組むJeannette Rankin Peace Center（http://www.jrpc.org/）の方に案内してもらいながらMissoula Peace Parkを散策した。山の上にあるこの土地をPeace Centerとボランティアの人たちが協同し、自由に人々が集まり平和について語り合える場を作る取り組みを続けている。山の側面には、Missoulaの町から見えるように、と現在進行形で巨大なピースマークが石を使って形作られている。ここにやってきた人達は、山にある石をそこへ置いていくという。私達JASCerもそれぞれに石を手にとり、反戦を示す巨大なピースマークを形作る石を置いていった。その後は、Peace Centerに移動しセンターの理念や取り組みについて伺うとともに、収益の一部として併設・運営されているFair Trade Storeも見学した。

▲ピースマークに石を置く参加者達

2. State Veteran's Memorial Rose Garden, Fort Missoula Rocky Mountain Museum of Military History

アメリカの軍事歴史について学ぶFort Missoula Rocky Mountain Museum of Military History（http://www.fortmissoula.org/）の方に案内をしてもらいながら、State Veteran's Memorial Rose Gardenを見て回った。そこには、大小様々の戦争記念碑が建設されており、訪れる人々に過去命をかけて国のため、愛する者のために戦った者達がいることを思い出させる。その後は、Fort Missoula Rocky Mountain Museum of Military Historyに移動し、アメリカ開拓時代から、テロとの戦争、現在に至るまでのアメリカ軍事の歴史を展示した資料館を各自見学した。

▲ベトナム従軍兵士の像

3. War&Peace Forum

午後は、午前に訪問したJeannette Rankin Peace CenterとMilitary Museumの方々、そして第二次世界大戦も経験した退役軍人といった方々を交えてのフォーラムを開催した。まずは、4人のスピーカーの方々からそれぞれのテーマのもとスピーチをして頂いた。太平洋戦争での経験について、平和活動の重要性について、アメリカ軍の政策・使命・抱える

▲立場の違う皆が輪になって議論を重ねた

問題などについて4人の方々から伺い質疑応答を経て、その後1つの大きな円になり意見交換を行った。意見交換では、広島・長崎への原爆投下の目的は何だったのか、それは正しかったのかという事から、日本の憲法9条の意義を日本人はどう捉えているのかといったことまで議論が及び白熱した時間となった。

この討論の模様とインタビューが、You Tube上にアップされている。
http://jp.youtube.com/watch?v=hsFr02s1VAM

環境コース
引率担当：廣田隆介　Aya Nakanishi

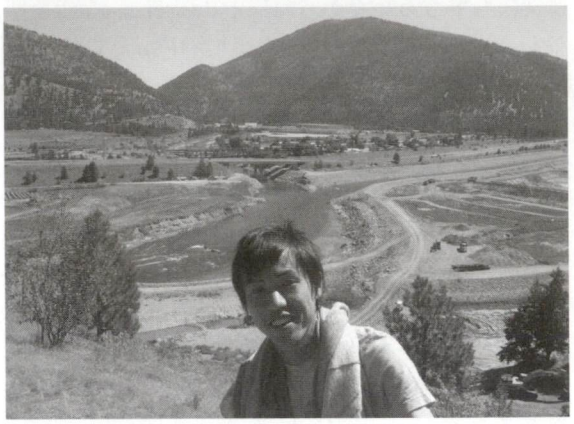
1. Montana Technology Enterprise Center

モンタナ大学と共同で最先端の環境技術を研究しているMonTECを訪問し、レクチャーと施設見学を行った。レクチャーでは水素エネルギー、リニアモーター、バイオマスエネルギーなど代替燃料技術を学び、技術的にはそれらが確立されていることを再認識した。その後実際に太陽光発電、風力発電、そして水素エンジン車を見学し、それらが市のバックアップを得て市民にも広がっていることを聞き、ミズーラのような小さな自治体から環境活動を始めることの意義を感じた。

▲ソーラーパネルを見学するデリゲート達

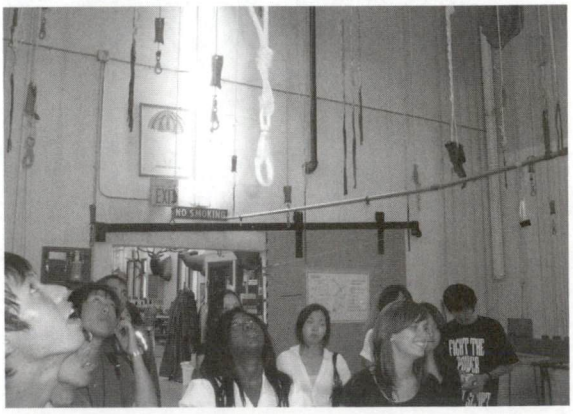
2. Milltown Dam Superfund Site

100年程前の大洪水の影響で、鉱山廃棄物が蓄積されてしまったMilltown Dam。その汚染物質処理作業に当時鉱山開発をしていた一企業が裁判によって全責任を認定され、現在でも汚染物質の除去がその企業によって行われている。企業が産業廃棄物を山林や空き地に廃棄し、言い逃れができてしまう日本との違いにショックを受け、日本でもこのような活動を広める術は無いかJASCer同士話し合った。


▲干上がったMilltown Damをバックに一枚

3. Smokejumper Center

人間の命、財産、そして野生動物やその土地の植生を破壊する山火事は、現在アメリカで社会問題になっている。その山火事専門の消防隊である、Smoke Jumper達の基地を訪問した。山火事に飛行機から飛び込み、延焼を防ぐ彼らは一見輝いて見えるが、その裏には高倍率の試験と過酷な訓練があることを聞かされた。更には近年温暖化や人工植林の影響で山火事は確実に増えており、デリゲート達は改めて環境問題の影響の大きさを実感した。



▲天井からぶら下がる消防士の装備品を見学中

【参加者日記】

今日は事前に選択した『環境コース』に参加した。（一方では『戦争・平和コース』が用意されていた。）水素燃料等の環境に配慮したエネルギーについて研究・開発を進める「Technology Enterprise Center」、地域と企業が一体となってダム解体を行う「Milltown Dam Superfund Site」、森林火災消火に立ち向かう「Smokejumper Center」を順に訪問。現地の環境問題に取り組む様子を実際の目で見て学ぶ貴重な経験だ。1日にこれほどのフィールドトリップをし、色々な人と出会うことが出来る事に幸せを感じる。

特に印象的だったのは「Smokejumper Center」。消火活動の為の重い荷物を背負い、ヘリコプターから勇敢に火に立ち向かう人々の姿を想像すると、常に全力なJASCerの様に情熱的で心打たれるものがある。夜は皆と合流し、お互いの1日について語り合いながら眠りについた。（廣瀬祥子）

8月13日　分科会活動、Libby-Minamata上映会、スペシャルトピックス

【参加者日記】

会議中、最も長いRT time が設けられていた日だった。各RTは、近づいているファイナルフォーラムまであまり時間がないことを再認識し、予定を再調整し始めたような印象を受けた。計7時間のRT sessionを終えた後、夕方にはリビー市のアスベストの被害と水俣市の水俣病の被害を対比させたドキュメンタリーを鑑賞した。実際にアスベストの被害者を家族に持つ方、ドキュメンタリーを制作したジャーナリストの方等に来ていただて行われたQ&Aでは、多くの質問が飛び交い、デリゲートの積極的な姿勢と問題意識の高さに刺激された。夜はバラエティーに富んだ内容が並んだ、デリゲートにより議論がリードされるスペシャルトピックの時間である。政治・文化・JASCの意義など多岐に渡るトピックから1つ選択し語りあった。これを機に今まであまり話す機会のなかったデリゲートとの距離が縮まった時間でもあった。（誉田有里）

8月14日　環境フォーラム、ディナーレセプション

環境フォーラム

【会場】 Missoula Children's Theatre

【テーマ】 Glocal Effect of Modernization

【概要】

1. 開会の辞　Mayor John Engen（9:00 ～ 9:45）
2. テーマ別グループディスカッション（9:45 ～ 12:30）
3. 基調講演　Prof. Steven Running（14:00 ～ 14:30）
4. パネルディスカッション（14:45 ～ 16:45）

パネリスト：Prof. Running、Ms. Gayla Benefield、Ms. Diana Hammer、金光慶紘

5. 閉会の辞　Maureen&Mike Mansfield Center Director Terry Weidner（16:45 ～ 17:00）
6. ディナーレセプション（17:30 ～ 20:00）

午前中は以下の9つのグループに分かれ、それぞれ設定されたテーマについて意見交換を行った。現地の活動家や市民の方も混じり、お互いの国の政策の違いや取り組みなども共有し学びあう事ができる良い機会であった。午後からはノーベル賞受賞者を含む3人の有識者と、日本側代表者である金光慶紘の4人で、Glocal(Global＋Local) Effect of Modernizationというテーマに沿ってパネルディスカッションが行われた。閉会後にはホストファミリーを交えてのディナーレセプションを行い、モンタナでの最後の夜はお世話になった方々との別れを惜しみながら過ぎて行った。

班別のテーマとリーダー

※カッコ内はリーダーを示す

Group 1: Poverty and Environmental Disaster（中村玲奈）

Group 2: Wildlife Conservation: Drilling for Oil in the Arctic National Wildlife Refuge（李　鎮河）

Group 3: Coral Reefs: A Victim of Global Warming（渡辺千尋）

Group 4: Environmental Politics: Reduction of Emission VS Respect for Economic Growth（誉田有里）

Group 5: Sustainable Farming（仁平理斗）

Group 6: Alternate Energies（神馬光滋）

Group 7: Conservationists and the Indigenous Community
（坂本朋美）
Group 8: E-waste　（金光慶紘）
Group 9: Natural Disasters　（松本秀也）

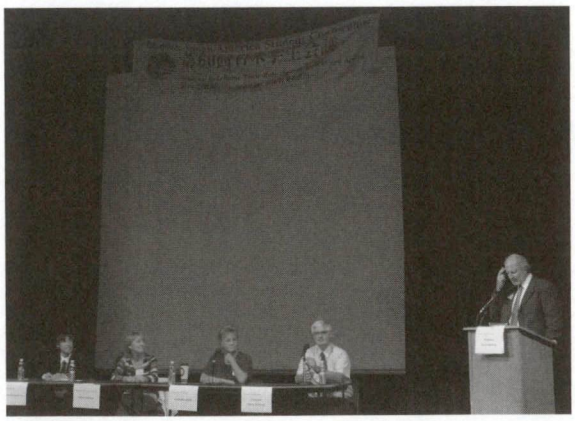
◀ディスカッションリーダーの9人

グループ別ディスカッション▶の様子

【環境フォーラムパネルディスカッションに参加して】

私は、8月14日に開催された環境フォーラムのパネルディスカッションに、パネリストとして参加した。この日は、モンタナサイトの最終日であり、このサイトの目玉と言ってよいイベントだ。パネリストはProf.Running（IPCCメンバー：2007年のノーベル平和賞共同受賞者）、Ms.Hammer（米環境保護局）、Ms.Benefield（リビーアスベスト被害者：活動家）そしてYoshihiro Kanemitsu（大学生：住所不定（当時））である。経験も知識も（住所も）ない自分が、パネリストに交ざって、何を発言できるのだろうと感じた。ディスカッションが始まると、やはり極度の緊張に襲われ、喉の渇きが止まらず、ずっと水を飲んでいたのを覚えている。後で、他のJASCerに聞くと、緊張しているようには見えなかったそうだが・・・。前半の1時間では緊張のせいか、あまり思ったことが発言出来なかった。何より、パネルの難しさは、質問に対してその場で即座に答えるということである。何とか回答したところで、その後すぐに、あれも、これも言えばよかったと後悔をした。冷静に落ち着いて考えてみれば、浮かんでくる言葉、アイディアもなかなか舞台の上、スポットライトの下ではそうはいかないものだと痛感する。こんな状況を変えてくれたのが休憩時間の出来事だった。休憩時間になり、壇上から降りると、アメデリも、ジャパデリも、みんなが温かく迎えてくれて、励ましてくれた。その時私は、気づいたのだ。他のパネリストを真似て、背伸びしようとしなくても、この信頼出来る仲間の、学生の代弁者となった気分で、学生らしくやればよいのだと。後半からは、壇上で、独りで何とか答弁しようとしていた自分は、もういなかった。JASCerのみんなと一緒にパネルをやっているという気持ちが、自分を凄くリラックスさせてくれていた。また、みんなに助けられたと思った瞬間だった。

最後に：このフォーラムをリードしてくれたAya、そして、この機会を与えてくれたJASC、励ましてくれたJASCer
Thank you!　（金光慶紘）



▲パネルディスカッションの様子

【参加者日記】

この日はMissoula Children's Theatreにて、環境フォーラムが開催された。様々な環境問題に対す

る地域のコミュニティーの認識や対策について熱く話し合われ、ディスカッション終了後は沢山のJASCerがパネリストに質問し、その環境問題に対する意識の高さが窺えた。

ミズーラ最終日となるこの日の夜、自然豊かなモンタナとの別れを惜しむように、多くのJASCerが、ホテル近くの山に登った。満天の星空の下仲間と語り合いながら、残された時間の短さに、皆一抹の寂しさを感じるのであった。　（松尾恵輔　一部改）

8月15日　ボストンへ向けて出発

【参加者日記】

モンタナを去る日。この日は朝の出発であったが、寝ずに語るもの、最後のサイトへの移動に向けて荷造りをするもの、それぞれモンタナ最後の夜を過ごした。と同時に、3サイトを終え、疲れも見えていた。しかしながらJASCがあと1週間で終わってしまうことを思い、皆ラウンジで、部屋で、それぞれ時を過ごした。そういった意味でモンタナサイトは、私達にとって特別だった。日本の学生にとってはもちろん、ほとんどのアメリカ側参加者にとっても真新しい環境であったモンタナは、私のアメリカに対するイメージにも大きく影響を与えたし、アメリカ側参加者も口を揃えて「良い経験になった」と語っていた。フォーラムなどでは環境というグローバルな問題を、国を越えて取り組むことの意義や難しさを知ることが出来た。アメリカでの3週間を思い1夜を過ごした我々は、眠りに着きながらバスに揺られ、最後の目的地ボストンへと向かっていった。

（松本秀也）

サイトコーディネーター後記

廣田隆介

「モンタナってどこですか？」「何故モンタナに行くのですか？」説明会や財務活動などの際にモンタナについて説明すると、必ずと言って良い程このように聞き返された。思えばモンタナサイトコーディネーターに手を挙げたのは、59回会議で秋田サイトを一番楽しみ、モンタナに同じ匂いを感じ取ったからであった。そしてその直感は正しかった。やはりJASCにとって一番必要な刺激であり社会発信の方法だったのは、現地の人や機関を含めたコミュニティとの深い関わりであった。そしてコミュニティとの距離はそのコミュニティが小さければ小さいほど縮まり易い。現にミズーラ市は人口8万人程度で、1時間もあれば街を一周でき、人々の繋がりは密接であった。JASCの存在は人から人へと知り渡り、市長を始めテレビ局、モンタナ大学、マンズフィールド財団、地元教会などからのサポートを得て、地元の方々を交えたイベントも多岐に渡った。その為JASCerは自分達の活動の影響が見え易く、一番JASCの意義を感じられたサイトだったのではないだろうか。今でもミズーラでの思い出話に花が咲くことが多いのは、その証であると勝手に解釈している。そしてこのように深い充実感と達成感を与えてくれる小さなコミュニティサイトに、これからもJASCの足跡を刻んで行って欲しい。

個人的には、JLP運動会プロジェクトで5月から本会議中まで共に念入りに準備を重ねてくれた伊藤、渡邊、田中に感謝の意を表したい。運動会は結局悪天候により中止になってしまったが、競技用に準備したCDはスキットやRTビデオなど思わぬ所で役に立ち、また興味を持ってくれたアメデリと個人的に騎馬戦などの競技を試したりもした。彼らの努力無しにはこれら本会議の旨味を増す副産物は生まれなかっただろう。そして最後に、ミズーラでJASCに関わっていただいた全ての人々、現地に出張までして企画してくれたHidemi、留学先のスペ

▲現地コーディネーターのクリスさんと

インから現地とコンタクトを取ってくれたAya、そして日本から拙い英語で共に頑張ったきょんに感謝の意を表したい。本当にありがとうございました。

渡辺恭子

モンタナという土地のことを知る人は少ない。私自身も実際想像もつかなかった、あるとしたらとんでもない田舎であるということから、ほのぼのした原風景のイメージくらいだった。もともと自然に囲まれて育ったものだから、サイトコーディネートするならばそういう慣れ親しんだ自然の温かさが多い場所がいいと思い手を挙げた。実際はどうだったかというと、期待以上の土地だった。まさに、"Think Globally, Act Locally "という言葉の意味を実感した土地であった。

ホームステイ・野外アクティビティ・モンタナフェアといった、アメリカならではの雄大な自然における文化体験は今でも現地の人との交流として深く思い出に残っている。その一方で環境問題への取り組み、平和活動、軍事資料館や戦争記念碑建設などコミュニティの人々が自発的に活動していることにとても驚いた。地球環境や国のあり方、また、それらに対して一人の人として何か出来ることはないかと考え、懸命に行動し挑戦している人たちに多く出会った。“Find the true north together.” 戦争と平和コースのフォーラム講演で、Jeannette Rankin Peace CenterのDirectorであるBetsy Dagueさんに言われた言葉が印象深く残っている。誰も平和の創り方に対する答えがどこにあるかは分からないが、協同しともに答えをみつけようとする姿勢の大切さを再認識させられた。彼女のまっすぐな瞳、そして語りかける言葉は彼女の歩んできた道、信念を想起させる力強いものだった。

そして、これは余談だがもう一つ、モンタナは予想外のハプニングが多かったサイトでもあった。モンタナに向かうには予想もしなかったプロペラ機へ乗り込み、がたがた揺れる機体に皆おののく。しかし、そこはまさに旅は道連れ、仲間が傍にいると思うと自然と怖さも収まった。お世話になったホストファミリーへのお礼の意味も込めて運動会を企画していたが残念ながら豪雨により中止。しかし中止連絡が行き渡った途端に、まるであの時の豪雨が嘘だったかのようにカラッっと晴れて拍子ぬけ。結局運動会は中止のままだった。ミズーラで有名な山の側面に描かれた"M"の文字へのハイキング。しかし実は登山なみの大変さだということを登り始めて気付くが時既に遅し。そして極めつけは、ボストン行きのアメデリ飛行機のフライトキャンセル。2日もアメデリと離れ離れになることになった。モンタナ、やってくれるな。ほのぼのした原風景のイメージに加え、ただでは済ませてくれないモンタナというイメージもさらに加わった。

癒しの地であると同時に、私達に様々な問題提起・考えるきっかけを与えてくれたこの土地、そしてコミュニティの素晴らしい人々に心から感謝を申し上げたい。遠く離れた地においても、現状の問題を変えたい、行動を起こしたい、という志を持ち力強く生きている人が多くいること、そしてそういった人たちと出会い共感し励まされた。最後になりますが、サイト開催にあたりご支援くださった全ての方々に厚くお礼申し上げます。

アメリカ側実行委員　Aya Nakanishi

Coordinating the week-long session in Missoula was the most challenging, yet also satisfying responsibility that I had as an EC. When I chose to manage the “rural site,” I had done so enthusiastically, wanting to recreate the wonderful memories of the likewise rustic Akita of JASC 59. Although I'd known that coordinating such a rural area would be difficult, I was unprepared for the confrontation with such a bleak reality; Missoula site had the lowest budget allowance and was without any established connections or alumni network to give us a direction. I remember the other ECs would joke about the Missoula predicament, holding the site to a different, lower standard than the three city-sites. Instead of feeling helpless, however, the lack of resources motivated me to work harder

to produce the best site possible, where delegates and the local community alike would learn from each other.

What is the best way to engage the community of Missoula? How can we interact with the local people? What is there that JASC can only do in a small town like Missoula? How can we make an impact? With the help of the other site coordinators, we worked hard to incorporate Missoula-specific issues and to really connect JASC to the local people. I am pleased to say that the delegates went above our expectations in building relationships with community members and actively participating in local events.

My personal project for the Missoula site was coordinating the Environmental Forum as the culminating event for the Missoula site. Although this project took months of planning and confirming of details, it is also my proudest accomplishment as site coordinator. Seeing community leaders congregate at the Missoula Children's Theater and engage in discussion with the delegates, I felt that JASC was fulfilling its purpose and living up to the mission statement. I would like to thank all of the group discussion leaders (Reina, Masato N., Yoshi, Tomomi, Oyuri, Jinha, Koji, Chihiro, Hideya) for their patience, diligence and for stepping up as true leaders at the forum; special thanks to Yoshi, who worked double-duty as a group leader and panelist. Lastly, thanks to my fellow site-coordinators.

アメリカ側実行委員　Hidemi Tanaka

It was the first time ever for JASC to visit the Garden City of Missoula. This fact worried us site coordinators. What events are we to plan? What is in Missoula? Where is Missoula? Such questions relayed as we struggled with ideas. However, such concerns quickly evaporated as we gradually discovered the countless possibilities the Big Sky Country had to offer. Yes, the first JASC in Missoula signified a new difficult challenge, but it also implied that it was a rare privilege and an opportunity for our genuine creativity. When JASC visits Missoula again, and I am sure it will, I sincerely hope our precedent will spark fresh inspirations and creative ideas for the future Missoula site coordinators.

In Missoula, all activities and programs revolved around three major themes: academic discourse, environment, and community engagement. We wanted to offer events with a rich and balanced blend of these three themes. Not only did these themes make Missoula site successful, it made the site significant. That is, significant to both the delegation and to the people of Missoula. And it is for this very reason, I am proud of our achievements in Missoula.

Being a rural site, many events were modeled after the 59th JASC's Akita experience. Like Akita, we had a local festival, host family program, roundtable sessions, and a major forum. This year, however, we decided to focus heavily on community engagement to leave a larger and definite impact to both the local community and the delegation. The Host Family Program, the Free Cycles Bike Building Project, the War & Peace Forum, and the Environmental Forum were all specifically designed to impact and engage the local members.

Our host family experience at the 59th JASC was highly memorable, but it slightly bothered us that we were always receiving things and thanking them. To return their favor, we have invited all host families to join us at our public events including the Bike Building Project, the War & Peace Forum, and the Environmental Forum. We have also planned the Undoukai, a Japanese style sports day event (which was unfortunately canceled due to rain). This sports

day event aimed to bring the delegation and the host families together through Japanese cultural sports and games, and it surely would have been a unique experience that only JASC could offer. We also collaborated with the Jeannette Rankin Peace Center for a candlelight walk to commemorate the August 9th Nagasaki bombing. The Peace Center members were delighted with the record turnout, and we felt positively about contributing to the community building.

Our week in Missoula certainly had a heavy emphasis on the environment, but we wanted to do more than merely discuss and learn about environmental issues. The Bike Building Project was significant for two main reasons. First, we directly contributed to sustainable transportation by building over 30 bikes from recycled bicycle parts. Second, we interacted with the local volunteers and built friendships. The War&Peace Forum gathered local peace activists, war veterans, active servicemembers, military historians, host families, and JASC delegates under one roof, and was undoubtedly bound to produce sensitive and uncomfortable discussions. Yet, we proceeded because we strongly believed in the bold impact it would make. We hoped this to become a life-changing experience, whether that meant reinforcing one's own opinion, synthesizing one's own with another opinion, or being enlightened to new perspectives.

The Environmental Forum embodied all three themes, as it was academic, environmental, and community engaging. Local environment experts and host families attended the group and panel discussions. As site coordinators, it was highly rewarding for us to observe people from various backgrounds actively engaged in constructive dialogue.

Lastly, On behalf of the 60th Japan-America Student Conference, I would like to express my deepest appreciation to all the individuals, host families, and organizations that generously supported our programs at Missoula. I would like to especially acknowledge and thank Terry Weidner and Christopher Marlow at the Maureen and Mike Mansfield Center, for the success of this site would not have been possible without their guidance, resource, and support.

It has been my greatest pleasure and honor to collaborate with my fellow site co-coordinators: Aya Nakanishi, Kyoko Watanabe, and Ryusuke Hirota. I would also like to thank Ashley Neeley Lam, Marie Kanke, and Hiroyuki Miyake for the advices and inspirations they have provided.

Thank you.

▲モンタナサイトコーディネーターの4人

ボストン
8月15日～8月20日

サイトコーディネーター

呉 宣咏　伊関之雄　Sam Scully　Nancy Yang

ボストンサイトスケジュール

8月15日（金）　ボストン着
8月16日（土）　分科会活動
8月17日（日）　ボストン観光
　　分科会活動
　　Local Japanese students との交流会
8月18日（月）　ハーバード大学教授とのお茶会
　　Government 訪問
8月19日（火）　ファイナルフォーラム
　　新実行委員選挙
8月20日（水）　ボストン市内班別観光（水族館・科学博物館・美術館）
　　タレントショー
　　ファイナルリフレクション
8月21日（木）　第60回日米学生会議閉幕
　　＊宿泊場所：Suffolk University

ボストンサイト理念

日米学生会議の発信力。これを問うた時に、アメリカで我々大学生の主張を根付かせるためには、ここボストンの他どこにもないであろう。そしてその拠点を米国、いや世界の最高学府のHarvard Universityで行なうことは、誰にとっても大変光栄なことである。

発信や学問的な色彩は、ボストンサイトの後半部分で強かったが、前半部分は少し状況が違っていた。前半部分はボストンでの文化、歴史、政治体制に重きをおいてサイト計画を行なった。分科会活動の「成果物」を発表する任務遂行の前に、ボストンでしか見られない物を集団で見学した。そこで感じ取った近代都市のイメージは、各参加者、各実行委員それぞれ違うであろう。

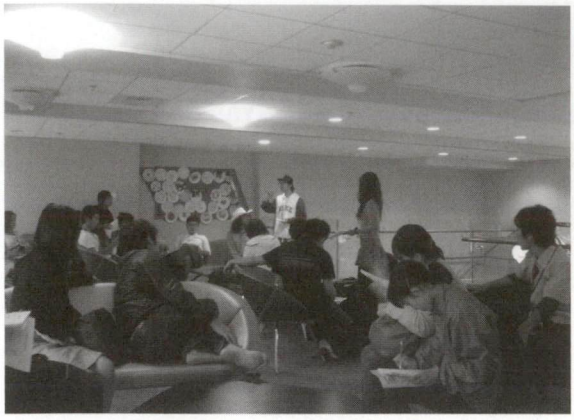
また、1776年の独立宣言から端を発したアメリカの行政システムを、ボストン市議会の各部局（ボストン市長事務所・公民権事務所・選挙事務所・市議会）を見学することで学び取ることができたのではないか。

ボストンサイト初日、アメリカ側参加者と実行委員の到着が、フライトキャンセルにより遅延してしまうという事件があった。にもかかわらず、21日のファイナルフォーラムでは日米の学生が一致団結して、妥協あり、葛藤ありの中、分科会活動の成果を最高の形で発表することができた。これも綿密に分科会での議論をまとめ上げることができる環境を提供して下さった、Harvard Universtiyのライシャワー日本研究所とSuffolk Universtiyの温かいご支援のおかげである。この場を借りて御礼申し上げたい。

8月15日　ボストン着

モンタナでゆっくりとした時間の流れを満喫した後は、第60回日米学生会議のハイライトであるファイナルフォーラムが行われるボストンへの移動。モンタナを発ったのはまだ太陽ではなく月がみえていた朝だったが、ボストンに到着し長時間の移動で疲れ気味の私たちを迎えてくれたのは終わりのみえないボストンの雨模様だった。

ニューヨークの名所がセントラルパークだとしたら、ボストンの名所はボストンコモンズという公園である。その公園のすぐ近くにある Suffolk Universityの寮に到着。フライトのキャンセルで一緒に移動することができなかったアメリカ側参加者の居ない空間は、言葉にできない違和感があり、皆が感じていたであろうその感情は、いつもより静まっていた参加者の声からも、表情からも出ていた。参加者のみならず、サイトコーディネーターとしてもボストンに来たのは初めてだった私達は、夕飯の準備のためにまだなれないボストンの町を雨と共に走っていた。



▲ジャパデリのみの緊急ミーティング

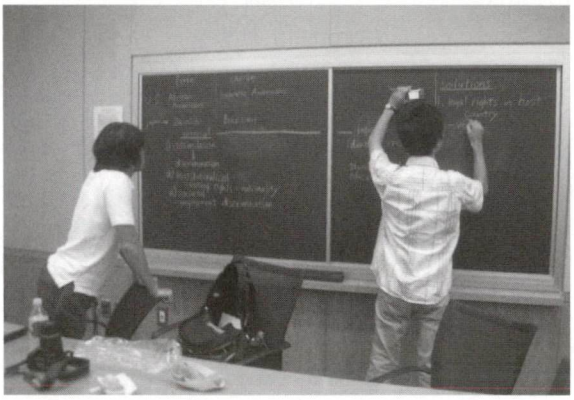
8月16日　分科会活動@ハーバード大学

アメリカ側参加者がボストンに着く時間がやっと分かった喜びと共に、ボストン2日目の朝がやってきた。ボストンサイトのスケジュールには大分変更があったが、ファイナルフォーラムに向けての準備の時間だけは無くすことはできなかった。そのため、日本側参加者だけでハーバード大学にて分科会活動を行うことにした。モンタナサイトで分科会の時間を多く設け、ある程度お互いの意見を詰めていたので、日本側参加者だけでの作業もそこまで難しくはなかった。そして、シアトル空港で待機していたアメリカ側参加者との連絡がインターネットを通じてできるようになり、チャットや電話を同時に行いながら日米参加者は臨機応変にネットミーティングを行っていた。分科会によっては、休憩時間を利用してハーバード大学のキャンパスツアーをしたり、分科会メンバーで大学の近くに夕食を取りに行ったりして、ハーバードの雰囲気を楽しみながら分科会メンバー同士の友情を更に深める時間にもなった。

【参加者日記】

前日の飛行機トラブルのためアメデリ不在で迎えたボストン2日目。当初のスケジュールは大幅に変更され、ジャパデリのみで終日RT活動を行った。Harvard大学に到着後、ディスカッション、映像作成、パワーポイント作成など、ファイナルフォーラムに向けてRTごとに最後の追い込みを開始した。私の所属するCSR RTは、スクリプトを作成する一方で、シアトルに居るCSRアメデリメンバーとSkypeミーティングを行った。ファイナルフォーラム直前のトラブルによる不安をかき消すようにお互いジョークを飛ばしあった。

深夜3時にRT活動を切り上げ、HarvardやMITの日本人留学生とのレセプションのスピーチに取り掛かると、別のイベントでスピーチが予定されていた実行委員の竹内がやってきて、一緒にスピーチを書き始めた。2時間後、真白なスクリーンを前に口を開けて寝ていた竹内を写真に収め、落書きしようか迷いながら、朝を迎えた。　（盛島正人）



▲マイノリティ分科会の様子

8月17日　ボストン観光、分科会活動、Local Japanese studentsとの交流会

早朝にボストンに着いたアメリカ側参加者には午後からの分科会活動に備えて休憩してもらい、その間日本側参加者だけでボストン市内観光を行った。Trolleyと呼ばれるバスに乗り、いくつかのコースの中で止まりたいところに降りて観光をするという自由観光コースであった。その中でボストンハーバーに行って久々の海に魅了されていた人もいた反面、MITやボストン大学など名門大学の雰囲気に圧倒され、学問へのモチベーションが上がったという人も多かった。午前中の観光で元気を貰った日本側参加者は、午後からはアメリカ側参加者と合流し、ファイナルフォーラムに向けての準備に本格的に取り組んでいた。2日の空白時間があたかも無かったかのように話がスムーズに進んでいて、これまで

の友情がより輝いた瞬間であった。夜にはハーバード大学院やMITに在学中の日本人学生、そしてSTeLAという学生団体の実行委員を招き、彼らの話を聞き、お互い学び合う時間を持った。スピーカーがユーモアを交えながらアメリカでの大学院生生活をお話してくれたおかげで、日本側参加者もアメリカ側参加者もリラックスした雰囲気で質問することができた。違う空間で勉強している彼らとJASCerだったが、胸の中で燃えている情熱というのは同じなのだろうと感じた。

【参加者日記】

ジャパデリにはボストン3日目、アメデリには1日目。前の晩から到着が待ち遠しくて皆心待ちにしていたアメデリが早朝に到着。シアトルからの長旅から彼らが体を休ませている午前中に、私たちジャパデリはボストンをTrolleys busで観光。美しい街の景観と、涼しい風が心地良くうとうととしてします。バスガイドさんの街案内の名文句は「MIT = Millionaire In Training」。

午後には、全員でハーバード大学へ移動しファイナルフォーラムの最終段階準備に取り掛かる。夕方には、参加者の盛島君が携わって実現したHarvard、MITの日本人学生との交流会である。Science and Technology Leadership Association (STeLA)などで活動されている大学院生との貴重な交流ができた。その後は寮に帰って、寝る間も惜しんで各々RTに没頭するのだった。　（安川瑛美）

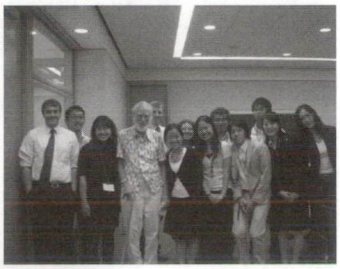
▲コーディネーター盛島君の開会の辞

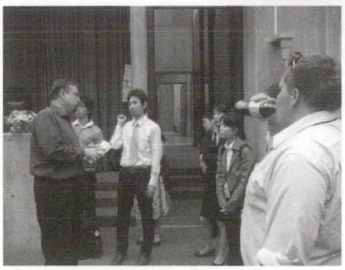
8月18日　ハーバード大学教授とのお茶会、Government 訪問

せっかく世界最高の名門、ハーバード大学まできて教授と会えないというのはとてももったいないということでずっと前から力を入れていたイベント、ハーバード大学教授とのお茶会。ハーバード大学で教えている様々な専攻の教授を招き、少人数のグループに分かれて、普段だったらなかなか会えないハーバード大学の教授のお金では買えない話を聞ける貴重な時間であった。

日米学生会議の参加者の中には両国の政治に興味を持っている人が多い。百聞は一見にしかず。両国政治の違いを知るという目標を持って、参加者は4つのチーム（ボストン市長事務所、ボストン市会議、市民権利事務所、選挙事務所）に分かれ、政府機関にそれぞれ訪問したのである。

教授を囲んで▶




◀ボストン市議会訪問

【参加者日記】

前日の夜はFinal Forumの準備が忙しく、寝不足であったが、朝のハーバード大学教授とのお茶会では、教授の話の面白さで目が覚める思いをした。様々な分野の研究をしている教授の中から、お茶したい人を選ぶのだが、私は、日本の伝統文学を研究している教授を選び、西洋から見た日本の伝統文学について話を聞き、「源氏物語」の愛の表現の仕方など、

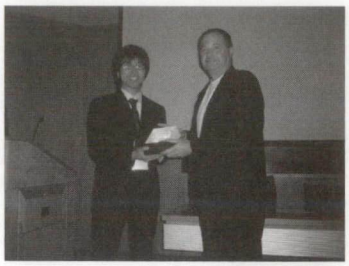
知的好奇心を刺激する話を多く聞けた。その後では、レセプションが開かれ、話の聞けなかった教授からも、話を聞くことが出来た。

昼からは、Government Tripで、アメリカの政治に関わる機関を訪れて、アメリカと日本の政府に関するオペレーションの違いを学んだ。やはり、アメリカでは連邦制・選挙などの日本と違う点が多く見られるので、それに関連する機構の違いも多く見られることが実感された。

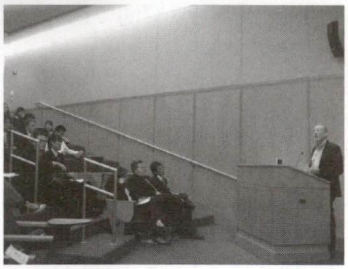
そして、夕方からは明日に迫ったFinal Forumの準備で、皆、深夜3時頃まで準備を行なっていた。

（油井英孝）

◀前夜の決起集会



◀ライシャワーセンターへクリスタルボール贈呈



ヴォーゲル▶
ハーバード大学名誉教授

◀サイト説明の様子

8月19日　ファイナルフォーラム、新実行委員選挙

ファイナルフォーラム

【会場】 Harvard University Center for Government and International Studies South Tsai Auditorium

【プログラム概要】

1. Final Forum開催概要　武田尚樹　第60回日米学生会議日本側実行委員長（10:30 ～）
2. 開会の辞　ギルマン博士　ライシャワー日本研究所所長（10:35 ～）
   参加者による60回各サイト説明　Ji Eun "Karen" Jung、Gregory Schuster、金光慶紘、油井英孝（10:45 ～）
3. 基調講演　エズラ・ヴォーゲル　ハーバード大学名誉教授（11:00 ～）
4. 各分科会成果発表（11:45 ～ 12:45）
5. 閉会の辞　Sam Scully　第60回日米学生会議アメリカ側実行委員長（12:55 ～）
6. レセプション（13:00 ～）

【参加者日記】

ついに、Final Forum、RT、そしてJASCの成果を発表する時が来た。“Japan as No.1”の著者として知られるEzra F. Vogel教授の基調講演を伺った後、参加者からの各サイト説明と、各RTの発表があった。RT活動の集大成である発表は、内容形式共に様々だったがしっかり時間をかけて準備されたのが分かるユニークなものばかりだった。目を潤ませつつレセプションで談笑する皆の胸にあったのは、フォーラムを無事終えた達成感と、少しばかりの寂しさとであった。　（横山雄一）

今日はファイナルフォーラム。どの分科会も2日間、寝ずにこの日に備えてきた。朝ファイナルフォーラムに向けて集合した時に皆の顔を見た。連日の徹夜により疲弊していたが、若者特有の清々しい希望に満ちた目を見た。ちょうど1年前の今日に決まっ

た分科会のテーマは、この1ヵ月間日米の学生により議論され、空中分解することなく、様々な手法により社会に向けて発信された。特に映像を制作した分科会が多く、今後の社会発信に活用できる素材が多く制作された。反省点も残されたと思うが、世界で一番熱い私たちの夏のフィナーレは未来へと繋がるはずだ。（高畑乃枝）

新実行委員選挙

この伝統ある日米学生会議の継続を支えているのは参加者である。60回目が実現したのは、毎年パッションとやる気を持った参加者が立候補し、来年の本会議を企画したいと名乗りを上げるからである。

【参加者日記】

日米学生会議参加者には、ファイナルフォーラムに加え、本会議の最後に果たさなければならない大きな務めがある。次期実行委員の選出である。立候補者はそれぞれ特徴あるスピーチを行ったが、どのスピーチからもJASCに対する熱い気持ちを確かに感じることができた。選挙結果発表後には、新実行委員は次期日米学生会議について話し合い、他の参加者は外出したり、語り合ったり、翌日のタレントショーの準備をするなどして、残された時間を様々に噛み締めていた。（横山雄一）

未来といえば、今日は第61回実行委員選挙の日でもある。選挙には立候補しなかった私であるが、立候補者のスピーチを聴き涙してしまった。60回続いたこの素晴らしい会議を継続させていく、新しい16人の実行委員の勇気にエールを送りたい。そして、それぞれのJASCは今日から始まるのだ。

（高畑乃枝）

【ファイナルフォーラム後のアメリカ側参加者Rachel Staumによる本会議全体感想スピーチ（一部略）】

When I first came, I didn't know what to expect from JASC. When people asked what I was going to do over the summer and why, I had trouble explaining because I knew so little about the conference. Now, when I return home, I think I'll have the same problem all over again. How can I explain what I did at JASC when so much has happened and so much has changed?

Throughout JASC, we've all been discussing what our purpose is in coming here. I think we feel a heavy responsibility in part because we were chosen to come here, which we know is an honor and a privilege and in part because we cannot help but feel the importance of JASC. After a month-long conference, after traveling across the continent, after meeting so many distinguished people, after studying so hard, we want to be able to say that we took this opportunity and made absolutely the most we could make out of it.

I know we all want to change the world, and we should. The world needs changing. But when I look out and see all of your faces, I have no doubt that I am looking at the politicians, diplomats, CEOs, journalists, and teachers who will change the world. At the same time, I'm looking at 63 people who make me laugh, make me think, and inspire me. Maybe the real purpose of JASC was bringing us together.

Throughout these four weeks we've spent together, I've changed and I've seen you all change. Our first business formal occasion at the Portland consulate general was the first time I'd ever worn a suit! At first we were all so nervous about mingling with the guests. I remember that it took five of us in a group to get up the courage to approach the first guest. Seeing how natural everyone was speaking to our guests at Boston site reminded me of how far we've all come. Today's final forum presentations are also proof of our intellectual growth.

I know that in a few days JASCers will scatter around the globe again, some of us returning to our colleges, some of us studying abroad, some of us entering the working world. Even for the few of us who become ECs, this experience can never

again be repeated; the 60th JASC was our JASC, our chance to grow and change and come to know each other.

Still, I know that the 60th JASC doesn't end here. I've already heard people planning reunions in Tokyo and visits all over the globe, and thanks to the internet even those of us who live on opposite sides of the earth can talk to each other. After being one another's roommates, colleagues, friends, and, in a strange way, family for four weeks, I know that something as simple as distance won't weaken our bonds.

In sixty years, I want to see you all again, standing under the arch at Reed College, celebrating the 120th JASC. The world will change and JASC will change, but still I imagine us all there with our canes and our hearing aids, celebrating sixty more years of JASC and sixty years of friendship.

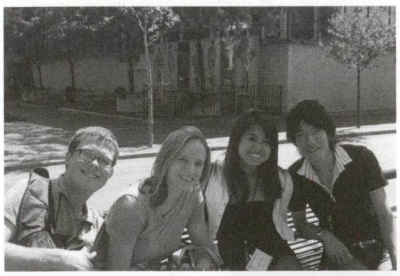
8月20日　ボストン市班別観光（水族館・科学博物館・美術館）、タレントショー

今までファイナルフォーラムのための分科会活動の作業が手一杯で、外に出て思いっ切りボストン市内を堪能する時間を取ることが中々できなかった。天気は晴天、温かい日差しも照りつける。いざ楽しむ時となると、参加者・実行委員はただちに「観光モード」に切り替え、残り少なくなってきた時間を最大限に楽しんだ。

各自夕食を取り終えた後は、全員で集合して新実行委員による来年度の会議概要の発表を聞いた。今まで参加者だった16人の顔が実行委員らしく変化しているのを見て、非常に頼もしく思えたのだった。

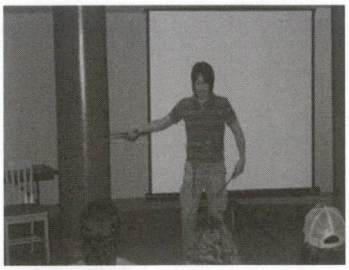
▲第61回日米学生会議実行委員会

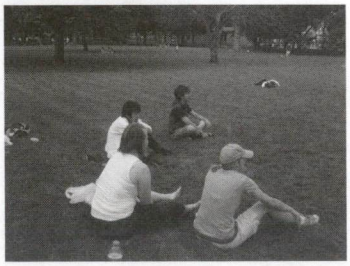
その後、お待ちかねのタレントショーを行った。出会って１ヵ月の中で、自分の内に秘めている才能を未だ隠し持っている参加者・実行委員は多い。中には、意外な才能を披露してくれる人もいれば、想像通りの出し物を披露してくれたり、写真を組み合



◀ボストン市内観光の一幕

様々な個性が光る▶





夕暮れの▶
ボストンコモンズで

◀日米ラッパーのコラボレーション

わせて作成したビデオで本会議の思い出を投影したりと、非常に個性があふれる時間であった。

お楽しみから一転、「ファイナルリフレクション」に移る。自分一人、皆の前に立ち、最後のスピーチをすることができるチャンスなのである。例年通り、この場は非常に感情的になってしまう。感謝の言葉や仲間と離れる寂しさの共有、そして素直に自分の気持ちを言葉に表す人もいた。一人一人がこの会議に対して抱く思いを、生の声で聞く事ができた。

サイトコーディネーター後記

伊関之雄

この場を借りて、まずはボストンで我々の学生会議のために様々な施設の提供をしてくださったSuffolk University並びにHarvard Universityに感謝の意を表したい。インターネットを通したリサーチも宿泊した寮にて簡単に使用ができ、ファイナルフォーラムに使用したオーディトーリアム無しには各分科会の成果の発表は大変難しかったであろう。最高の環境での最高の偉業を成し遂げることができた、と感じている。

このサイトは、度肝を抜かれるような事態から始まった。Missoula空港とSeattle空港で、アメリカ側参加者と実行委員が2日間足止め状態となってしまったのだ。ファイナルフォーラムまで残り数日しかない状況のなかで、どのようにして分科会の議論を行なえば良いのか。果たしていつアメリカ側は到着するのか。このような不安と絶望感が生じてしまった。日本側実行委員とアメリカ側実行委員との綿密な打ち合わせを携帯電話で行ない、インターネットを双方で自由に使える環境にあったことから、メールやオンラインミーティングを利用して議論を続けることができた。当日は、実行委員として多少混乱状態になっていたが、今振り返ると臨機応変に物事を対処する力を身につける良い機会になったと自負している。

日本側のみでBoston市内を移動している際は、初めて観光に来た際の京都の四条河原町の地下鉄や町中をさまよっているような感じであった。宿泊場所がBoston市内のど真ん中に位置していたために、多人種多文化を肌で感じ取れる場所に我々はいた。今までの各サイトで感じ取った様々な「アメリカ」にさらに、「都会」・「映画で出てきそうな町並み」といったスパイスが混じった最終サイトになったのではないか。

とりわけ、最終サイトはファイナルフォーラムに向けて準備などでストレスが自然に溜まってしまい、睡眠時間も少なく、体力的にも厳しい時間が多々あったであろう。しかし、「新たな潮流へ～60回を通しての再考と創出～」の理念の元に、各参加者は学生の立場として自分たちの主体的な言動が社会に発信されるように辛抱強く議論を続けた。各分科会の発表が終了した後の各参加者・実行委員の顔に滲み出た満面の笑みはそれを物語っている。

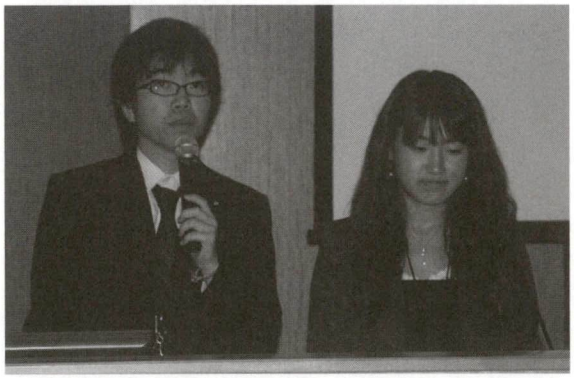
最後に、何度も記しているようにHarvard UniverstiyとSuffolk Universtiyの厚いご支援に感謝したい。両校の厚いサポートなしでは、各分科会の入念に準備してきた成果を最高の状態で発表することはできなかったであろう。そして計画が度重なる不意打ちでスムーズに進まなかった時でも、絶えず笑顔を保ち、楽しむ気持ちを持ち続けてくれた各参加者・実行委員に感謝したい。

呉 宣咏

4ヵ所のサイトの中で一番最後のサイトになるボストンは、会議の幕が下りる所でもあり、参加者のみんなが涙を流しながら再会を望む場所でもあり、個人的に2年間の日米学生会議の活動が公式的に終わる所でもある。一緒にコーディネーターをした伊関之雄は第59回日米学生会議に受かって、最初に参加した春合宿で初めて話かけてくれたJASCerである。私にとってボストンサイトコーディネートは日米学生会議の始まりと終わりがよく混ざっていて、今まで味わったことのない味をしていた。ボストンにはそれまで1回も行ったことが無かったので、どういったプラニングをすれば良いのかがよく分からなかった。周りのボストンに留学経験がある友達に話を聞いたり、ネットで検索したりしていたが、それらをしているうちにボストンに初めていく人だからこそボストンサイトに期待することを活かした方

が、JEC（日本側実行委員）としてできることではないかと考え始めた。２人のアメリカ側実行委員がボストンで勉強をしていたため、そうしたほうがお互いのニーズを当てはめることになり、プラニングもうまく進むようになった。

４人が話しあいながらプラニングしたボストンサイトだったが、実際最初にボストンに着いたのは日本側参加者だけだった。ボストンサイトのコーディネーターであった日本側実行委員はたった２人。２人ともボストンが初めてで、到着時にはすでに辺りは暗くなっていた。まるで日米学生会議の中で更にボストン学生会議が始まったようだった。しかし、ゼロから全部日本側実行委員サイトコーディネーター２人で引っ張っていかなければならなかったボストンでの最初２日間が、私の中では一番充実した時間だったかもしれない。アメリカ側実行委員に頼らないで、自分達で考え、判断し、みんなをリードしたその２日間を終えて、アメリカ側参加者が来てから本格的なボストンサイトが始まった。１年をかけて計画したスケジュールに大きな変更が出てしまい、毎日夜２～３時までのミーティングやスケジュールの調整を行っていた。準備したスケジュール通りにできなくなったことはとても悔しかったが、肩を叩きながら笑ってくれたボストンサイトコーディネーター達のおかげでボストンでの日々は１日が１分のように感じるほど早く過ぎていった。本当に早かった。今振り返ってみると、パノラマのようにFacebookに載っている多くの写真と私の頭に残っているメモリがオーバーラッピングされ、ボストンへのノスタルジアを呼び起こしてしまう。またの機会でボストンに行くことになったら、私は間違いなくJASCerを探すでしょう。すぐ現実に戻って、日米学生会議はもう終わったと自分に言い返すでしょう。しかし、雨が降っていたあの夜、伊関と２人でボストンを走り回ったことや、クラブの音でうるさくて夜遅くまで眠れなかった日々、分科会メンバー達と熱い議論を行った後ハーバード大学の近くで食べたランダムな日本料理、目を擦りながら語り合ったラウンジなど、全ての思い出はそのまま心の奥に生きていて終わらないその話をしてくれるでしょう。私の生きていく原動力のたくさんの思い出を作ってくれた第60回日米学生会議のボストンコーディネーター伊関、Nancy、Sam、そして62名の参加者や参加者以外の全てのイベントに関わっていたみんなに感謝の気持ちを伝えたい。これからもよろしく、そしてお忘れなく。



▲ボストンコーディネーターの２人

▲１ヵ月共に頑張ったECs

第４章

分科会活動

環境とコミュニケーション分科会……64
法と社会分科会……71
企業の社会的責任（CSR）と
市民分科会……77
科学と倫理分科会……84
現代社会と伝統分科会……90
悲劇の記憶分科会……96
マイノリティと多文化社会分科会…… 102

環境とコミュニケーション～自然と共生するために～

Communicating Environmental Ethics Media : Mindset and Ecological Inspiration

分科会メンバー

金光慶紘
坂本朋美
竹内菜緒*
中村玲奈
仁平理斗
Joshua Schlachet*
Robert Cooper
Kayoko Hirata
Elizabeth Jones
（＊はコーディネーターを示す）

分科会概要

地球サミットや国連、NGOでの議論に代表されるように、環境問題に関する議論は絶えない。環境に対する意識は高まっているにもかかわらず、気候変動問題、排出権取引、生態系破壊などの問題が一向に解決されないのはなぜか。個人を取り巻く情報や媒体が人間の倫理観や行動を大きく左右しているからではなかろうか。例えば、Al Gore氏の映画「不都合な真実」がいかに人々を触発したかを考えたとき、環境問題に対する取り組みを成功させるためには、まず個人の考え方や姿勢を見つめ直す必要があることに気づくだろう。当分科会では、主体的に行動する個人と、その個人に影響を与えるメディアとの関わりや他者とのコミュニケーションを視野に入れ、自然との共生を可能にする道を探りたい。

事前活動

1. 東京大学木村准教授　勉強会

日時：6月7日（土）
講師：東京大学大学院工学系研究科原子力専攻
　　木村浩准教授

この日は、原子力発電に関する、パブリックコミュニケーションを研究しておられる木村准教授に原子力発電の基礎的知識、パブリックコミュニケーションについてお話を伺った。温暖化対策技術とも言われる、二酸化炭素を排出しない原子力発電についてポジティブな面、ネガティブな面の両面を知って、その有効性について考えるきっかけとなった。この日は金光慶紘がコーディネートをした。

木村先生を囲んで

2. 越智隆雄衆議院議員事務所訪問

日時：6月9日（月）

講師：衆議院議員　越智隆雄様

議員会館事務所において、政治がいかに環境対策に効力を持つことができるのか、また環境保護という争点のもとにどのようにして「政治と国民のコミュニケーション」を進め、国民を動かすことができるのかについてお話を伺った。特に私たち環境とコミュニケーション分科会にとって興味深かったのは、「政治と国民のコミュニケーション」をいかに取るのかという前述の問いに関係して、報道などのメディアがどれほど国民の意思決定に深く関わり、良くも悪くも政治に密接な影響力を持っているのかに関して、第一線で活躍する方の実感を伺うことができた点である。講師の越智隆雄氏は私たちのあらゆる質問にも全て真摯に答えて下さった他、他の勉強会開催に当たって講師の方の紹介にもご協力して下さるなど、本分科会の活動に多大なご協力をいただいた。この日は中村玲奈がコーディネートをした。

越智先生の事務所で

3．関西電力訪問

日時：6月18日（水）

講師：関西電力株式会社　地球環境室　砥山浩司様

関西電力本社にて環境への取組みを中心にお話を伺った。まず地球温暖化対策・循環型社会形成・環境コミュニケーションに焦点をあてた広報ビデオを見た後、担当者による説明、質疑応答、若手社員との意見交換を行った。ビデオと説明で、当社がいかに環境への取組みを推し進め、実績を挙げてきたかを知ることができた。その後の質疑応答と意見交換では、環境室地球環境グループの皆様が建前だけに留まらない率直な意見を述べて下さった。例えば多大な手間とコストをかけてまで環境活動を強化する理由を“環境を守るため”、“社会的責任”といった響きの良い言葉だけで片付けるのではなく、企業利益の追求といった点まで踏み込んでお話をしていただいた。また原発、外交、政策などあちこちと多様な話題であったにも関わらず丁寧に対応してくださり、4時間近くも応対していただいた。中身の濃い訪問となり、参加者一同大満足であった。この日は坂本朋美がコーディネートをした。

4. 電通訪問

日時：6月20日（金）

講師：株式会社電通　第8営業局　吉野次郎様

サッカー事業局　金大鐘様

環境問題とコミュニケーションは切っても切り離せない関係である。その中でも特に私たちの分科会では、企業から消費者への環境のコミュニケーション・メッセージを深く分析したいと考え、昨今話題にもなっているエコ広告の実態を知るため、大手広告代理店で数多くのエコ広告を作り上げている株式会社電通を訪問した。エコ広告事例集のプレゼンテーションをしていただき、昔と比べて現在のエコ広告はどのように変わったのか説明してもらった。また、環境問題を解決するにあたり必要なのは「規制」「税金」「コミュニケーション」であるが、その中でも「コミュニケーション」には可能性はあるが強制力はない、という意見を聞くこともでき「本当に世の中、コミュニケーションで良くなるのか」という根本的な問いを分科会に投げかけることができた。この日は竹内菜緒がコーディネートをした。

5. 小池百合子衆議員議員事務所訪問

日時：6月24日（火）

講師：衆議院議員　小池百合子様

環境大臣を務められていた小池氏より、環境取り組みに関わる国民の意思決定に大きな影響力を持った代表的政策モデルであるクールビズ政策と、今後

の日本の環境問題への取り組みの展望について、国際社会におけるプレゼンスに関連させるダイナミックな視点でのお話を伺った。クールビズ政策に関しては、立案の目的と狙い、戦略と展望について実際の政策の仕掛け人としての立場からお話を伺うことができ、分科会の内容をより成熟させるために有効な情報を得ることとなった。また「夏炉冬扇」、「心(地球をいつくしむ)技(LEDの開発、負の遺産を超える技術)体(税制や補助金、排出権取引などのシステム)をもった武道の精神」など、日本固有のアイデアを環境政策に生かすという視点を知ることで日本文化の優れた特性を再認識することとなった他、それ自体が本会議におけるアメリカ学生との議論において新しい切り口を提供してくれることとなった。この日は中村玲奈がコーディネートをした。

小池先生を囲んで

6. 日本テレビ訪問

日時：6月26日(木)

講師：日本テレビ放送網株式会社　情報エンターテイメント局　秋山健一郎様

日テレecoウィーク。我ら環境分科会メンバー全員一致で、日本テレビのこの取り組みに共感し、勉強会を申し込むことに。すると日本テレビは、快諾してくださり、全員一致で大喜び。日テレecoウィークの番組を担当された、秋山健一郎さんに、テレビ局というメディアの視点から環境について語っていただく。特に印象的だったことは、「まじめに、楽しく伝える」という理念。難しいトピックになればなるほど、「楽しく」という部分を忘れがちだが、人にそれを伝えるためには、この「楽しさ」が大事だと学ぶ。3年連続で開催されている日テレecoウィーク。今年は、1週間様々な番組内でもこれを取り上げ、最終日には「環境」をテーマに、13時間生放送という、全く新しい試みに挑戦した日本テレビ。「エンターテイメント×環境」というテレビ局にしかできないような取り組みに、環境という言葉の捉え方がまた1つ、広がったような気がした。この日は仁平理斗がコーディネートをした。

7. 分科会ミーティング

定期的にオンラインミーティングを設けることによって、各フィールドトリップの事前準備および事後フィードバックや、分科会の方向性などについての議論を活発におこなうことができた。オンラインミーティングの他にも、東京でのミーティングを数回(RT事前合宿含む)おこなうことによって、分科会メンバー同士の信頼関係を築くことができ、本会議前に十分な準備をすることができた。

本会議活動

本会議では、本会議前に出し合って整理した分科会タイムスケジュールに基づき、サイト毎に以下の枠組みで議論を行った。

1. 分科会セッション(ポートランド)

ポートランドでは、初めて対面した米国側分科会メンバーと自己紹介、各自の環境に関する興味分野のシェアをアイスブレーキングとしておこなった。また、日米の環境に対する意識・取り組みの違い、なぜ「環境」と「コミュニケーション」なのか２つのワードの関係性を話し合い、それらにより参加者内にある環境に対する意見の差を見解できた。さらに、お互いの直前合宿で話し合った分科会タイムスケジュールをもう一度見直し、今後のディスカッションの基盤作りを行った。また、本分科会は、様々な興味を持った学生が集まったこともあり、本会議前に1人5枚程度の分科会レポートを提出してもらったものを、各自1人15分でプレゼンテーションをおこなった。

以下、プレゼンテーションの題名である。

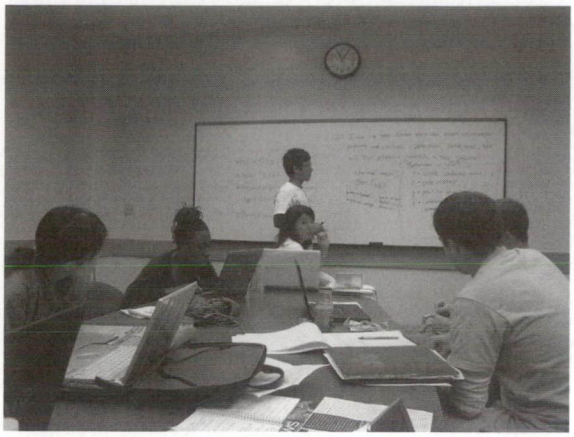
Joshua Schlachet: “Speaking for Nature: Agency in Environmental Discourse Then and Now”
Robert Cooper: “Reverse graffiti and the relationship between CSR and eco friendliness”
Kayoko Hirata: “Movements in increasing environmental awareness”
Elizabeth Jones: “Businesses using environmental concerns to increase consumption”
竹内菜緒: “Minamata disease and the media”
金光慶紘: “E-waste”
坂本朋美: “Forest Certification and certified tree products”
中村玲奈: “Environmental deterioration caused by poverty”
仁平理斗: “The Japanese media's impact on environmental issues”

2. 分科会セッション(LA)

本サイトにおける主要な3テーマは「メディアの働き」「政府・民間企業・メディアの役割・影響の強さ」「エコ・キャンペーン」である。特に興味深かったのは「現実の再生産」という「メディアの働き」に関する議論である。「不都合な真実」を含め、それが真実であろうとなかろうと、音声と映像を伴って流される情報の役割はただ「伝達」するという事に留まらず、新たな現実の基準を作り上げる程の影響力をもつ。悪い意味では「現実を歪める」働きとも言えるのだが、それはメディアが絶大な効力を持っている事実を示す。議論を通して、環境問題に対する人々のマインドセットにメディアを有効に機能させる事の重要さを皆が確認することとなった。

3. 分科会セッション(モンタナ)

モンタナは4つのサイト中、最も分科会活動の時間が長く、議論が広範であった。そして、迫りつつあるファイナルフォーラムに向けて計画を具体化させたのもここからである。モンタナでカバーしたトピックを列挙すると、国際協調と環境、企業と環境、政党と環境、資源政策と環境、宗教・文化と環境、Urban Environmentalism VS Garden Planet- Eco village models、MOTTAINAIである。効率化のためモンタナでは、トピック毎に2名ごとを割り当て、議論の前に調査をし、短いプレゼンテーションを導入として行う方式をとった。これにより、ベースとなる知識を全員が共有することに成功した。



議論の様子

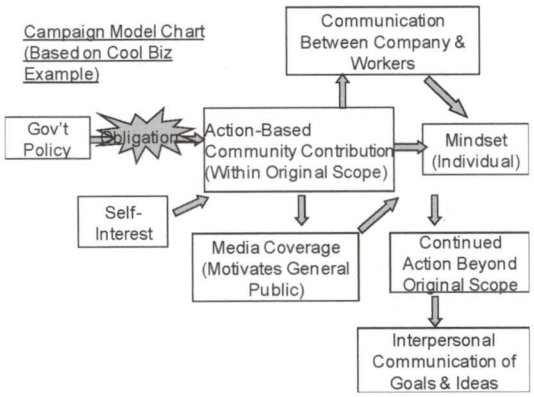
4. ファイナルフォーラム(ボストン)

ボストンサイトでは、ファイナルフォーラムに向けての作業を連日おこなった。涙する「なお」、安堵の表情の「リズ」、眠ってしまいそうな「れいな」、はしゃぎまわる「ロブ」、お母さんのような「もろ」、冷静沈着な「まさと」、疲れが押し寄せている「かよちゃん」、感動している「よし」、それを見守る「シュラケット」。表情は違えど、メンバー全員悔いが残らない、ファイナルフォーラムを終えることができた。ファイナルプロジェクトは、分科会の成果を踏まえ、最も白熱した議論ができたものをいくつか取り上げたうえで、“MOTTAINAI Angeles”(啓発ビデオ)作成、ブックレットの作成、プレゼンテーションの3本柱で構成された。以下が、ファイナルフォーラムで発表したコンテンツである。

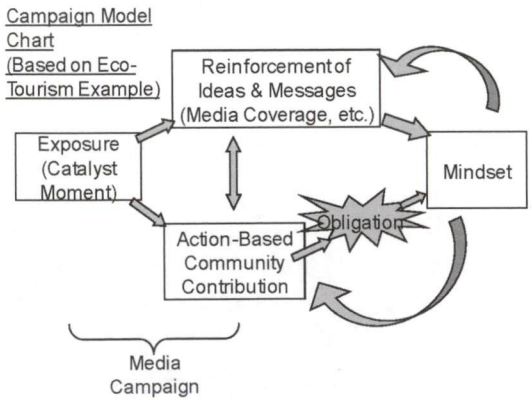
・MOTTAINAI Angles（啓発ビデオ）

議論の中で、多くを占めた「MOTTAINAI」という日本の考え方。政府による規制が、環境問題改善において、大変重要な役割を担うと同時に、草の根レベルで我々一人一人が普段の生活から意識できることの積み重ねが、とても大きな影響を与えるという結論にいたった。その手段として、「MOTTAINAI」という意識を日本とアメリカで広

く浸透させることが重要であり、その第一歩として、我々は、啓発ビデオ「MOTTAINAI Angles」を作成した。
(参考：http://jp.youtube.com/watch?v=RsSqTLIl97o)
・ブックレット
ファイナルフォーラムでは、プレゼンテーションの補完的役割としてブックレットを作成し、聴衆に配布をした。約6000字とチャートを含むブックレットを全員が一致団結して作成し、政府、民間企業、メディアという3つのアクターの役割を比較、マインドセットのピラミッドの説明を記した。また、クールビズおよびLOHAS（エコツアーリズム）という2つの例を取り、それぞれがどのように個人のマインドセットを導いているか、以下のモデルチャートを作成することによって検証を試みた。



クールビズの意識チャート



エコツーリズムの意識チャート

・プレゼンテーション
導入として、聴衆に自分の生活と環境問題の関わりについて考えてもらうために、啓発ビデオを発表した。現状として環境問題に対する意識が極端に高い層はマイノリティーであり、低い層がマジョリティーである。その構造が入れ替われるときこそ、日本とアメリカが世界にリーダーシップをとって環境問題に取り組めるときであり、我々はその構造を図式化することで、聴衆への問題提起とした。

分科会参加者の声

●金光慶紘

環境とコミュニケーション。環境技術だけが環境問題を解決するのだと信じていた私は、分科会活動を通し、今は違った視点から環境問題を捉えることが出来るようになったように思う。特に、Environmental Philosophy、MOTTAINAIに関する議論は私の好奇心を大いに掻き立てた。米国の食堂は非常にMOTTAINAI。日本側参加者・米国側参加者の間には、どこか最後までこの日本発の概念に対して、相互理解が出来ないところがあったように感じる。しかし、そのことから、私はコミュニケーションには文化的背景の要素が大きく影響することを実感した。グローバル化が進む社会の中で、環境問題もまた然り。グローバルスタンダードなどというものが昨今議論されるようになって久しいが、環境コミュニケーション・啓発において、グローバルに同じものを適用するのは不可能または困難であるというのが分科会を通して私が感じたことのまとめである。

●坂本朋美

環境とコミュニケーション。どちらも流行のキーワードだが，2つが組み合わさった時、それは一体何を意味するのか。環境問題の定義は？誰と誰のコミュニケーション？これから取り組む課題とその方向性を明らかにするため私達が最初に話し合った内容である。科学、経済、外交、文化など様々な問題が絡む環境問題。その解決に重要な、あらゆる分野のコミュニケーション。その意味で，異なる専攻のメンバーから成る環境分科会は最高の構成だったと

思う。おかげで、私達は常に多様な観点からの議論を展開できた。もちろん3ヵ月間で素晴らしい問題解決策を提案できるはずはない。しかし私達は学生という立場で何ができるか、むしろ学生だからこそ発信することのできるメッセージとその手法は何かを考え、形にできたと自負している。私達の分科会はこれで終わりではない。日米学生会議での経験を糧に各メンバーが新たな道に進むにつれ，環境分科会も進化し続けると考えている。

●中村玲奈

今や重大な国際政治の重大争点である「環境問題」。アメリカと日本、それに対しての政治レベルの取り組みには温度差のある問題でもあり、国民レベルではどのような意識差があるのか、そういった好奇心と不安を胸に分科会はスタートした。結論から言うと、想像していたよりも互いの意見は近く、環境問題への取り組みに対してはほぼ共通する立場をとることの方が多かった。しかし、同じ立場をとる時であってもアプローチの仕方やマインドセットのプロセスは異なることも多い。それは議論のプロセスを踏まずして知ることのできない視点であり、そういった新たな視点を互いに得ることができたのが、「日米」で「環境問題」について話し合う、私たち分科会であるからこそ知ることのできた、大きな収穫であったと強く思う。

●仁平理斗

日本で環境問題が大きく取り上げられるようになったきっかけとして、京都議定書がよく例に上げられる。一方で、締結を拒否したアメリカでは京都議定書の存在すら知らない国民がいるという。結局このようなトップダウンの方法でしか、国民の環境問題に対する意識を高めることができないのだろうか。我々が出した結論は「NO」であった。メディア・産業・そして国民が連携しあうことで、状況は如何様にも変化する。しかし、その大前提として個人個人が、環境問題に対する意識を持ち、主体的に行動することが100年後の地球に大きな違いを生む。そのためにも、我々RTメンバーは草の根レベルの努力を決して侮ったりしないし、主体的に行動することを約束した。まずは自分から変えてみることが、とても重要であると感じた。

分科会総括

分科会コーディネーター　竹内菜緒

昨年の夏、アメリカ側実行委員であるJoshua Schlachetと「環境とコミュニケーション」分科会を立ち上げた。私たちは共に環境問題を専門に勉強をしている訳ではなかったので、本分科会をコーディネートするのにあたり1年間もがき続けてきた。第59回の本会議後から、海を隔てた向こう側にいるアメリカ側実行委員とのコミュニケーションは全てウェブ上で行わなければならず、コンセンサスをとるのが困難ではあったが、「私たちが作っている分科会のテーマは「環境とコミュニケーション」なのだから、私たちもコミュニケーションを大切にしよう。会議を成功させるために一番必要なのは、コミュニケーションでしょ。」という考えの下、活発に連絡を取り合いながら、まだまだ形が見えない分科会の準備を試行錯誤してきた。そして分科会の結成から8ヵ月がたったころにようやく分科会の主人公である参加者を迎え、本格的に動き始めた。事前活動ではメンバー全員が1人1回以上の事前活動フィールドトリップをコーディネートすることによって、環境分科会の参加者としての意識やモチベーションをあげることができ、チームとして良いスタートを切ることができた。本会議に入ってからは、始めアメリカ側参加者との意見の違いに戸惑ったが、参加者一人一人とリフレクションを設けたことや参加者自身の努力によって、最終的には分科会全体としてのチームが作れた。お互いの悪い点、良い点などを率直に伝えることによって、確実にチームとしてまとまってきた。さすがはコミュニケーションに焦点を当てた分科会である、彼ら自身のコミュニケーション能力には脱帽だった。チームとしてうまくまとまった後は、ファイナルフォーラムのプロジェクトにおいてもスムーズに段取りが進んだと思う。ボストンでのハプニングによって分科会の時間が短くなってしまったにもかかわらず、PR映像の制作、ブックレットの作成、プレゼンテーション準備と、睡眠時間を削ってまでこなした参加者たちは本当に

良くやったと思う。ファイナルフォーラムが終わった後に私が流した涙は彼らへの尊敬の意であった。本分科会の最終的な目的である「学生への社会発信」を達成できる日も、そう遠くないだろうと確信した。今後も是非、彼らと分科会活動の続きをおこなっていきたい。最後に、常に真剣に分科会に取り組み、真っ直ぐに自分の意見をぶつけ、相手の意見も聞きいれた分科会参加者に心から感謝の意を伝えたい。「環境とコミュニケーション」分科会の本会議の活動は終わったが、これからもともに事後活動を続けていきたいと思う。

末筆ではありますが、分科会フィールドワーク、勉強会にご協力いただきました企業様方、議員の皆様、アドバイスをしてくださったJASC同窓生の皆様、参加者の皆に心からの感謝を申し上げます。ありがとうございました。

環境分科会のメンバー

法と社会

Comparative Law and Society

分科会メンバー

今矢涼子
後藤昌也
誉田有里
油井英孝
李　凌叡*
Jessa Hutchins*
Rebecca Norton
Catherine Simes
（＊はコーディネーターを示す）

分科会概要

法の支配は人間の知的努力の結晶である。その一方で、法の下で生きることは制約を伴う。この分科会では、日米両国の法体系や個々の法律を比較し、各社会の文化・思考様式がいかに法律に反映されているかを見出すのと同時に、法律がいかにして社会を規定し、変動を促すかをも考察する。法と社会が互いに影響を与え合う様相を鮮やかに抽出し理解することは社会設計において不可欠である。最終的には文化の差異を越えて、法の社会における役割はなにか、人間にとって最適な自由とはなにか、そのような社会規範に関する諸問題について議論し、学生としてなにかしらの提案を行うことを目標とした分科会である。

議論の経過

日本側参加者の初討論セッションは2008年の5月、春合宿にて行われた。そこで日本側参加者は、日米の法律状況について一通りの考察・把握を進めてから、具体的な法律（例えば著作権法やプライバシー法など）に集中して議論を進め、議論の結果として、そして議論に止まらない継続的な社会への発信として、提案書を作ることで合意した。その設定した目標に沿うよう、事前活動を日本側で行った。また同年6月からはアメリカ側参加者も日本の法システムに関する勉強などと事前活動を進めた。お互いの情報を元に、日米双方がそろっての合同セッションが2008年7月、始めて本会議で実現した。約1ヵ月の会議期間の末に、本分科会は提案書の下書き案を完成させ、最終発表では完成までの経緯、そして提案書の趣旨と期待される成果を発表した。会議終了後も本分科会は活動を続け、2008年末までに提案書を想定される諸アクターへ送り届け、その後なお社会発信を続けていく。

事前活動

事前活動は計6回行われた。日米の法システム、そして社会への理解を深めるためにメンバーのみで行われたスカイプ（インターネット通信ソフトウェア）勉強会が3回、著作権問題と社会のかかわり方を模索するためのNPO、企業への訪問が2回、そして新たな視線を得るために防衛大学校の学生との合同

討論会が1回である。

以下に各事前活動の詳細、および分科会参加者の声を記す。

1. スカイプ勉強会

私たちは、JASC本会議で議論するに前にいくらか法律に馴染む必要があった。法と社会のメンバー全員が法学部学生ではなく法律に慣れ親しんでいる訳ではなかったからだ。そこで、アメリカの法制度を纏めた『outline of the U.S. legal system』という英文教科書を用いて勉強会を開くことになった。勉強会では、スカイプを通して教科書を用いて米国の法制度について勉強をするとともに、日本の法制度における特徴について勉強した。各メンバーが教科書の担当箇所について説明し、さらに発展した内容を発表するという形式で3回の勉強会を開いた。テーマは、第1回は法制度に関わる人々、第2回は法制度とその歴史的背景、第3回は日本の法制度である。日米の法制度の概略をつかむことができた。また、発表後には、活発なディスカッションが生まれた。多くの疑問点が提示され、幾つかの疑問点は、日米の法制度や社会の違いの本質を示唆する有意義なものだった。さらに、副次的に英語の法律用語に慣れることや、作業を通してチームの連帯感を増すことができた。

この勉強会はJASC本会議に大いに貢献をしたと思う。まず、本会議を前にして、アメリカの法制度を知っているのと知らないのとでは、理解の面でも気持ちの面でも、雲泥の差があったと思う。おかげで、本会議では法律用語を理解することが容易になり、議論をより深めることができた。また、勉強会はコミュニケーションの面でも有意義なことだった。メンバー同士が集まる機会が少ない中で、勉強会を通じてメンバー間の理解が深まり、より自由な意見交換が生まれるようになったと感じている。本会議に繋がる価値ある勉強会であった。（後藤昌也）

2. ThinkC傍聴会

6月5日、私たちはThinkCというグループのミーティングを傍聴させていただいた。このグループは大学教授、弁護士、大学院生、実務家など8名から成り、著作権保護期間延長問題をはじめとする、今日の日本の著作権法が抱えている問題への解決策、改善策を政府と社会に提案することを目的に結成された。私たちの分科会は、今日の日米が有する社会的問題を法律という側面から取り上げ、その解決策を本会議で検討し、最終的には日米両国の社会に発信することを目標としている。このような共通点から、このグループが行うディスカッション内容およびその進行方法を学ぶべく、東京大学で開催されたミーティングを聞かせていただいた。

このグループは、著作権保護期間延長問題の根底にある、「著作者の権利」の十分かつ合理的な範囲内の保護、及び、ユーザー（使用者）の権利との均衡というポイントに着目し、立法面・制度面・政策面の三つの側面から提言案を作成した。立法面においては、欧米の著作権法には存在するが、日本にはない規定を、欧米の条文と同様に新設することを検討。制度面においては、著作権の「流通」を促進し、著作者に、創作のインセンティブが付与されるようなシステムの構築が議論された。政策面からは、著作権を政策的に保護し、文化的・芸術的な観点から国が保護を強化することの可否について話し合われた。

相反する当事者間の利益を両方の視点からそれぞれ捉え、社会的に実現可能な解決案を作成する。その難しさと、それを仲間との議論を通じて一つの「実」に成熟させるプロセスの楽しさが伝わってきた。そして議論には必ず、比較なり否定するための十分な前提知識が必要であり、それを本会議で仲間と学び共有しなくてはいけないのだということを再認識した。このミーティングを通じて、分科会メンバー全員が大きな刺激を受けたことは言うまでもない。（今矢涼子）

3. ソニー・ピクチャーズ訪問

6月26日、ソニー・ピクチャーズの林大介様に、著作権と映画ビジネスについての講義をしていただいた。日本とアメリカを取り巻く法律の違いから、映画ビジネスを行なうことの難しさ、実際に起きた問題などのケースを取り扱った。

今まで、事前勉強会では、法についての概念的な勉強や、アカデミックの最新の動向などを勉強してきたため、ビジネス・文化の面から法律を学べたこ

とは、実際に法律が生活の周りに多く取り巻いていることを再考する良い機会となった。実際に、最近では映画といっても、「漫画などが原作となっている映画」や「日本原作の作品が、海外向けにリメイクされている」といったことが多く見られている。このように、マクロ的な視野から見た「デジタル化社会」という時代の大きな変化を感じながら、法律がどのように機能し、経済や文化の枠組みを創っていくかという「法と社会」の本質的な部分へのアプローチが達成できて非常に満足であった。やはり、法の勉強をするには、多角的な視野が必要で、経済・社会・文化・宗教などといった側面が必要なのだろう。日米学生会議では、アカデミック・官僚・外交官・NPOなどの方々とお会いすることが多いが、ビジネスの最前線で活躍している方々と出会う機会が少ないので、こういった意味でも意義のあることだった。

講義が終わったあとは、ソニー・ピクチャーズの会社のフロア・試写会室を見せていただいた後に、林様のご好意で懇親会を開いてくださり、食事を交えながらカジュアルな形で、著作権の話をより深く議論し、今後の世界の著作権法の話も伺うことが出来た。本会議に向けての良いブレインストーミングが出来たと同時に、良いプロダクトを本会議中で作っていきたいと改めて自戒した勉強会であった。

（油井英孝）

4．防衛大学校でのグループ討論会

防衛大生とのグループ討論会は、防衛大生にプレゼンテーションをしていただき、それについて皆で議論をするという形式で行われた。「徴兵制度と社会」「軍人は己の信念と職務、どちらが重視されるべきか」「軍刑法と一般刑法～自衛隊における軍事司法制度の現実～」というテーマでしていただいた三つのプレゼンテーションを元に、熱い議論が防衛大生と私たち分科会参加者の間で繰り広げられた。

「徴兵制度と社会」の議論の際には、徴兵制度がフリーターの増加に対する解決策の一つとも考えられるという少数派の議論であるユニークな視点から、他国を例に挙げながら、徴兵制度は経済的に困窮した人に被られる場合が多いゆえ、経済格差をある種是正する存在になりえるのではないか、といった社会構造まで視点を広げた議論ができたことがとても印象に残っている。二つ目のテーマでは議論の途中、防衛大に入学したことで愛国心が強くなったか、という議論に発展、一般大生と防衛大生で「愛国心」について話し合った。愛国心とは何か、それぞれの考えを述べていくうち、とても興味深かったことがある。それは、防衛大生も一般大学生と変わらない「愛国心」像を描いているという点であり、無論彼らは自衛隊員としての責任感や国に対する忠誠心は有しているが、愛国心に満ち溢れているのだろうという私の行き過ぎた固定観念を払いのけてくれた。三つ目のテーマに関しては、軍刑法を設立すべきか、それとも自衛隊法に特別法として法を盛り込むべきかという、私たちの分科会の軸の一つでもある「法律」と、自身をどう裁いてほしいかという、防衛大生の生の声が最も融合された議論になったと感じた。

（誉田有里）

本会議活動

本会議では以下のセッション配分をもって議論を進めた。なおセッション1－5はおよそ2,3時間のセッション、セッション5－8は5,6時間のセッションである。

分科会セッション1：事前活動共有・今後の枠組み決め
分科会セッション2：ファイナルプロダクト決め
分科会セッション3：憲法比較
分科会セッション4：ジョイント分科会
分科会セッション5：弁護士と陪審制度
分科会セッション6：メディアから見る法・著作権
分科会セッション7：著作権・プライバシー法・スケジュール決め
分科会セッション8：アクティビズム・ファイナルプロダクト準備
分科会セッション9：発表準備

ポートランドサイトで行われたセッション1、2は主に今まで日米双方で行われた事前活動のシェア、そして会議において達成したいゴール、その手段の

調整にあてられた。事前活動としてアメリカ側の参加者はミニエッセイを書いてきており、そのテーマは日米憲法比較と、法曹数、訴訟数など法社会的な比較であった。その内容は日本側の事前スカイプ勉強会で触れたものとほぼ一致し、共通の問題意識がある実感が育まれた。残りの時間では、本会議全体の分科会時間を洗いだし、議論に関する時間配分で合意を得た。1/3の時間を法社会的背景の理解、残りの時間を具体的な法律への理解、そして具体的な法律を著作権とプライバシー権に絞った上で、どちらかについて提案書を作成することに合意した。

マッサージ大会

ロサンゼルスサイトにてセッション3～5が行われた。セッション4はマイノリティー分科会との合同セッションで、2グループに分かれてそれぞれ移民問題、性的マイノリティー問題について議論をした。この合同セッションのテーマは「いかにしてマイノリティーが法律から疎外されることになったか、そしていかにして法的救済を受けられるか」であった。社会発信手段としてのアクティビズム、そして日米の法律の射程範囲の相違について考えを深めた。他のセッションは法社会的背景の理解ということで、憲法で守られる基本的な人権、三権分立システム、法曹界、そして裁判員制度を考察した。そこでの発見は日米の法形態の違い(包括的な文言を使うか、複数の条文を使って細かく規制するか)、そして一律的に立法という救済法を採らなくとも、法教育、システム改革などさまざま解決策があることである。

モンタナサイトは一番分科会時間が長く、具体的な法律について長時間議論ができた。セッション6では、法律の社会的なイメージをメディアを通して考察し、その後著作権法について考察を深めた。著作権法は様々なアクターが絡んでおり、専門知識のない参加者たちはこれまでにない困惑を見せたが、セッション7が始まるまでに各自で独自にリサーチを進め、次のセッションでは問題点を提示し新たな提案を示せるまでに活発に議論が進められた。著作権法において大いに手ごたえを感じたので、プライバシー法に関しては問題理解程度の議論でとどめ、著作権法に集中して提案書を作ることとした。

ボストンサイトでは飛行機の欠航があり、日米の参加者が地理的に分離されてしまった。そこで、互いに仕事を分担し、スカイプを使っての打ち合わせとなった。日本側参加者は提案書の仕上げに当たるアクティビズム、社会的発信方法について議論を重ね、本分科会が目指すべきアクティビズムで合意を得た。一方でアメリカ側はいままでの議論を提案書にまとめ始めた。日米全参加者がそろった後は提案書つくり、最終発表の発表づくりと仕事を分担し、最終発表の当日2:00amに全てが完成した。

ファイナルプロダクト

これまでの章で述べてきたように、法と社会分科会では最終成果として著作権法に関する提案書を作成した。この提案書を相関する諸アクターに送り届けることをもって本分科会ファイナルプロダクトとなる。以下に、本会議中の最終発表の訳文を用いて提案書の内容を概説する。

提案書

著作権法は作者の権利保護と作品の社会的流通をバランスさせており、文化の発展を促進するのになくてはならない法律である。情報社会の到来によって、著作権業界は大きな変動を迎えている。違法な著作権作品の利用(たとえばネットにおける無料動画・音楽ダウンロード)によって、産業はダメージを受け、作者の創作意欲がそがれる危険性がある。私たちはより効果的なシステムが必要と感じ、新た

な違法利用チェックシステム、そして罰則の明確化をこの提案書にて提案する。

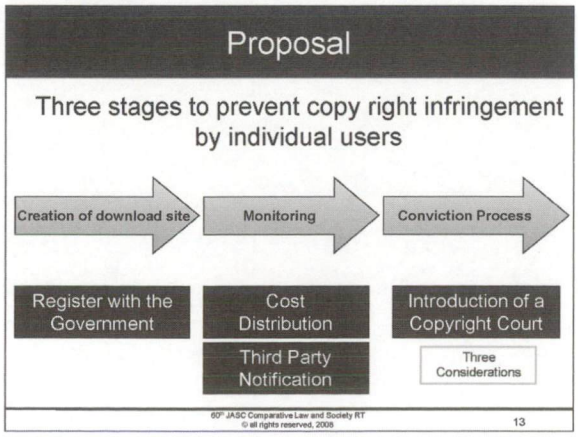
私たちの提案書は3段階に渡って、個人ユーザーによる著作権侵害を防止する。第一段階は動画・音楽アップロードサイトを作成する段階、第二段階はそれらのサイトをモニターする時、そして第三段階は違法アップロード者を罰する時である。

第一段階では動画・音楽アップロードサイトを登録制にする。登録先は既存の著作権を取り扱う政府機関で、たとえば日本ならば文化庁となる。その登録情報を政府は民間の企業および違法利用をモニターする団体に開示し、これをもって情報の共有とモニターの簡易化を進める。

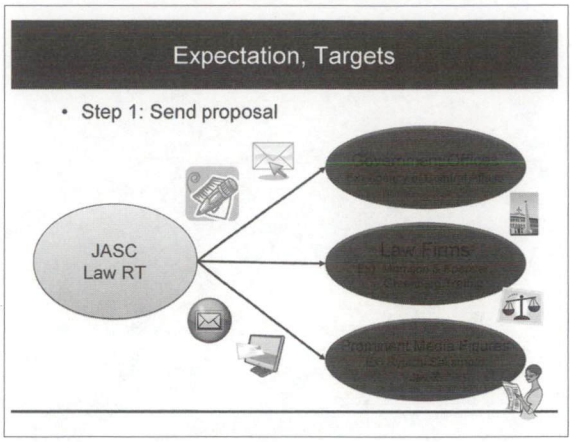
第二段階は違法利用のモニターコストを作者(音楽会社など権利者側を広く含む)と動画・音楽アップロードサイトで分配するシステムである。私たちは政府が動画アップロードサイトに対して、税金を課すことを勧める。その税金をもって、モニター団体に助成し、モニターコストを配分する。

またモニター段階においてのもう一つの提案は、各動画アップロードサイトが個人通報のシステムを整えること。違法なアップロードを見つけた際に第三者通報ができるようにするのである。

第三段階では、著作権専門裁判所の設立など、著作権侵害の訴訟プロセスをマニュアル化、システム化することを提案する。処罰の基準を明確にし、著作権法の抑制効果向上に努める。市場価格、数量、そして商業的な目的か否かの三つの基準をもって罰金を段階化することを求める。



この提案書を私たちは、政府機関、法曹界、そして音楽ビジネスに関わる諸アクターに提出し、社会的な発信を続ける。これにより、違法利用のモニターがより効率的になり、社会の著作権法に対する意識が高まり、創作的な作品が著作権法の意図通りにバランスをもって保護されることを期待する。



分科会活動の一幕

分科会総括

分科会コーディネーター　李 凌叡

法と社会という分科会は、大きく社会と関わりを持ちながらも、法律という非常に専門的な分野を検討していく分科会である。しかし、参加者は必ずしも法律を専攻するものばかりではなく、その背景も経済、医療、政治、そしてファッションと多様に渡った。それは本分科会にとっての挑戦とともに幸運で

もあった。みなが異なる背景を持っていたからこそ、法律という蓄積された学問分野に囚われない議論を行えたのである。もちろん、法律用語に参加者たちは困惑し、理解に苦しむ場面が何度も見られたのも確かである。そんな困難にも果然と立ち向かい、リサーチや事前学習の努力を重ねた彼らを褒め称えたい。前章で読み取れるように、提案書の完成は本分科会にとっての終わりではなく、始まりである。事後においてどれだけ継続的に活動できるか、いかに自分たちの提案をもって人を説得していくか。そんな挑戦が今から楽しみだ。

ボストンでの分科会①

ボストンでの分科会②

企業の社会的責任(CSR)と市民～社会発展のための新たな視点～

Corporate Social Responsibility in Development

分科会メンバー

伊関之雄*
伊藤昂介
竹内友理
廣瀬祥子
盛島正人
Hidemi Michael Tanaka*
Edward Phillips
Peter Weldon
(＊はコーディネーターを示す)

分科会概要

近年CSRの概念は製品やサービスの提供、雇用創出、法律の遵守など経済的、法的な責任を超えた概念に広がっている。企業は顧客、株主、従業員、地域住民など多様なステークホルダーに対して積極的に情報を開示し、国際交流や社会福祉など社会貢献活動、環境に配慮した取り組みなどを推進している。このような企業姿勢の変化は日米及び他国において違いがあるのか。活動拠点を複数におく多国籍企業と国内で活動している企業とでは CSRに対する意識の違いがあるのか。本分科会の狙いはCSR活動に関する議論を通し、我々学生が責任ある消費者、投資家または社会起業家としてどのように地域、国際社会の発展に関わっていくべきかを考えていく。

事前活動

1. 経済団体連合会訪問

日時：2008年6月18日(水)
場所：日本経済団体連合会　経団連会館

企業の社会的責任(CSR)に関して、非常に熱心に取り組んでいる社会第2部企業社会グループ副長の長沢恵美子氏による、レクチャーならびに約1時間程度予定より長引いてしまった質疑応答を行なった。

レクチャーには、本分科会メンバーの他に数名の参加者・実行委員が参加した。そして、レクチャーには事前に提出した質問内容に沿う形でお話をしていただいた。その後、今までの話し合いの中で浮上した数多くの質問をざっくばらんに問いかけた。貴重な国際会議での経験や日々行なっている企業側の担当者との対話から得た現場の声・知識を共有してくださり、我々にとっては有益な情報であったと再認識している。

さて、この訪問の具体的な内容であるが、基本的には以下の通りに進んだ。

CSR全体概要に関して、企業行動憲章に関して、社会貢献との関係、日本のCSRの強み、CSRの効果測定に関して、が主な内容である。簡単にそれらの内容の詳細を記しておこう。

まず、CSRの全体概要として、日本経済団体連合会(以下、経団連)には定まった定義が存在する訳

ではないが、認識としては各企業の法令遵守以上のものであると述べられていた。また、日本のCSRの発端である、近衛商人の三方よし「売り手よし、買い手よし、世間よし」の重要性にも言及されていた。また、経団連が2007年4月17日に発行している「企業行動憲章」に基づき、企業側自身が草案を執筆し、企業間の約束事を定めているのである。

長沢氏が特に強調されていた事は、CSRと社会貢献の意味合いの違いに関してである。CSRとは、法令遵守に加え、説明責任、ステークホルダー（利害関係者）との良好な関係の構築・維持という広義な概念である。一方、社会貢献とは企業と社会の関係に重点を置いた社会問題解決のための活動であり、CSRはこの定義に基づくと社会貢献の一部として考えられる、と言及されていた。企業とステークホルダーとのコミュニケーションの重要性が成り立たなければならない世界である事を改めて痛感させられた。

長沢氏が独自に取り組んでいる活動として、「CSR報告書を読む会」がある。CSR報告書を通した第三者との勉強会によって、例えば花王㈱の、シャンプーとリンスを区別する口の形を変える、ユニバーサルデザインを開発した。このようにして、一般の消費者とのヒアリング、またはCSRの成果を浸透させて、企業の商品企画に活かすことが日本独自の強みと特徴であるのだ。

最後に、我々の当時の分科会での議論の1つにCSRの効果評価の作成が浮上していた。そのために、長沢氏に直接どのようなお考えを持っているかを伺ってみた。ただ、この問題に関しては各企業のCSR担当者の永遠の課題であり、「評価できないものを評価するための試み」であると述べられていた。今後の発展として、特徴的な議論となったのが、問題解決の経験やノウハウを持つNGOやNPOとの連携をいかにして導入し、専門家との協調した行動を通した相乗効果を高めるかが、CSR並びに社会貢献活動の今後の特徴と言えそうである。

（文責：伊関之雄）

2. アメリカ側参加者とのオンラインミーティング

アメデリとのオンライミーティングは6回行われた。ECの2人がアジェンダを作ってきて、英語で議論をするという形式だ。CSR RTはメンバーのほとんどがバイリンガルで、ある意味すんなりミーティングが展開していった方だと思う。オンラインミーティングで主に議論されたのは、進捗と成果物に関してであり、CSRという概念自体の議論はあまりされなかった。またRTペーパーを読んだところ、アメリカ側がCSRについてあまり興味がないのではという不安が日本側にあった。そして意欲に差があるのでは、と考えていた。日本側では、会議後もCSRはRT活動として、何かしらの成果物を残そうと議論していたからだ。しかし、それもミーティングを重ねるにつれ、誤解であったという事が発覚した。アメリカ側も積極的に会議後の成果物に取り組むと言ってくれた。ただ、オンラインミーティングが進捗共有と、成果物考案に終わってしまった部分も否めない。アメリカの本会議中の議論やその進展方法、またファイナルフォーラムで発表する内容も含め、事前にもっと議論すべきであったという点はある。しかし、コミュニケーションを通して、お互いのモチベーションを確認し、さらに高め合う事が出来たミーティングであった。　（文責：伊藤昂介）

3. 防衛大学訪問

私たち一人一人に防衛大学校生のエスコートがついて下さっての学校見学では、同年代の防衛大学校生の大変丁寧で真摯な対応に感銘を受け、防衛大学校生に四方を囲まれての昼食では彼らの食べる早さに驚嘆し、また受けさせて頂いた『戦略』についての講義では、いつも私達が『授業』と呼んでいる科目とは少し異なるリアリティをもったこの授業の新鮮さにワクワクするなど、異なるタイプの学校に通う私にとって、防衛大学校訪問研修は新しい発見や経験に溢れていた。

しかし中でも最も印象的だったのは、防衛大学校生との分科会ディスカッションだった。

CSR分科会の他メンバーとの数々のメール、メッセンジャー、そして直接会ってのミーティングを重ねていても、当初、私は防衛大学校でのCSR分科会ディスカッションにはあまり期待できないかもしれないという気持ちで当日を迎えていた。

CSRは背景知識なしに個人的な倫理観、価値観のみに基づいて議論を行うことができない性質の議題である。しかし日本において企業の社会的責任という概念は比較的最近になってから社会的に強く意識されるようになっているため情報が薄く広く散在しており、今でも完全な定義や評価方法が定められていないために絶対的な情報を探すことも困難である。おまけにCSRは一見完全に防衛大生の専門範囲外であるということもあり、様々な要素が不安となって重なっていた。本当に防衛大学校生が企業の役割について関心を持っているのか、そしてまたどの程度これについて知っているのか、本当に建設的な議論をすることが出来るのかなど予想つかずの事柄を多く残し、不安を抱えたままの私たちが用意したディスカッション前のプレゼンテーションは、背景知識の共有に重きを置いたものであった。

しかし私たちが一緒にディスカッションを行った4人の防衛大学校生によるプレゼンテーションを聞き、私はそれまでの不安が体中から抜け感動と興奮へ変わってゆくのを感じ、それまでこのように教育背景が違う学生と議論をすることに不安を抱えていた自分を非常に恥ずかしく思った。

彼らは、私たちが懸念していた背景知識について既に理解をした上で、CSRという概念に自分達が最も詳しい安全保障の観点を最大限に盛り込んだプレゼンテーションをしてくれた。曰く、現在国家の安全を脅かす要因は多様・非対称化しており、安全保障において国家のみならず企業の責任も問われるべき時代がきているとのことである。彼らのプレゼンテーションでは、過去の内部統制や危機管理における日本企業の失敗事例も安全保障的観点から『企業倫理や安全保障意識が欠如していたケース』として考察されているなど今後自衛隊の幹部人員として国家防衛に携わってゆく彼ら独特の視点が表れており、それまで『企業』と、それをとりまく『社会』という曖昧な枠組みの関係性について考えていた私にとって非常に興味深かった。その後のディスカッションでは、民間企業活動の自由を如何なる場合に国家が誘導、あるいは規制して良いのかということや、企業側にとっての安全保障CSRの利点、『企業倫理』という言葉の通用する範囲などについて白熱した議論が行われ、あっという間に2時間が過ぎていってしまった。

防衛大学校生とのディスカッションを通し、私は大きく二つのことを再考した。

一つは、CSR分科会のメンバーとしての視点である。

それまで、私たち分科会メンバーは沢山の本を読み、資料や意見を共有しては議論を行っていた。それは本会議前に私たちなりに出来るだけ広く、深く学ぶことで会議中の議論に備えようと思ってのことだったのだが、今回防衛大学校生との議論を通して、自分が広く持っていたと思っていた視野はまだまだ狭く浅いということに気付かされた。そして『企業』の『社会』的責任といっても、企業が責任を持ちうる社会のアクターは無数にいるということ、そして無数にいようともそれぞれが民間セクターの活動と密接に関係しうるということを再認識し、本会議前には、一見企業の動向にはあまり直接的な影響を受けそうもないような社会的アクターと企業との関係についても考慮した上で、企業に課せられる責任について考えなければならないと自覚した。

二つ目は、日米学生会議参加者としての視点である。

日本の江戸時代の商人の間に存在し、今言われるCSRと似た概念であった『三方よし』という考え方について議論をしながら、ふと防衛大学校の学生が、『今年の夏、アメリカにいったら、CSRは日本で生まれたんやって主張して下さい。こんなに昔から日本では当たり前のように行われてきたんやってこと、アメリカ人達に伝えてきてやって下さい！』と言った。その時私はみんなで顔を見合わせて笑いながら、部屋中に『日本の学生』としての一体感を感じ、そしてまた、日米学生会議に参加させて頂くことによって生じる私たちの責任を再認識した。

私たちは、個人としての私見を交換するためだけに第60回日米学生会議に行くのではなく、同時に日本の学生の代表としての意識を持たなければならないのだということ。それはすなわち、これからの日本の防衛を担うべく日々勉強している彼らを含め

たあらゆる学生の意見も極力広く理解し、それらを抱えてアメリカに行かなければならないということを意味した。分科会内の議論においても、参加者やRTリーダーの意見交換に終わらぬ様、様々な視点を持ち寄って議論をしたいと感じた。

あとから聞いた話では、私たちが一緒に議論を行った防衛大学校生は、最初CSRと聞いて全く意味がわからなかったところからリサーチを行い、安全保障的観点からCSRを見た資料が非常に少ない中、あのようなプレゼンテーションを用意してくれたそうだ。彼らのような優秀な学生と出逢えたことを本当に光栄に思い、様々なことに気付かせてくれた彼らに感謝するとともに、この出逢いをここで終わらせず、これから日本の安全保障を担う彼らと、企業を含め様々な場所で活動することになるであろう私たちの間の対話が続いてゆくことを願う。

（文責：竹内友理）

4. 東レ株式会社「CSR勉強会」

日時：2008年7月17日（木）
場所：東レ株式会社　東京本社
講師：東レ株式会社　CSR推進室長　松野健三様、
　　人事部　人事採用課長　小西明子様

日本の「CSRの現場」を学ぶべく、東レ株式会社を訪問。東レのCSRに対する基本的な考えや、実際の取り組み等をはじめのプレゼンテーションでお話いただいた後、勉強会参加者からの率直な質問にも丁寧に答えていただいた。

今回の勉強会を通じて特に印象的だったのは二点。

一点目は、東レが「CSR」を取り入れた理由である。消費者（市民）を意識したPR的な意図よりも、今までの企業活動を見直すため、そしてグローバルに活動してゆく企業として「CSR」を捉えていた。

二点目は、「Business to Business (B to B)」と「Business to Consumer (B to C)」企業におけるCSR戦略の差異だ。CSR活動と利益が伴うビジネスモデル（好例はコーズプロモーションやコーズリレイテッドマーケティング等）に取り組みやすい「B to C」企業は、PRの観点からもCSRを上手く使うことが出来る。しかし、「B to B」企業にとってはその様な戦略をとることは難しく、課題も多い。

今回東レで学んだことは、それまでのRT議論ではみえなかった新しいCSRの側面を多く発見でき、大変有意義な勉強会であった。　（文責：廣瀬祥子）

5. 分科会合宿

6月27日に防衛大訪問、6月28日に横須賀基地訪問とJASC全体でのイベントに参加後、メンバーは疲れを見せることなくオリンピックセンターで分科会合宿を行った。この合宿では、(1)日本側参加者とアメリカ側参加者がどのように協力していくべきか、(2)ファイナル・フォーラムと本会議後のプロジェクトをどう進めていくか、といった二点に関して主に話し合われた。

(1)に関しては、日本とアメリカのどちらが議論を主導すべきか、知識量では勝りつつも英語力で劣る日本側参加者が議論にどう参加していくか、知識量で劣るアメリカ側参加者を最大限活かすにはどのような取り組みが必要かといった話し合いが行われた。また、(2)に関しては、ファイナル・フォーラムのプレゼンテーションだけではJASCの社会発信が不十分だと考え、本会議後にRT活動を社会発信するためのPost-JASCプロジェクトを構想し、ファイナル・フォーラムとこうしたプロジェクトをどう関連付けるか、本会議中はどちらにより多くの比重を置くかなど、メンバー間で活発に意見を戦わせた。惜しむべきは、これら活発なディスカッションを通して出た意見を上手く積み重ね、最終プロジェクトに反映させることが出来なかった点である。

（文責：盛島正人）

休息中の一幕①

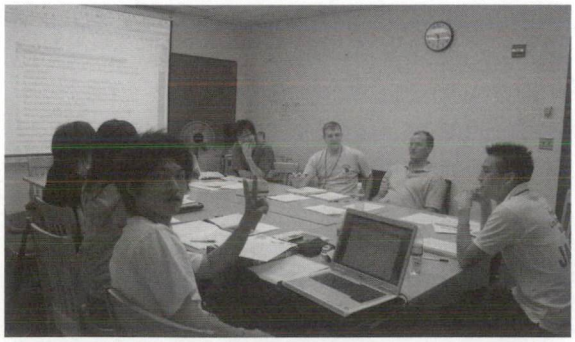
防衛大訪問の様子

本会議活動

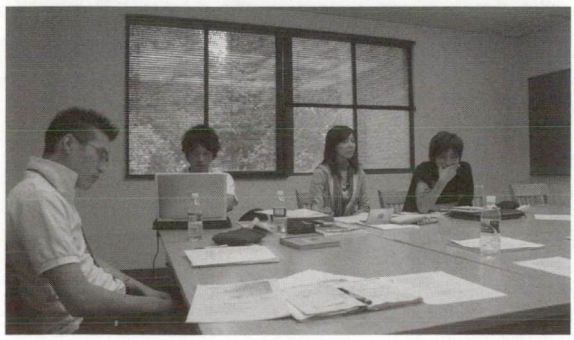
1. 本会議の議論概要

本会議は、CSRに対する基本的な意識・知識の共有をすることから始まった。日本ではあまりまだ認知されていないCSRという概念だが、一方のアメリカでは広く知られ、数多くの企業が積極的に取り組んでいるという日米の差異を感じた。また、各自のRTペーパーに関するプレゼンテーションでは、戦略的な企業活動としてのCSR、NGO・NPO・市民レベルで見たCSR、教育から考えるCSR等、それぞれの観点は非常にバラエティに富んでいた。

そこで、私たちはCSR分科会として一つの「定義」を作ることを試みた。“CSR is broadly defined as activities a corporation undertakes which contribute to both the corporation as well as the large society.”やはり、「CSR」という広く漠然としたテーマで、何に焦点を当てて話し合い、どうまとめてゆくかを考えだすことは安易ではなかった。何がCSR活動で、何がそうではないのか？どのような「C（企業）」にフォーカスするか？企業がCSR活動に取り組むインセンティブは何か？ CSRというトピックにどのように日・米の学生のユニークな視点を盛り込むか？ そんな議論が繰り返されていたが、はっきりとした答えは見出せないままだった。



議論の様子①



議論の様子②

本会議のフィールドトリップでは、日経アメリカ支社からの田邉 雄様をUCLAにお招きし、日経CSRプロジェクトの紹介や日本企業の経営概念に関するプレゼンテーションをはじめ、UST Global社のCEOのSajan Pillai様や、在ロサンゼルス日本国総領事館のBrian Swords様による講義を受けた。各スピーカーには事前に準備しておいた質問をぶつけ、様々な立場からの企業や経営のあり方を知ることが出来たのは、分科会にとっても非常に有益で興味深い経験だった。

第3サイトからは本会議中に訪問した企業や団体の総括を行った後、ファイナルフォーラムを意識した議論を重ねた。分科会としてのゴールは何か、そして何を皆に伝えるのか。話し合った結果「なぜ企業はCSRに取り組むべきか」という基本的なテーマに焦点を当てることに決まった。CSRに対して懐疑的な人々をも説得し、市民の関心を企業に向けさせ、よりよい企業のCSR活動と社会を目指すための有効な第一歩になるという結論に至ったからだった。幅広い視点を取り入れるため、企業だけではなく、消費者、政府、NGOというアクター別に別れてリサーチを行い、分科会内で発表しあうという方法を取り入れた。本会議当初ばらばらだった議論の内容は、この頃から徐々にまとまりを見せていたように思えた。

アメデリのボストンサイト到着が遅れ、予定が大幅に変更になってしまうというアクシデントを乗り越えながらも、ファイナルフォーラムでの発表に向けて準備を進めた。発表は短い時間を有効に使うために「ニュース形式」を取り入れ、本番直前まで作業に取り組んだ。

最後に本分科会の「雰囲気」についもて少し述べておきたい。個人的な話ではあるが、語学に比較的問題がないメンバーが揃った分科会の中で、私は１人語学の壁を感じていた。しかし皆は「C」や「T」のサ

インを出せる状況を心がけ、それに快く応じてくれたり、ノートを使いながら議論後のフォローを入れてくれたりと、親身に分科会への参加を助けてくれていた。タスクに対する取り組みのペースの違いに対しても非常に寛容であり、言い換えればお互いが「個人」を尊重しあう分科会だったと思う。

（文責：廣瀬祥子）

2. ファイナルプロジェクト

ファイナルフォーラムに当たって、何を作るか、どんな成果を発表するかの議論がモンタナサイトから本格的に始まった。様々な視点から捉えられるこのCSRという概念を、包括的に7分間で発表するのは不可能だと感じ、『CSRの必要性』を軸に発表を組み立てていこうという事となった。更に、わかりやすいよう60MINUTESというニュースを模倣して07MINUTESというリアルタイム型ニュースを作成しようということになった。

最初に、盛島とEdwardがスクリプトの土台を書き、竹内と伊藤が編集を担当した。しかし、丁度ビデオを撮り始めた時、竹内の「内容が薄い」という一言を皮切りに、構成をもう一度練り直し始めた。今度は、盛島と竹内がスクリプトを、伊藤が撮影/編集を、廣瀬がレポーターという大役を、そしてEdwardとPeterが各々の役を演じた。スクリプト作成、撮影から編集まで全てが一晩しかなく、皆4日間の徹夜があったにも関わらず、一睡もせずに各々の役割に取り組んだ。RT予算の8割をレッドブルという栄養ドリンクに費やし、議論を重ね、軌道修正しながらファイナルフォーラムを形作っていった。そして、発表の当日の朝に完成した。

時間がかなり厳しかったが、その過程ではチーム全体の情熱やチームワーク、葛藤が感じられた。内容はCSRに対する考えを各セクターからの必要性を、インタービュー形式で紹介していくというものであった。会社なら企業イメージのため、NPOなら協働や生産性UPのため、政府なら公的責任を分け合うため。そして、JASC参加者から消費者としてのCSRに対する意見をもらった。CSRに対する反対意見も存在し、また議論も行われたが、発表時間を考えるとどうしても、省くことになってしまった。その様な意味では、発表の内容的には課題を残してしまったが、全体の発表としては納得のいく結果となった。

（文責：伊藤昂介）

休息中の一幕②

分科会総括

「企業の社会的責任(Corporate Social Responsibility)」。このところ、ビジネスシーンのみならず、広く社会において耳目を集めるこの概念を用いて、社会に大きなインパクトを与えることに挑戦したCSR分科会活動。この活動を振り返った時、率直に言うと、事前活動期間、本会議期間を通して、多くの問題点や失敗が思い出される。

事前活動期間中は、議論が活発に交わされ、Post-JASCプロジェクトなど非常に志が高く、興味深いアイデアが出るなど良い点はあったものの、やはり多くの問題点が目立った。顕著な例として、「分科会のために十分な活動時間を確保できなかった点」が挙げられる。JASC以外にも多くの活動に力を注ぐJASCerが多い中、企業訪問の回数はわずか2回のみとなり、個人個人での勉強量は十分な知識を得るには足りず、更にはメンバー同士のミーティングも全員の予定が合わず、深夜のオンラインミーティングが多用された。こうした状況を受け、ファイナルフォーラム、Post-JASCプロジェクトともに、十分な準備を終えることなく本会議に突入することとなった。

本会議中には、加えて、「タイム・マネジメントの稚拙さ」が目立つようになった。分科会(以下、RT)セッションでは、全体的に議論のペースが遅くなることが度々あったが、そこでペースを上げることなく、そのまま黙って見過ごしたことが何度もあった。また、最終サイトに至るまで、自由時間やすきま時間を効率的に使わずに、Post-JASCプロジェクトはもとより、ファイナルフォーラムでの発表準備にほとんど手をつけることができなかった。こうした状況を受け、ファイナルフォーラムでの最終成果物は、最終発表の前日と前々日の実質2日間で創り上げ、多くの改善点を抱えたままでの発表となった。

最終成果物に関連して付け加えると、「議論を成果物へと繋げる意識の欠如」は、我が分科会の活動全体を通しての最も目立った問題点であった。毎回のミーティングでは激しい議論を戦わせ、興味深いアイデアはいくつも出ていたが、そうしたアイデアが積み重なり、繋がり、発展し、最終成果物に大きく寄与することはなかった。

このように見ると、問題点ばかりの分科会のように聞こえるかもしれないが、評価すべき点は数多くあったし、最終成果物に関しても例年の水準と比べても遜色はなかったかと思う。しかし、それでもここまで問題点や失敗にフォーカスを当てて書いてきたのは、分科会メンバーに対する不満からではなく、むしろ能力抜群で、かつ非常に高い志を持った最高のメンバーが集まったにも関わらず、全員が能力を最大限に発揮し、社会に大きなインパクトを与えられなかった後悔 ー ひょっとすると私たちがJASCを通して社会に与えることのできたかもしれない壮大なインパクトを想う後悔 ー を、次に続くJASCerに知ってもらいたいと強く願うからである。彼ら/彼女らが私たちの失敗から学び、JASCという大きなハコを用いて大志を実現し、最高の形で分科会活動を締めくくってほしい。そう願いを込めて「企業の社会的責任(CSR)と市民」分科会の総括を締めくくりたいと思う。　(文責：盛島正人)

科学と倫理～真に豊かな社会形成を目指して～

Ethics: Holding Science Accountable to Humanity

分科会メンバー

高野恭平*
李　鎮河
大井あゆみ
横山雄一
渡邊ともね
Nancy Xu Yang*
Neal Akatsuka
Colin Moreshead
（*はコーディネーターを示す）

分科会概要

科学の発展により、人は物質的に豊かな社会を築きあげ、生活水準を著しく高めてきた。しかし、同時に科学者の飽くなき好奇心は人類を一瞬で滅亡させ得る核兵器を生み出した。また、科学技術の発達は地球規模の環境破壊を引き起こし、生命工学は人の生と死のパラダイムを変えつつある。我々は科学とどう向き合っていくべきなのか。当分科会では科学における倫理の問題に焦点を当て、文系理系を問わず様々な視点から、科学が人間社会にもたらした功と罪を考察していく。そして、今の世代だけでなく次世代も含めて、人類全体が科学の利益を享受できるシステムを模索していきたい。

はじめに

昨年の9月、分科会リーダーであるNancyと私の手によってこの分科会の骨格が作られた。私たちが強く意識したものは参加者の成長であった。分科会を通して、お互いに刺激し合えるような経験をしてほしい。分科会の草案を考えた時からから本会議終了まで、これが私たち分科会リーダーの立ち位置、ひいてはこの分科会の特徴を決めることとなる。

この分科会で特記すべきこと、それは多様性であろう。様々な背景を持つ参加者が自分の思うように活躍してくれた。私たちの分科会が扱う題材は科学に関する社会問題全般でとても広いものであり、かつ自分の考えのままに動く参加者たちだったので、本当にうまくまとまるのかという私の不安をよそに、自分たちで分科会の方向性を決め、それに向かい一丸となって最後まで努力し続けてくれた。

以下、5ヵ月に渡る私たち分科会の軌跡をここに書き記す。

事前活動

1. 春合宿

日時：5月4日（日）～6日（火）
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

初顔合わせを行い、分科会の方向性と最終目標について話し合い、私たち学生は時の先端技術をどう使うべきであるのか、また私たちにできることはなにか、という疑問を中心に分科会を進めることで一致した。この疑問に答えていくために、具体的に以

下の1～4の流れに沿うこととした。1. 事実を明確にする。2. 倫理的問題に注目する。3. その功罪を踏まえ、建設的議論を行う。4. 科学が人間の幸福に寄与するため何ができるのか考察する。

2. 第1回RT合宿

日時：5月23、24日（金、土）

春合宿から1ヵ月が経ったが分科会の方向性を明確に設定できず、再び話し合いの機会を持った。科学と倫理の問題について、国内格差に焦点を当てることや科学を研究者・施行者・一般市民にわけて考えることはどうかなどの意見が出た。また、いかに意義ある形でこれらの問題を扱うのかについても議論した。

3. 田中智彦先生訪問

日時：6月5日（木）

分科会の方向性をより明確にし、個人個人の扱うトピック選定のヒントを得るため、東京医科歯科大学田中智彦准教授に質問をさせていただく形でお話を伺った。科学と倫理は、1. 科学の倫理（内在的問題）2. 科学と社会の接点から出てくる問題（外在的問題）という二つの面から考えられることを学んだ。科学と倫理の軋轢が生み出すジレンマ（例：どこまで既存の科学技術を適応してよいのかという問い）を考える切り口として「真に豊かな社会の実現」というフレーズをいただいたことは記憶に新しい。そのフレーズを考えるに際し、「真に豊かとは何か」という究極の問いにぶつかり、それを突き詰めて考えると「人間とはなにか」を考える機会となった。

4. 日野原重明先生訪問

日時：6月26日（木）

医と倫理の関係について考察を深めるため、聖路加国際病院理事長の日野原重明先生にお話を伺った。短い時間ではあったが、理論・技術を病む患者に適用するという「アート」について、治療の究極の目的とは命を大切にすることだということ、生命倫理という限界の中での研究についての話を伺った。日野原先生のお話もさることながら、多忙のなかこの依頼を引き受け、短い時間でも精一杯話をしてくださったその姿に人としての大きさを感じた。「医とは、いのちをはぐくむもの」と繰り返されていたことが印象的だった。

5. 防衛大学訪問

日時：6月27日（金）

防衛大学校の学生とマンハッタン計画における科学と軍の関係、それに付随する倫理の問題について議論した。互いの調査結果を発表し合った後、原子爆弾の研究開発に携わった科学者や軍、政治の責任について、当時の軍と科学者の関係などを話し合い、戦争と共に発展してきた科学の歴史について認識を深めた。また、科学技術の施行者という視点から、科学技術を実際に適応する際に生じる倫理的問題ついて、現実にはそれを考える機会がほとんどないことも議論がなされた。

6. 第2回RT合宿

日時：6月29日（日）

個人個人が取り上げたい題材を共有し、議論を如何に深めるかを話し合った。それぞれ、題材を十分絞り込むことができていない面があった。インターネットを利用したミーティングなどを通じて、個々人の扱う題材を共有、相談することを確認した。

7. 鈴木信行氏訪問

日時：7月14日（月）

二分脊椎症という疾患を持つ日本二分脊椎症協会の鈴木信行氏に、「医療者に大切なこと～目的意識を持っていますか？～」という題でお話をしていただいた。二重脊髄を取り巻く医者と患者の目的意識のズレから生じる問題についてご自身をも例としてご説明下さり、患者の生きる目的を支えるという医療者の役割の重要性を強調された。質問も交えた議論は人生の目的にまで及び、気さくにお話をさせていただいた。

8. 班目春樹先生訪問

日時：7月18日（金）

科学技術と倫理、科学技術と制度について考えるヒントを頂くために、原子力社会工学、技術倫理がご専門の班目春樹東京大学教授にお話を伺った。技術そのものに倫理性があるのではなく、技術を使う人間から倫理性が生じるというお話を伺い、科学を利用する者の一員としての責任の重さを痛感した。議論の進め方や参考資料についても様々なご提案を

下さり、分科会全体の方向性を再考することができた。

9. 分科会ミーティング

事前準備においては、直接会って話をするだけではなくインターネットを使って連絡を取り情報・意見を共有することで、分科会の方向性、事前活動の内容、個々人の扱うトピックなどについて議論を行った。それぞれ忙しい中でも連絡を取り合ったことで互いに信頼関係を築くことができ、本会議に上手く入っていくことができたと感じる。

本会議活動

本会議では、倫理という抽象的な問題を扱う都合上、まず鍵となる質問(key question)を設定した。これは、それぞれのトピックごとに議論がぶれて一貫性がなくなることを防ぎ、分科会の向かう目標・方向性を定めるという意味がある。key questionの候補はいくつかあったものの、次のように決まった。

How can science contribute to human condition?
(いかに科学が人類・人道に貢献できるか)

これを見ればわかるように、倫理的な科学は人類・人道に貢献すべきであるという前提を設定し、議論を行った。

その上で、直接上記の質問に答えるのではなく、倫理的ジレンマ(ethical dilemma)が存在する具体的な事例を取り上げ、議論を重ねる過程でkey questionに答えるという方法を採用した。ただし、最初の2回に関しては、科学と倫理という分野の全体像を理解する上で議論しておくべき基本的テーマとして、あまり具体的な事例に沿うことなく、抽象度の高いままで話し合った。なお、明確な一つの正解がある分野ではないからこそ、多様な視点を理解することが大切であるということを念頭におき、全体の議論を行っていったことも付け加えておきたい。

扱う事例は分科会のテーマに沿う範囲内で各自の興味分野から自由に選ばれ、以下の順で行われた。

1. What do we mean by ethics?　(Nancy)

まず、倫理とモラル、法律、エチケットはどう異なるかを議論しつつ、各自の倫理観を共有した。プロフェショナルの倫理(職業倫理)と一般の倫理が異なる場合があることについても、確認をした。

2. What is happiness？　(渡邊)

自分がどんな時に幸福を感じるかなど幸せに対する考え方をした後、物質的に恵まれていても幸福を感じられない場合があることについて、またその逆もありうることについて、参加者それぞれの価値観に沿って意見を出し合い、幸福感がどれほど個人の体験によって形成されているかを認識した。

3. Genetically Engineered Taro－What role should culture play in the direction of science?　(Neal)

ネイティブハワイアンの人にとって、タロイモは単なる食物を超え、信仰に関連する神聖なものであるが、そのタロイモが現在絶滅の危機に瀕している。そこで、ハワイ州立大学の研究者たちが遺伝子組み換えのタロイモについて研究を始めたところ、ネイティブハワイアンの人々から強い反対を受け、研究の継続が困難になっているという。文化と科学の関係を考える上で、非常に面白いケースで、議論は白熱した。ヒンドゥ教の人が牛について研究するなと言えないように、科学は独立して存在すべきだという意見が見られた一方で、科学も一つの文化なのではないかとの意見も見られた。科学者と利害関係者(この場合ネイティブハワイアンの人々)との間で十分なコミュニケーションが取られなかったとすれば、問題があったのではないかとの指摘から、科学者と社会を構成する市民の責任についても議論が行われた。アメリカでのキリスト教と進化論の対立関係についてなど、話が及ぶ場面もあり、誰もが満足するように科学を発展させていくことが果たしてできるのか、考えさせられた。

4. Bioethics －Definition of human　(高野・渡邊)

科学技術の進歩に伴い、人間の定義をあいまいになったことや、人間の終わりである死という概念の定義を確認した。延命措置を希望しない患者と延命措置を希望する家族の間で、医師はどのように行動すべきかという事例を取り上げ、その上で、人間をどう定義するかについて議論を展開した。まず、動物を人間の子供のために犠牲にすることはできても、その逆はありえないことから、動物との違いと

いう観点で人間を定義しようと試みた。そこで、機能的な定義(Functional Definition・意識の有無、知能や判断能力の度合い、脳の機能など)と認識的な定義(Recognition Definition・人から見て人だと認識されること)が候補として挙げられたものの、どちらも完璧な定義とは言えなかった。しかし、人間の条件を考えることは、基本的人権の概念とも密接な関係がある。人間の定義のあいまいさが傍流の人々の人権が侵害する恐れもあり、自分なりの定義を持つことが大事であることを実感させられる機会であった。

5. Manhattan Project / Nuclear Technology − What should we require from scientists?　(横山・大井)

日米の学生で会議をする上で、核問題は避けて通れないトピックであるように思える。核兵器のような人道を阻害するものを開発する際に、科学者はどのような責任を負うのかを検討した。政治・軍事産業・科学の三つのつながりが深いことの問題点を指摘し、科学者が自分の研究の帰結について考慮する必要があるが、往々にして予測が難しい点に議論が及んだ。倫理は時代・状況・立場によって異なってくることから、現在の視点に立つ私たちが科学者を断罪することが難しいという指摘もあった。また、科学者は市民より専門知識を持っているので、社会と科学の橋渡しをするべきだという意見が見られた。それと同時に、科学者は社会の需要によって動くことから、社会を構成する市民の側も科学に関心を持つことが重要であるとされた。結局、社会を構成する私たち一人一人が、科学を倫理的に導くための責任を有するのではないだろうか。

6. Alternative Energy／Bio fuel − What is the relationship between environmental ethics and the right to develop?　(Colin・李)

技術革命、そして産業革命以降、人間社会が行ってきた開発により化石燃料の使用による過度な二酸化炭素の排出が行われ、恒常性を保つことができないほどに、現在環境破壊が進行している。これに対し、すでに経済的に優位を占めている先進国を中心に化石燃料使用を抑制するコンセンサスが作られてきたが、開発が遅れている途上国の反発を招き、様々な葛藤が生じている。また、バイオエタノールなどの代替エネルギー技術は、アフリカ諸国など食べ物の値段に直接影響を受けやすい途上国の立場にとって、生存がかかっているほどの敏感な事案である。こういう現状を見るときに、科学技術に対する意見が貧富や置かれた社会的な状況によって違うため、科学技術の発達は格差を広げているという結論にたどり着いた。この状況を改善する方法を議論する過程において、権利や科学技術の存在意味などについて考えさせられた。

ファイナルフォーラム

ファイナルフォーラムは分科会での議論を総括し、社会へ発信することが目的である。私たちはビデオを使い、key questionを軸とする一連の議論のつながりや各議論の概要を示した上で、来場者にも科学に関する問題を考えてもらうよう試みた。倫理と科学の関係には明確な正解がない。そのため、全体像・対立構造を理解し、個々が自ら思考することが重要だと考えたのである。最後に科学を倫理的に扱うように導く責任は社会を構成する私たち一人一人にあるのではないかとの問題提起を行い、5ヵ月にわたる分科会活動はひとまずの結論を得ることとなった。

なお、私たちが作成したビデオは以下のアドレスでyoutubeから見ることができる。興味を持った方は、是非見ていただければ幸いである。

http://www.youtube.com/watch?v=9_05D9a5aVA

分科会総括

●李 鎮河

科学と倫理分科会は全ての分科会の中で一番学生のバックグラウンドが多様であり、それぞれ自己主張が強い優秀な学生が集まり、非常に活発な議論ができた。各種事例に対してそれぞれ違う見方をしていて議論がまとまりづらい傾向もあったが、そのため、自分は持っていなかった新しい視覚と洞察を得ることができた。最初は形のある結果を出すことに集中し、コンセンサスをとりづらい現実に挫折したりもしたが、結果的にそういう方向の多様性がこの分科会の一番の魅力だったと思う。もし、またこの

ような多様なバックグラウンドを持ったメンバーで構成される分科会ができるのなら、最初から自分が持っている観点や意見を迷わずに出していくことを勧めたい。本会議中のフィールドトリップに積極的に参加できなかったことは一つ惜しいところである。この日米学生会議の1ヵ月間の議論を通して得てきたものを一生大事にしていきたい。

●大井あゆみ

私たちの分科会は、波乱続きだった。春合宿の段階で、分科会の最終目標が決まらず、プレゼンテーションもめちゃめちゃだった。当然、他の参加者からの質問タイムでは、答えに窮するような質問の連続だった。事前活動の時期になっても、この分科会を通しで何が達成できるのか、はっきりわからないまま、ただ焦っていた。

本会議中ですら、まだ不安があった。結局のところ、科学と倫理(あるいは世の中の多くの問題)について、一つの明確な答えなどなく、議論の先行きが見えないこともあった。しかも、私たちの分科会は、全てがメンバーの自主性に任されていた。

しかし、今振り返ってみれば、リーダーシップをとるよりメンバーの自主性を優先するリーダーがいたからこそ、個性の強いメンバーがぶつかりあい、化学反応を起こすことができたのだと思う。この分科会では、困難な問題に対処する方法や多様なメンバーの考え方を知ることができた。それは、今後も私の財産になっていくことは間違いない。

●横山雄一

日米学生会議を終えた今、「科学分科会は成功だった」という感覚がある。これは分科会の目標を達成できたという満足感と深く結びついているが、この目標の探求こそがこの分科会の活動の中心だった。

この分科会のトピックはご覧の通り多様で、参加者の多様性とあいまって、分科会が一つの目標に収斂しないことが問題だった。分科会の目標は二転三転。議論の方向性が最終的に決まったのは本会議に入ってからだった。しかし、逆説的だが、分科会が「成功」だったのはこれだけ長い期間をかけてどのような目標を設定するのか苦しんできたからだろう。事前に苦労したからこそ本会議で思う存分議論でき、綿密に連絡を取り合って事前活動を通じて目標を模索し続けたからこそ深い信頼関係が生まれたのだと思う。

個人的には、なじみのない問題を専門分野が異なる人と話し合えたこと、様々な方のお話を伺えたことが大きな収穫だった。お世話下さった多くの方々に感謝致します。

●渡邊ともね

分科会に参加して、議論の時間をともにすごした大切な仲間からもらった言葉の一つ、「現状を疑う目」。

この分科会はまさにこの言葉がテーマだった気もする。普段、なに不自由なく生活しているなかで見落としてしまうものは数知れない。その中には、自分の人生を変えるような大切な問いもあると思う。受身でいけていればなんとなく生きていける現在、欲しいものはほぼ不自由なく何でも手に入る。その中で、現状に感覚が麻痺してしまって、私たちは考えることを止めることが多々あるだろう。しかし、大切なことは、「これでいいのか」と問う瞬間だと考える。そして、恐れずに意思表示をすること。これらがこの分科会活動を豊かにしたし、私が活動を通して学んだことでもある。

分科会コーディネーター

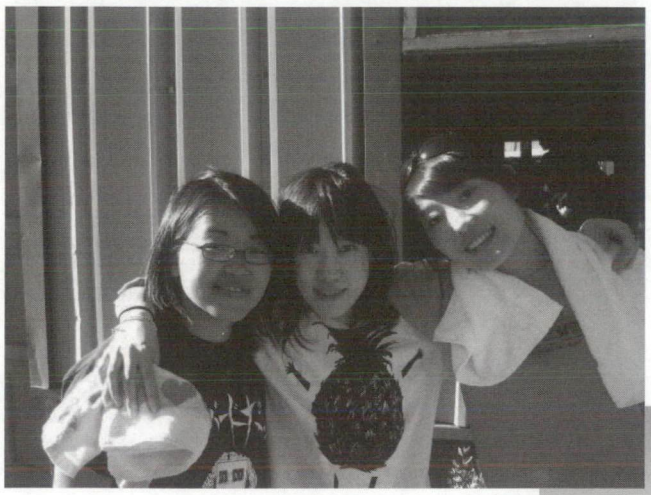
●高野恭平

この報告書作成もほぼ終わり、分科会リーダーとしての仕事を無事終えられたことにほっと胸をなでおろしている。しかし、この分科会の目的は安堵感を得ることではない。終わった後の充実感は、時に人を陶酔させ、そこまでの過程で発生した様々な問題を未解決のままおざなりにさせるだけの魔性を秘めていることを心に留めておかねばいけない。

充実感を味わうことは次の仕事をする動機付けにもなるため、ある程度は必要だ。しかし、それだけで納得していては全てを生かしきれたとは言い難いだろう。これからは、それぞれが各自で分科会中に得た様々な課題に愚直に取り組んでほしい。分科会を通して学んだこと全てを周りに伝える努力をしてほしい。これがすべての参加者に対しての私の思いである。この分科会は参加者の成長に焦点を置いて

いると始めに記したが、それは本会議後に参加者たちが何かしらの形で社会にこの体験を還元してくれることを期待して掲げた目標である。そして、多くの方の支えによって成り立つ日米学生会議において、それは責務でもある。

ここが私を含めすべての参加者の新たな出発点になることを願い、筆を置くことする。



Science Ladies

ポートロングビーチにて

現代社会と伝統～調和と共生の模索～

Exploring the Relationship between Tradition and Modernity

分科会メンバー

居鶴有未恵
新宮清香
廣田隆介*
松尾恵輔
松本秀也
Jon-Michael Durkin
Chien Lam
Gregory Schuster
Joshua Turner*
（＊はコーディネーターを示す）

分科会概要

現代社会は歴史から様々なことを学び、発展してきたが、時としてそのルーツである伝統との間に摩擦を引き起こしてきた。両者の緊張関係は、近年の例を見れば、1960年代後半の反体制運動や、今日の宗教原理主義、民族主義勃興の遠因ともなっている。しかし一方で、古今東西、新しき物と古き物が衝突し合い、異文化が相克する過程において、固有の文化、技能、価値観は融合と発展を繰り返してきた。そしてグローバル化と過去への考察が進むこの現代において、地球規模の空間軸、人類の歴史という時間軸の双方において、融合と発展の選択肢は無限に広がっている。本分科会では現代社会と伝統の調和と共生の術を模索し、より良い未来を構築するために議論を進めていきたい。

事前活動

1. 春合宿

分科会メンバー5人全員が初めて出会う場所である、国立オリンピック記念青少年総合センターに、我々は期待と不安を抱えながら集まった。OBの方の講演を聞き、自己紹介をすませ、ついに分科会の方向性を決めるディスカッションが開始される。そこで、我々がこの分科会を通して何を知りたいか、何を作り上げたいか、何を社会に発信したいのかをめぐって熱い議論が交わされた。そして最終的に本分科会の目標を、「現代の食文化、社会保障制度、ポップカルチャーなどがどのように形成されてきたかを探ることを通して、伝統と現代社会の調和と共生の術を模索する」と設定した。

3日間の合宿を通し、個性溢れ能力ある仲間と妥協のない意見交換をする事の心地よさを感じ、彼らと今夏一緒に過ごし様々な経験と発見を繰り返すことができるという予感に胸が弾んだ。　（松尾恵輔）

2. はとバス英語観光ツアー

日時：7月5日（土）

外国の方々が魅力を感じる日本の良さを知りたい！という思いから、私たち「現代社会と伝統」の分科会は事前学習として、外国人向けの英語の東京はとバスツアーに参加した。

朝、日本であるはずなのに英語が飛び交うバスターミナルでわくわくしながら乗車すると、まず驚

いたのがツアーに参加している人の出身国であった。西欧圏の人が多いと思っていたのだが、実際は北欧や東欧、スペイン、モンゴルなど、現在まさに発展している国々の人だったのだ。そして彼らに日本の良さを尋ねると、日本人の温かさ、日本食、そしてアニメ・マンガなどのポップカルチャーという答えが返ってきた。日本の影響はすでに日本人が意識している以上に海外へ浸透し、日本の存在感が増しているのだ。そしてバスガイドさんの日本の良さを伝えようとする熱のこもった説明から、日本の良さを外国人に伝えるための工夫を私たちは学ぶことができた。

このツアーを通して、私たちは日本の潜在的魅力を再確認し、ますます日本の良さを世界に発信したいと思うようになった。そしてその実践の場となる夏の本会議に向けて、より一層アメリカ側参加者に日本の良さが伝わるように、事前準備を重ねていくきっかけとなったのだ。最後に、ツアーで出会った多くの外国人旅行客のみなさん、そしてツアーガイドさん、ありがとうございました。　（新宮清香）

3. RT合宿

日時：7月12、13日（土、日）

この合宿は皆忙しい中での実施であったが、各々のプレゼンテーションを英語で行い事前にどのようなトピックについて話し合うかを議論した。まだアメリカ側と直接顔を合わせている訳ではないので、非常に手探り状態での議論ではあったが、着実に本会議が近づいているのだなという実感と、本会議において

実物を見ながら食文化に関しての議論中

アメリカ側とどのような議論になるのかというのが非常に楽しみであった。また分科会としての一体感もここで増したように思えた。夜中まで議論と発表を続け、夜は悲劇の記憶分科会と共に交流会を設けた。日米学生会議はとても幅広い学生や考え方を持ったヒトが集まっているため、こういった時間はとても貴重であるし、何よりの楽しみの一つであった。合宿によって皆の共通意識を共有していく中で、本会議が待ち遠しくなった。　（松本秀也）

4. 中山恭子参議院議員勉強会

日時：7月15日（月）

場所：参議院議員会館　国会事務所

目的：中山先生の駐ウズベキスタン特命全権大使や拉致問題担当等豊富なご経験から日本に対する想いを伺い、「日本の伝統」や「日本の文化」を定義し、今後発信していく術を学ぶ。

6月末に越智隆雄議員の政策勉強会で中山先生の講演会に参加させていただき、駐ウズベキスタン特命全権大使等のご経験から日本文化発信について伺うことができた。その時期私たちはアメリカ側メンバーとのon line meetingで、「日本文化の伝統」とは何を指すのかという疑問を投げかけられ、定義を模索している最中だった。そこで、日本文化に対し強い誇りや愛情を持って政務に臨まれている中山先生により具体的にお話を伺いたく、訪問をさせていただいた次第である。

まず、「文化」とは何かという問いに対し、「文化とは常に動きながら他と融合し、社会に根付いているもの全てである」というご見解を伺うことができ、まさに文化とは人や社会に宿るものであり、伝統と現代社会は両者切り離して比較させるものではないのだと知ることができた。

この場合の文化とは、「着物」や「茶道」といった目に見えるものもあれば、助け合いの精神といった可視化できない文化的価値観もある。それまで私たちは、日本の（可視的）伝統がグローバル化によって変化してきたことを問題視してきたが、遣隋使や遣唐使を例に「柔軟に他を受け入れられる日本の文化がある」というお話から、それもまた日本の文化であることにも気が付いた。そして、伝統的価値観は

根源を保ちながら柔軟に近代に対応していくのであり、伝統の核心を尊重する意識と柔軟性の両面が文化を形成していくことを学んだ。

限られた時間ではあったが、時間いっぱいに生きたご経験談を伺うことができ、「日本人の良さ」を体現したかのような先生のお人柄に触れる貴重な機会となった。（居鶴有未恵）

中山恭子先生を囲んでの１枚

本会議活動

ポートランドではお互いの自己紹介もそこそこに、分科会で議論したい内容に関する活発なブレインストーミングが行われた。グローバリゼーション、世代間ギャップ、女性の役割の歴史的変化、農業、教育、都市化、食文化、社会保障など様々な興味深いトピックが挙がる一方で、35時間という限られた時間をどのように効率的に使って行くのか試行錯誤が続いた。ロサンゼルスではGetty Museumを訪れて古今東西の芸術作品を鑑賞して「文化とは何か？」という疑問に対する答えを再確認すると共に、ジャパデリが事前に用意してきたプレゼンテーションを元に議論が行われた。そして分科会作業時間が最も多く設けられていたモンタナでは、いよいよファイナルプロジェクトに向けた作業に突入した。モンタナからボストンへの移動の際にはアメデリの飛行機が丸2日遅れるというトラブルに見舞われながらも、Skypeを通じて連絡を取り合い、アメデリが到着後の作業がスムーズに進むよう努力した。そしてファイナルフォーラム前日の22時頃、T&M Timesというニュースレターと、プレゼンテーション用のビデオを完成させた。

ファイナルプロダクトのニュースレターとビデオはそれぞれウェブ上にアップされているので、是非ご参照いただきたい。

ニュースレター：
http://traditionmodernity.blogspot.com/
ビデオ：
http://jp.youtube.com/watch?v=p5HwGXwdv-k

以下に、分科会で行われた活動の一部をご紹介したい。これらはジャパデリが春合宿から念入りに準備を重ねてきたプレゼンテーションを元にした議論内容と、本会議中の分科会の議論が実際にどのように進行し、またその雰囲気はどの様なものだったのかということを読者の皆様にお知らせする目的で書かれている。

１．「食文化」

「食」は私たちの毎日を構成する一番身近なトピックである。その一番身近な現代の食の中に、伝統が息づいているのではないかという興味から、私は「現代社会と伝統」の分科会で「食」について考え発表した。具体的にはまず「食」の知的体系を考え、「食」には材料収集と人間の体内消化という二つの自然科学的段階と、料理方法や盛りつけ、慣行などの文化的段階が存在することに気付いた。そして自然科学的段階として、材料収集に関連する農業に注目し、文化的段階として、食文化の歴史に注目して日米比較を行った。

農業比較において、アメリカは広大な土地を利用した近代的な大規模で機械化された農業であり、日本は国土の制約性から伝統的な知を活かした、家族単位の農業という、一見すると現代的なアメリカと伝統的な日本が対立するような印象を持つ。しかし実際、アメリカは大規模ではあるが、転作など伝統的な農業の知を活用し、日本でも伝統的に行われてきた品種改良に加えて現代の技術を活用している側面が見られた。

また食文化の歴史比較においては、日米各国内で伝統的な料理を基盤として、現代的要素を取り入れていく歴史変遷が見られるだけでなく、両国の間で国境を越えた影響が見られた。アメリカのファーストフードが日本に輸入され、逆に日本から日本食がスローフードとして注目されたのはその一例である。

発表と議論を通して感じたのは、現代社会と伝統は一見対立するように見えて、実は現在社会は伝統とのつながりの上に成り立っているのであり、現代社会があるからこそ、伝統の良さが再注目されるということである。グローバル化が進む現在、近代化の流れによって、伝統と現代社会が対立する局面をしばしば目撃する。しかしこのグローバル化を逆に利用することで、自国の現代社会に息づく伝統の良さや各国の影響に再注目し、その自国の特徴を発信することが可能なのである。　（新宮清香）

2.「日本の農業」

私は日本の農業景観は多くの日本人がノスタルジアを感じ、時に日本人のアイデンティティを形成する重要なものであると感じていた。そこで、本発表を通じ①美しい伝統的な日本の農村風景をアメリカ側参加者に紹介すること②農業景観が、グローバリゼーションがもたらす現代化とどのように調和を図るかを模索すること、の二点を達成しようと試みた。

そこでまず「棚田」に焦点を当て、その耕作放棄前後の写真を紹介し、次に棚田の放棄の原因として、グローバル化による食生活の変化、産業構造の変化、安価な食物の流入を挙げた。そして調和策として、海外での日本食ブームを活かした食料輸出や、農業景観を観光資源にすることで、棚田を守る方法を提示した。

これに対しアメリカ側参加者と日本側参加者の一部から、日本の伝統的な農業景観を残す意義は何かという疑問が示された。更に現在の日本の低い食料自給率を考えると、伝統的な農業を守り続けるよりも、農業を集約・効率化して生産量を増やすべきだと指摘があった。

発表を通して、伝統と現代社会の調和の問題以前に、自分が持っている価値観を違う環境で育った人々と共有する難しさを痛感した。例えば本発表の場合、私は日本の所謂田舎の出身であり、農業景観そのものが私にとっては守るべき価値である。しかし、そのような農業景観にあまり触れる機会のなかったアメリカ側参加者や一部の日本側参加者にとっては、その価値を理解することは難しい。そして、そのような価値観の共有の難しさが、世界各地で伝統とグローバリゼーションが衝突を起こす原因になっているのではないかと感じた。　（松尾恵輔）

3.「社会保障制度の日米比較」

社会保障制度と私達の分科会テーマは、一見関係がないように見える。しかし私は、日米の社会保障制度の成立背景を比較して見る中で、社会保障制度には両国の伝統的精神が映し出されていると感じ、それらの変遷を捉えることで両国の価値観の推移を見ることができ、伝統的価値と現代との調和を見出すことができると思った。

まず、日本がpublic helpの精神に基づき制度設計がなされているのに対し、アメリカはself-dependenceの精神に基づき最低限の社会保障がなされていることを紹介した上で、近年は社会的変動（globalization等）により、両制度が接近傾向にあることを指摘した。

メンバーからは、私が提示した両国の価値観の設定に対し、アメリカの最低保障という制度背景にはコミュニティでの連帯が密であることも関係する、また日本は明治政府時代からトップダウンでやってきたことも社会保障政策に影響しているのではないかといった疑問が投げかけられた。また、グローバル化により人の行き来も盛んになると、文化間だけではなく、世代間にも問題は生じるといった意見もあげられた。

発表と議論を通して、伝統という価値観も日米間では異なる視点があるということは興味深く、またグローバル化により状況が近似すると、各国の情勢に敏感になり相互理解が進展することを感じた。また、政策をテーマに取り上げ、予想以上の関心の高さを感じると共に、知識だけではなく実感として感じる視点を活かした有意義な議論ができ、こうした個人間の相互理解の重要性を感じた。（居鶴有未恵）

4.「分科会活動の流れ、雰囲気」

遂に本会議が幕を開け、同時に分科会活動も始まった。始めは日米両国の参加者がお互いどのような準備をしてきたのかということを共有し、議論をすると共に、テーマが「現代社会と伝統」という広いものであるということもあり、ファイナルフォーラムに向けてどういったトピックを抽出していくかという議論から始まった。何より分科会を通じて思ったことは、やはり両国の歴史に対する見方が違うという事と、双方の歴史に対する価値観によって、現代の社会における両国の変化が如何に異なっているのかというのが面白かった。議論自体はアメリカ側がリードするといったこともなく、公平にお互いがお互いの意見をぶつけ合い、尊重していくという姿勢が見られた。それは私にとって非常に驚くべきことであったと同時に、実際にアメリカやその他の国々の人々と議論した時にはどうなるのかということが気になった。いずれにせよ、相互理解の姿勢が強かった当分科会は、最終的にもファイナルフォーラムに向けてのまとめ、作業の円滑化が非常にうまく進み、かつ議論もお互い妥協することなく進めることができ、非常に良かった。　（松本秀也）

ファイナルフォーラム前夜の決起集会

分科会コーディネーター後記

●廣田隆介

「色々な社会問題に関して、アツい率直な議論を交わしたい。」という思いから、「現代社会と伝統～調和と共生の模索～」という非常に幅広いテーマを設定し、参加者が自由にトピックを立てられる分科会を創設するに至った。しかし、正直自身の就職活動や他の実行委員としての仕事に忙殺され、本格的に分科会の準備をし始めたのは4月に入ってからであったと記憶している。焦りに駆られながら分科会パートナーのアメリカ側実行委員と毎週オンラインミーティングを重ね、なんとか分科会の方針を日米で合わせることができて安堵したことを覚えている。そして待ちに待った春合宿が始まり、全員の分科会メンバーと分科会の方針について議論を重ねた。そこで強く感じたことは、分科会コーディネーターという役割の難しさであった。メンバーとの距離を縮めるためには自分の意見を率直にぶつけることも大切だが、どうしも「前回のJASCではこのようにした」というバイアスが分科会の議論に影響してしまいそうで怖かった。この悩みを解決したのは、やはり心のどこかで持っていた「これは自分の分科会だ」という所有欲を捨てることであったと思う。そもそも分科会コーディネーターは分科会という「ハコ」を用意することに徹するべきで、中身はデリゲートが作り上げて行くものである。そういう心持ちで分科会の議論に臨むことで、自分はデリゲートのニーズに合わせて動くことに徹することができた。

本会議が始まりアメデリが合流すると、新たに英語という壁が立ちはだかった。ここでの重要な役割は日米間のコミュニケーション円滑化であり、分科会を15分間日本語で行うなどして言語の壁の高さをアメデリに意識させ、また分科会終了後日本側で内容の確認を行うなどした。ジェネレーションギャップ、グローバリゼーション、農業、食文化など様々なトピックに関する議論も進み、順風満帆に見えた分科会だったが、モンタナサイトに入って大きな問題が生じた。ファイナルプロジェクトに関する議論に入り、何かを作り上げなければならないという焦りからか、食い違いや勘違いが多発するようになってしまったのだ。更には会議も中盤に差し掛かり体調を崩して分科会を休む者が居たり、ミスコミュニケーションによって夜のミーティングに現れない者が居たりと、なかなか全員一致で物事を決めること

ができず、ますますその溝が深まっていった。そのため、思い切って現状を全員で認識するための反省会を設け、もう一度全員で方向性を確認し合うことでこの山場を乗り切ることができた。

モンタナでの合意を成果物まで持っていくための時間は、ボストンでの2日間しか残されてはいなかった。そんな時に、アメデリのフライトがキャンセルされてしまうという非常事態が発生。しかし、モンタナで一つになった分科会の結束は固く、日米デリゲートはSkypeで自主的に連絡を取り合い、メール上でビデオプロジェクトの台本を送ってチェックし合い、自然と歩幅を合わせていた。そしてアメデリが1日半遅れで到着すると同時に、ラストスパートに入っていた。この時期私はECミーティングで夜の分科会ミーティングには殆ど参加できなかったが、自分達で役割を分担し、一つのプロジェクトを作り上げて行くデリゲートを見て、本当に感動したのだった。

確かに1ヵ月という短い期間で、学生が世界を震撼させるような発表を作り上げることはできないかもしれない。しかし、様々なバックグラウンドを持つ同世代の人間と、母国語、非母国語を交えて率直な議論を交わし、一つの発表を作り上げるという経験は、人間、そしてチームという集合体に大きな可能性を感じさせてくれる。このような気付きは、その後の人生に大きな影響を与えてくれるのではないだろうか。少なくとも私は影響を受けたその一人である。こういった気付きに、日米学生会議で分科会活動を行う一つの意義があると信じている。

陽光眩しいGetty Museumにて分科会メンバーと

最後に、最高の分科会メンバーに敬意と感謝の意を表したい。将来またどこか違うフィールドで再開できることを祈念して、この文章の締めくくりとしたい。

悲劇の記憶～歴史認識と教育の役割～

Memory of tragedy:Examining vehicles of bias, Education and Peace

分科会メンバー

明石恵美子
高畑乃枝
比嘉慎一郎
渡辺恭子*
渡辺千尋
Hannah Lemmer
Bethany Marsh*
Rachel Staum
Yuichi Shimokawa
（*はコーディネーターを示す）

分科会概要

歴史教科書論争を始めとし、特定の歴史事実やその解釈の違いを巡る議論が盛んになっている。今や、メディア、教育など様々なレベルで形成される歴史認識は我々の思考や行動までにも影響を及ぼし、国民感情として表出する。政府間外交だけで歴史問題の解決を図ることは限界に来ているだろう。当分科会では、ホロコースト、原爆投下、9・11テロ事件などの歴史的出来事を取り上げ、過去の悲劇がどのように語り継がれ、描かれ、人々に記憶されているのか検証する。特定の価値観や歴史観の形成に際し、教育が果たす役割についても視野に入れ、歴史認識の対立をどう捉え、そこから何を学ぶ必要があるか議論していきたい。

事前活動

春合宿

分科会のテーマ理解を行い、今後の方向性について話し合いを進めた。分科会としての明確なゴールは何か、認識の違いを理解する意義とその還元方法は何か、大学生として私達は何ができるか、という三点を詰めて考えていくことになった。また、教育の役割についても議論を進め、国内においても育った環境や受けた教育の違いで異なった意見が発達していることや、暗記するだけの歴史教育の問題点などが挙がった。その他、春合宿のプログラムとして組まれていた海外の学生（アメリカ・韓国・ブルネイ）との英語ディスカッションでは、「歴史認識の問題がどうして起こるのか」を知るために、歴史を学ぶ意義や各人が受けた歴史教育について話し合った。

本会議での議論に備え、春合宿後から本会議までの期間様々な事前活動を行った。目的としては、歴史認識を取り巻く環境の理解、過去の出来事がどの様に展示・記憶されているのか等インプットを主とした。以下は、その活動内容である。

1. 防衛大学校研修について

日時：6月27日（金）

防衛大研修日の夕方、2時間ほど分科会の時間を得た。「悲劇の記憶」分科会グループには、JASC側と防衛大学校側合わせて11人が集合した。お互いの簡単な自己紹介の後、防衛大学校側からの発表、質

疑応答、自由討論を行った。議論した内容は、首相の靖国神社参拝の是非、世界における日本の理想的なあり方、自衛隊の意義、憲法第9条、各国における歴史認識の違いなど、外交や歴史などと多岐に渡った。靖国神社参拝問題に関しては、JASC側と防衛大学校側で意見がほぼ分割されたが、それ以外の議題に関しては参加者の中でもそれぞれ考えが異なり、活発な議論が交わされた。その他には、JASC側から自衛隊の活動に関する国民の不安や、自衛隊側の国民に関する広報や情報発信に関する提案を行い、グループ会議を終了した。(明石恵美子)

2. 防衛大学校の学生へのアンケート調査について

「第二次世界大戦の悲劇の記憶を日米で共有できる」教科書作る上で、防衛大生の考え方と私たちの考え方の違いに興味を持ったことから、その違いを日本国内の意見の多様性として教科書の中で象徴させることができるのではないかと考え、歴史問題に関する質問を防衛大生に投げかけた。政治思想に影響された返答が返ってくるのではないかという予想に反し、結果には過去の歴史を真摯に見つめ、現在に続く歴史問題を軽視せず相互的な解決を望む姿があった。防衛大生の「過去のことを声高に叫ぶ暇があったら、世界の紛争地で今日明日死んでいる人がいるという現在の悲劇にも思いをはせてもらいたいものです。」という言葉は、当分科会を大いに刺激した。

(高畑乃枝)

防衛大学校学生たちと共に

3. RT合宿

日時：7月12、13日(土、日)

この合宿の目的は本会議前に日本側でどのようなことを話し合いたいかを決めるためである。合宿に向け知識を深めるため興味のある分野(歴史教育・被爆者など)の本を読み、概要をレポートにまとめた。合宿ではそれらをもとに各自の歴史に対する考えを共有した。また、戦争がメディアを通してどのように描かれているのか、私たちはメディアによりどのような影響を受けるのかについて考えるため『父親たちの星条旗』を鑑賞した。その後、現代社会RTと議論の時間を設け、歴史が現代社会に及ぼす影響などについて話あった。現代社会RTとの議論は歴史について異なる意見を聞くよい機会であった。

(渡辺千尋)

【取り扱った本】

明石恵美子：

藤原帰一『戦争を記憶する　広島・ホロコーストと現在』講談社、2001年

高畑及枝：

中国新聞「ヒバクシャ」取材班『世界のヒバクシャ』講談社、1991年

比嘉慎一郎：

油井大三郎『日米戦争観の相克―摩擦の深層心理』岩波書店、1995年

渡辺千尋：

石渡延夫・越田稜『世界の歴史教科書―11カ国の比較研究』明石書店、2002年

渡辺恭子：

岡真理『記憶/物語』思考のフロンティア、岩波書店、2000年

4．フィールドトリップ

太平洋戦争を主軸にRTを活動していた私達は課外活動として３つの戦争記念館を訪ねた。

①　靖国神社及び遊就館

日時：6月29日(日)

日本国内外でも様々な議論の対象となっている靖国神社とその歴史資料館遊就館を見学した。遊就館で書かれていた歴史は太平洋戦争を自衛戦争として避けられない戦争だったという正当化や特攻の美

化、侵略した国の被害など情報は最小限に表示し自分達の被害は大きく表示している、など偏った展示方法をとっており、『戦争の生々しさ、日本軍の理不尽さ』や『太平洋戦争は決して正当化されるべきでない』と言った事を学んでいた私達の歴史認識とは大きく異なり、改めて異なった歴史認識を理解することの難しさを知った。

②　しょうけい館

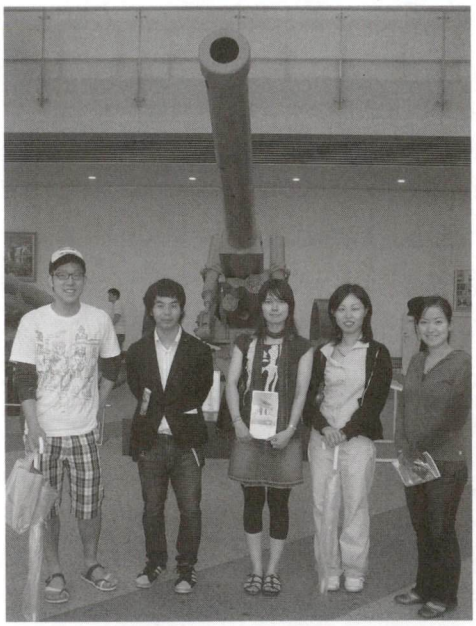
日時：6月29日（日）

戦争での傷痍兵などの体験を記した記念館であり、メンバーは初めて訪れたため新鮮な発見が多かった。兵士は加害者であると同時に被害者であるということも知り、改めて悲劇とは何かを考えさせられた。

③　平和祈念館

日時：7月12日（土）

ここは主に日本を離れ中国や満州で暮らし戦火に巻き込まれた人々やシベリアで強制労働させられた人たちの資料が展示されていた。戦争が終わった後もその戦争に翻弄されて人生を送った人たちがいるということを知る事が出来た。ここでの学習は『悲劇の記憶』が何故に強く記憶されるか、戦争と言う行為はその時のみだけが悲劇では無い、といった本会議のディスカッションの意見としても大いに役立った。（比嘉慎一郎）



遊就館へのフィールドトリップ

本会議活動

本会議中は、テーマに関するディスカッション及びファイナルプロジェクトの議論を中心に進めた。その他、全体プログラムでポートランドでは日系移民強制収容所に関する資料館訪問をし、モンタナではWar&Peaceコースを選択し現地の人々と意見交換を行った。

以下は、本会議中における印象深かった議論テーマとそれに対する分科会の意見をまとめたものである。各自の興味関心に基づいて、それぞれがリサーチしまとめたものを2人ずつ発表した。

【記憶が生む悲劇】

人類共通の「悲劇」や「記憶」はないことが本会議中での話し合いで分かった。「歴史」は誰かにより修正、編集されたものであり、「悲劇」と「記憶」は国家、民族、個人の中で異なる。「被害者」は時に「加害者」になり、相互は主観的にも客観的にも入れ替えが起こる。「相手の気持ちを理解して尊重しましょう」ーともすれば、このような陳腐な言葉にまとめられてしまいがちなトピックであるが、本会議全体を通しての話し合いでは、なぜ異なった記憶がなされるのか、誰がそれを支持するのか、記憶の差から生まれる憎しみや嫌悪こそが「悲劇」ではないのか、という奥深いところまで議論ができた。一つの結論は無いが、議論というプロセスで「考えたこと」、「知ったこと」、が大きな収穫だった。（明石恵美子）

【今、ヒバクシャとは誰なのか？】

原子爆弾が日本に投下されてから63年、本会議ではRTメンバーに「ヒバクシャとは誰なのか？」という問いを投げかけることから私のプレゼンテーションは始まった。RTペーパーの論点は、広島・長崎の原爆の記憶と、戦後世界中で引き起こされている核施設からの放射線汚染の被害、現在も続くイラク戦争でアメリカ軍が使用している劣化ウラン弾の被害をどのようにコメモレイトするかであった。発表では取り分け、劣化ウラン弾がイラク人のみならず、

アメリカ軍人にも被害を及ぼしている点についてアメリカ側メンバーが知らなかったと言っていたことが印象に残った。今、ヒバクシャとは様々な放射能汚染の被害者を含んでいる。63年前の歴史が教えてくれる悲劇の記憶が、現在も活かされる日を、私たちの手により掴み取らなくてはならない。

（高畑乃枝）

【沖縄戦と基地問題及びその歴史認識】

8月13日、モンタナにて、日米間問題の一つでもある沖縄に関するディスカッションを行った。多くの県民が巻き込まれてなくなった地上戦とその後27年間によるアメリカの支配、米軍基地の集中化、復帰後も日米安全保障条約による諸問題、更には集団自決などの歴史問題を取り扱った。歴史認識では京都の高校生と沖縄の高校生の認識アンケートをとり、沖縄戦や基地問題でどのような認識の差があるのか、などの議論も行った。モンタナの平和活動家も交えた本ディスカッションはそれらから更に発展させて環境問題やマイノリティー問題も取り上げ、各人から多くの活発な意見や質問が飛び交い、とても充実した議論が出来た。（比嘉慎一郎）

【日米教育の比較と教師の役割】

私は教育に興味があったので日米で歴史教育の相違、そこから生まれる歴史認識の差について議論したいと思っていた。本会議では歴史教科書の記述や教師の解説についてリサーチや経験をもとに話し合った。日米両国がそろって議論し、初めて気がついたことは両国とも侵略の歴史は授業ではほとんど触れないのに対し、被害の歴史は多く取り上げられているということである。私たちはこの現象を議論し、侵略の歴史はある意味自国のイメージを下げ、被害の歴史は悲劇を二度と繰り返さないためや残酷さを記憶しやすくするためなどという結論に達した。私は英語教育の勉強をしているが、歴史教育という違う分野の教育について議論することは大変興味深く、教育について幅広く学ぶことができた。

（渡辺千尋）

【記憶装置としての資料館が果たす役割】

「悲惨で暴力的な出来事を記憶し語り継ぐ事は可能か」、という問題意識が私の心にあった。被爆の実相を継承することが急務とされている中、出来事の記憶が人間の死を越えて生き延びるために、それは語られねばならない。その為に様々な形で記憶を分有する試みがなされている。その一つとして、戦争において不条理な死を遂げた人々に敬意を払い記憶するために様々な資料館が存在している。偏った見方、異なった解釈など議論になる面も多々あるがそれらは一つの視点に基づき、特定の人を対象として存在している。議論を経て、私達は資料館自体に問題を押し付けるのではなく、私達自身が能動的に行動する事の必要性を認識した。複数の施設をみて周るなどして、様々な考えに触れ一人一人が客観的に事実を判断し真実をみようとする姿勢が重要だと考えた。（渡辺恭子）

RTメンバー全員での初顔合わせ

ファイナルプロジェクトについて議論中

【ファイナルフォーラムおよびファイナルプロジェクト】

「悲劇の記憶～歴史認識と教育の役割～」分科会は、本会議前の事前学習やフィールドトリップ、本会議中の議論の中で、曖昧になりがちな「悲劇」や「記憶」、歴史認識や教育について幾度も粘り強く渡り話し合った時に議論は堂々巡りをし、メンバーは唯一の結論や正論は存在しないことを悟り、歴史的「事実」や収集した情報に懐疑的になりながらも、最終的にはこの分科会としての「見解」を一致させることができた。

私たち「悲劇の記憶」分科会は、この議論の集大成をファイナルフォーラムでは口頭による発表と文書での冊子に反映させることを決定した。発表と冊子には、「悲劇」の具体例として、1945年太平洋戦争の下アメリカ軍により落とされた「原子爆弾」について、また「記憶」のされ方に関しては「歴史的記念碑」、「マス・メディア」、「教育」、「文学」に焦点を絞った。

私たち分科会の「見解」として、以下の事柄を確認した。

唯一正しい歴史観はたとえ一国内においても存在しないこと、その国や地域の「主流」の歴史観には必ずメディアや教育、その地域が歩んだ「歴史」が影響していること、「歴史」というものは誰かの解釈なしには語ることができないこと、大切なことは異なる歴史解釈があることを知りそこから過去と現代の関連性を見出すこと、現代の国際関係にも歴史認識や教育が大きく関係し、その歪みで互いに無理解になり憎しみあうこともまた「悲劇」であること、などである。

冊子には各メンバーが、歴史認識に関する「メディア」、「歴史的施設」、「教育」、「文学」の役割について各々の意見と疑問点を提示した。例えば、「メディア」の役割については、社会ではメディアが世論を動かすケースと世論がメディアを動かすケースがあり、そのどちらにおいても結局は国の歴史教育方針や主流な歴史認識によって根付いた視点が強化されている。人々とメディアは双方的に影響しあい、その偏った視点を信じ込み、結局世論もメディアも一方的な視点に偏り他の視点を受け入れがたくなってしまうことが問題だ。故に、メディアが教育に与える影響、利害などについても教育過程で教える必要があり、メディアもまた事実を一方的な視点のみを報道し世論を助長させるということがないように努力することが必要になる。

「教育」に関しては、日米の中学校の歴史教科書や歴史教育のやり方を具体例に、歴史教師の役割の大切さを強調した。日本の中学校の歴史教科書の記述は極めて曖昧であり、その解釈は教師に任されている。国家間や、一国内でも地域間、学校間により解釈には差があり、それが生徒の歴史認識や社会問題に関する意識について大きな差を生むことが分かった。教師の役割として大切なことは、歴史は必ず誰かにより解釈されており、その解釈は唯一無二ではないこと、そして生徒たちに過去の歴史と現代の情勢の関連性や、過去の歴史から学ぶべきことに関する「意識」を持たせることだ。

ファイナルフォーラムの発表では時間がごく限られていたにも関わらず、分科会メンバーが一人一人発表する機会を得て、「悲劇の記憶」分科会メンバーとして伝えたいことは伝えられたと思う。発表内容の詳細や口頭の発表に含めることが出来なかった事柄を12分に詰めた冊子を会場の来客に配布した。

約60年前までは敵対関係だった日本と米国の「悲劇」と「歴史」、そしてそれを乗り越えるべき手段としての「教育」の役割、世論意識に大きな影響を与える「メディア」や「歴史的記念碑」、「文学」について「悲劇の記憶」分科会は熟考を重ねた。第60回日米学生会議のファイナルフォーラムへの活動と話し合いの中で、私たち「悲劇の記憶」分科会は過去と現代、そして未来をつなぐ「歴史」と「記憶」の複雑な迷宮を、すこしは理解することが出来たかもしれない。

(明石恵美子)

分科会総括

分科会参加者　渡辺千尋

女子7人に男子2人。(男子はいつもいじられていた。)アメデリ皆が日本語上級！デリ全員がマイペース。RTは終始おだやかに和気藹々と進行していったが、このマイペースぶりがファイナルフォーラムの時だけは一変した。今振り返っても一番大変だっ

たことはファイナルプロジェクトで第二次世界大戦を「日米双方の視点から客観的に取り扱う」ことだった。これは本会議中ずっと考え続けてきたことだったからこそ簡単に結論付けることはできず、深夜まで話し合いをし、フォーラム当日の朝ぎりぎりまで朝食を食べながら準備をした。

やはりRTの思い出はJASCでも大部分を占める。日常から「悲劇」が多かった。例えば同時に3人が風邪でダウン。空港で執拗なセキュリティーチェック。だれかがいないことはしばしば。同時に、「メモリー」がいっぱい！本会議前全員そろってのスカイプミーティング。ポートランドでの初顔合わせでちょっと沈黙気味なランチ。LAサイトでいじめについて語ったこと、モンタナで寒くてみんなでかたまって暖をとったこと、ボストンで買いものばかりして、RTの時間がなくなったことなど。

最後に、私たちの役割は各々が将来それぞれの分野でこの経験を生かして、還元していくことだ。今、私たち一人一人がその方法を模索している最中である。

アメリカ側参加者後記：Rachel Staum

The Memory of Tragedy roundtable was a rare opportunity for me and for all of us, I think: a month of discussion where Japanese and American students could come together to talk about the uglier parts of our shared history. The atmosphere was always respectful but sometimes challenging, when we struggled with our own personal and cultural preconceptions to try to reach mutual understanding. Our constructed memories of history have deep impact on the way our societies work today, and learning about and deconstructing the way we think about World War II in Japan and the United States was a valuable experience that quite literally changed the way I think about the world.

最終夜の打ち上げの様子

マイノリティと多文化社会

Minority Issues: From Social Discrimination to Social Contribution

分科会メンバー

呉 宣咏*
小野 元
田中 豪
神馬光慈
安川瑛美
Karen Jieun Jung
Fausia Mahama
Aya Nakanishi*
Charity Yoro
（＊はコーディネーターを示す）

分科会概要

アイヌ族や在日コリアン、ヒスパニックやネイティブアメリカンなど、日米両国の社会には、「マイノリティ」と呼ばれる少数派が存在する。彼らとの共生を実現する上で、政治的地位の問題や経済、教育環境の改善、社会保障政策のあり方など解決されるべき課題は山積している。しかし、そうした政策がマイノリティの社会への単純な同化や強制の足がかりとなってはならない。少数派ゆえ差別や偏見にさらされることの多いマイノリティをいかに保存、継承し、異なるグループ同士の共存を図るべきかという視点も欠かせない。本分科会では、マイノリティに対する日米両国の事列を検討し、多文化社会の建設に向けた新しい共生のあり方を探究したい。

事前活動

1. アイヌ、ジュマ、ビルマの先住民族・マイノリティとともに～首都圏のアイヌ、滞日外国人の中の先住民族との出会い2008～

日時：2008年6月15日（日）午後2時～5時半
場所：明治学院大学白金キャンパス 本館2階1255教室
主催：6.15イベント実行委員会、ジュマ・ネット

このイベントは、首都圏に住むマイノリティの人々と時間を共にし、彼らの生の声を聞く貴重な機会であった。国連の宣言に基づいて、日本政府がアイヌ族を先住民として認めた直後というタイミングもあってか、当日は120人ほどの教室がほぼ埋まり、テレビ局のカメラも駆けつける盛況であった。プログラムは、AINU REBELS（アイヌレブルズ）によるパフォーマンスに始まり、バングラデシュのジュマ民族で、日本で昨年難民認定を受けた方、ビルマの先住民族チンの民族協会の方、アイヌ連絡会の方の講演と質疑応答という構成だった。それぞれのパフォーマンス、講演の内容も興味深く、マイノリティに対する知識を身につけさせてくれた。

イベントを通じて強く感じたのは、マイノリティとくくられている人々の多様さと、彼らと対峙した時の「自らのマジョリティ性」だった。ビルマの方が説明しきれないほど大量のパワーポイントを背景に、通訳に口をはさむ隙を与えぬ勢いで、自らの民

族の境遇を現地語で猛然と話し出した時や、アイヌの権利のために長い間闘ってきた老人の「形だけの先住民認定より謝罪だ」という語り口から静かな怒りが滲み出ている時、それらが発せられている雰囲気に共通の特徴があり、無意識のうちにどこか身構えてしまう自分がいた。

「知ること」は相互理解のはじめの一歩ということに間違いはないだろう。AINU REBULSは、首都圏に住むアイヌの若者が中心だ。彼らは、アイヌ伝統の舞踊・歌に独自の感性でアレンジを加え、新たな表現に挑戦している。「マイノリティであることに、社会で積極的な意味や価値をどのように見出せるか」は我々の分科会の一つのテーマでもあり、グループの世代が自分達に近いこともあって、事前の分科会活動では関心の的であった。純粋にエンターテインメントとして引き込まれていたところ、パフォーマンスの後に、数週間後に予定されていた北海道での先住民サミットへの資金協力を呼びかける姿を見て、改めて彼らの出自と境遇に引き戻された。彼らはあえて「広告塔」を引き受けているのだろうか。

盛況の会場を見渡す。このようなイベントに参加費を払って来る人たちは、「知ること」に熱心なのだろう。一方で、難民認定は「認定」だけで、援助が得られなかったと笑っていたバングラデシュの方の話は、「知ること」の次にある「統合」の難しさを浮かび上がらせる。当事者とマジョリティの境目という立ち位置は果たして可能なのだろうか。（小野 元）

2．柏崎千佳子先生勉強会

日時：6月20日（金）

場所：慶応義塾大学　日吉キャンパス

6月20日、慶應大学経済学部准教授の柏崎千佳子先生とマイノリティと多文化共生についての勉強会を行った。まず先生は、日本社会ではマイノリティ問題を語る機会もなく、問題意識としての感覚が薄いことが授業中の学生の態度からも分かると、アメリカと比較した際の印象をおっしゃった。社会もマイノリティの権利保護に疎く、多文化共生に懐疑的な立場からは多文化共生実践のマジョリティへの利益とは何かという疑問が付きまとう。先生は、そのような疑問に対して日本の現状を見据える必要性を強調された。日本政府の公式な立場は、「単純労働者は受け入れない」、専門的職業の能力を持つ労働者を進んで受け入れるというものだ。一方現実は、統計的に高度専門能力のある移民の割合は少ない。移民はすでに日本に存在し、顔が日本人でなくても日本国籍を保有する人口は年々増加している。加えて、日本が今後右肩上がりの経済成長を望む時、労働力の確保、技術力など移民が果たす役割は国際競争の激化によって弱まることはない。日本の移民政策、そして多文化共生政策はこのままでよいのだろうか？

多文化共生という概念は「どのような状態」を持ってそれを実践しているといえるのかなど成功の状態が測りにくい概念であり、うわべだけの3F（food, festival, fashion）を強調する国際交流に止まってしまう可能性もある。先生は、日本が多文化共生をどこまで達成できるかの可能性には限定的な返答をされた。そもそも「平等」というクライテリアが多文化共生においては重要であるが、在日韓国人、アイヌ人の差別問題への抜本的解決策もなくうやむやのままの現状、また他に日本人と同じ社会的な平等性を求める集団がいないという現状は「平等」の実現からはほど遠く、日本社会の閉塞感を感じざるを得ない。多文化共生実践の現実的な単位は、地域社会という具体的・局地的なレベルにあるかもしれないが、それでもやはり国家の明確な政策としての多文化共生は難しいとのご意見であった。移民を受け入れない

柏崎先生と一緒に慶應大学日吉キャンパスにて

と日本が崩壊するという危機感、「入ってくる」ことは否定できないという現実に直面することが今後の日本の姿勢に不可欠なのではないかとの問題意識を強く感じた。　（安川瑛美）

3. 財団法人自治体国際化協会（CLAIR）訪問

日時：7月17日（木）

場所：財団法人自治体国際化協会（CLAIR）事務所

自治体国際化協会への訪問の目的は、日本の地方自治体における外国人の実態を知ることだった。というのも、この団体は、助成金供与によって各地方自治体の国際化を財政的にサポートする総務省関連の団体で、日本の外国人労働者を非常に近い位置から分析した意見を伺えると同時に、日本全国の事例を把握できると考えたからだ。最初に協会の方から活動内容について全般的な説明をしていただき、その後、質疑応答に移った。講義の内容は、1)日本の現状、2)自治体国際化協会の活動内容、3)今後の課題、の三点に主に集約され、質疑応答では、単年度会計や要請主義の問題点、支援と共生の違いについての意見をうかがうことができた。この訪問は、日本の行政システムの問題点や、対外国人政策の意義について根本から考え直す契機を与えてくれた。どんな質問にも丁寧に答えていただき、本当に充実した事前勉強会となった。

お話の中で印象的だったのは、国レベルでは多文化共生の理念などといった大きな話は進んでいるものの、具体的な政策は実現になかなか向かわず、その間に、外国人が多く住む地方自治体では、問題が深刻化しているということだ。日米学生会議には、（会議の内容からある種必然的に）国際交流に興味のある学生の参加者が多いわけだが、僕たち学生が想起する国際交流と、きれいごとでは片付けられない地方自治体が直面している外国人との問題はもちろん質的に異なる。学生の考える国際交流にはある種の甘さがあるのではないか、と非常に考えさせられたし、日本において圧倒的多数者である‘日本人’が少数者の現状を知ることは、1ヵ月後に外国で少数者として見られるかもしれないと考えると、非常に意義深かった。　（田中 豪）

CLAIR訪問でお世話になった方々と一緒に

4. 岩渕功一先生勉強会

日時：7月22日（火）

場所：早稲田大学早稲田キャンパス19号館

本会議へ出発間近、メディア・文化研究を専門とする岩渕功一教授（早稲田大学国際教養学部教授）のご厚意でマイノリティについての勉強会を開いていただいた。今回は早稲田大学国際教養学部棟の教室をお借りし、そこで1時間程のディスカッションを行った。マイノリティ分科会の私たちは、勉強会の事前準備として、マイノリティに関するエッセイを書き、岩渕教授の論文を含むマイノリティ関連の著書などを読み、勉強会の当日は岩渕教授が私たちの質問にただ答えてくれると考えていた。しかし、それは非常に安直で、主体性に欠ける期待をしていた。実際には、想像とは反して、私たちマイノリティ分科会のメンバーが岩渕教授に多くの質問をされ、無知を露呈すると同時に、洞察深い質問の応答を考える過程で、マイノリティに対する新しい視点や考え方を知ることが出来た。具体的には、マイノリティのメディアでの表象のされ方、在日コリアンの現状や日本の多文化共生への方向性について、また、日本と東アジア諸国との緊張感等を議論した。勉強会の結果、マイノリティに対し安易な気持ちのままで本会議に挑まずに済んだために、岩渕教授には非常に感謝している。この勉強会を大きなモチベーションの一つとし、マイノリティ分科会は本会議に挑んだ。　（神馬光慈）

5. 各自事前勉強のトピック

分科会をゴーディネートする際に、全般的なマイノリティに関して1ヵ月という限った時間に全部話し合うというのは無理と判断し、日米のマイノリティと絞っていた。9名の分科会メンバー各自ひとつのマイノリティについて勉強し、本会議が始まると同時にプレゼンテーションを行いながらQ&Aを行うことにした。

＊各マイノリティを調べる際に、共通の項目を設けた。（歴史・問題・現状・未来）

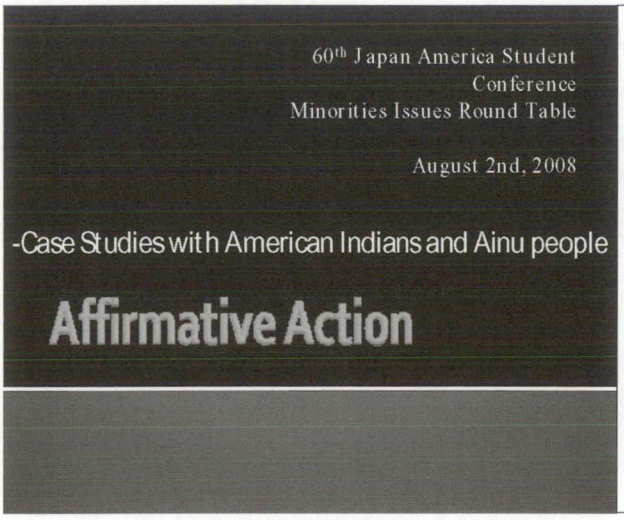
呉 宣咏：在日韓国人
小野 元：日系人
田中 豪：部落民
神馬光慈：沖縄人
安川瑛美：アイヌ族
Aya Nakanishi：Asian American
Charity Yoro：Exploring the Conflict of Japanese American Identity in Hawaii
Fausia Mahama：Sexual Minorities in America
Jieun Karen Jung：American Indians: The Product of America's Failed Cultural Assimilation

本会議活動

1．マイノリティフォーラム

日時：8月2日（土）
場所：Japanese American National Museum

マイノリティフォーラムの成功を祝いながら、私達は「M」inority分科会です！



マイノリティの受けてきた差別をなくし、マイノリティの社会的な地位を保護するために制定されたAffirmative Action。近年、マイノリティが増えてきて共生への道を模索している日本に比べ、比較的マイノリティとの共生が社会で進んでいるアメリカの政策をネイティブアメリカンを一つ例にとって調べてみる。そして、日本側ではアイヌ族を例としてあげられ、今までのアイヌ族に対する日本政府の政策を研究する。最後にはこの政策が策定されてから、約50年が経つ現在、この法案を維持するべきか否かについて考えてみる。

Assessment of Affirmative Action

- Not working well enough
  - "blood quantum law"
    ex.) ¼ theory, Ute tribe (5/8: the highest)
  - Problem in registration of federal recognition
  - Difficulty of integration
  - Community alienation and lack of emotional support

アメリカでのAffirmative Actionの現状を調べてみた結果、当初の意図とは違い、上手く機能していないことが分かった。居人種間の結婚が増え、ハーフやクォータで区別ができなくなり、正式な基準が曖昧になってきた。そのため、政府に正式に登録することができない場合があり、どこからどこまでマイノリティとして認めるのかが議論になってきた。更にマイノリティの権利を保護するための法案であるのにもかかわらず、多い精神的な問題へのケアが伴っていないため、主流社会への統合がより難しくなってきた。

Attempts of Rectification

- Hokkaido Former Aborigines Protection Act (1899)
- Law of Promotion of Ainu Culture (1997)
- UN Declaration on the Rights of Indigenous Peoples (2007)
- Formal Recognition by the Japanese Diet (2008)

- *What the government still needs to do?*
- Increase Awareness

2008年、公式にマイノリティとして認められたアイヌ族。その存在を保護しようとする動きは1899年から始まっていた。それから約100年が経過した1997年にはアイヌ族の文化を守るという保護法案が制定されたのである。しかし、アイヌ族は公式に認識されておらず、アイヌ族の声はなかなか日本社会に届いて来なかった。2007年、国連からの原住民として認められたアイヌ族は2008年には日本政府からその存在を公式に認めてもらったのである。これをきっかけとし、政府側はアイヌ族をはじめ、多くのマイノリティの存在自体を認定し、国民に知ってもらうように努力していく必要がある。

Conclusion

PROS	CONS
· Diversity	· Costs for society
· A "level playing field" · Equal opportunities	· Social stigma · Reverse discrimination
· Greater class mobility	· Income inequality

両国のマイノリティに対する政策を調べてみたのち、Affirmative Actionの存続を決めるまでの過程としてメリットとデメリットを考えてみた。メリットとしては、多様性を保ち、平等な社会を創ることができる。そのため、社会的地位の変更が流動的になる。デメリットとしては、やはり主流からのある程度の犠牲が求められ、逆差別が起こる可能性がある。主流と区別され、「違う存在」と認識されてしまい、新たな疎外感を感じてしまう危険性が見られる。

1. ファイナルフォーラム

日時：8月19日(火)

1ヵ月間、9名で議論してきたものを何枚かの紙にまとめる作業は簡単ではなかった。日本とアメリカ、両国に多くのマイノリティが存在しているということには9名のメンバー全員が同意していて、マイノリティと主流社会の共生をより良くするために大学生として私たちができることは何かを考えてきた。その正解のひとつはマイノリティ自体を良く「知る」こと。1ヵ月をかけ、両国の色々なマイノリティが直面している問題やその解決法について話し合ってきた。ファイナルフォーラムでは今まで勉強し、議論し、まとめてきたものを外側に発信できる機会だと思い、8枚のパンプレットを作成し、ファイナルフォーラム当日に配布したのである。

Minority Issues: From Social Discrimination to Social Contribution

Those not belonging to the majority often find themselves separated and marginalized from the rest of their community. Encounters with discrimination, stereotyping and pressures to assimilate occur on a daily basis…but what does it mean to be a minority?

The Minority Issues Roundtable investigated the life of ethnic minorities living in the U.S. and Japan and the roles they play in contemporary society. Minority groups were compared through an analysis of each culture's interaction with the community at large, examining the burdens encountered by minorities and identifying the ways they are influencing the majority culture.

Goals: In this pamphlet, we examine the situation of indigenous groups, immigrant populations and inter-minority concerns. Through an analysis of the current situation regarding institutional, societal, individual and internal issues, the Roundtable attempts to rectify social injustices and suggest future plans of action.

Institutional Issues

Any form of discrimination maintained by governmental organizations is classified as institutional discrimination. These concerns include complications in acquiring citizenship, inadequate health care, and public education. There is a constant struggle between assimilation and maintaining one's original language and culture.

Societal Issues

Societal issues are forms of discrimination that are socially controlled rather than institutionalized by the government. Stereotypes and social prejudices are included in this section.

Individual Issues

Individual issues often derive from societal issues such as negative stereotypes. This can lead to bullying or avoiding members of the immigrant groups. Moreover, simple cultural differences can lead to cultural conflicts.

Internal Conflicts

Minority groups encounter difficulties not only from their own surroundings, but also face internal hardships coming to terms with their own situation in society. Some suffer from inferiority complex, thus feeling inferior to the majority. They can also develop an identity crisis, where one lacks a concrete identity as a citizen or does not feel he or she belongs anywhere.

Indigenous peoples

Indigenous peoples are defined as an ethnic group that resided on the land before the settlers arrived.

Issues and Analysis

Land disputes: Settlers had acquired lands previously owned by the natives by force, unfair treaties, or simple annexations.

Ex.) The Treaty of Echota

Compensation: A monetary payment made by the government for the wrongful actions against the natives in the past.
Ex.) Lands of Ainu were taken away by the Japanese settlers and Ainu people demanded its return. In 2002, there was a court case where the Ainu asked the Japanese government for 12.3 million dollars in compensation.

Ethnocide: Refers to the destruction of a culture of a people. Natives tend to be the victim of ethnocide by the settlers by means of forced assimilation.

How to tackle the issues

Solution to land dispute does not equal giving back all the land; current owners will not feel obligated to give up their land just because it once belonged to the natives.
Compromise: Government to make reparation payments to natives.

Education is one of the most important factors that the government should consider.
1. Raising the rate of higher education attainment; indigenous populations tend to have the lowest rates.
Further action -> Provide resource centers for indigenous peoples, to provide moral and emotional support.
2. Governments Should educate the majority on indigenous history and culture to fight discrimination caused by ignorance
Further action -> set an annual holiday to commemorate the history of the indigenous peoples. During this holiday, citizens should engage in activities to increase awareness about indigenous peoples.
Ex.) Native American Heritage month

Inter-minority conflict

Race relations are often seen as a "Black and White issue," but in reality it is a concern that involves all racial groups. Furthermore, minorities can act as both perpetrators and victims of racial discrimination; race relations reinforce stereotypes and create tension.

Minority hierarchy

Historically, White Europeans have occupied the top of the social hierarchy; however, there seems to be some mobility among the minority groups. For this reason, minorities end up competing against one another and conflict arises for higher societal positions.

Model minority

Definition: Refers to a minority ethnic, racial, or religious group whose members achieve a higher degree of success than the population average. It is most commonly used to label one ethnic minority higher achieving than another ethnic minority. This success is typically measured in income, education, and related factors such as low crime rate and high family stability.

Coexistence

Minority groups have a tendency to build exclusive communities to protect themselves and maintain their culture. However, this self-isolation makes them less accessible and more distant from other communities. More interaction within minority groups would lead to greater cooperation to overcome racial segregation. Coalitions such as Pan-Asian groups and minority focus groups would help educate The Media should also minimize racial biases and instead focus on cross-racial issues.

Immigrant Groups

In our research, we have included the Zainichi-Koreans and African Americans as immigrant groups.

* Example of Zainichi Koreans (Resident Koreans

in Japan) facing "Institutional Issues."
Zainichi Koreans, as of August 19 2008, does not have the right to vote in neither Japan nor Korea.

* Example of African Americans facing "Societal Issues."
When African Americans apply for work, there still remains the chance of being rejected because of race. These types of issues may subsequently lead to gathering only within their own group in schools, work places, or neighborhoods.

* Example of Nikkei-Brazilians facing "Individual Issues."
Deriving from socially created stereotypes, Nikkei-Brazilian children at school are sometimes bullied due to the difference in culture, attitude, and skin color.

* Example of Nikkeijins facing "Internal Conflicts."
Nikkeijins may suffer from identity crisis because they do not feel the same way as full-Japanese people, nor are they fully integrated into the migrated nation, unlike the United States.

Suggestions & Solutions
* Assure certain social services to immigrants without host country's citizenship.
* Provide stable employment and working conditions for immigrant labor.
* Promote positive minority engagement and integration in local communities.

Suggestions & Solutions
Summary of solutions for minority issues in general.
Legislative solutions
* Promotion of independence and self-sustenance of minority peoples, such as Native Americans.
* Recognition and protection by legislature (top to bottom) in host country in order to treat people equally with full rights.
* Financial compensation and reconsideration of the subsidy system for indigenous people.
* Non-segregated communities based on race or ethnic groups. More inclusive city planning.

Societal solutions
* Cultural exchange (JASC) / Inter-racial marriage could encourage acceptance and tolerance towards a different people.
* Alliances between minority groups based on similar problems. (utility based coalition)
* Utilize the media to counter negative stereotypes rather than perpetuate negativity.
* Create a collective memory in public space so that people will not forget the past injustices suffered by minority groups.

Educational solutions
* More supportive language education programs with the aim to promote independence rather than assimilation. For example, Japanese as Second Language (JSL).
* Ethnic Schools should not be too segregated. Official Recognition and subsidies may help
* Teaching the significance of diversity and the injustice of discrimination in education may make a difference.

分科会コーディネータ総括

●呉 宣咏

第60回日米学生会議の実行委員に選ばれ、マイノリティと多文化社会分科会を第59回日米学生会議で同じ分科会に所属していた彩と一緒にリードしていくことになった瞬間から私の頭には「マイノリティ」という字が1秒も消されたことなく、全ての神経は周りからマイノリティに関する何かを読み取ろうとしていた。私は日本に住んでいる韓国人の留学生で

あり、彩はアメリカに住んでいるアジアンアメリカンである。私たちが自分たちのことを社会のマイノリティとして認識していたことからこの分科会は生まれたと言える。マイノリティとマジョリティの共生はマイノリティに対して最も良い解決案であるのか、共生という単語はマジョリティから作られたものでマジョリティへのマイノリティの吸収を示しているのではないのか、そもそも社会のマイノリティというのはマジョリティからみた観点からの一方的な表記ではないのか、そういったマイノリティの人達のアイデンティティは何で、そのアイデンティティはちゃんと守られるのか、「マイノリティ」から出てくる答えのない疑問は数え切れない。分科会にはいわゆるマイノリティが揃っていた。アフリカンアメリカン、アジアンアメリカン、ダブル、自分がマイノリティだと思っている日本在住の帰国子女、マイノリティに興味を持って関連した活動をしてきたジャパニーズ、アメリカのマイノリティを勉強している日本人、そしてマイノリティに優先順位を置いていなかった日本のマジョリティ。違う環境に置かれていた9名が語り合うだけでも、良い勉強になった。それぞれの異なるマイノリティ論の共有は時々違う方向を向けていたお互いの間を縮めてくれた。こういった議論を重ねていくうちに、共に生きるためにはお互いの存在をそのまま認め、知るという過程が重要だという簡単そうに見えるがなかなか気づけない事実が鮮明に見えてきたのである。つまり、マイノリティということは一人の人間に出会う時にその人を決めるラベルになるのではなく、一つの特徴にすぎない。それがマイノリティ分科会をコーディネートしながら学んだ一番の教訓である。

あや、お疲れ様。そして、ありがとう。ー宣咏よりー

第５章

参加者の声

「自分にちゃんと向き合えるようになるまで」

第60回日米学生会議実行委員
呉 宣咏

「なぜ韓国人なのに日米学生会議に参加しようと思ったの？」

第59回日米学生会議にデリゲートとして参加した時から実行委員として活動した第60回日米学生会議まで約2年の間、一番多い頻度で聞かれた質問である。聞かれた度に私は日本に勉強している韓国人として日本側とアメリカ側の間にたって客観的な立場から物を見てみたい、アメリカとの関係において韓国と日本との違いが知りたいと答えてきた。しかし、口からはそう答えていたが、心の中でははっきりとしてない何かをずっと探していた。なぜ、私はここにいるのか。意外と答えは簡単だった。それは、「日米学生会議」に参加したかったからだ。「日本人アメリカ人学生会議」ではない「日米の学生会議」に参加するのが目的であった。日本の大学に在学している私は韓国からみても留学生であり、日本からみても同じ大学の学生なのに留学生というタイトルが先に出てくる。私はそこで日本に来る時は全然予想もしていなかったアイデンティティの問題にぶつかってしまった。私はどこにも所属していない浮いている存在であるのか、他人に見られている自分は何だろう、作られている留学生のコミュニティから出てキャンパスの中に入ろうとする努力は結局無駄であるのかなど色々なところで悩んでいた自分だった。悩んでいながらも、留学生が主体になって活動するサークルにの一員として早稲田祭に参加していたある日、閉幕式でのことだった。閉幕式で早稲田祭実行委員長の熱いスピーチを聞いていた。実行委員長は動くスペースもなく集まっていたOBを含む早大生に向けて、となりの人と肩を組んで一緒に校歌を歌うことを注文していた。その言葉が終わっていないうちにみんな肩を組み始め、一回もあったことのない人と肩を組んで歌詞も覚えてない校歌をとても楽しく歌っていた自分に気づいた。そして、早稲田に対する自分の思いを熱く語っていた委員長の話にみんなと一緒に涙を流した。その瞬間、私はずっと悩んでいた問題の答えを見つけたような気がした。それは、自分は間違いなく早稲田大学の学生であり、ただ出身が韓国であるだけだということ。とても簡単に聞こえるかもしれないが、私はこれを心の底から認めて、吸い込むまで時間がかかった。自分が留学生であるということを言い訳にしないで、日本の大学に在学している「学生」としてできることに挑戦してみようと決心したのである。

それと同時に第59回日米学生会議に参加することになった。しかし、日本に生まれてない、日本で育ってないという人は私一人しかいない環境に気付き、心からちゃんと離して遠く飛ばしたと信じていたジレンマに入ってしまった。それは私を自分を出せない小心な子にしてしまい、無関心につながった。しかし、36人のアメリカ側参加者と一緒に過ごした1ヵ月の間、私はその空間では自分はもう留学生でも、韓国人でもない一人の人間、呉宣咏としていられる場所だということに気付いた。あとはそれが場所による問題ではなく、自分が作っていた心のフェンスだったということまで分かるようになった。私は呉宣咏という名前を持っている一人の人間として生まれ変わったのである。「自分」に気付き、「自分」として認識しはじめたらその先はアイスリンクの上をスムーズに滑るスケートみたいに進んでいた。「自分」だからこそできることは何があるのか。その自分だからこそできることというのは他人のために使えることなのか。そのクエスチョンマークについて考えていた時に私は次の実行委員の候補になっていた。一秒も悩むことなく、実行委員の選挙に出ていた私は本会議で自分に向き合えた経験を同じように次の参加者にも経験して欲しいという気持ちが強かった。参加者が悩む時にも、戸惑う時にも、本会議に絶対みんな一回は経験するんだろう自分の中での混乱とぶつかっている参加者の隣にいつでもいてあげる、ぶつかっていた問題を自分で解決した時に一緒に喜んであげるという準備はできていた。それが、その時私が考えていた自分だからこそできることであった。その想いがみんなに伝わったおかげなのか、次の実行委員に選ばれた私は誰よりも第60回会議の参加者に早く会いたがっていたため、選考という仕事を担当していた。250人の小論文を夜遅く

からデニーズで採点しながら誕生日を迎えたり、郵送の作業を夜遅くまでやっていて事務所に閉じこめられたり、仕事を期間内に終わらせるために入学以来始めて授業をサボったり、春休みずっと事務所通いで、立命館大学の寮に引きこもって終わらない議論をしたり、最後の週は体が耐えられないようになって日曜のエマージェンシールームでリンゲルの力を借りなければならないようになったり、アメリカ側の実行委員達と会議するために夜中まで起きてチャットしたり、毎週行われたスカイプミーティングを何回も忘れていて一番多く罰金を払ったり、毎月のオリセンでの合宿でパッキングは５分で終わらせるようになり、36人の日本側参加者の名前をちゃんと漢字まで覚えていてパソコンの自動変換プログラムには参加者の名前が一番上に出てきたり、アメリカから戻ってきた時には初めてのジャスク・シンドロームで3年という留学生活の中で一回もなかったホームシックになったりした２年間という時間は私にとっては宝物である。自分に向き合えた第59回に続き、第60回では沢山の人の中での「自分」に出会うことができた。リーダーという全てを把握してみんなを引っ張っていかなければならない位置で、責任というものを学んだし、忍耐というものを身につけることができた。自分はやはり人の中で一番の喜びを感じ、幸せになり、呼吸ができ、生きていると感じると再確認した。そして、次のステップに進める自信もついた。やる気も出た。次の会議がどういった会議になるのかということに興味を持つぐらいの余裕も出来た。つまり、２年という最大限に楽しんでいた日米学生会議の現役を卒業してこれからはOGとして見守りながら応援する準備ができたのである。

第60回日米学生会議実行委員選挙で私は「HERO」を歌っていた。

There's a hero
If you look inside your heart
You don't have to be afraid
Of what you are
there's an answer
If you reach into your soul
And the sorrow that you know
Will melt away

第59回会議で71名のHEROは私に本当のHEROは自分自身であり、それは自分にちゃんと向き合わないと見えてこないということを教えてくれた。私はそのHERO達の前でまた新しい71名のHEROに会いたいと言い、みんなが私に教えてくれたようにその71名にも自分の中に生きているHEROに出会うようにしてあげたいと約束していた。第60回日米学生会議に参加者はどう考えていたか分からないが、私は選挙で歌いきれなかった残りの歌を実行委員になった瞬間から本会議が終わって１ヵ月もたっている今まで歌い続けている。

And then a hero comes along
With the strength to carry on
And you cast your fears aside
And you know you can survive
So when you feel like hope is gone
Look inside you and be strong
And you'll finally see the truth
That a hero lies in you

It's a long road
When you face the world alone
No one reaches out a hand
For you to hold
You can find love
If you search within yourself
And the emptiness you felt
Will disappear

And then a hero comes along
With the strength to carry on
And you cast your fears aside
And you know you can survive
So when you feel like hope is gone
Look inside you and be strong
And you'll finally see the truth
That a hero lies in you

Lord knows
Dreams are hard to follow
But don't let anyone
Tear them away
Hold on
There will be tomorrow
In time
You'll find the way

And then a hero comes along
With the strength to carry on
And you cast your fears aside
And you know you can survive
So when you feel like hope is gone
Look inside you and be strong
And you'll finally see the truth
That hero lies in you

明石恵美子

8月が終わりまだ蒸し暑さが続く日本へ帰った後、元通りの忙しい生活が始まった。現実は突如として襲い掛かり、アメリカで過ごしたひと夏は瞬く間に「思い出」と化してしまった。移動に講演に勉強にと忙しい本会議だったにも関わらず、何故か「思い出」はみな牧歌的で、広大な草原で飴色の黄昏を見ているかのように甘く、そしてもの寂しい。日米学生会議を終えて早2ヶ月が経とうしている。少しずつ色褪せてゆく「思い出」に浸りながら、果たして私にとっての「日米学生会議」とは何であるのかを考えたいと思う。

現在の政界や経済界を牽引するそうそうたるメンバーであるOB・OGや、「日本代表として」、「ジャパデリとして」という言葉、そして初日の出のように輝かしい光に包まれたその「日米学生会議」という存在は、時に私にとって眩し過ぎることもあった。—私は「日米学生会議」で何を得たのか、何を提供できたのか、何を発信できたのか—　今考えると、以前の私は無意識的にこれらの考えに固執しすぎていたのかもしれない。もちろん、会議の中で一定の結論に至り、何らかの実りを得ることは大切である。しかし、今分かることは、会議は「きっかけ」や「はじまり」でしかないということだ。あるいは、人生という大鍋の中の味に影響を与える「香辛料」の一種でしかないのではないかと思う。そしてそれを料理するのはこれからの自分自身に他ならない。その経験はよく咀嚼し、吸収することで、養分となって体内をめぐりまた自分を強く成長させるのだろう。

「日米学生会議」というと、どうしても「本会議」が活動の中心になるかの様だ。だが私が多くを学んだのは、この本会議はさることながら、事前活動や一見本会議とは関係のない「遊びの時間」だった。事前活動は本会議を充実させ、自分自身の考えの幅を大きく広げた。単なる娯楽のようだった、アメリカでの観光や遊びの時間も、アメリカという国の文化・歴史、人々をより深く知り友情を深める格好の機会であった。私のとっての「日米学生会議」は、「日米学生会議のジャパデリ」となった瞬間から始まった一連の経験なのだ。事前活動、本会議での活動、それらを通じて知り合った人々はもちろんのこと、その経験や人脈から派生される事柄も全て含まれる。その意味で、「日米学生会議」は私の中で永遠に続き、これからの人生に多大な影響を及ぼすだろう。

実に気軽な気持ちで応募し幸運にも合格してしまった「日米学生会議」であった。しかし、この会議の経験から私は、何事にも代え難い多くの宝物を得、表す言葉も見つからないほど濃厚な経験をした。温かいOB・OGの方々、事前活動や会議を通じて出会った魅力的な人々との出会い、そして何よりも、会議のはじめから共に頑張ってきた、理解があり気さくで優秀で、一緒にいて心地の良い日米の友人たちこそが、私が「日米学生会議」で得た最高の宝である。自分の限界を悟り不甲斐なさを感じることもあり、時に羨望や焦燥感などという複雑な感情を抱いたこともある。しかし同時にこの経験は、時に私を激励し、鼓舞し、自信を持たせ、慰め、喜びを与える。私にとっての「日米学生会議」はその歴史と響きのようにスマートで輝かしいものばかりではない。しかし、全てが始まったあの初夏を思い出す時、その経験はいつも、優しい春の光を目いっぱい浴びて成長した新緑が芳しい若竹のような爽やかで健やかなも

のに感じられる。もちろん後悔するところもある。しかし、会議の終了や「ジャパデリ」としての活動は決して終わったわけではないのだ。この夏に経験したことや気づかされた自分の中の欠点や新しさをアウトプットするための時間、出会った人々をよりよく知るための時間、そして築いた絆をより温めるための時間は残りの人生の分だけある。この経験と友情は決して衰えることはなく、私の人生の「香辛料」として未来永劫に刺激と味わいを与え続けてくれると確信している。

李 鎭河

日米学生会議その1ヵ月、私たちは何を得て帰ってきたんだろう。

今まで持っていなかった多様な視覚を持った人に触れ、大地に立ち、対話、熱情、そして謙遜を学ぶことができた。ある集団をこれほど愛するようになったのはきっと初めてだろう。久しぶりに人生の先輩に出会い、参加者の一人一人と友情を築いていきながら、忙しい日常でだんだん薄れていっていた貴重な価値は感動と涙という形で再現された。

若さを満喫しながら一歩一歩を歴史に足跡を刻む器の大きい友人たちができたのが一番重要な収穫である。ビジネスであれ学問であれ、多く、そしてきれいに盛るためには大きい器が必要であろう。私は多くのものを入れることだけ考えていたのではないだろうか。

日本、そしてアジアをみるアメリカの視点、また東洋哲学に心酔して勉強している人々の動機や問題意識に関しても話す機会もあった。個人的には、日本と韓国を始め、アジアの様々な国で不合理だと思われているシステムの問題や社会問題(教育に力を入れすぎて教育に失敗している韓国の中高や、50%を下回る自由民主主義国家日本の選挙率などでみられる矛盾)は、長い歴史で保たれてきた東洋文化の命脈の上に西洋の形式が塗りつぶされため起こる内面と外面の葛藤から起因すると思っていた．そして結局この問題を解決するためには、内面も形式に従って変化させるしかないと思っていたのも事実である。

しかし、外にいる多くのアメリカ人はそういう問題はどの先進社会でも起きる成長痛であるし、逆に現在欧米が含んでいる問題の解決案をアジアで探している動きに関する話はとても新鮮であった．そして我々の社会が志向すべき方向性について考え直すきっかけになった。

環境フォーラムを準備しながら持続可能性(sustainable)の意味に関して再度考えるようになったのも収穫である。環境だけに限らず、社会に関しても、個々人であっても持続可能かという問題、つまり持続可能な幸福と意味を理解できるかという問題はみんなが自ら問いなおすべき問題であろう。国家の唯一の存在意味が領土拡張になった瞬間滅亡の道を歩み始めたローマ帝国のように、または眩しく強烈な力を発散しては失う超新星よりは、太陽のように長く暖かく光る社会を、皆が目指してほしい。25日間の合宿は言葉どおりにsustainableであった。

伊関之雄

第60回日米学生会議。59回会議とは本質的には同じものはずなのだが…やはり、会議の組織内での役割が違うと、必然ではあるが、違う体験をすることができた。実行委員としての立場、日米学生会議全体から見た本会議の外観、参加者への一言で、60回会議の私の「声」としたい。

実行委員とは、いわゆる情報端末である。参加者、講演者、周辺の声、他人の声などの様々な雑音を集積し、分析し、整理するのが役割と考える。主な雑音は、参加者や講演者からなのであるが。そして、毎晩行なう戦略会議にてそれらの貴重な情報を共有して、次の日の戦闘体制に活かす。面と向かって、話し合うこれらの情報から出るのは大概はアメリカ側からが多い。主催側のアメリカ側の実行委員の責任とリーダーシップは、非常に大きい。日本側もできるだけ、日々の企画面以外の参加者情報や講演者情報などの投げかけを通して貢献する形を形成する。しかし、これがまた、言語や議論の慣れなどの面から適応するのが難しい。

さらに、これまでの1年間はインターネットを通した文字媒体でのコミュニケーションのためにまだ

情報などは把握することができた。しかし、本会議からは議事録などもなく、毎日毎日の口から発信される無信号の情報なのである。

59回会議の報告書には、歴代の日米学生会議参加者と我々が未だに持っている、未だに共通した日米間のコミュニケーションの難しさに関して記した。今回、感じたのが、参加者のみならずたった8人の実行委員内でもそのような現象が生じてしまうことである。

基本的に、私の時間の多くは、これらのミスコミュニケーションを埋めるために費やされた。口数が少ない日本側の主張を出来る限り、率直に個人攻撃を仕掛けてアメリカ側に送り続けたのである。個人攻撃のため大抵これはうまくいく。同時に、アメリカ側が保有している文句やら問題意識も聞き取り、実行委員会内で原子力爆弾が投下されないように努めるのである。

去年から生じているアメリカからの伝染病であるサブプライム問題が日本や世界へ影響している。CDSやMBSといった債券などの証券が世界を短時間の間に伝染するも、「日米学生会議」という名前の伝染力ははるかに遅い。60年以上の歴史がある日米学生会議も、経済状況に影響され、様々な山や谷底を味わっている。ポートランドでは歴代日米学生会議参加者の方々の同窓会が開催された。60回を再考し、今後の発展を行なう起点がそろそろ来ていることが、現在の金融危機と共に日米学生会議に関係している方々のトップニュースとなっている。25回日米学生会議が大改革を行ない、会議全体の変更やコンセプトを変えたのと同様に、世の中が求める会議への需要(要求)と合わせた我々の会議も柔軟な姿勢での「再考」と「新たな潮流へ」移動していかなければならないのである。実行委員の一人として、このリユニオンの意義、価値観はここにあったのではないかと感じている。

最後に、60回会議に参加してくださった皆様に一言言いたいと思います。めでたく参加者となったみなさん、伊部事務局長が述べていたように、「参加できたのは運」かもしれない。だけど、その「運」で勝ち取った経験は非常に大きいと思う。これからもそれを活かしてほしい。そして、本会議中の色々な変更があっても辛抱強く、寛容な心を持っているみんなは必ずやビックになると感じている。

参加できなかった方々、現在様々な機会が世の中に存在している。それを本会議に手を出したように、なんでも手を出してほしい。

居鶴有未恵

1．参加動機「受容から発信へ」

私が日米学生会議に応募したのは、大学院での生活が毎日慌しく、ただ一方通行に過ぎ去っていくかのような焦りを感じていたからである。また、政治・行政を専門に学ぶ中で、日本の政策は他国(特にアメリカ)の例から選択的に決定する傾向があるように感じ、日本の政策や背景にある価値観、文化を発信する機会を得たいと考えていたことも動機となった。その根底には、グローバル化の現代においても日本固有の価値観や文化を見失いたくないという思いがあった。

私は、時間や情報に追われ、選択肢の中で決定する受身な自分を脱却し、自分の価値観で意見を主張し、相手と刺激し合える主体的な機会を求めていた。そして将来を見据え、自分や自国をきちんと理解し相手と向き合える軸のある人になり、日本を発信したいと考えていた。

2．事前活動と本会議「Face to faceの大切さ」

約3ヵ月間事前活動を行い、分科会では議論の土台形成をし、駐日米軍基地訪問や留学生とのディスカッションなどを通じて改めて自国を知り、また日米の違いを感じると共に、自分の先入観にも気付くことができた。

そして心の準備は十分に、本会議を迎えた。

分科会は「伝統と現代社会」に所属した。日本のみのテーマであれば江戸時代以降生まれた伝統文化等の変遷といった内容が浮かぶが、アメリカの学生からは議論の最初で「アメリカは日本に比べ歴史が浅く、伝統と現代といっても世代間のジェネレーションギャップでしかイメージできない。」との意見があげられ、事前の想定は通用しなくなった。しかし、これこそ直接意見を交わすことの醍醐味なのだとわ

くわくし、お互いの共通認識を築くところから話し合いは始まった。

生活を共にする中でも、生活様式、考え方、スピーチの仕方などに日米の学生間で差異が見られ、時には反発を感じながらも全て興味深く、互いに指摘しあって意識する中で学びあうことができた。むやみに批判や拒絶するのではなく、自分のスタイルを説明した上で相手を受け入れるというやり取りは、コミュニケーションの中の当然の手法であるようで、相手を直接目の前にしないとできないものである。

次第に打ち解けてから最も盛り上がり、国の差を感じなかったテーマは、「恋愛」についてであった。「恋愛」がテーマとなると、普段英語に苦手意識のあった私もすらすらと言葉が出てきたのが不思議である。環境や文化といった国家間で話題になる種のテーマ以外にも、価値観を共有できる興味深い話は毎日たくさんあふれ出てきた。

3．まとめ「相互理解」

参加後に、このありふれた表現が実感として得られるようになったことが大きな成果であった。相互理解は実際に顔を合わせることで生まれるものである。科学が進化し人工的な社会で生活する私たちだからこそ、一人一人が直接向き合って心を通わすことが重要だと体感した。

参加前には、不安やプレッシャーを感じ、またたった1ヵ月間生活を共にするだけでは密な関係は築けないだろうという勝手な思いもあり構えていた私も、気が付けば、メンバーに強い絆を感じ、毎日話したい話題があふれ出てきて寝る間も惜しむ程に会議に夢中になっていた。この感覚は、今まで様々な海外プログラムに参加しても味わえなかったものである。日米学生会議に開催当初から現在まで続いている伝統があり、参加者に日米の架け橋となる責任や自覚があるから連帯感が生まれるのであり、本音で意見をぶつけあう中で壁にぶつかったり互いに対立する人間臭い場面があるからこそ真の友情が育まれるのだと思う。分科会やフォーラムで熱い議論に刺激を受けたことだけではなく、会話が弾んで明け方まで話し込んだことなどは、人は国や年齢に関係なく通じ合えることを実感できる貴重な経験となった。グローバル化という時代の利点を活かして、文化や言葉の壁を越えて個人間から交流を図ることこそ、社会を動かす原動力になると確信した。

以下に、印象的な一文を引用したい。

「現在の世界の情勢は混沌とした様相を呈している。…国内に目を向けても不安と焦燥という形容が相応しい社会になりつつある今日、これら現象は人間が巡ってきた必然の結果であり、私たち人間が先ず変わらなければ社会（世界）は変わらないことを示している兆しである。」（「日米学生会議70周年記念に寄せて」、第1回参加者中山公威氏）

伊藤昂介

第60回日米学生会議お疲れ様でした。当初、参加を決めた時は正直不安もありました。というのも、1ヵ月間自分の「日常」からかけ離れて、本当に大丈夫なのか。有意義に過ごせるのか。そんな不安が頭の片隅に常にあったからです。しかしそれも杞憂に過ぎませんでした。それもすべては国際的な視野を持った、尊敬できる『仲間』に出会えたためです。そんなことを思えるほど、分科会、会議行事、そして何より日常から様々な刺激をもらえました。

私が所属していたCSR（企業の社会的責任）の分科会を通して、本当に尊敬できる親友に出会い、様々な関心事に関して議論ができたのは、私の大学生活における最も貴重な経験の一つだと思います。そしてまた、CSR（企業の社会的責任）というまだまだ新しいコンセプトを様々な見識者から学び、優秀な仲間と議論できたのも、これからビジネスパーソンとして社会に出て働く上で、非常に役立つものだと思います。また、分科会の議論を通して、英語を話す時の自分と、日本語の時の自分、まじめな時の自分、ふざけている時の自分、というように、様々な自分のアイデンティティを他者の反応や言動を見て再認識できたと思います。しかしそんな素晴らしいことだらけでもなかったです。非常にモチベーションも高い人材が集まったというのに、結局『社会に対してインパクトを与える』どころか、それ以前の『行動する』というレベルにすら到達できなかったからです。そういう意味では会議中、会議直後は後悔

の念がありました。今でもあのグループで何かやったら楽しく真剣にできたなと心残りはあります。しかしそれはそれでも、CSRの分科会に参加できて本当に良かったと思える程、素晴らしい出会いができて喜ばしく思います。

そしてまたJASCという日常においても、様々な思い出が残っています。日米学生会議ということだけあって、公用語も英語と日本語(ちょっとした韓国語)で言語が入り混じるという非日常的な行為が日常でした。日本側参加者にとってはアメリカが、アメリカ側参加者にとっては日本が異文化のはずですが、私にはJASCという異質な空間が日常となることで、その文化間の壁を乗り越える足場となっていた気がします。またともに、ある課題について議論することによって、様々な視点を得られ、世界に対しての視野を広げることもできたなと思っています。

そんな私の第60回日米学生会議は8月21日をもって終わりました。ですが、“Once a JASCer, always a JASCer”という様に、JASCerとしてのアイデンティティは永遠に残ります。そしてJASCで得たこの絆はビジネス、政治、アカデミアと各々の道に飛び出ても、途切れるものではないと思います。また、各々の道が近い将来または遠い未来、会議中に語りあった夢に向けて走り出すのを切に願っています。そしてそれが国境を越えて交差し、パートナーとして再会できたら尚喜ばしいことだと思います。それでは、第61回日米学生会議の委員や参加者、そして将来のJASCerの皆さま、JASCでかけがえのないひと夏を手に入れてください。

今矢涼子

ボストン最終日。各々が最後のJASCメールとパッキングに追われる中、私は、自分が翌日には飛行機で帰国するのだという現実をうまく受け止められずにいた。数ヵ月前に出会ったばかりであるジャパデリや、1ヵ月前に初めて会ったアメデリとの毎日の生活。会議の最初は、英語のコミュニケーションに悩み、日本側とアメリカ側に別れてしまっていたこともあった。しかし、いつしか言葉の壁やアイデンティティーを超え、お互いの価値観や思考をぶつけあい、時には熱く議論し、共に笑い、泣き、はしゃぎ、尊重し、刺激し合う大切な仲間となっていた。寮のラウンジでみんなが深夜まで戯れ話し、笑い声あふれる光景も、毎晩分科会の準備のために行われた大好きな分科会メンバーとの集まりも、もう、ない。そして何より、帰国すれば、今のこの楽しい空間も、私の目の前にある彼らの温かい笑顔も、いつか思い出となってしまう。そう思うと、寂しさと、このような素晴らしい空間にいれることを嬉しく思う気持ちが同時に込み上げ、涙として私の頬をつたっていった。

10年前に住んでいたポートランドから始まった本会議は、その当時の私が知っていたアメリカとは違ったアメリカを見せてくれた。幼い11歳の私に染み付き、今の私を形成している本質は、ここで経験したものによって培われた。そして10年という歳月が過ぎ、22歳を迎える私に、新たな「自分」を作り出す種が芽生えたのもこの場所となった。就職活動を終えた大学4年生として、自分自身、自分の将来、今日の社会についてそれなりに見つめてきたつもりで挑んだ日米学生会議。結果として、この会議で再度自分の弱さと甘さを認めざるを得ない状況に直面し、自分の視野の狭さを痛感することとなった。しかし、この痛みは、自分の目の前がパッと広く開かれるような、爽快な痛みであった。「人間は壁や辛さを乗り越えたときに、新たな皮が剥けて一歩進める」という言葉を大切にしてきたが、学生最後の夏に、まさかこんなにも大きな皮が剥がれるとは思ってもいなかった。そしてこの剥がれた後のじんとする痛みも、その後に強く厚くなる皮膚も、その剥けた跡も、「日米学生会議」として、私の中に大きく、深く、温かく刻まれることとなった。

移民問題、環境問題、エネルギー問題、そして戦争と平和と安全保障問題。今日の日米両国が、そして、もはや日米だけでなく世界中の国々が直面している、重大かつ深刻な問題である。このことから目を反らして今後の国際社会は成り立ち得ない。そして世界の一員である以上、これらの本当の現状を知らずして、あるいは、放置して生きてはいけない。

本会議中にこの問題意識が芽生え、それぞれの問題につき自分なりの考えが生まれただけでなく、自分は来年から、社会人としてその責任を担うのだということを強く認識した。また、私が所属した「法と社会」の分科会では、法と社会という切り口から社会的問題を見つめ、解決案を検討した。たとえ学生であっても、現状への問題意識、意見や解決案を提示し、これらを発信することを通じて、社会的意識を惹起することができれば、本会議および分科会の意義は、この上なく有意義であったといえるだろう。

日米学生会議の本会議はたったの1ヵ月であった。私の人生はそれの何倍とある。この1ヵ月で見て、触れて、聞いて、味わって、感じたもの、習得したものを通じて、これからの私は自分の人生の舵をどのようにきるか。これは全て自分次第であり、私はこの貴重な経験を糧として、自分という人間をもっと磨いていきたい。

JASC中に出会った大切な仲間、彼らと過ごした最高の思い出を、写真と自分の記憶にしっかり収めつつ、学生最後の夏にこのような機会が与えられたことを本当に嬉しく思う。こんなにも知的好奇心をくすぐられ、興奮し、本気になった熱い夏を、どう頑張っても忘れることはできないだろう。

大井あゆみ

私は「人」が好きだ。面白い人に出会うこと、その人たちから刺激を受けたり、何かを返したりすることが人生の意味だと思う。JASCはまさにそんな場所だった。

JASCには二つの目的があると思う。

一点目に、議論やフォーラムなどのイベントを通して、世界の現状や様々な問題について、視野を広げ、自分なりの理解を深めること。分科会の議論は、いつも多様な意見が飛び交い、刺激的だった。様々なフォーラムで、壇上に上がって発表する参加者たちを見ているのは、頼もしく、誇らしかった。領事館で聞いた、日本の移民受け入れに関するスピーチも印象に残っている。考えさせられるきっかけが、そこら中に転がっていた。

二点目に、国境を越えて信頼関係を築き、お互いを理解し、ひいては世界の平和に貢献すること。これは、JASC設立当初からの理念でもある。結局のところ、有名な教授のスピーチよりも、移動中のバスの中で参加者と交わした会話の方が、記憶に残っている。世界中の人が友達になれば、世の中の多くの問題は解決すると思う。そんな考え方は楽観的すぎるのだろうか。

当初は、限られた時間の中で、この二つの目標をバランスすることが難しく感じられた。学術的な鍛錬だけを追及するのは、もったいない。ただ楽しむだけでも、もったいない。しかし、徐々に、この二つの目標は対立するのではなく、車輪の両輪であると思うようになってきた。議論を通して、お互いの考えをより理解し、その分野の新たな視点を得ることが出来る。逆に、絆が深まっていく中で、今まで自分は関心の無かった分野にも興味が広がる。

例えば、モンタナでは戦争と平和について考える日があった。戦争で亡くなった方を追悼する公園やJeannette Rankin Peace Centerを訪問した後、軍事博物館を見ていたときのこと。アメリカ側の参加者2人と、ふとしたタイミングで憲法9条について話が及んだ。日系2世でもあるNealは、日本の憲法9条は、ダブルスタンダードなのではないかという。つまり、都合のいいときだけ、憲法9条を持ち出して、負担を回避しようとしているのではないかと。Rebeccaは、憲法はアメリカが作ったものなのに、今では日本固有の考えとして根付いているように見えるのが不思議だという。私は、日本なりのpeace keepingの方法があるのではないかという考えを、一生懸命説明することになった。結局30分ぐらい、その話題は続いたように思う。もっと説得力を持って自分の考えを伝えられるようになりたいというモチベーションがふつふつと沸いてきた。日本側・アメリカ側というのではなく、信頼する一個人として会話ができることは、面白い。

その後、War and Peace Forumというフォーラムがあった。退役軍人の方、平和運動家、歴史学者と私たち学生で、輪になって討論をする。様々な立場の人が、真摯に思うことを共有できる場は、貴重な機会であった。ここでも、同じように、「いかに

平和を構築するのか」が問題になった。私は、武力抜きの日本固有の平和構築のやり方を擁護したい一方で、現実論として、実際はアメリカの武力に頼っている側面があることに関して、自分の葛藤を吐露した。武力抜きで平和を構築できるというのは、理想論すぎるが、武力ありきの平和構築が様々な問題を引き起こすのも間違いない。「平和のありがたさを一番身にしみてわかっているのは、兵士なのだ」という退役軍人のせりふが印象に残った。

日米学生会議で私がどう変わったのかと問われると、一言で答えるのは難しい。私の将来の進路や性格を大きく変える出来事があったわけではない。でも、一人一人との出会いが私に与えた影響は、決して小さくない。

JASCが終わり、1ヵ月。過去をただ懐かしむだけでなく、自分がその経験をどう活かせるかが問われている。

小野 元

ほんのちょっとした仕草がなぜか鮮やかにいくつも脳裏に焼き付いている。今はまだその種類が豊富で、思い出したくない失敗や苦笑いでさえ、ランダムにひょいと浮かんできては、いつでも脳内スライドショーの再生が始まる。これらの具体的な場面が僕のJASCを彩っていて、それをここに書き出さないのは字数制限のこともあるけれど、それを自分の中で大切にしたいからでもある。

帰国後、友達がアップしてくれた写真を見ると、JASC期間中、僕は作り笑いでなく、自分でもちょっと驚くほどよく笑っている。こんなにも笑っていられたのは、多くの参加者が自身を外に開いていたからだと思う。新しい人、場所、考えすべてに柔軟。参加者のその姿勢が作用しあって醸し出される雰囲気は、なんともいえず居心地がよかった。その雰囲気の中で、自分ができないと勝手に決め付けていたことに、自然に、ときに強引に巻き込まれていた。話していると、はっとさせられる切り返しで、常に睡眠不足気味だった僕の目を覚ましてくれた。

寝る時間を惜しんでも、もっと考えを聞いていたいと思うような人達。参加者以外にも、例えばマイノリティフォーラムで、自分達が調べて発表したことへのフィードバックを20分間もしてくれたような教授や、レセプションで同じテーブルにいた一人一人に対して、JASCへの参加理由にじっくり耳を傾けコメントしてくれるような柔和な方。彼らの存在は、その人たちに自分の意見を聞かれ、うまく言葉にできなかった時のもどかしさを際立たせる。

僕にとって英語は言葉を滞らせる原因の一つだった。これから、単純に練習が必要だ。それに加え、僕は自分のことを言葉にするのにどこか抵抗があり、いつの間にか黙っていることに慣れていた。気がつくと、適当な言葉をなくしかけていた。伝えたい人達を目の前にして、慌てて考えてみても、もやもやした混沌からまとまりに持っていく段階で、言葉は逃げていく。僕自身の表現は途切れたままだ。結局、どこかで読んだ客観的に見える意見を言ってみたり、細かいところを妙に広げてみる。あるいは、あいまいにぼかして、立場を鮮明にすることから降りる。

僕のような自分を相手にさらさない「聞き役」は、聞き役ではないのではないか。双方向でなければ、コミュニケーションは成り立たない。アイデアがまとまらないままでも全体に投げ出して、その後の議論の展開を楽しむのがアメリカのスタイルで、一方、謙遜と自重が日本文化なのだから仕方ないといったこれまたありきたりの結論に逃げるのは、今の僕は納得できない。

ふと、ここまで書いてきて立ち止まってしまう。自分の経験を卑下することは、傲慢と同じ平面のベクトルに過ぎない。自分の課題を見つけ出し、原因をひとつひとつ潰していくやり方は、合理的で着実だが、客観的に自分の課題を見つけたふりをしても、仕方がない。現在の僕に見えているのは、この夏休みの体験のほんの一部。わからないことはそのままで受け止めて、ほんのちょっとしたみんなの仕草のように、脳裏に焼き付けておこう。いつか分からないことが少しでもほぐれてきたら、脳内スライドショーに別の意味が加わるかもしれない。

金光慶紘

昨年12月、某学生シンポジウムに参加し、“ミステリアス”な女の子、ナオ(EC)に会う。彼女から、日米学生会議の存在を知る。このナオとの出会いがこの夏を、いや恐らくこれからの人生を変えていくことなんてまだ俺は知らなかった。

5月、2泊3日の春合宿。予想以上のキャラ多数。特に、OBの前での自己紹介で、ラップを披露したコウジは神だった。初日の宿泊は伝説の〇〇〇にて。男10人部屋で初日から早くも「恋愛保障理事会(略：恋保理)」第1回会合を行い、事務総長に就任。そんなバカなことをやっている時間もあれば、真剣な議論の時間は人が変わったように、スイッチを切り替えるのがJASCer。分科会の議論はとても白熱した。最終日、初めてのリフレクションでは、早くも数人泣いてしまっていて、俺ももらい泣きするとこだった。悲しいからでなく、こんなに多くの、こんなにも尊敬出来る仲間を一度に得たことが、本当にうれしかったから。

所属する環境RTは事前活動を頻繁に行った。東京大学、越智衆議院議員、関西電力、電通、小池百合子元環境相、日本テレビを訪問させていただいた。RT合宿も２度行った。＠マサト宅＋＠ナオ宅。マサト宅では孔子、ナオ宅では毛むくじゃらの化け物=アンディーに遭遇。防衛大訪問、米軍横須賀基地訪問等、RT以外の事前活動も非常に有意義だった。

ポートランド、JASC発祥の地、JASCの歴史を振り返る。何十年も前に、自分達と同年代の先駆者たちは、ここで何を思い、感じたのだろう。ここでの思い出は、スキット交換。日米両方完成度が高かったけど、やはりMVPはジンハ。サイトリフレクションはジャパデリ、アメデリ別々でジャパデリのリフレクは3時間くらいに及んだ。英語のこと、アメデリとジャパデリとの意識の違いなんかが主な議題だった。結局、リフレクし足りなくて、その後他のジャパデリと数人で遅くまでリフレクの続きをやった。ジャパデリの意識の高さにアメデリは応えてくれるのだろうかという不安がまだあった。

LA。3日は俺の誕生日。みんな本当に祝ってくれてありがとう！誕生日、常に夏休みだから、こんな大人数に祝ってもらったのは人生初。毎日のようにスーツを着て沢山のイベントを行ったが、最も思い出深いのはそのどれでもなく、アメデリのKarenとジャパデリとアメデリ間の壁について深く議論したこと。そこから彼女ととても親しくなり、アメリカ側の一番の親友になった。

モンタナ。この頃はもうJASCの終わりが見えてくる。毎日をこなすのが、精一杯ながらも、常に終わりを考えてしまう日々。ここでの思い出は、環境フォーラム。パネルディスカッションに参加し、ノーベル賞受賞者らと並んで議論したことは、本当に良い経験になった。フォーラム後のレセプションディナー会場の隅で、Karenに「Yoshiと一緒にAECをやりたい！二人でJASCを盛り上げていこう！」って手を強く握られて、口説かれたことが忘れられない。周りで見てた人は、俺が告白されてるのかと勘違いしたみたいだけど(笑)

ボストン。予想外の事態でアメデリの到着が遅れ、ジャパデリだけで２日間を過ごし、感じたことは、アメデリがいてこそJASCだってこと。彼らは、もう欠くことの出来ない存在になっていた。ファイナルフォーラムの準備に追われて、みんなと話す機会もどんどん減っていって、何だか寂しかった。最後の別れのときに、家族と別れるのと、同じ気持ち。そう、俺みんなのことデッカイ家族みたいに感じてたんだ。

今、カナダで留学中の自分は、アメデリにもジャパデリにも会う機会が滅多にない。ここで、忙しい毎日を送りつつも、いつも思い出すのは、みんなの笑い声、笑顔、そしてナオのENVIRONMENT ～！朝起きると、誰かが「Yoshi!」って声かけてくれるような気がして、でも誰もいなくて。自分がJASCで得た一番大切なモノ、それはアカデミックなものや経験ではなく、やはり温かい仲間、JASCに参加しなければ、生涯かけても得ることの出来なかっただろう仲間。そんな彼らとこれからも、共に歩んでいきたい。そして、いつか皆で、日米を、世界を変えてみたい。

後藤昌也

まず始めにJASCに感謝したい。JASCのおかげで、日本にいては叶わないかけがえのない経験ができた。単にアメリカの文化を経験するだけでなく、日米で心腹の友ができ、国際的な視野と行動力を身につけることができた。

JASCには良い点が数多くあると思うが、中でも積極的に経験をすることを歓迎する空気があることが特に素晴らしいと私は思う。その空気の源は、学生が主導で運営しているということと、参加者全体で私たちは学生で勉強をする身なのだから積極的に行動すべきだという共通認識から生まれていた。そして、その空気の中で多くの参加者が積極的に行動し、質問を投げかけ、リーダーシップをとっていた。JASCにこのような自主性を育む環境があることが素晴らしいと思う。そして、この環境が将来リーダーシップを持って世界を変えていく人を生んでいくのだと思う。これから先、国際的なリーダーの輩出が求められている日本のためにも、JASCには末長く続いてほしいと思う。

準備段階について述べると、アメリカに行く前にできる限り準備をしようとモチベーションが高まり、新たに行動がしたことは有意義であったと思う。私は、もっとイベントに参加できたら良かったし、時間が許せば自ら企画を立てられれば良かったとも思う。JASCの準備期間は適度にあり、それが確かに本会議に繋がっていた。

ポートランドサイトでは、ディスカッションリーダーという初めての経験をした。パートナーが期待を良い意味で裏切ってくれた。アメリカ人はディスカッションに慣れているようで、随分助けてもらったことを覚えている。このサイトで議論に対して自信を持つことができた。また進行役をすると視野が広がるので、ディスカッションリーダーの経験はできれば皆がしたほうが良いと感じている。

ロサンゼルスサイトでは、JASC全体を通して言えたことだが、生活環境が素晴らしかった。食住が充実することで、毎日のストレスを解消することができ、モチベーションが高く保たれた。影ながらJASCの活動を支えている部分だと思う。今後も、この環境を保っていってほしい。また、分科会では、このころから議論に慣れてきた。ただ、議論の大枠は理解したが、細かいところをなかなか理解するのは難しさを感じていた。細かいところで議論を止めて質問するのは難しく、議論の時間に余裕がさほどないと使いづらかった。やはり時間は多ければ多いほど良いと感じる。

モンタナサイトでは、アメリカを肌で感じ取ることができた。アメリカの広さに驚くとともに、ホームステイをすることで、アメリカの人の生活を垣間見ることができた。アメリカの文化を体感するという点で充実したサイトであった。ホームステイは今後もぜひ続けてもらいたいと思う。また、ここでは、メンバーと話をする時間が多かったこともあり、踏み込んだ話をすることができて良かった。例えば、他の分科会の話を聞いて、お互いに意見を交換することができた。

ボストンサイトは、第60回JASCの終わりを告げる場所であり、感慨深いサイトであった。このサイトで良かったのは、個人的なことだが、ハーバード大学に行くことができ、大学院に行くモチベーションが上がったことだ。大学院生との交流もあり、モチベーションが上がるとともに、将来のキャリアプランに一石を投じてくれた。そしてファイナルフォーラムでは、あのようなアカデミックな場所を使わせていただいたことで、モチベーションが高まり充実した発表をすることができたと思う。

最後に、JASCを振り返って、実行委員やOB、大学、多くのスポンサーの協力あってのJASCであることを実感しています。多くの貴重な経験をさせていただいたこと感謝しています。ありがとうございました。

坂本朋美

帰国後2週間以上が経過し、すっかり日常を取り戻した今、改めて私にとってJASCとは何だったのかを考えている。間違いなく、5月の春合宿から本会議を終えるまでの約4ヵ月間はこれまでの私の人生において最も濃密で、そして特異な日々であったと言える。こんなにも環境、政治、人権などあらゆ

る問題について毎日考え、企業や政府機関など普段ならまず訪れることのない場所を訪問し、そして寝るとき以外はほぼ常に誰かが傍らにいるなどという経験はこれまでも、そしてこれからも二度とないであろう。

初めて日本側参加者が顔を合わせた春合宿から、私にとってJASCは特別な存在になった。これまで属したいかなる集団とも異なる摩訶不思議な“空間”、JASC。個性的過ぎるほどに個性的で、確固たる自分の主張を持ち、それでいて他者の意見を貪欲に吸収する寛容さも持つメンバー達。専攻する学問分野もこれまで育ってきた環境も、何よりものの考え方もまるで違うメンバーとの交流は、新鮮な驚きに満ちていた。またインターンなどを通じて作り上げた人脈やそれを活かす行動力など、他のメンバーが持つ私にはない能力に感嘆させられると同時に己の無能さ、至らなさを痛感する日々でもあった。

このように、日本側参加者35名との出会いで既にカルチャーショックにも似た衝撃を受けてしまった私にとって、アメリカ側参加者26名を加えての本会議がどれほど刺激的であったかは想像がつくであろう。フォーラムや分科会では世界的な課題について真剣に議論し、スペシャルトピックでは食文化や飲酒、さらには恋愛などについて白熱した意見交換を展開し、フリータイムでは家族や学校など様々なことについてアメリカの学生と話した。銃規制や環境問題に関する議論では、日米の学生の間に如何ともし難い根本的な意識の違いを感じた。その違いは時に議論を膠着させることもあった。しかしこうした議論の御蔭で、私は日本で生まれ育ってきた中で当たり前に思ってきたことを初めて意識し、アメリカ側学生との違いを生み出した日本の文化、慣習、社会について改めて考えることが出来た。「他国の文化を知ることは自国の文化を知ること」とはありきたりな言葉のようにも思えるが、アメリカで過ごした1ヵ月はまさにそのことを実感させるものであった。

JASCを振り返って一つ大きな後悔がある。それは英語の壁だ。ディスカッションでもフリータイムでも、日本語でなら発言していたであろう時に、適切な英語が浮かばなかったために言葉を飲み込んだことが何度あったであろうか。これは私の英語力の不足だけでなく、意欲の不足だったのだと今になって思う。「変な英語を使いたくない」などというつまらないプライドなど捨ててもっと思いを口にすればよかった。伝えようとする気持ちを強く持っていれば、何度言い間違えても，多少変な単語を使っても、皆きっと耳を傾けてくれることはわかっていたのに。1ヵ月ではこの壁を乗り越えることが出来なかった。

最後に、丸1年を費やして60th JASCを作り上げてくれた実行委員、本当にご苦労様でした。学生主体でここまでやれるものなのかと、学生の可能性に対する認識を改めさせられました。そして、多忙なところ事前活動や本会議中に多大なご協力をいただいた皆様、快く送り出してくれた両親、JASCという素晴らしい経験を私に与えて下さった全ての方々に、この場を借りて心より御礼申し上げます。

新宮清香

日米学生会議、それは私にとって自分を見つめ直す場であり、かけがえのない仲間との出会いの場であり、社会とのつながりを強く意識した場であった。

私は普段なかなか自分を見つめ直す暇がなかった。しかし今回、日米学生会議という機会を通して、日本語で自分の意志を何の苦もなく伝えられる日常から、英語という制約された状況に自分の身を置くこととなった。また、様々なフォーラム・フィールドワークや内容の濃いディスカッションなどの非日常の世界に向き合った。これらの状況によって、私は生身の自分と向き合うこととなったのだ。日本語のように無意識に扱えない英語で自分の意見や思いを伝えるために、自分の内面を整理し、自分自身が何を考え、何を本当に伝えたいのか、真剣に考えた。さらにたくさんの刺激的な人々に出会うことで、他者を通して自分と向き合うこともできた。様々な得意分野を持つ人々を見て、自分は何によってこの会議に貢献できるかを真剣に考えたのだ。そこで発見したのが、私は日本人であり、日本のすばらしさを紹介することが好きなのだということであった。そ

して何より、どんなにつたない英語でも、まず伝えようとすることが不可欠であると気付いたのである。

さらに、夏の会議で共にすごした仲間が私に様々なことを教えてくれた。英語に対して自身が持てず、挑戦することから逃げていた私に最初に勇気を与えてくれたのは、Special Topicを一緒にやろうと誘ってくれたアメリカ側参加者であった。その準備のときに、私の拙い英語を辛抱強く聞いてくれたことから、私はとにかく伝えようとすることが重要なのだと思った。また日本側参加者の中からも、英語を上達させるために日本人同士の日常会話でも英語で話しかけてくる人や、フォーラムで積極的に発言している人に刺激されて、私も頑張ろうと励まされたのである。そうして、私の日米学生会議における常に新しいことや英語に挑戦する日々が始まった。この挑戦し続ける姿勢を維持することができたのも、仲間のおかげであった。私がフォーラムで質問すれば、今日の質問良かったよ、とすぐに反応が返ってくるし、夜のフリータイムに仲間と政治や社会問題について議論するときも、お互い真剣に自分の意見を主張し、相手の意見を聞き合った。私が何かに挑戦する時、その何倍もの見返りが仲間から返ってきた。挑戦すればする程、自分が変わっていく喜び、仲間と繋がっていける喜び、全てが良いサイクルとなっていったのである。

さらに、事前準備、会議中のフィールドワークやホームステイなどを通して、社会に対する責任を日米学生会議が教えてくれた。日米学生会議初のアメリカ開催地となったポートランドで、会議への熱い思いを語ってくださったアルムナイの方々。ロサンゼルスでの大使館や企業訪問で出会い、お話ししてくださった人々。ホームステイで私たちにモンタナの暖かさを教えてくださった滞在先の家族。そして日本について、アカデミックであると同時にフレンドリーに私たちと議論してくださったハーヴァードの教授。また姿は見えないけれど、今会議に投資し、私たちに期待を持ってくださっている多くの人々。たくさんの人々に支えられて私はこのすばらしい夏を経験できたのだと気付いたのだ。

このような人々に感謝するためにも、私は今会議で学んだことを継続していきたい。それは、自分を見つめ直すことを忘れず、再発見した自分の良さを活かし、挑戦し続けることである。さらに、ここで出会った仲間との絆を大切にして、これからも絆を深めていきたい。そして将来、仲間とともに日米学生会議で学んだことを活かして、社会に向けて新しいことに挑戦出来たなら、それが社会に対して示すことの出来る最高の感謝の形となろう。

神馬光滋

会議終了後、日米学生会議の感想を聞かれるとどういうわけか「尊敬できる最高の友人が出来て、やつらに触発された」、くらいしか言うことがない。本会議中、多様な背景を持つジャスカーたちと話しているだけで刺激的であったし、私にとっては新鮮な体験ばかりであった。一生忘れないような思い出や記憶だって数えきれないほどあるというのに。自分の感想力のなさに悩んでいると、私はあることに気付いた。「新鮮な」出来事に溢れる、刺激的な毎日が日常になっていたのである。それは、日本に帰ってきてもOB・OGの方々と交流させていただいたり、スーツで学生対象のイベントに参加したりしてみることで、本会議中の「非日常」を「日常化」することができたからだと思う。そのような日常を本会議後も楽しむには、主体性やコミュニケーション能力が必要だと思うのだが、それを教えてくれた意味でも、出会いの面白さを教えてくれるきっかけを作ってくれた意味でも、日米学生会議は私の大学生活、そして人生の転機となった。ただし、今の私の生き方を否定してくる友人もいなくはない。「人を見下しているみたい」、とまで言われた。それは、自分が他の学生に触発をされた経験から、私もそのようなことが他者に出来ないかと、人に話をしたり、イベントを紹介したりしようとした結果、空回りをしていたのであると思う。しかし、最近ではグループワークやチームワークでの経験を通して、自分の役割を自覚することが大事だということが分かり(特に、誰もがリーダーでなくても良いということ)、いろいろな人がいて良いのだと考えるように

なった。以前ならば私が日米学生会議で学んできた生き方を絶対とし、その価値観で他者を触発したいと思っていたが、今では押し付けがましく私のライフスタイルを勧めることはなくなってきた、と願いたい。しかしやはり私個人としては、私が日米学生会議で学んだような日常が大好きである。日米学生会議参加前の私を否定するわけではないが、参加前はICUという狭い空間の中で、生活が完結していた感は否めない。第60回会議の参加者が初めて集った交詢社での激励会では、学生同士が名刺交換をしていた。ICUでは稀に見る光景である。私はそれだけでも衝撃を受け、早速100枚刷ってみた。また、本会議前の事前活動では、アメリカ人学生との交流があったため、その次の100枚は裏面英語も入れてみることにした。これは、今振り返ってみると、異文化交流さえも日常のものとなったのではないかと言えると思う。本会議ではアメリカ側参加者との共同生活であったので、異文化交流は前提としてあったのだが、一つ残念なのは、写真を改めて見てみると、日本人、またアメリカ人同士で写っている写真が多いということである。言語の壁は否定のしようがないが、日本側参加者として、日本以外の人や物とも柔軟に接し、相互的に触発が出来る関係を築ける勇気を養いたい。

ということで、第61回会議の理念は、Towards Global Awareness: Everyday Impact through Interactive Empowermentとなった。今後は、第61回日米学生会議の実行委員として奔走する日常を満喫していきたい。

高野恭平

手紙　－未来－

拝啓　この手紙を読んでいるあなたは、今何をしているのでしょう。風邪などひいていませんか。

今私は第60回実行委員としての最後の仕事である報告書作りをしています。長かった日米学生会議との関わりももうすぐ終わりです。この1年半を思い返すと、様々なことがありました。私の大学生活は日米学生会議なしでは語れないほど、この活動から多くのことを学ばせていただきました。

日米学生会議を通して、私は自分が作っていた「壁」を認識できるようになりました。本当のことを伝えることで人間関係に亀裂が入るのではないか、流暢ではない英語をしゃべることで仲間に見限られてしまうのではないか。そういった不安や恐怖が自分の思いを内に閉じ込めさせ、本当のことを言い合える真の友人を得る機会を私は幾度も逃していたのです。しかし、実行委員としての活動はそんな私の甘えを許しませんでした。より素晴らしい会議を作るという志の下、私たちはとても永い時間を共有し、本気で語り合わざるを得ない環境にさらされることで、相手を深く理解すること、自分を深く理解してもらうことの心地良さを味わい、「壁」を越える勇気を学ぶことができました。そして、最高の友人たちを得ました。

日米学生会議を通して、私は誰かの為に働くことで得られる充実感の素晴らしさを知りました。戦前から続いてきたこの会議を、莫大な予算がついているこの会議を、そして多くの方の想いが詰まっているこの会議を絶対に成功させなければいけない。今まで背負ったことのないほどのプレッシャーのなかで、着々と医師となる準備を進める同級生たちを見て焦りを感じながらも、ずっと投げ出さずに仕事を続けられたのは、仲間のため、世界のためという思いが、そしてそれによって得られる充実感があったからです。いつしか私は自分の一生を誰かの為に捧げたいと思うようにまでなりました。生きる意味を、人生の意義を奉仕に見出すようになりました。

私は本当に様々なことを日米学生会議からもらいました。だから、今度はあなたが日米学生会議に恩を返す番です。

後続を育てて下さい。私が学んだことを、後輩たちに熱をもって伝えて下さい。私も多くの先輩方のお世話になりました。時には厳しい父親のように、また時には全てを包み込む母親のように接していた

だき、道を見失った私の標となって下さいました。今の仲間とさらに深い交流をして下さい。仲間と共に頑張ってきたからこそ、日米学生会議を成功させることができたのです。それぞれが自分の力に合った役割をこなし、ひとつのチームとしてまとまったからこそ、このような大きな会議を動かすことができました。あなただけの力ではありません、うぬぼれないで下さい。今の仲間の方たちと力を合わせて、より大きな仕事をこなし社会に貢献してください。社会貢献という日米学生会議で得た思いを忘れないで下さい。

そして何より、自分の心の中にある誠実さを失わないでいて下さい。日米学生会議は数人の学生によって始められました。それが今まで存続してきた理由は学生の一途な思いによると私は思います。学生はたいした社会的地位もありませんから、権力も財力もたかがしれています。そんな私たち学生に多くの方が協力してくれているのは、何のしがらみにも囚われることのない「ただ社会を良くしたい」という学生の純粋な思いに惹かれるからではないでしょうか。思いは最高の武器です。どうか、この気持ちを保ち続けていて下さい。

あなたはこの日米学生会議の思い出をどれほど覚えているのでしょうか。ヒトは忘れることが得意な動物ですから、時を経るごとに私の記憶もどんどん色褪せていくでしょう。今の私にとっては日米学生会議がこの1年半の全てですので、それが消えてしまうことをとても寂しく思います。ただ、どうかこれだけは忘れないで下さい。私はずっと一生懸命頑張ってきました。時にズルすることもありましたが、この1年半本気で取り組みました。この私を誇りに思って下さい。辛いときはこの報告書を読んで思い出して下さい。そして、胸を張ってこれからも生きていって下さい。

それでは、また十年後にお会いしましょう。それまでどうかお元気で。

敬具

2008年　秋　高野恭平

高畑乃枝

最終日、仲間と別れなくてはならなかった夜、私は号泣した。人生の中で、いつも涙をぐっとこらえてきた私の胸を、第60回JASCは熱くさせた。自分が成長できたからだとか、会議で言いたいことが言えたからではなく、JASCの仲間達と特別な時を共有し、お互いの存在や価値観を尊敬し合えることができたことに、感動した涙だった。私に、そのような経験を与えてくださった全ての人に感謝したい。

【JASC応募への経緯】

私は三鷹の森で、平和ボケした日々を送っていた。そんな時、廊下の掲示板で武田委員長と目があった。ポスターを読んでJASCの存在を知り、これだ！これは絶対に面白いに違いない！と、興奮した。しかし同時に、「日米」という枠がひっかかった。それは私の二つの祖国であると同時に、愛せない二つの国だったからだ。両国を「ハーフ」として生きていく中で、日米の政治や社会に嫌悪感を抱いていた。あの時、そのまま通り過ぎてしまうことは容易だった。しかし、「日米」と向かい合わなくては、この先つまらない人生を送ってしまうかもしれないという気持ちが込み上げたので、JASCに応募した。この報告書を読んでいる学生の方が応募を迷っているとしたら、応募して欲しい。応募しなかった後悔よりも、応募した後に待ち受ける失敗の方があなたの人生を実らせるはず。

【JASCの魅力】

JASCは「日米」という二つの国をベースにしているが、集う人々は日米という枠に収まりきらない背景を持っている。JASCの何よりの魅力は、各人の持つ背景や考え方を臆することなく見せ付け合える、柔軟な環境にあると思う。つまり、JASCerは「他者を受け入れ、理解しようとする」気持ちが備わっているのかもしれない。ポートランドのラウンジで、みんなで輪を作って自己紹介をしたときから、みんな顔に「君の事を知りたい」って書いてあるみたいだった。あのみんなの顔を見たときから、日米という枠への不安がどうでもいいものとなった。なぜなら、私たちは日本人、中国人、韓国人、アメリカ人だけど、お互いに知りたいと思っているのは、その

先にあるものだと確信したからだ。

JASCの多様で柔軟な環境は、議論をする上でも大いに発揮されたとおもう。私の所属していた通称「メモリー」RT（元「悲劇」RT笑）では歴史問題を語る上で、互いの価値観や地域的背景を交差させることで、初めて見えてくる議論があった。日本側の中でも、広島・沖縄・東京出身者としての問題意識に差異があることは、互いにとって発見であった。私は大学で歴史学を専攻しているが、各人の歴史観や価値観を議論する場はなかなか無い。それゆえ、JASCでの歴史認識に関する議論は、とても面白かった。なぜ、面白くなったのかというと、学生という立場を最大限に活用して、「本音」で語ることができたから。フォーラムやスペシャルトピックスでの議論でも、知識不足や議論展開の違いを乗り越えようと努力しながら、みんな腹を割って話そうとしていたことが今も心に残っている。

JASCに参加していなかったら、出会えなかった人、視点、機会、悔しさ、喜び、言葉、踊り（笑）、景色、抱擁、手紙、流れ星、励まし、寝顔、歌、ほほ笑みのことを考えると、あの時JASC（タケ）と出会って本当に良かったと思う。

ただ、自分がJASCを通してどう変わったかは今も分からない。今分かることは、自分はJASCを「体験」したのではなく「経験」したという事実。そして、私がJASCで出会い、感じたすべての「経験」を無駄にはしたくないということ。青春の荒波の中を「第60回JASC号」にみんなと乗って航海できたことを、私は誇りに思う。ありがとう。60年後の夏に、また会おう。

竹内菜緒

第60回日米学生会議―。それは、私の中で永遠に続くものであるはずで、ここ１年の日常生活の中心であった。価値観やバックグラウンドが異なる者たちで、一つの会議を作り上げるというのは、簡単なようであるが、決してそうではなかった。しかし、だからこそ誇れる会議だ。私にとっての第60回日米学生会議を三部に分けて紹介していきたい。

第一部は第60回の参加者が決まるまでの準備期間。その中でも特に印象的なものは広報活動だ。第60回の参加者に会いたくて、広報作業に夢中だったあの頃。覚えたてのイラストレーターを使ってポスター等のデザインの作成をしたり、一人で恐る恐る印刷会社に訪問したりした。全国300の大学にポスターを貼ってくれないかと慣れない交渉の電話をかけ、地味な発送作業を行ったあの日々。ウィルコムで同じ志を持った実行委員と今後の広報戦略を話した日々。私が壁にぶつかった時はいつも、手を休めじっくりと話を聞いてくれ、一緒に解決策を考えてくれた。広報は対外的に団体の顔となる仕事のため、一見派手な役割に見えるが、やることはとても地味な作業ばかりだった。時に仕事を投げ出しそうにもなったり、衝突があったり、大泣きしたこともあったが、その度に同じ実行委員に支えられて、最終的に私はこの仕事を通し、本会議を成功させる自信と彼らとの信頼関係を得ることができた。

また、アメリカ側実行委員とは、コミュニケーションのツールがウェブと限られていたため、コンセンサスをとるのになかなか大変だった。分科会においても、環境問題についてウェブ上で議論を行いながら分科会の構成を考えたり、ポートランドサイトも、知らない土地の情報をウェブで検索しながら、日本側・米国側コーディネーターと共にスケジュール案を考えていった。時には価値観を衝突させ受容しながら、個人感の絆も深めていった。事前準備に全く悔いがない、といったら嘘になるが、他の実行委員から多くの事を事前準備の段階で既に学ぶことができたことに満足している。

実行委員との激しい衝突があったからこそ、一緒に会議を作りあげていく参加者に出会えた時は、初恋が実ったような思いを感じられた。

第二部は、そんな彼らと一緒に過ごした時間について。本当に時間の流れが早く感じられた。春合宿、防衛大学、直前合宿とコーディネートを行うのは正直大変だったが、参加者の成長や笑顔が楽しみで、それを考えたら睡眠時間を削って一つ一つのイベントを丁寧に企画・運営することも苦に思わなかった。また、分科会の準備も感慨深いものがある。分科会のメンバーには特にお世話になった。頼りない分科

会リーダーを、よくもここまで助け、ともに最高の分科会を作ってくれたと思う。事前活動中も、本会議中も、私の能力に足りない要素を他のメンバーが分科会に補ってくれることによって、一つの「環境とコミュニケーション」の分科会が成立していた。このように1年のほとんどの時間を費やして企画した本会議は、モンタナで見た流れ星のごとく時間は早く過ぎていった。本会議で最も私が誇らしく思ったこと。それは、間違いなく第60回日米学生会議の参加者たちであると思う。

そして本会議が終わった今ー第三部が始まる。日米学生会議はこれからもずっと終わらない。いくら第60回の会議が最高だったと思えても、実行委員として恥ずかしながら達成できなかった目標もあるし、後悔している点もいくつかある。しかし、達成できなかった、だけでは終わらせたくない、なぜならその後悔も日米学生会議の一部なのだから。今後、ひとつひとつその目標を達成していく。私はこれからも前に向かって進んでいく。この会議で「成長した」と言い切らない理由は、今もその過程を踏んでいるから。日米学生会議を通して、個人と個人、個人とコミュニティの繋がりの可能性を感じられた。その可能性を信じて、今後は私が社会に何かしていきたい。takeばかりでなくgiveもしなくちゃ、と思う。矛盾だらけのこの社会ではあるが、可能性も確かに存在する。人間が社会をつくり、そのような社会が私たちの、時には矛盾する、規範をつくっている。その責任を負うべく「社会貢献」したい、と思う。それが私の中にある、一生をかけて完成する予定の第3部である。今後も、第三部は永遠に続きますように、と願いながら。

最後に、国際教育振興会の職員の皆様、多くのアルムナイの皆様、多数の支援者の皆様、実行委員会の皆、参加者の皆に心からのお礼を申し上げたい。本当にありがとうございました。

竹内友理

モンタナ州、ミズーラ市の山の上。下には夜景が広がり、暖かい光が橋や道路、モンタナ大学のフットボールフィールドなどを包んでいる。目線を上げるとそこには満天の星が輝いており、ときどき流れ星が流れる。“Nine!!” “I missed it again!!!” みんなで仰向けになり、見つけた流れ星の数を競い合いながら、私は願い事をしようとタイミングを見計らっていた。

私は小学生の頃から日米学生会議の存在を知っており、機会があれば参加してみたいとどこかで思っていた。しかし、アメリカと日本の両国で人生の半分ずつを過ごしてきた私にとって、日米学生会議に参加するということや、参加したいと思うことはある意味で当然のように思えながら、考えれば考えるほどまたある意味で、全く意味のないことにも思えた。私は自分のことを完全なる『日』とも『米』とも捉えていなかった。むしろハイブリッドの『日米』そのもの、もしくはそのどちらでもない『無』だという意識の方が強く、そのいずれであろうと、参加することで何か新しい発見や成長があるのかどうか、分からなかったからだ。

日米学生会議を通して私の中で何が変わったということを認識し、整理し、言葉にすることはできないし、仮に言葉にしたところで伝わるものではないと思う。しかし上記のような懸念が激しく的を外していたことは確かである。米国中から集まった学生との交流の中で自分が予想以上に自分自身と彼らの『違い』を感じたことや、会議を通して物心ついてから今まで感じたことがないくらい強く、彼らに日本について『分かってもらいたい』と感じている自分に気付いたことなどはその印であり、私にとってかけがえのない発見であった。第60回日米学生会議は、『相手を知る』というよりも、『自分を知る』という意味において本当に貴重な経験であり、それこそが私にとっての『会議に参加する意味』であったのだろうと今では思う。

もう一つ、私が会議から得たものは、心から信頼出来る仲間である。

日米学生会議史上最大の応募者数の中から『偶然』に選ばれた日本側28人、アメリカ側18人の参加者。面接の中であの一言を言っていなかったら、書類のエッセーをあの題材で書いていなかったら、もしかしたら私はいなかったかもしれないし、夜通し喋っ

たあの子やお腹が痛くなるまで一緒に笑ったあの子も参加できていなかったかもしれない。しかしそんな激しい競争の中、『偶然』とはいえ実行委員が選抜した他の45人のデリゲートは本当に優秀で、素敵で、皆どこか飛び抜けたところのある『変』人たちで、そんな彼ら（そしてもちろん、史上最高の実行委員の16人）と共に第60回の旅をするジャパデリ28人目として選ばれたことを光栄に思う。

日米学生会議で作られる絆には、どこか特別なものがある。会議中、JASC OB/OGとお会いする中でそう感じさせられる機会が幾度かあった。ご自身が参加した会議から30年経った今でも参加者同士で文通をしているという方、自分の参加した会議からは８組もJASC結婚が生まれたのだという方・・・時間を経てもなお変わらずに固い絆で結ばれている先輩JASCerのお話を伺いながら、自分が今正にその絆の生成過程にあるのだということが少し不思議に思えた。しかし62人の学生と1ヵ月も寝食を共にするという一生に一度の機会を経て、私たちも気付けば日常ではあり得ないほど深く互いの長所・短所を知り、それらを認め合った上で仲を深めていったようだ。そうやって築き上げられた関係の下には信用と信頼の根が這っており、壊れたり忘れられたり失われたりする方が難しいようにさえ思える。（特に仲良しで『アツい』ことで本会議前から噂になっていたというCSR分科会の仲間には、特に感謝している。春合宿でRTリーダーの伊関くんが『家族みたいなRTにしたい』といっていたのが今では懐かしく思えるが、本会議が終わった今、CSR分科会は自分にとって本当に家族のようになっている。沢山の本を読み、議論を重ね、狂ったようにメールを回しまくっていた4人は、これからもずっと私にとってのinspirationであり、心の支えであり続けるだろう。）

結局、気まぐれで恥ずかしがり屋の流れ星に直接願い事をすることはできなかった。いや、あの夜頭の中では、ずっとそのことしか考えていなかったから、むしろペルセウス座流星群全体に願い事をしていたのかもしれない。・・・今となってはどちらでも良い。『このみんなの間で、一生この関係が続きますように。』お星さまに頼る必要はなさそうだ。

今では必然としか思えない第60回参加者とこれから一生の付き合いが出来る楽しみを胸に、これからの1年間、第61回実行委員としてまた新しい発見と絆の生成に貢献したいと思う。

武田尚樹

振り返ればこの1年間、パソコンに向かえば講演会や会議の企画、事務所へ赴いては伊部事務局長との会議の方向性や財務についての相談に明け暮れていた。終わって1ヵ月が経った今、事務所での作業や実行委員の皆とのミーティングがないことで、よりJASCが自分の生活の大きな一部であったことを実感する。最初はミーティングが思うように進まなかったり、渡航費が高くて会議が縮小される危機があったりした。山のように積みあがったポスターを折って送付する作業、クリスマスの企業回り、選考時期に明け方までデニーズでこなした作業、苦労話をあげればキリがない。しかし、事前準備を追え５月の春合宿で日本側のデリゲートに会ったとき、それまでの苦労が形となっていくことを実感した。

初めて参加者が顔を合わせた春合宿で、反省の一つにあがったのが実行委員とデリとの壁。これはメリットとデメリットの両方がある。実行委員業に徹することにより、参加者をうまく誘導でき、プログラムはスムーズに進行されていく。しかし、果たしてそのプログラムは良かったのか。意義のあるものだったのか。それを検証するには参加者の立場を通して参加するほかない。春合宿を機に「参加者の視点」を意識して実行委員の仕事に打ち込もうと心に決めたが、実際に本会議で＜参加者に近い実行委員長＞を務められたかと思うと確かではない。なるべくデリと会話し、会議に対する不満や英語力の悩みなどを聞きだそうと努力したものの、どうしてもフォーラム中に次のイベントのことが頭に入ってきたり、トランスポーテーションが大丈夫か心配したりと実行委員意識が抜け切れなかった部分がある。

そんな悩みも胸に抱えつつ、自分たちが1年近くかけて企画してきたものが現実となってどんどん実行されていく。1年間かけた企画が一日単位で消化

されていく。複雑な思いではあったが、参加者がかけてくれる感謝の言葉、批判の言葉、「楽しかった」という一言は、それまでの苦労や悩みをすべて吹き飛ばした。本当に嬉しかった。

参加者であった59回のJASCは自分なりに楽しむだけだった。会議が終了してからも、次の参加者に楽しい思いをしてもらえればそれでいいと考えていた。しかし、財団や企業、アルムナイの方々と話していくなかで、JASCの意義について深く考えさせられた。財団や企業から頂いている賛助に見合うだけの価値が私たちの会議にあるのか。JASCを続けることに果たして意味があるのか。委員長として悩まされることが多々あった。講演会の挨拶などで自分が口にするJASCの魅力や社会的な意義など、建前だけの発言だと思うこともあった。一つ一つの企画に大きな理念と夢を抱いて挑んでいったものの現実はそう甘くない。予算の問題、学生の限界、自分の未熟さのせいで自分が理想として描いていたフォーラムが次々と縮小されていく。悔しかったし、自分の力の無さを痛感した。しかし、この1年をかけてJASCから発せられる意見が社会で重要視されること、私たち学生にこそ担うことのできる役割が存在することを実感するにつれ、JASCの理念一語一語が委員長として偽りの無い確かな本音になった。

一方で、現時点では会議が社会全体に変化をもたらしたか否かは定かではない。だからこそ、これがこの先の課題であると思っている。これからどれだけ自分がJASCを通して学んだことをJASCで出会った人々と一緒に活かしていくか。忙しい実行委員生活は終わったが、これからより一層努力をしなければいけないと思う。

田中 豪

「アメリカどうだった～？」

日本に戻ってきたから、よく友達に聞かれる。

「うん、楽しかったよ～♪」

そう答える私。むしろ、そうとしか答えられない私。多くの人は僕の余りに単純な答えに怪訝そうな顔を見せる。あるいは、それに続く次の言葉を待っている。そんな友達の様子を見て、慌てて何かを付け加えようとする。自分が訪れた場所のこと、アメリカでできた青い目の友達のこと、自分が少しは英語を話せるようになったこと…。申し訳程度に付け加える。

では、自分にとって、この夏の経験はその程度のものでしかなかったのだろうか。その点に関しては、否、と言いたい自分がいる。そこで再び自分に問いかける。この夏に得たものは、何であったのか、と。そう考えると再び答えにつまる。

この夏に、自分は何を獲得し、何を獲得できなかったのか。そもそも、自分は何を期待して渡米したのだったのだろうか、とまで振り返る。

ところで、日米学生会議が掲げる大きな目標の一つは事後活動としての社会発信である。それは、まさに今の私に求められていることと言えるのかもしれない。

では、何を社会に発信していくのか。日米学生会議を学生の国際交流団体という視点から捉えれば、「国際交流の大切さ」、「グローバル」、「平和」、「国境を越えた対話」などという言葉が浮かんでくるだろう。しかし、それらの言葉も自己の内面の深い理解から紡ぎ出されていないかぎり何の意味も持たない。

この夏に得たものは、何であったのか。その問いに満足に答えられないうちは、社会発信の第一歩目すらおぼつかない。

ここで新たな問いが生まれる。そもそも社会発信は必要なのか。なぜそこまでこだわるのか。しかし、その答えははっきりしている。この夏がなかったら…と想像すると、ある意味でぞっとする自分がいる。この夏が自分にとって大切な経験であると言いたい自分もいて、そう断言できる自分もいる。最後に、社会発信を通してできるだけ多くの人に知ってもらうことが何かプラスになるのではないか、と思う自分がいる。そこから先への一歩。それを模索する日々は続く。

僕の第60回日米学生会議はまだ終わらない。

中村玲奈

志望動機シートをメールした日、直前合宿前日、

本会議中15日目、そして会議終了後の今日でさえ、その「宝箱」の中に詰まった無限の可能性に思いを巡らし、まるで銀河の闇に輝く宝石を手探りで探しているような、そんな不思議な興奮と高揚感に包まれるような感覚を味わうことに変わりはない。そんな「宝箱」がついに開かれた本会議、その走馬灯のように過ぎ去り、それでいてあまりに密度の濃かった時間の中で、結局のところ私は何を見つけたのだろう？

その答えを表現する言葉はいくらでもあるだろうし、列挙すればどれもそれらしく思えてくることに違いはない。しかし、その中でも極めて深刻なものがあったのである。中村玲奈という人間が生きてきた時間の中で「初めて」の発見であり、「初めて」の出会いでもあったそれは、彼女の中に大きなインパクトを持ってとどまっている。

それはベタな表現をするのであれば、ボーダーを越える（というよりは消すといった方が私にはしっくりくるような気がする）フレンドシップでもあり、同時に知らない自分との対面であった。

元来ネイティブではなくとも英語に多少の自信があった私は、「日本人は英語が話せない」というステレオタイプに対してコンプレックスを抱いており、「自分は出来る」というプレッシャーとプライドを自らに対して無意識にかけていた。会議が始まって2週間は、相手に甘く見られないように流暢な英語で議論をしなければ、日常会話くらいさらりとこなさねば、といった具合だった。しかしなんといっても25日間、24時間の長丁場。会議半ばにして、プライドを守っているだけの体力は尽き果てる。

そこには単に体力という理由以外のものがあった。それは、そんなプライドの塊の自分と会話をするアメデリの姿勢だった。私自身が「ステレオタイプを持っている、コミュニケーションのsuperiorたち」というステレオタイプを通して見ていた彼らは、常に真剣な眼差しでこちらの話を聞いていた。彼らの目が「君を理解したい」「君の考えを知りたい」ということ、しいては「同じ人間がコミュニケーションをとっている」ということを気づかせてくれたのだ。分科会では特に、「人々に対する環境問題の啓発や環境関連政策に関するメディア媒体を中心とした効果的なアプローチ方法」などを考察していたため、当然ながら日本語であっても理解の難しい単語、ロジックが飛び交う。 不自由な左手を使って箸で小豆をつまみ上げるような感覚だ。毎回のディスカッションが真剣勝負で、それでやっと「土俵」に上がれるといった感じだろうか。そんなハードな分科会での一場面、なにより、私の話を真剣に聞くアメデリの目が、自分の意見を必死に伝えようとする私に自信を与えてくれたことを思い出す。

「彼らは私を理解しようと努めている」

単純であるが、そんな気づきに肩の力が抜けていくのを感じた。そんな本当の意味での言語の壁が崩れ始めて、こんなことを思った。

「 英語を話すためには話せることを選ぶのではない。話したいことを、英語を使って伝えるのだ。言語は、ツールにすぎない。 日本語、そして日本人という要素は、ツール、型なのであって私を代表してはいない。私という人間は型にはまりたくもなければ、型の中に隠れて見えなくなるのもいやだ。」

その時、長年心の底にあった「外国人と本当の友達になったことがない」というコンプレックスと、彼らと話す時に毎度感じる「自分が自分でなくなる奇妙な感覚」が頭をよぎった。つまりは、『話す』ために言葉を選んでいたから、本当の自分が思うことを伝えられなかったということか。自分が壁だと思っていたものは、自分が自分の前に作りあげた、英語を話すための誰かだったのだ。誰かの友達が自分の友達でなかったのは極めて自然なことだ！

そんな気づきから日はどんどんと流れ、8月19日。すっきりと晴れた空の下、夜とはうって変わって穏やかなボストンコモンズの中を私とCharityは歩いていた。ハワイ出身、バックグラウンドも生活スタイルもまったく異なる彼女とは、LAでルームメイトとなった時から不思議と気が合った。24時間後に迫った別れを前に、伝えたいこと、聞きたいこと、残された時間を無駄にはしまいと焦るようにしてお互いを知ろうとしているのがわかった。

不思議だったのは、一人の人間としての「人生」に対する考え方、将来達成したいこと、愛、そういっ

たことへの考え方が奇妙なくらいに一致していることだった。「日本の友人にも理解を求めたことのない私を、生まれて初めてここで出すことになるとは。」感動にも似た高揚感に心は弾んだ。

別れの時、Charityが私を抱きしめて言った一言をこれからも忘れることはないだろう。その言葉は、「日本」と「アメリカ」という作られたボーダーの中に生きてきた自らの価値観を、未来に向けて変えるものでもあった。

「Sister, the other side of me…」

胸のうちに熱くこみ上げるものがあった。ボーダーは、消えていたのだ。言語のそれも、人間同士のそれも。それが、JASC60という「宝箱」に入っていた最高のtreasureだったと、私は自信を持っていうことができるだろう。

仁平理斗

第60回日米学生会議と聞くと、まずその数字に驚かされる。軍国主義を背負った日本と、民主主義を掲げる日本を一つの架け橋がつないでいる。1934年に始まった第1回日米学生会議を想像する。日本の思想、教育、国際的立場、経済力、政治体制、危機意識、何もかもが違う中、こうして第60回に参加できたことを大変光栄に思う。そして、これまで日米学生会議を絶やすことなく、引き継がれてきた先輩方に深く感謝する。

2008年8月初旬、ロサンゼルスにて、「日本の未来」について参加者同士で話し合う機会があった。専ら我々日本人学生の関心は、ジャパンバッシング、ジャパンパッシングにあらず、ジャパン「ナッシング」にあった。飽和状態にある日本経済を尻目に、著しく経済成長を続ける新興国の影に埋もれ、日本は興味関心をアメリカにすら、持たれていないのではないだろうかと。任意参加のこのディスカッションに、3人のアメリカ人学生の姿を見て、コーディネーターの日本人学生が、「ナッシング」は免れたと言った。事実、彼らのうち2人はたくさん発言をしたし、その内容も日本を褒め称えるものが多かった。しかし、参加したアメリカ人学生がそもそも親日家であるということと、アメリカ側参加者が30名弱いるということは、「気づかない振り」ではすまない事実であった。

単純な疑問が浮んだ。彼らはなぜ親日家なのか、日本の何に魅力を感じているのか。話をしていくうちに、その根源がどうやら日本の「エンターテイメント」にあることがわかった。ハリウッド、ブロードウェイ、ラスベガス。エンターテイメントの代名詞を数多く所有するアメリカが、日本のそれに魅力を感じているということは、韓国人に「日本の焼肉おいしい」といわれることに何となく似ていた。ドラマ、アニメ、ファッション、ときにはメイドカフェ。日本の大衆文化がアメリカで受け入れられているのだ。日本はアメリカ文化の恩恵に与っているという雰囲気を、幼少期から感じていた私にとっては、とても新鮮な出来事だった。(私は日本で生まれ日本で育った。)戦後を振り返ると、日本は、「戦争」「神風」という時代を払拭して、「技術力」「勤勉さ」という時代を勝ち得た。それらを前提とし、これからは「エンターテイメント」という要素に注目すべきではないだろうか。それが直接的あるいは間接的に利益をもたらして、日本社会が更なる成長を遂げるきっかけとなるのではないか。日米学生会議を通じて、日本の将来と日米関係について、一人の日本人として思案に暮れた。と同時に、例えば世界の貧しい人々の存在が、エゴイズムという罵声を自分に浴びせた。そして、実際に裕福でない国々を旅行して、自分の感情が愛国心なるものであるということに気がついた。自分がお世話になったものに対して、恩返しをちゃんとしなくてはいけないと思う。

最後になりましたが、共に1ヵ月間を過ごしてくれた参加者のみんな、毎日あなたたちから、色々なことを学ばせていただきました。この出会いにとても感謝しています。ありがとう。

比嘉慎一郎

JASCが終わって早1ヵ月が過ぎようとしている。それでもJASCシンドロームから抜け出せない。一生のうちでもおそらく最高の夏を過ごしたと思っているからそれも仕方ないが(笑)沢山ある思い出から今回は二つ焦点を当てたいと思う。

【課題】

JASCで何を学んだか？？と聞かれれば迷わず「成長するための課題」と答えるだろう。

それほど自分にとってJASCは挫折を感じ、成長している瞬間を感じ、それと同時にもっとみんなと一緒に成長したい、という欲求が生まれる場所であった。他の参加者より英語が出来ないので足手まといにならないか。レベルの高い会議の目的をみんなと共有できているか。数少ない理系で、しかも女性が多くを占める分科会で適切なコミュニケーションが取れるか。今振り返っても答えはどちらかと言えばNOだったと言える(笑)

でもそれはJASCが自分に与えてくれた、自分を成長させるためのこれからの課題だと信じている。

そんな課題を一緒に見つけてくれた個性派ぞろいのRTメンバー。アメリカから帰国する最終日、そのままカナダに留学するヨシと「今度会うときはもっと英語うまくなっていよう」と誓った。祥ちゃんとは、ともすれば揺れがちなJASCでの存在意義について沢山語ったし、にっひーの「自分達がJASCに参加できるのは世の中からの投資のお陰である」と言う言葉はすごく響いた。

そしてJEC。もちろん会議全体の舵取りをしてJASCをまとめあげたことだけでも賞賛の嵐だが、ストーキングしてただろ！？って突っ込みたくなる位絶妙のタイミングで日本語で話しかけてきてくれて、挫折から来るストレスを溜め込まず、課題であるとポジティヴな考えに至ったのは間違いなくアナタ方のお陰です(笑)ありがとう！

【アメリカと日本、時々沖縄】

長いフライトを終え、アメリカのリードカレッジについた初日。自分の不安はピークに達していた。自分が他のジャパデリ(日本側参加者)とは少しずれた考えを持っていたからである。『アメリカが好きとは言えない』それは自分が沖縄で生まれ育ったという背景から来たもの、即ち祖父母や学校から教わった沖縄戦や今なお沖縄が抱えている問題からきたもので、それらを思うと果たしてこれから1ヵ月やっていけるのかと不安になった。

加えて英語がそこまで上手く話せないので自分の意見がアメリカの人たちに上手く伝わらないのではないか・・・。しかし、実際は会議が始まってしまうとそんなのは全くの杞憂だったことに気付いた。もの凄い知識と共に流れてくるみんなの情熱はなんとも得がたいものであったし、何より驚いたのは出会った多くのアメリカ人が自分の事をJapaneseであると同時にOkinawan（沖縄人）としてみてくれた事である。「沖縄のことについて教えて！」、「このことは沖縄ではどう思われているの？？」と興味津々で尋ねてくる彼らに自分の知識、想いを全力でぶつけた。そうして話が終わると彼らは「あなたに出会えて良かった。沖縄のことを知ることが出来て良かった」と言ってくれた。それはとても嬉しい事だった。

そしてアメデリ・・・。my buddyで来年のアメリカ側実行委員長のColin、つたない日本語を使いながらも自分とホストマザーとの意思疎通を図ってくれたJon-Michael、Karenとは一晩中恋バナしたし、ChienとHannahには間接的にフラれたなー(笑)

そしてTurner・・・沖縄の基地で勤務しイラクにも行った元軍人でアメリカ側のECだった彼とは分科会は違うが、沖縄に関しての色々な話をした。それこそ地元の変な替え歌から極東の安全保障についてまで。真の相互理解ってのは学術的なところからではなく人と人とを原始レベルで徹底的に語ることから生まれるのだろうなと思った。

そして会議の最終日、『アメリカが好きだ!!』と言える自分を見つけた。そう、かけがえのない友人たちは自分を凝り固まった一意的な視点からの束縛を解き放ってくれた。これもまたJASCの理念に沿っていると勝手に思っています。

最後に一言、『挑戦とは一歩ではなく二歩踏み出す事』　これは自分が好きな言葉である。

JASCに参加したとこが一歩目だとしたら、自分達の挑戦はこれから始まると思う。そう、今こそ二歩目を踏み出すときなのだ。自分の事、沖縄の事、アメリカの事、日本の事、世界の事、これから挑戦することは沢山在る。JASCerと一緒ならそれらを成功させられると私は信じている。

廣瀬祥子

「JASCerとして選ばれた」と言うよりも「運よくJASCerになるチャンスをもらっただけだ」としか思えなかった。アメリカに行くのも、アメリカ人と友達になるのも初めてだった。果たして自分がJASCでやっていけるのか、友達すら出来ないのではないかと不安で心配で仕方がなかった直前合宿・本会議前。いざその輪の中に飛び込んでみると、あっと言う間に夏は過ぎ、たくさんの思い出、かけがえのない友達、何度も眺め返してしまう数々の写真を私は今手にしている。

参加者の声を記すにあたり、何を書くのかを相当悩んだ。上手くまとめられない上に、1,600字では到底書ききれないが、ここでは私がJASCで感じ得た三点に絞って紹介したいと思う。

【日本人とアメリカ人】

JLPとして開かれたお好み焼きパーティー。はじめは和気藹々とみんなで作り始めたお好み焼き。気づけばいつしか作業をしているのはジャパデリだけで、アメデリはカウチに座って楽しく会話。一度には全員分が焼けない為、出来たものは順にアメデリへ。次第に次の予定の時間が迫り、ジャパデリは慌ててお好み焼きを食べていた。勿論この構造に誰も不平・不満はないし、本当に楽しいひと時だった。

ポートランドサイトでの移民ディスカッション。議論内容を発表するため、各グループに二枚の画用紙が配られた。何を書くのかを話し合う間もなくさっとペンを執り画用紙へ思うままに書き始めたのはアメデリ二人で、ただそれを見ているしかないジャパデリ。

日本人とアメリカ人だからなのか、それとも個人の性格なのか。普段はあまり気にしないが、自然に日・米が別れる様子を目撃する度に何とも言えない興味深さがあった。

【学ぶ姿勢】

意識一つで「学び」が変わる。大きなフォーラム、フィールドトリップ、前の席に座るか・スピーカーの近くに行くか、それとも後ろの方にいるかで話を聞く姿勢が随分違ってくる。英語を学ぶチャンスもJASCの日常に溢れている。分科会中の議論、JASCerとの会話、ショッピングでもらう何気ないレシートにまで。与えられた学びの場だけに頼るのではなく、自らそのチャンスを探し、作り、吸収していくことが重要なのだと実感。やはり「全ては自分次第」。

【悔しさ】

率直に言うと、私は今回のJASCにおいて、自分自身の役割が何だったのか、どう貢献できたのかが明確に分からないままだ。英語も出来る才能ある人たちが揃った自分のRT。議論についていくのが必死で、自分の意見も上手く主張できない事も多くあった。“The Japanese American National Museum”でガイドの方が案内をしてくれていたときのこと。「面白い」と口を揃えて興味深く話を聞いているグループの皆とは対照的に、何も英語が分からない自分。思い出せばきりがない、自分に「悔しい」感情を覚えた瞬間。自分自身の厳しい「現実」に向き合わなければなかった。時には抑えきれず、涙があふれた。しかしそれは同時に、そのようなやりきれなさを親身に受け止め励ましあう仲間が常に隣にいるという、JASCの魅力を痛感する瞬間でもある。

私はこれらの経験をどのように活かすか。ただ楽しかった、悔しかった、たくさん学べた、かけがえのない友達が出来た、では終わらせられない。JASCerとしての私の役割はこれからなのだと感じている。辛く悔しい思いをしたあの瞬間は、今と今後の自分自身の糧にして、貴重な友達と経験は心の支えにして、一人のJASCerとして生き、JASCで出会ったアラムナイたちのように社会に貢献してゆける人間になりたいと思う。こうした前向きさと、将来への目標を得ることができたのもあの1ヵ月のおかげである。

最後に、60回のJASCを作り上げてくれた七人の実行委員をはじめ、本年の参加者、アラムナイの方々、そして今回JASCに協力していただいた方全てに心から感謝している。

廣田隆介

何かをオーガナイズする経験を通じて自己成長したい、そして単純にもう一度JASCを楽しみたい、

そのような思いを抱いて第60回実行委員に立候補したことを今でも覚えている。思えば大学に入学して以降、一つの物事に長い期間をかけて取り組んだことは無かった。海の家運営、政策立案コンテスト、インターンシップなどを一匹狼的に梯子していくことで色々な経験を積めていると自分に言い聞かせていたが、それは何かに長期間仲間と共に取り組むということへの恐れの裏返しでもあった。しかし日米学生会議に出会えたことで、そのような恐れは全く無くなったと自信を持って言える。というのも第59回会議に参加して、一緒に働きたい、議論し合いたい、夜通し遊びたい、ライバルになりたいという仲間たちに出会えたからだ。そう確信できたことで、第60回実行委員に立候補することができた。

実行委員生活は予想していた以上にタフだった。自分の担当である報告書と企業財務に加え、何々担当などの臨時の役割を常に抱え、手が空いている時は広報や選考を手伝い、また11月から年明けの2月まではほぼ毎月講演会などの大きなイベントを開催するというハードスケジュール。予定帳はいつの間にかJASC関連の用事で埋め尽くされ、夜はパソコンに張り付いてSkypeミーティングに参加し、その合間に就職活動を行い、学校に関しては殆ど犠牲にするという有様であった。特に肉体的にも精神的にも苦痛を極めたのは、選考が本格化した3月。第1希望群の会社からまだ内定が出ていないのにもかかわらず、応募者を面接したり、評価したりしなければならないというジレンマ。加えて、選考とジョブの日程が被り、皆の理解と協力を得てオリセンから会社に通ったこともあったし、京都での10日間の選考合宿中には、何度も周りの就活生から置いて行かれるような感覚に襲われた。それでも実行委員を辞めたいと思ったことは一度も無かったし、このような苦難を仲間と共に乗り越えた時の達成感は、また次のステップへと自分を駆り立ててくれた。

そして春合宿、ついに第60回のメンバーが一堂に会す日がやってきた。第60回日米学生会議の正式なスタートである。しかし、ここで大きな壁にぶつかった。JASCが全く楽しく感じられなかったのである。アメリカ側分科会パートナーの突然の辞任や、神経質過ぎる己の性格も加担したのか、運営側と参加者間の壁を感じ、なかなかデリと一緒になって楽しむことができずに常に一歩引いており、初めて実行委員という立場を後悔した。しかしそんな困難も、デリがJASCに積極的に関与し始め、また自分もデリと同じ目線で会議から何かを学び取る時と、実行委員として振る舞わなければならない時の境目が見えてきたことで乗り越えることができた。こうして60th JASCがどんどん楽しくなり、事前活動はほぼ全参加することになったのだった。

そしていよいよ、待ちに待った本会議がスタートした。アメリカで、英語で、ミス無く様々な活動を行っていかなければならない重圧。苦労した1年間の成果は、全てこの本会議の成否にかかっていた。しかし会議を心の底から楽しんでくれているデリゲート達の姿を見て、実行委員冥利に尽きると心の底から思うことができたのだった。

今この文章は、実行委員としての肩書を取り払い、この1年間の出来事や感想を素直に綴っている。身勝手な文章で申し訳ないが、ここには書かれていないJASCが果たしてくれた役割、JASCの意義、JASCの未来、そしてJASCを巣立った私たちがこれから為すべきことなどのトピックに関しては、JASCerといつまでも語り続け、考え続けて行きたい。最後に、共に一夏を過ごした63人の仲間たち、私達にJASCの未来を託してくれた59回の皆、日米学生会議を支援して下さった皆々様、そして私のJASCへのコミットメントを支えてくれた友人や家族にお礼を言いたい。本当にありがとうございました！

誉田有里

私にはいつも客観的に自分を見つめているもう一人の私がいる。この私は時にやっかいな存在で、思い切りはしゃごうとする自分にブレーキをかけたりする。しかし、日米学生会議中はありのままを受け入れてくれる仲間の中、居心地が良すぎて、私にはめずらしく心のブレーキが外れ「思い切り」はしゃいでしまったように思う。

積極的に自らを試す場に身を持っていき、自分を

変えようとする仲間は、私の眼を大きく見開かせてくれた。大人しそうだった印象の人が最後まで自分の意見を曲げない人間に、人の意見に全く耳を貸さなかった人が人の意見と妥協していくように、自信のなさそうだった人が積極的にフォーラムで質問するようになるなど、仲間一人一人の確実な変化、変わろうとする姿勢は会議中、私の原動力になった。アカデミックな活動と共に、時間を見つけては仲間と語り合ったことも忘れられない。部屋で枕を並べながら、時には夜の川辺、星空と夜の街に挟まれながら山の頂上で、移動中や食事の時、公園で、芝生で寝ころびながら、挙げればきりがない。語り合いを通じ、仲間一人一人の奥深さに触れたことは、私が密かに抱いていた「人」に対する警戒心を温かく溶かし、「人」ともっと向き合ってみるよう、背中をポンと押してもらったような気がしている。

触発される経験がしたい―そんな思いを見事に日米学生会議は叶えてくれた。

上手くディスカッションをリードできず悔しい思いをしたことや、価値観が真正面から衝突し、なかば口論になりながら議論したこと、ディスカッションを通じて見えてくる新しい視点に興奮したこと、仲間と話して泣き笑いするほど楽しかったこと、仲間からの笑顔やさりげない言葉に隠された優しさに心がぽかぽかしたこと、会議の全てを思い出そうとすると、走馬灯のように様々な感情の波に襲われていた自分を思い出す。更に思い返せば、本会議前、事前活動が始まってから既に色々な感情に飲み込まれていた。春合宿の後、焦燥感と不安でいっぱいだったのが今ではなんだか懐かしい。色とりどりの感情と多くの笑い顔に、大きすぎる位の笑い声がつまったこの夏は、これから先の私に映る世界を変えるだろう。

60回の会議のテーマであった“Students Redefining Their Role through Insight and Action”学生としての役割とは何だろうか。考えてみるほど自分の未熟さと小ささから限界を感じ、一人の力がそこまで相互理解や世界情勢の問題に大きく貢献できるのかは正直懐疑的であった。しかし、会議を終えた今、一人が「変わる」ことの影響力は必ずしも小さいわけではないのかもしれない、そう思う。参加者一人一人の変化が私や他の参加者を刺激したように、一人の変化は波及して広がっていく。変わる人数が多いほど、影響もより広く波及していくのなら、一人が与える影響は一人の限界を上回る。

人と人との化学反応は予想不可能でおもしろい。反応によって生み出されるものがどれほど大きく、輝いたものになるか、それは先入観を打ち破り、人を受け入れる個人の器の大きさに左右されるのかもしれない。アカデミックな面での触発だけでなく、温かいものを心に残してくれた皆には感謝の気持ちでいっぱいだ。それぞれの場所で、自分の道を歩き始めた皆をずっと応援している。私も、「変わる」ためのリスクを恐れず、目標に向かって着実に進んでいきたい。

松尾恵輔

日本は現在、対外的にはアジアでのプレゼンスを失いつつあり、「ジャパン・ナッシング」といわれる状況にある。また内側を見てみれば、財政赤字、少子高齢化、格差の拡大など問題は山積である。

そんな社会の中で日々閉塞感と漠然とした不安を感じていた私は、これまでずっと「21世紀の日本の望ましい姿」を模索していた。そしてその課題を、第60回日米学生会議では「日本人がどのような生き方をするのが幸せなのか」という課題に置き換え探してきた。日本人が「どのように生きるのが幸せなのか」の大まかな尺度を、先の10年間の不況やグローバル化により価値観が多様化する中で見失ってしまっており、その価値観を再構成することで、その価値観を達成するために必要な社会状況がどの様なものであるか、導き出せると考えたからである。

第60回日米学生会議の半年が終わってみて、まだその問いに対する明確な答えは見つからなかった。やはり価値観は個人によって異なる物だから仕方ないのだろうか。課題そのものが愚問だったのか。

だが、この課題を考える中で私は実に多くの人たちの生き方と真剣に向き合うことができた。そのなかでも、モンタナで私を迎え入れてくれたグレッグとシェリーの夫婦の生き方はとても印象的だった。

彼らはミズーラにある山の中腹にある、大きな庭と家庭菜園のあるアメリカにしては少し小さめの家に住んでいる。彼らはたまに二人で旅行に行く以外、大抵家でゆっくり過ごしているそうだ。庭で取れた野菜を使って料理し、バルコニーにあるベンチでお酒を飲み、静かに語り合いながら食事をする。それは、物質的な豊かさではなく、「家族と、何気ない日常を過ごす」ことの素晴らしさを体現した生き方であった。もしかしたら、この生き方こそ今後日本人が目指していく「幸せな生き方」の定義なのではないかと感じた。

話は変わって、JASCの日々は私にとって一生忘れられないであろう瞬間の連続であった。みんなと朝まで語り合ったこと。誕生日、皆がバスの中でハッピーバースデーを合唱してくれたこと。ポートランドでダンスを踊ったこと。RTのメンバーとの何気ない冗談の言い合い。ファイナルフォーラムを目指して、毎日3時間睡眠で議論をした事。皆で夜山の上から眺めた流れ星、ミズーラの夜景、宮沢賢治、満月。夜のモンタナ大学の散歩、そして事あるごとに頭に浮かぶ名曲「Leaving on a jet plane」。

国籍を超えて信頼を築き、皆と作った一瞬一瞬が私にとって宝物である。そこから感じたことや学んだことは今の自分や未来の自分を作ってくれるという確信がある。全ての60th JASCerに伝えたい。
「ありがとう。また会おう。」

松本秀也

私が日米学生会議（以下JASC）を知ったのは、実は他でもないmixiだった。大学1年の終盤に差し掛かっている頃JASCの“コミュニティ”を発見し、面白そうだなと感じていた。しかし実際の活動内容などについては全く知る由もなく、大学２年の夏休みに、他のプログラムで一緒だった先輩にJASCの話を聞き、それ以来本格的に興味を持つようになった。その意味で、参加が決まったとき、またアメリカに渡るまでの期待は他のプログラムに寄せられていたそれよりも大きかった。

全体を通して、やはり良い部分と悪い部分は在ったように思う。反省すべき点としては、私自身が時に「お客様気分」に浸ってしまったという事。JASCにおいては、全てが計画され、資金援助も他の学生会議などに比べてしっかりしている。そういう意味でも、少し安心して会を実行委員やプログラムに任してしまっていた気がしている。それは他の人にも少なからずあったことのように思う。また内容的な部分では、事前に準備していった内容をアメリカの学生と照らし合わせた際に、どうしても妥協しなければならない部分があったことは、少し消極的だったようにも思う。

しかしそれらは同時に、学ぶべきことでもあった。今回JASCの組織としての大きさや実行委員の運営力の偉大さ、参加者として傍観してしまう部分はあったにしろ、そういった部分を非常に良く見ることができた。またアメリカ側学生との議論についても、少し妥協してしまった部分があるとは言え、それらを最小限にすべく意見を言えたことはできたように感じるし、アメリカと日本の議論の仕方の違い、或いはそれを理解した上での話しの進め方といったものを考えるキッカケとなったと思う。

そして何よりも、1ヵ月でできた仲間は、一生の財産であり、私がJASCから得たものの中で最も大切なことであると感じている。1ヵ月生活を共にし、議論し、遊んだ時間は、今後の人生において何にも変えられないものであろう。また今後も、彼らとともに思い出を作り、この絆が世界において何かしらの発信をできるのではないかという期待を私は大いに抱いている。JASCは良くlife changing experienceと表現されるが、私はこの1ヵ月が私の人生を変えるとは思っていない。人生を変えていくのは、あくまで「これから」である。

盛島正人

第60回日米学生会議（JASC）の日本側代表の1人に選ばれて以来、事前活動、本会議を通して、現代におけるJASCの意義を考え続けてきた。戦前の戦争回避、戦後の平和構築、高度経済成長期の貿易摩擦の緩和と、JASCの意義・役割は時代の移り変わりと共に変化してきた。では、現在、日米関係が成熟した状況で、JASCに出来ることは何なのか。第

60回日米学生会議での経験を通して、それは日米両国の一般の人々の間に、「太平洋を挟んだ反対側の国にも、自分たちと同じ人間がいる」という質感を醸成することではないかと思うようになった。「海の向こう側にも、自分たちと同じように泣き、笑い、日々を過ごす人々がいる」という感覚を両国の一般市民の間に育むことこそ、平時の日米関係において求められていることであり、JASCに出来ることではないかと。しかし、こうした理解に至るまでには、多くの挫折や失望があった。

JASCの持つ可能性に胸躍らせて参加した会議だったが、開始直後は失望の連続だった。ポートランドやLAの日本領事館でのレセプションでは、JASCerが両国のDecision makersに対して、ほとんど何も提供出来ないこと（彼らは、JASCの有無に関わらず、有事などの際に必要とあらば日米関係に関して学び、良好な関係維持のために奔走するだろうし、現在はその手段も多数ある）を思い知らされ、また分科会活動やその他のアカデミックな活動では、専門知識を有さない学生が1ヵ月という限られた時間の中で達成できる学問的貢献が限定的であることを思い知らされた。このように、JASCの外の世界に全く影響を与えることのできない日々が続き、JASCの意義を見出せない状況が続いた。

こうした状況を打破するキッカケとなったのは、モンタナでのHomestayとWar & Peace Discussionだった。Homestayでは、JASCerが一般のアメリカ人と初めて触れ合い、外の世界に初めて影響を与えることが出来た。日本の領事や日本を研究対象とする学者らとは異なり、ホストファミリーたちは、JASCerとの一つ一つの会話や私たちの彼らの家での振る舞いなどから、日本人とアメリカ人の共通点や違いを学ぶことが出来た。また、War & Peace Discussionでは、現役アメリカ軍人、退役軍人、平和活動家、そして日米両国の学生が戦争と平和に関して議論することを通して、それまでの人生、考え方、所属組織、そして国籍が異なる中でも、合意点を目指して建設的な議論ができるということを証明した。自分の目の前でモンタナの素晴らしさを語るホストマザーや戦争の悲惨さを訴える現役アメリカ軍人が段々と人間になっていき、私たちが彼女や彼にとって人間になっていった。JASCが媒体となって、立場の違いや国境を越えて、両国の一般の人々の間に、「彼らも自分たちと同じ人間なんだ」という質感が醸成されていった。

フルブライト奨学金の創設者、故J・ウィリアム・フルブライト上院議員はかつて、“教育交流は、「国家を人々に変える」”と言い、人間的な国際関係、すなわち“他の国々に自分たちの国で育った人々と同じように喜びや悲しみ、残酷さや優しさを共感できる人々が住んでいる、ということが実感”できるような関係の構築に尽力した。そのような関係こそ、悲惨な戦争を防ぐ有効な手立てになると信じて。戦争のない平和な時代、JASCに出来ることは、日米両国の人々の間に「太平洋の向こう側にも自分たちと同じ人間がいる」という質感を醸成し、日米関係を人間的に変えていくこと、日本とアメリカを日本人とアメリカ人に変えていくことではないだろうか。モンタナで手にした質感がこれからのJASCで、よりはっきり、ずっしりと重たいものになっていくことを心から願う。

安川瑛美

私にとってJASCの夏は、新たな発見と再確認で満ちた一生に一度の時だった。何か大きな変化が私に起こったのかといえば、正直そうではないかもしれないけれど、変化はこれから起きるような予感がする。

始まりは終わりへのカウントダウン。会議の始まりから終わりは、あっという間に過ぎ去った。毎日1分1秒でも惜しんで、みんなと過ごそうと心に決めた。眠くて、疲れていて、目を閉じたい時も、もう少しみんなと話していよう。だって、もっともっとみんなを知りたいから。

You can make more friends in two months by becoming interested in other people than you can in two years by trying to get other people interested in you.

-- Dale Carnegie

— Portland: the place where we started —

緊張の初対面から、はじめて受け取るJASC mail、buddyからの歓迎の言葉に興奮を隠せない。大使館でのopening ceremony、会議は始まった。はじめてのRT時間から、移民フォーラムでのディスカッション、アカデミックな準備はそこまで楽じゃないけれど議論するのは楽しい。ポートランドの街へ繰り出したscavenger huntで、「指令」に従って大通りで歌う、走る、躍る。負けず嫌いが集まったチームは、町を走る、走る。ポートランドで私たちは出会い、走りだした。

― LA: the place where we grew ―

所属のマイノリティと多文化社会RTは、マイノリティ・フォーラムでのアファーマティブ・アクションのプレゼンテーションの準備に、滞在中半分明け暮れた。UCLAの寮で、移動バスの中で、ビーチで、カフェでみんなと語り合う。夢、趣味、恋などを話し始めたら、止まらない。これだからみんな、寝不足なんだ！ Hollywoodから帰るときに道に迷ってとった“we are lost” picture、今ではいい思い出。ビーチでの日焼けをアロエで癒しながら、LAの太陽は私たちの心に熱い友情を芽生えさせ、団結をより強くした。

― Missoula: the place where we were bonded tight ―

ホストファミリーとの時間は、モンタナを特別な場所に。Horseback riding, s'moresなどアメリカらしい経験をプレゼントしてくれたお礼に、手巻き寿司をふるまい日本の食を楽しんでもらった。環境フォーラム、自転車づくり、地元の方々との接点を通じて、私たちは何かしら発信できたのだろうか。モンタナでの緩やかな時間の中、流星群が流れる星空の下で過ごした時間の「意味」は更新されていく。

― Boston: the place where we finished and departed for the future ―

終わりのことは考えないように、楽しもう。ハーバード大学でのファイナルフォーラム、7分に詰め込む1ヵ月の成果。最後の夜のJASC mail、みんなへ綴る思いの数々はあふれる涙と、温かいハグでいっぱいだ。「また会おうね」の言葉で、終えよう。

In the hope to meet
Shortly again, and make our absence sweet.
-- Ben Jonson

私たちはまだ始まったばかり、
JASCでの価値の真価を問われるのは、これから。

油井英孝

初めてJASCのメンバーと会ったとき、本当に仲良くなれるのだろうか／自分が変化できるのだろうかという心配があった。しかし、今はこの友情は一生続いていくだろうし、自分も強くなれた、と確信をもって言える。JASCでの経験は、それほど自分にとって衝撃的なものであった。なぜだろうか？自分は二つの大きな理由を考えた。

一つ目は、一人一人、個人が活躍出来るチャンスがあること。3週間という時間は非常に短いが、自分が勇気を出せば、どの日常の一コマも自分が輝けるものに変わっていく。全体ミーティングで発言すること、パネリストに質問をすること、喋ったことのない人に話しかけてみること、プログラムにない企画を作ってみること。これらは、全て自分の「勇気」によって作り出せるものであり、自分の一生を変えうるような出来事になるかもしれないのだ。

二つ目は、個人の活躍を讃えあえる文化があること。たとえ、活躍できるチャンスで失敗したとしても、仲間が失敗を受容してくれ、的確なアドバイスをくれ、積極的な行為に対して賛美の言葉をくれるのである。このような明るい雰囲気が、自分の成功体験を作り出せてくれて、他人から積極的に学ぼうというムードを作り出し、個人として仲間を尊敬できる所へと繋がっていくのだ。

自分にとっての、アメリカでの約3週間は、自分を鍛え、他人を思いやるという日々の小さな目標をこなすだけで精一杯に終わったが、振り返ってみたら、一つ一つの行動が自分を成長させるチャンスであったと思う。そして、自分は毎日、毎日のチャンスを逃さず活かせていたと自信を持って言えることを改めて誇りに思っている。

アメリカに行く前は、世界は狭く、自分は、将来は若い頃に貯蓄していた知識のみで生きていけるだろうという安易な思いで生きていた。しかし、アメ

リカに1ヵ月いて、世界は広く、世の中には面白い学問・友人・世界があって、一つ一つが輝いているということを改めて感じた。JASCでの別れは、とても辛いものがあった。

皆、別々の道を歩んできて、一度JASCに集まって、またそれぞれの道を歩んでいく。今まで、1ヵ月間共に、笑い・泣き・一生懸命に過ごした分だけ、寂しさは募るが、別々の道を心から応援してあげたいと思っている。そして、自分も彼ら彼女らの頑張りに負けないよう、精一杯頑張っていきたいと思っている。

JASCはいわば「駅」であると思っている。JASCという「駅」に集まり、そこを通過点として、お互いの電車を確認しながら、自分の道を切り開いていく。この素敵な出来事に出会えたことを心から感謝している。

横山雄一

日米学生会議。そんな会議の存在をふと思い出したのは、1次選考の締め切りも差し迫った2月下旬のことだった。

私がこの会議の存在を知ったのは、中高時代の先輩に大学1、2年の間にどんなことに取り組んだらいいか尋ねた、2007年の夏のこと。応募時期がまだまだ先だと聞いた私はすっかり安心しきってしまっていた。1次選考直前になって初めて2次選考の日程を知ったため選考の時期には海外旅行の予定まで入っていた。フライトのスケジュールを変え、選考の為の準備を旅行の準備と並行して進め…といった調子で2次選考は慌しく終了した。絶対に落ちたと思って失意の内に旅行に向かった私を日本で待っていたのは、どうしたことか、合格の連絡だった。

こうして運良く日米学生会議に参加できることになった私がまず行ったことは、イメージを持つことだった。イメージを先に作っておくことで、自分の体験を振り返るのが容易になる。最も著名な「先輩」のお一人、故宮澤喜一氏の参加した時期の日米学生会議を描いた『友情力あり』(城山三郎著、講談社)にこんな一文を見つけた。「真の友情だけは海を隔て年を経ても、変わることがない。」こうして私の中には友情を培う場としての会議、というイメージが生まれた。今考えてみると、それからの私にとっての日米学生会議とは、一つにはこのイメージを確かめていく軌跡であったような気もする。

3ヵ月の事前活動、1ヵ月の本会議の中で、友情が(そして時には愛情が)固まっていった。分科会の方向性を悩みながら、レストランで食事しながら、休憩中に、1日のプログラムを終えた後に、ホテルのロビーで、バスでの移動中に、ディスカッションをしながら、食事しながら、買い物しながら、ジムで運動しながら、自転車を組み立てながら、スーツを着て真剣に講演を聞きながら、草の上に寝転がりながら、野球しながら、私たちはJASCerとして同じ時を共有した。参加者全員と納得行くまで話ができた、という訳ではない。それでも、皆と本当に楽しく過ごすことができた。

最も力を入れて取り組んだ分科会活動では、分科会の目標がなかなか定まらず、皆で本会議まで苦しみ続けた。分科会合宿を行っても目標は定まらなかった。多くの方々を訪問してお話を伺った。インターネットを通じて何度も連絡を取り合った。自分がディスカッションのファシリテートをする為の準備にも、相当骨を折った。しかし、そうした苦しみの一つ一つでさえ、本当に楽しかった。目標を上手く設定できず苦しむ中でも下らないことで皆笑いあった。お互いに色々からかいあうこともあったが、それも信頼あってこそのことだ。

ここまでは主に満足感を持って語れることを述べてきたが、一方で悔いが残っていることもある。まずは、英語だ。皆が一生懸命伝えてくれることが分からないことが数え切れないほどあった。ジョークが理解できず、周りが笑っている中で笑えないという状況の中で何度悔しい思いをしただろう。言いたいことを正確に伝えられずに歯軋りをするのは毎日のことだった。アメリカ滞在中に日本に送った葉書のほとんどに私は「英語で苦労している」と書いた気がする。だがそれでも、困ったときにはいつも誰かが手を差し伸べてくれた。皆の通訳、ノート、説明に、何度も助けられた。

もう一つ悔いが残るのは、積極的になりきれな

かったかな、ということだ。皆のエネルギーには圧倒されることが非常に多かった。私は不器用で小心なところもあるせいか(…というと一部の人には疑われそうだが)、どこか自分を出し切れなかった部分があった。

楽しく、少し悔いの残る、それでも充実した旅は、もう終わってしまった。しかし、私は確信している。「真の友情だけは海を隔て年を経ても、変わることがない。」一度は参加できないのではないかと思った日米学生会議。幸運を噛み締めながら、ここで得た友情を大切にしてこれからの人生を過ごしていきたい。

李 凌叡

二回目のJASC、二回目の1ヵ月間。何かが待ち受けているのだろうというわくわく感は変わらないが、緊張感と責任感、そして若干の疲労感が去年より加わった。実行委員とはいかなるものか、いかなる役割を負って、いかなる態度で行うものなのか。その答えは実行委員の数だけあるのだろう。私が自分に課したのは、参加者をサポートすること、常に注意力を絶やさずに突発時に対応できること、そしてなおかつ参加者の輪に溶け込むことであった。1ヵ月終わってみた現在、それが全て達成されたとは言いがたい。次々と起こる不測事態にたじろぎ、困惑したこともあったし、葛藤し苦しむ参加者に、どんな言葉をかけていいか分からずに立ち去ることもあった。そして、参加者の発言に既視感を感じてしまって、一歩引いて観察していたことも多々あったと思う。

それを反省した上で考えてみても、1ヵ月間終わって鮮明に覚えていることは、助けてくれた仲間のこと、会議中で味わった達成感、そしてみんなからもらった無数の小さな幸せである。挫折感と壁、JASCにおいて誰もが感じたことだろうし、誰にも感じてほしいことである。でもそれが、JASCではない。

JASCの終わりが始まりである。会議中何度も繰り返された言葉だ。それは実行委員8人が、頭をつき合わせて考えた理念でもある。JASCで見つけた幸せや喜びを自信に変え、世界への信頼に変え、この先に突き進んで行ってほしい。世界を変えたい、自己実現をもってよりよい影響を。若者ならば一度は思うことである。それが諦められ、色あせてゆくのは、やはり先が見えないから、レスポンスが返ってこないから、そして一人で世界に立ち向かう孤独感である。JASCは、そんな夢をかすめとるひとつひとつの小さな出来事を、さらにかすめとる場ではないかと思う。

そしてそんな自分の夢、自分の目標の成長の傍で、国際交流というテーマが、私の人生に加わるのは確かであろう。

渡辺恭子

日米学生会議との出会いは、大学の情報提供スペースに置かれた青いリーフレットを通してだった。委員長の威厳溢れる顔と、それとは対照的な楽しそうな写真の数々が一緒に並んでいる事をちょっと面白く思ったことを覚えている。会議の名前を聞いたこともない私が応募しようと決めた理由は、分科会の内容に強く惹かれたからだった。山積する社会問題を真剣に考え、自分達なりの答えを模索する人たちが集まる場だと思った。そして、その考えは今でも変わっていない。

会議を二度経験して思うに、日米学生会議は自分と向き合い、そして社会と向き合う機会を提供してくれている場でもあるということだ。二度目の夏、会議中ずっと頭を駆け巡っていた言葉がある。"Do what you can do, don't ask for what you can't do". 59回の時参加した分科会のリーダーからもらった言葉だ。思えば、私は自分に自信が持てなくていつもあれこれ悩み立ち止まっていた。「悩む暇があれば、動いてから悩め」。そうやって私の背中を押してくれた。今でも、私に出来ない事はたくさんある。でも出来ない事を悲観的に考えて立ち止まるよりも、今の自分に出来る事を探して動いていくほうが精神衛生上もいいし生産的だ。今出来ないことはなぜ出来ないのか、どうやったら出来るようになるのか、そう考えて行動していくことの大切さをこの言葉を起点とし会議を通して学んだ。各サイトで組まれて

いた様々なディスカッションの機会を通して、山積する社会問題とその解決の複雑さを知った。ロサンゼルスの比較政治フォーラムでは、アメリカのgun controlについて考え、アメリカ社会の根底に流れる個人主義がもたらした現代の問題を垣間見た。モンタナの環境フォーラムでは、現地の活動家を交え電子廃棄物や水銀の問題について意見交換をすることができ、遠く離れたアメリカでも世界的な問題について取り組んでいる人たちが確かにいることを実感でき励まされた。こうした社会問題と向き合う機会が充実していると共に、ディスカッションを自分のものとするための工夫や取り組みが日米学生会議ではなされていることは特筆すべきだろう。“C”をして論点や要点を言ってもらう他、“T”をして通訳するなど伝統あるサインが今でも残っている。そして、何より話しがうまく通じなくても諦めずに理解しようと話を聞いてくれる人々の存在は何よりありがたかった。相手の言っていることに耳を傾け、自分も相手に伝わるように話をする姿勢。会議が始まった理由でもある相互理解を重んじる伝統が生んだ土壌によって、私達は相手を慮る姿勢とともに、いい事も悪い事も含め忌憚なく意見を言い合いお互いの友情を深めていった。

日米学生会議の出会いから今に至るまで、本当に様々なことがあった。感想文を書くこととなった今、次々と色々な思い出が浮かんでは消えていく。一つ一つの経験が波紋を作り影響しあって今の私をつくっている。初めて日米学生会議に参加した直後は、“Life changing experience”という言葉の意味が実感できなかった。しかし今言えることは、日米学生会議は私の生き方を変えてくれたということだ。日米学生会議との出会いをもたらしてくれた、青いリーフレットは想像を超える世界に私を引っ張ってくれた。そうして迎え入れてくれた全ての人に感謝を言いたい。月1回の合宿、広報活動、選考、各種イベントの実施など実行委員8人の力を結束させないととてもじゃないがまわしきれなかった。そして何より、周りからの支援が私達を勇気付けてくれた。主催団体である国際教育振興会の方々を始め、OB・OGの方々、第59回実行委員・参加者のみんな。第60回参加者のみんな。日米学生会議に関わって下さった全ての方々。たくさんのご支援と愛情を受けて第60回は無事に終わる事ができました、この場を借りて言わせて下さい。ありがとうございました。

渡辺千尋

初めてJASCのことを知ったのは今年の初めに学校でポスターを見たとき。見た瞬間に「学生最後の夏休み、これに参加してみよう。」という意欲がわいた。直感的に最高の夏休みになる気がした。この直感は間違っていなかった。JASCはただ単に「楽しい」だけじゃない。その楽しさは以下に記すとおり。(無理やりJASCの頭文字を使って表すと)

J　日本人として、
A　アメリカに渡り、
S　学生として、
C　会議に参加
することだと思う。

日本人として

私は生まれてから日本にいなかったことは総計しても2ヵ月ぐらいであろう。日本の義務教育をまじめに受けて、書道・剣道の段をもっていて、日本文学と和食が大好きな私。分科会が「悲劇の記憶」だったので会議前に日本史も復習したし。私は柳田國男には到底かなわないけど、日本のことはきちんと説明できると思っていた。でも実際、今回アメリカに行って、いろいろな方々に、広範囲にわたって、日本についてたくさん質問(マンガ・食べ物・教育・歴史問題などなど)を受けた。私の日本に対しての認識はまだまだまだまだ足りないと痛感した。もっと日本人として自国、日本を知らなくてはならない。

1．アメリカ

初めてのアメリカ。何もかもが新鮮に感じられた。ポートランド・LA・ミズーラ・ボストン。四つの異なるアメリカを一度に見られる機会はそうないと思う。アメデリと一緒だったこともあり私たち日本人だけでは見えてこないアメリカの側面を見られたと確信している。アメリカは何もかも大きく豪快で大雑把だった。アメリカの大学の寮や学食は私に

とってはとても新鮮だった。各地で訪れたミュージアムや企業への訪問も驚きの連続だった。（日本とアメリカを相対化してもっと日本が好きになった。）

2．学生として

学生として。これはJASCの最も大切にしている、しなければならない点だと思う。私は「学生として」日米交流活動に参加する意義を考えていた。それは「一人の学生として、自分の考えをもつこと」だという結論に達した。JASCの良いところは学生だからこそ素直に疑問や意見を言えるということだ。たとえ相手がアメリカ海軍の将校、ハーバードの教授、偉い弁護士の先生でも、思ったことを質問・発言できる。これは学生の特権である。そうすることによって私たち学生は本当に知りたかったことを知ることができる。その結果、より興味関心を持ち、次の行動に移すというように、良い循環になる。こうして良い学生会議が受け継がれていくのだ。

3．会議に参加して

会議に参加して、私はたくさんの刺激を受けた。刺激を受けすぎて、逆に今でも何がなんだかわからなくなかったりするので私は個人的に時間をかけて消化していくつもりだ。アメリカで個人的には絶対に入れないような施設を訪問し、個人的には絶対にお話できないような方々と談話した。この経験から学んだことは実に貴重である。

しかし･･･しかし･･･。一番刺激が強かったのはやっぱりJASCerだと思う。私はこのメンバーを客観的に見て「すごいなぁ」と幾度となく感嘆した。お世辞抜きでみんな才能豊かで、努力を惜しまない人たちばかりだった。言ってしまえば「所詮」学生会議。手を抜こうと思えば抜ける。でもそんなことをする人は一人もいない。全員が全力で取り組む姿は本当に美しい。こういった人たちと一緒に生活することは、お互い知らず知らずのうちにいい影響波を出しあっている。私は何度もビッグウェーブにのまれた。この会議で出会いは･･･千載一遇かつ一期一会。

このようにJASCの「楽しさ」は学生として今しかできない体験・経験ができること。同時に、将来に向けての課題も見つけられるということ。世界、特に日本とアメリカに向き合うことで究極的には自分に向き合わなくてはならないということ。この三点が参加して最も痛感したことだ。もちろん、楽しくない瞬間も多々あった。英語で内容の理解できない講演、未知の分野のプレゼンテーション。眠気と戦いながらのRT。でも、こうした事も、私にとってはJASCの「楽しさ」に含まれる。

私は今回、この会議に参加できたことを誇りに思う。これほどの大きな会議を運営してくれたECの皆、本会議を支えてくださっているすべての方々にお礼を言いたいです。ありがとうございました。

会議が終わって早1ヵ月。私は長い夏休みを終え、いつもと変わらない学生生活を送っている･･･はずだった。でも、今までの夏休み明けとは少し違う。世間で騒がれているNEWSの理解度と関心度が増し、大学には留学生としてアメデリがいて、JASCメーリスは相変わらず頻繁に回ってきて、本屋さんに行けば戦争関係の本が目に飛び込んでくる。極めつけはフランス人のフランス語がわからなくて無意識にTを使いそうになった･･･。今でも確実に私の中にJASC魂が根付いている。私はこれからもこのJASC魂を大切にしたい。みんながそうしているように。終わり。

<u>渡邉ともね</u>

「自分自身と向き合う・自分の価値観にふれる」1ヵ月だったという表現が、私の率直な感想である。その中で感じたことを「3つの50%」と「一つの100%」というキーワードを使って、述べたいと思う。

一つ目の50パーセント。それは、「自分が自分自身を知っていたパーセンテージ」である。日米学生会議（以下JASCとする）の活動を通して、自分とは、何を大切に思い、何を重要視して生きているのかなど、自分自身の価値観と向き合う時間が多々あった。その中で、「自分とはこういう人間だったのだ」等、普段見過ごしていた自分自身に気づかされ、同時に知っていたようではっきり認識していなかった自分に気付かされた。

二つ目の50パーセント。それは、「私たちに見えるもの」である。JASCの活動を通して、たくさんのひとに出会うことができた。その中で感じたこと

である。私たちが何かを判断するとき、真実(または本質)は、私たちの目に映っているものの半分(またはそれ以下)でしかないということである。「目に映らないものをどれだけ大切にできるか」「目立たないものに配慮する心があるか」など、人の本質は私たちが見逃してしまいそうな行動やしぐさのなかに現れていると感じた。目に見えないものには、私たちが見逃してしまいそうで価値有るものがたくさんある。そして私も、「目に見えないもの」を大切にできるひとになりたいと心から願う。

三つ目の50パーセント。それは、「与えられた機会」である。私たちは同じ時間を与えられたとしても、その経験の一連を100パーセントとして捉えるとしたら、「与えられた機会」自体はそのうちの50パーセントであると思う。残りの50パーセントは個人個人に委ねられており、それを充実したものにするか否かは私たちそれぞれの手に委ねられている。与えられた同じ時間が有るとして、それを活かすも活かさないも、全てそれは私たちの責任である。JASCという場で私がどの程度、自分に委ねられた50パーセントを上手に使うことができたか、(またはこれからできるか)それを自分に問い直す。私は、この機会を得るために私を支えてくれたひとたちに感謝しつつ、責任を感じながら歩みたい。

最後に、私が感じた100パーセントを述べて、私の第60回日米学生会議の感想としたい。私たちは日常の中で、興味のあることや、やってみたいと思うことにたくさん出会う。しかし、その想いが中途半端では、なかなか実現できない。何かを成し遂げたいと感じたときに、そのことに私たちがかけるべき想いは、ほぼ「100パーセント」である。「強い想いや願い」こそが、変化や達成の源である。JASCに参加した学生たちから、私が受けた最大の刺激は彼らの「想い」や「願い」であった。この仲間に出会えたことを、心の底から、幸せに思う。

第6章

アラムナイ・参加者の実像

アラムナイ寄稿文……146
数字で見る日米学生会議……150

「アラムナイ・参加者の実像」企画趣旨

第60回日米学生会議実行委員報告書担当
廣田隆介

本章は、主に二つのターゲットに向けて企画されました。第一に、日米学生会議を日々ご支援いただいている方々。そして第二に、これから日米学生会議に参加しようと考えている学生の方々へ向けてです。日米学生会議は社会から多大なご支援を受けながら継続されており、その期待に答えるための一つの方法として、日米学生会議アラムナイのご活躍をお伝えすることが適当と考えました。そのため「アラムナイ寄稿文」という項を設け、アカデミア、ベンチャー企業経営、NPO法人、国際協力関係など幅広いジャンルで社会に貢献している方々が、日米学生会議における経験をその後どのように仕事に活かされているかということを当報告書に寄稿していただきました。同時にこれらは、将来日米学生会議に参加を希望されている学生の皆様の道標ともなると期待しています。また、「数字で見る日米学生会議」という企画を立ち上げ、日米学生会議参加者のデータを数字で示すことで、「帰国子女会議」や、「理系は参加できない」などといったレッテルを取り払うことに注力しました。

本章をご覧になることで、様々な側面から日米学生会議に対する理解が深まり、日米学生会議をご支援いただいている方々、そして日米学生会議へのご応募を考えていらっしゃる方々の輪が広まれば幸いです。

アラムナイ寄稿文

第34回会議参加
井伊雅子

一橋大学の国際・公共政策大学院で経済学、特に医療経済の問題を中心に研究と教育に携わっています。

ICUの1年生の時にJASCに参加しました。高校時代に1年間カナダに留学した経験があり、将来は国際機関で働きたいという希望を持ちICUに入学しましたが、それと同時にJASCに参加したことは、その後の人生に大きな影響がありました。私が参加したJASCは米国で開催され、初めてのワシントンDCやNY、デューク大学、ボストン郊外のWellesley Collegeでの滞在は、一つ一つの出来事が鮮明な思い出となっています。

分科会はbioethics（生命倫理）に参加しました。社会科学系の学生が選ぶ分野としては異質な感じもありましたが、社会現象の比較文化的な分析手法に関心があり、自殺の日米比較が私の報告テーマでした。分科会のリーダーは当時東大医学部6年生の赤林朗さん、参加者は東大医学部2年生の粂和彦さん、北大医学部の松浦淳さん、聖心女子大で美学を専攻していた赤津晴子さん、アメリカ側はYale大学のSusan Asmaningさん、Amherst大学のAndrew Infosinoさんでした。当時は、将来医療関係者と一緒に研究をするようになるとは思いませんでした。医療界との最初の出会いがJASCの分科会でした。

JASCを終えて、将来の進路を模索している時に、国際機関の中でも、世界銀行やIMFのような機関の方が働き甲斐があるのではないか、そのためには経済学を専門とすること、などのアドバイスをくれたのもJASCの先輩でした。当時のICUの社会科学科では経済学の教員の数も少なく、科目としてもあまり充実していませんでした。慶応大学の経済学部に在籍していたJASCの友人がICUの近くに住んでおり、しばしば訪ねてはいろいろ教えてもらいました。慶応大学の講義を聴きに三田キャンパスに行ったことも懐かしい思い出です。

ICUを卒業して、米国のウィスコンシン州立大学マディソン校の経済学部の博士課程に進学しました。国際機関で働くためには、欧米の一流大学で経済学の修士号、できれば博士号を取得することが必須と聞いていたからです。ウィスコンシン州立大学は経済学部では全米で10位前後の大学です。東海岸や西海岸の大学、中西部でもシカゴ大学などと比べると日本では知名度が低いのですが、州都のマディソンは全米でも住みやすい街に何度も選ばれたことのある美しい学園町です。安全で物価も安く、のんびりとした留学生活を送ることができました。

大学院の途中で、世界銀行の調査局で働きました。最初はサマーインターンとして夏休みだけと思っていましたが、結局2年間、研究員としてワシントンDCに滞在しました。当時世銀では研究体制が大きな変革期にありました。マクロ経済政策だけでなくて、医療や福祉といったミクロの経済政策へも関心が移っていった時期です。当時構造調整政策の対象になっていたボリビアの貧困分析が私の世銀で与えられた仕事で、家計調査のデータを担当しました。ボリビアの医療制度改革に関係することになり、何度か現地を訪ねました。博士論文も途上国の医療制度改革をテーマにボリビアのデータを用いて執筆しました。

1995年に横浜国大の経済学部に就職したのですが、日本に戻ると日本の医療制度の問題に徐々に関心が移りました。途上国で働くと日本の制度についていろいろ聞かれることが多いのですが、あまり詳しく知らなくて残念に思ったこと、日本の医療制度も大きな問題をいろいろ抱えていることなどが理由です。

国際機関にいる時にもJASCの先輩、友人、共通の知人に出会うことが多くありましたが、日本に戻り、医療政策にかかわりますと、JASC出身の医師、官僚、研究者と仕事上ばったり出会うことが多くなりました。利害関係のない学生時代にこれだけ多くの分野の仲間に巡り合えたことは本当に恵まれたことです。

JASCの分科会の日本人参加者に限っても、赤林さんは生命倫理の研究者の第一人者となり東大教授として活躍され、粂さんも熊大医学部で専門の研究を続けながら、睡眠と時間という専門分野を一般向けの著書『時間の分子生物学』として出版し、講談社出版文化賞を受賞されています。赤津さんは聖心大学を卒業後、アメリカのメディカルスクール、インターンを経て、アメリカで臨床と研究に携わり、その体験記を出版されて医学部の関係者に広く読まれています。学術会議の会長を務められた黒川清元東大医学部教授は海外経験も豊富で、小泉元総理のアドバイザーも務められた方ですが、赤林さんや粂さんは東大時代の教え子であり、アメリカで活躍する赤津さんもよく御存じで、私たちが学生時代からの知り合いだと知って、「日本の通常の学生の人間関係では考えられない！」と驚いていました。単なる同級生とか同窓生というのではなくて1ヵ月間のJASC、その前の数ヵ月の準備期間と文字通り寝食を共にした人間関係は確かに通常の学生生活では得られないものです。

さて、現在アジアの医療制度に関する書籍を執筆・編集しています。今年JASCに参加した学生さんたちがお手伝いをしてくれています。彼女たちのJASCの経験談を聞きながら、私も経験したJASCの思い出を昨日のように思い出しています。あの濃密な夏の1ヵ月は二度と経験することはできないのかと思うと、これからの参加者の方々を羨ましく思います。

第39回会議参加
ヴィジョネア株式会社　内古閑 宏

私は2000年にヴィジョネア株式会社を設立しました。私が起業をしたのは、日本の技術者に光を当て、技術と市場の橋渡しを行い世の中に新しい価値を提供したい、と思ったからです。設立の理念は「日本発世界初の技術で新しい産業を創る」です。

ヴィジョネアは技術開発ベンチャーであり、映像メディアの技術を開発して事業にする、ということに現在は注力しています。映像メディアであるDVDとインターネットの連動。複数のデジタルメディアを連動させることによって単独のメディアでは実現できなかった新しい提案をしています。映像を楽しむ時に「DVDを買う」、「DVDを借りる」という形でいまは商品を手に入れています。しかしこれはVHSというアナログメディア時代からの続いている購入スタイルです。もっと何か新しいスタイルがあってもいいのではないか。それによって市場がもっと広がっていくのではないか。ヴィジョネアはDVDとインターネットを連動することによって消費者に商品購入法の第三の選択肢、「PPV（ペイパービュー）DVD」を提唱しました。DVDの映像がレンタル価格で視聴できる、でも商品を返却せずに

手元に残しておけるという購入方法がPPV-DVDです。次世代DVDのブルーレイ・ディスク(BD)でも同様な開発を行っています。独自技術を基に映像商品の新たな購入スタイルを世に提唱する、ということにチャレンジしています。

このようなヴィジョネアでの活動は、遡るとJASC(日米学生会議)での経験が起点になっていることが多いです。JASCの経験で得た視点が、その後の学生生活、社会人生活で培われていったのだと思います。一つ目は、国、という視点でものごとを考えられるようになったということ。日米、という2ヵ国を意識した会議を通じて日本と世界、という観点でものごとを考えるようになりました。世界に通用する日本人技術者のレベル、そこから生まれた技術を用いて新ビジネスを創造し世界に貢献する。そのために技術者が活き活きと働いて技術を世に出せる場を創っていきたい、と考えたことです。二つ目は、人と違った、自分らしい人生を歩んでいく、という視点を持てたことです。JASCに参加して、米国で教育を受けてみたいという思いが益々強くなり、就職後私はハーバード・ビジネス・スクールへ留学することになりました。そこでは一回限りの人生を独自の考えを持って歩むことの大切さ、面白さを強く感じました。一度の人生であるならば新しいビジネスを創造することによって世の中を変えてみたい、という価値観が醸成されました。三つ目は、チームでことを成し遂げる意義、です。一人でできることは限られている、チームを結成することにより、達成できることも違う、達成感も違う。JASCでは日米のチームに、個性豊かなメンバーが揃っていました。個性のダイバーシティから生まれる議論、発想。ビジネススクールの教室においても、たくさんの個性を集め企業のケーススタディを徹底的にしていました。あらゆる視点から考察した上で事業を進める、可能な限りのオプションを考えた上で方向性を選ぶ、ことの重要性を学びました。ヴィジョネア社での採用は、可能な限り異なる個性を集めることを心掛けています。

本原稿を書きながらJASCに参加した当時の純粋で前向きな気持ちを思い出しました。思い出しながら、当時の自分には負けていられないぞ、まだまだ成長するぞ、と邁進するパワーが湧いてきます。いまの私にとって「JASCでの経験」は、そのような存在です。

「あの夏の記憶」

第54回会議参加、第55回会議実行委員長
乗竹亮治

あの夏の沖縄もとめどなく暑く、僕らをうだらせていた。あの夏も、オリンピックセンターのアスファルトは、灼けつく日差しを照り返していた。あの夏の原爆忌も、蝉しぐれの中、黙祷を捧げる日米両学生の額には、汗がにじんでいた。

「真剣に語り合う夏があってもいいと思う」というキャッチコピーをまとった実施要綱を配り歩き、70名近い仲間と、泣き笑いしたあの夏から、はや5年が経とうとしている。

日米学生会議に想いを馳せるとき、その記憶が細やかなディテールまで鮮明であることに、時として驚く。2003年の夏、沖縄の空は台風に覆われ、一晩を停電のなか過ごすこととなった。深夜、宿舎が用意したガス式のランタンを持とうとすると、熱せられた取っ手に触れた人差し指に痛みが走った。火傷の痛みが、鈍く尾を引いた。ロウソクやランタンの灯で、夜更けまで語り合い、心の底から笑い合った記憶。沖縄の現地学生、日本側参加者、アメリカ側参加者の間で、なかなか埋まらない歴史感覚の溝ともどかしさ。降り止まない雨。そして右手人差し指の痛み。このまざまざと想い起こせる皮膚感覚こそが、日米学生会議の想い出であるように思う。

日本側実行委員長として参画した第55回日米学生会議のテーマは、「グローバル化社会と日米～市民参加の視点から考える～ U.S. and Japan: Civic Participation in a Globalizing Society」だった。学生同士が国家論やイデオロギーなど大きな物語を語り合うことも重要だが、同時に、教科書的な議論に陥ることなく、今、学生として、一市民として何が実現可能なのかを議論すべきであるという我々なりの模索だった。

この模索の延長線上に現職があるかもしれない。現在、「日本医療政策機構」というシンクタンクで勤務しているが、市民主体の医療政策の実現をミッションとするノンプロフィットの組織である。海外の財団や組織、国内の組織と連携取りながら、国内外における医療政策提言活動を行っている。

我々が実現しようとしているミッションは、まさに日米学生会議で語り合ったテーマと重なり合うところも多いが、直接の決め手となったのは、日米学生会議の若手OBが、何人もこの組織の立ち上げ時期に参画していたことだった。非営利法人に新卒で就職することは一般的にも、日本ではまだ珍しいことだと思う。いささかの不安ももちろんあったが、日米学生会議の若手OBがワールドクラスで認められる組織を作ろうとしている姿は、不安を上回る安心感と期待感を持たせてくれた。

日米学生会議での経験は、終わることなく今に引き継がれている。海外組織や財団との連携の任に当たることも多いが、お会いした方がアメリカ側OBであったり、JASC, Incのボードメンバーであった例もある。人脈に限らず、プロジェクトの収支を議論し、外部と折衝し、そして70名近い学生を引率できた経験は、有形無形に今に活かされている。今年の夏、スイスのジュネーブで国際学会があり、患者市民リーダーを引率し通訳したことがあった。そんなときもふと、5年前の夏を懐かしく思う。

現役の学生さんに依頼されたとはいえ、錚々たる諸先輩方を差し置いて、このように筆を取ることは憚られた。身の程知らぬ放言であることを自認するところだが、日米学生会議の参加者に、幅広い職業選択の可能性を示す意味で、あえて現職のことを書かせていただいた。

森鴎外「舞姫」の冒頭付近にこんな記述がある。

「5年前の事なりしが、平生の望足りて、洋行の官命を蒙り、このセイゴンの港まで来し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新ならぬはなく、筆に任せて書き記しつる紀行文日ごとに幾千言をかなしけむ、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりておもへば、穉(をさな)き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常(よのつね)の動植金石、さては風俗などをさへ珍しげにしるしゝを、心ある人はいかにか見けむ。」

2003年の蒸し返すような暑い夏から、5年が経とうとしている。右手の指に火傷の跡は見当たらないが、あの夏の記憶は僕の心に今も焦げ付いている。

日米学生会議―終わらない、夢を見られる場所

第57回会議参加、第58回会議実行委員
波多野綾子

本稿では、日米学生会議を卒業した駆け出しの社会人として、日米学生会議での経験が仕事や人生の進路を選ぶ際にどう影響し、また現在の生活の中でどう生きているのか、といったことをお伝えできればと思います。とはいえ、他にもより経験豊かご先輩方、友人たちがいる中で、拙稿がお役にたてるのかわかりませんが、結局日米学生会議の経験やそこから学んだもの、その活かし方は一人一人違うので、数多くの参加者それぞれが抱く「日米学生会議」の中に、こんな経験・想いも存在するのだな、という気持ちで読んでいただければと思います。

さて、簡単に自己紹介をしますと、私は57回(2005年、日本開催)に参加者として、また58回(2006年、アメリカ開催)に実行委員として日米学生会議に関わりました。大学卒業後、米系投資銀行を経て、現在は官庁で国際協力の仕事をしています。

人生の進路選択として重要な就職先を選ぶにあたっての日米学生会議の影響はけして少なくありませんでした。何より、日米学生会議の実行委員としての活動期間が、就職活動にまるかぶりしていたことで影響せざるをえませんでした(笑)。時間や精神的にけして楽ではありませんでしたが、今はあの時日米学生会議があったから今の自分がいる、きっとやらなかったら一生どこかで後悔していただろうと思えます。

まず、現在の仕事を選んだ理由のひとつに、日米の尊敬できる仲間たちとの交流と協働を通して、また様々な分野で活躍する先輩方を拝見して、グローバルな環境で自分を磨きより成長したいという思いが育っていったことがあるでしょう。

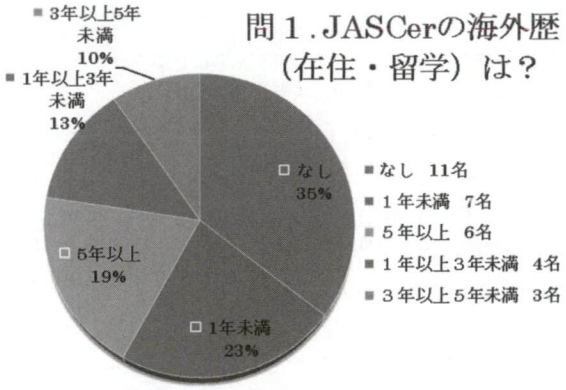
さらに、自分は人一人一人がその可能性や能力を最大限に発揮できるような社会と平和の実現に少しでも役に立てるような生き方がしたいと思っていましたが(それがJASCに参加し、また実行委員となった理由の一つでもあったのですが)、その目的は民間の会社ではなかなか達成されないと思いこんでいました。しかし実際に多くの公共心を持ったJASCの先達が企業でも自分を磨き、自由な発想で社会変革を起こしているのを眼の辺りにし、またCSRをテーマにしたシンポジウムの開催(58回では、社会責任投資の会社を起業した井上氏、現タリーズコーヒーインターナショナル会長松田公太氏などを招いてシンポジウムを行いました)などを通して、公務員や政治家だけでなく、どのような分野にも志を持った人々が存在し、よりよい商品、会社、仕組み、社会を作るために日々奮闘しているということを実感しました。どのような立場にあっても、志とあきらめない力、そしてここ日米学生会議で出会えたような素晴らしい同士さえいればやりたいことが実現できてしまうのではないか、それを現実と思わせてくれる仲間との出会いがここにありました。大事なのは、どこで働くかではなく、どうありたいのか、誰と、何を目指したいのか。異なる価値観やバックグラウンドを持った仲間との出会いは、より広く長期的な眼で人生を見渡す力をくれたと思います。

そのように就職という人生の選択においても大きくインパクトのあった日米学生会議ですが、私は社会人になった今、一層その有難さを実感しています。もちろんJASCで培った人とのコミュニケーションや協働の経験は実務でも役に立っていますが、より感じるのは学生という社会的「肩書き」の無い身分で出会った友人たちが、「会社」というベールを取り去ったありのままの自分に忌憚の無い意見をしてくれる貴重な仲間であるということです。また、何度も徹夜で議論をして、笑って、泣いて、日米学生会議という場を創り上げるため不器用なほど一生懸命に日々を駆け抜けた仲間たちは、今でも、盛り上がりたいとき、落ち込んだとき、人生に迷ったとき、真剣に話を聞いてくれ、そして一方でどこまでも馬鹿な企画も、突拍子もない考えも現実に出来てしまう、他には無い「場」となっています。1年経っても2年経っても、きっと10年後も、このかけがえのない絆とともに、いつか見た夢は終わらずに続いていくのだと、そう思います。

最後になりましたが、本年度も素晴らしい会議を共に創り上げた60回日米学生会議の皆に祝辞を、それを支援してくださった賛助者・団体の方々、またこの場をくれた実行委員の皆様に心より感謝を申し上げます。

数字で見る日米学生会議

これまでの募集広告やの報告書ではあまりJASCer自体の特性を把握できない。ゆえにそれを数値やグラフ化することにより、これからJASCへの応募を考えている方々に本当のJASCerの特性を知っていただきたく思い、第60回会議参加者にアンケートを実施した。また、学年や専攻データに関しては過去５年間に遡って検証を加えた。本項が今後JASCへの応募を考える方々の一助となれば、本項の目的は達成されたと言えるだろう。

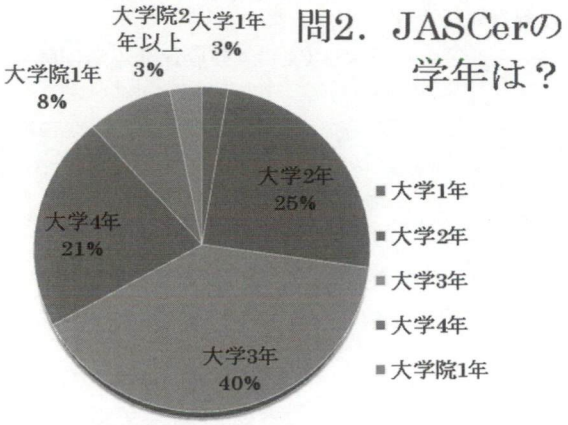


第60回日米学生会議参加者36人のデータを基に作成

問1.

本来JASCとは、日米学生会議と言われるように、日米間の交流を趣としたプログラムであり、基本的に高い英語能力が問われると考えられがちである。しかし、参加者の実態はどうか。アンケートで最も多いのが「海外経験なし」という予想に反する結果だった。1年未満まで合わせると実に半分の参

加者が海外に長期滞在した経験に乏しいのだ。実際に、英語力が会議の全てを左右する訳では無い。本会議では英語の堪能な参加者に適宜通訳をお願いし、またSlow down, Translation, Clarify, Wrap it up, Louder, などの独特のサインが参加者のコミュニケーションを助けている。勿論海外に長期滞在していた経験を持つ者も多いが、JASCを海外経験の足掛かりにしている者も少なく無いのである。

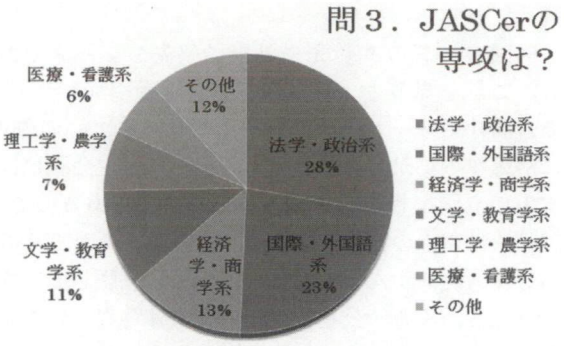


過去５年間の参加者148人のデータを基に作成

問2.

データを見ると高学年の割合が多いように見えるが、1、2年生の割合も1/4程度とかなりの割合で参加している。上級生の専門的知識や広い視野、下級生の発想力やエネルギーが上手い具合にバランスが取れており、本会議に活力を与えているというのが率直な感想だ。また様々な年齢層の参加者がいることにより、各々が自分の役割を意識し、お互いを高め合うことができる。アカデミックだけでなく人間的にも成長できる場だと言える。

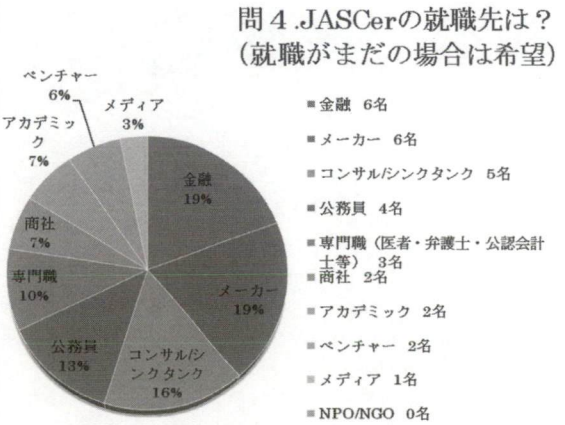
さらには、JASCでは学年や年齢に関係無く参加者同士フランクに付き合う習慣があり、全員がタメ口で会話をする。言葉による距離感が無くなること、更に1ヵ月という長い本会議期間を通して、参加者同士の絆は一気に深まるのだ。



過去5年間の参加者148人のデータを基に作成

問3.

JASC参加者の割合は圧倒的に文系が多い。国際交流が主に文系学生によって担われていることと共に、分科会のテーマが文系寄りであったり、また議論において抽象的な事柄を議論することが多いことも一因であると思われる。しかし、その他の分野の参加者が活躍できないのかというと、そのようなことは全くない。逆に理系のように、数値やデータを使って議論を展開するのも会議の中では必要となってくる。またそうした現実的、科学的視点が、文系中心の参加者の議論の中で力を発揮し、議論に革命を起こしてくれることもある。それゆえ日米学生会議では毎年、理系学生にも広く参加を呼びかけている。



第60回日米学生会議参加者36人のデータを基に作成

問4.

60回参加者の就職先や就職希望先のデータである。これを見ると、外資系を含む金融やコンサル、総合商社やメーカーが圧倒的に多い。どれも国際的に活躍する場が多い業界である。日米学生会議は日本という国を相対的に見られる機会でもあるので、国際的な視点の獲得に繋がるのだろう。そしてその高い能力をいかんなく発揮する場所に就職していると言える。また、公務員と言っても外務省を目指す者も多く、様々な分野で国際的であるといえる。しかしそんな中ながら、起業やベンチャーを目指すユニークな者も存在する。自分の専攻に閉じこもっていてはなかなか出会えない刺激的な仲間と出会えることは、その後の進路にも大きな影響を及ぼしているのだろう。

こうした多岐に渡る就職先において、先輩方は多大な功績を残している。そしてJASCでの繋がりが、ビジネスや研究上役に立ったと聞くことも少なく無い。先人の偉業を乗り越えて、私たちも数年後に社会で活躍できる人材になり、社会に貢献していく。それが日米学生会議の目指す社会貢献の一つの形でもあるのだろう。

（文責：伊藤昂介　廣田隆介）

第７章

第61回
日米学生会議概要

第61回日米学生会議テーマ

“Toward Global Awareness: Everyday Impact Through Interactive Empowerment”

「日常から世界、日米から地球へ～国際社会を見据えた対話と発信～」

「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである。」1934年、満州事変を契機に悪化しつつあった日米関係を危惧した四名の日本人学生は、この理念を胸に抱き太平洋を渡った。これが日本初の国際学生交流プログラム、日米学生会議の幕開けである。創立以来、参加者たちは国際社会で起きている様々な問題に深い洞察を加えると共に、日米両国の学生間の相互理解を促進し、友情と信頼関係を醸成してきた。毎夏日米交互に開催される約1ヵ月間の会議は、すべて学生の手によって企画・運営されている。

第61回日米学生会議は「日常から世界、日米から地球へ～国際社会を見据えた対話と発信～」というテーマを掲げた。私たちはこのテーマに二つ意味を込めた。

20世紀における日本とアメリカの二国間関係を振り返れば、それは絶えず変化してきた。第二次世界大戦直後の米国による戦後統治、さらには安保闘争や貿易摩擦など幾多の困難を乗り越え、日米両国間の関係は「歴史上最も成熟した二国間関係」と表現されるまでに至った。しかし我々を取り巻く世界に目を向けると、テロリズムに代表される暴力の応酬、環境問題、経済、貧困、民族問題など、日米だけでは解決が困難な様々な課題が溢れている。また、中国やインドなど新興国の発展に視線が集まる中、日米関係への関心は相対的に低下しつつある。こうした現代の世界情勢を踏まえた上で、21世紀における日米同盟の意義や国際社会における日米の役割を考察したいという思いが、「日米から地球へ」という言葉に込められている。

また、分科会では文化や言語の壁を乗り越えながら率直な議論を交わし、フォーラムやフィールドトリップではさまざまな人と出会い、学生としていかに社会に発信できるかを模索する機会がある。この過程で、参加者は自身の考え方や価値観の根幹を見つめ直すことができるであろう。参加者には、第61回日米学生会議を終えて、それぞれが学生としての日常生活に戻り、さらには社会に羽ばたく際に、会議で蓄積された経験を生かし、自らの周囲に影響を与え続けていくことが求められている。さまざまな場で「対話と発信」を繰り返していくことが、やがて世界の諸問題を解決する一助になるであろう。これが「日常から世界へ」という文言の目指すものである。

このような基本理念の下、本年度の日米学生会議は東京、函館、長野、京都の四都市を主要開催地とし、議論と交流を重ねる。私たちは、第61回を迎える当会議の歴史と、それを支えてきた多くの人々の思いを受けとめ、両国学生間の対話の充実を目指し、学生のメッセージを社会に投げかけていく。

主催

財団法人　国際教育振興会

企画・運営

第61回日米学生会議実行委員会

開催期間

2009年7月28日～2009年8月21日

開催地

東京

江戸開府から四百余年。1300万人近い人口を擁する巨大都市に成長した東京は日本の政治経済の中心であると同時に、常に最新の技術と文化の発信地であり続けてきた。世界各国の企業、公館、国際機関が集中しているところを見れば、東京が国際都市であることは一目瞭然である。同時に、浅草や上野など、日本の伝統文化が色濃く残る街もあれば、もはや世界共通語にもなっている、ファッション街の「HARAJUKU」や最新技術とオタク文化の聖地「AKIBA」もある。今や、どこへ行っても人種や国籍の多様性が見られるようになった東京。様々な文化や価値観が交錯するこの大都市から、第61回日米学生会議は国際社会を見据え、日米の学生による対話と発信を開始する。

函館

100万ドルの夜景に朝獲れイカ刺し。年間500万人を集める観光都市として、また日本有数の漁業都市として名を馳せている函館も、江戸鎖国期には松前藩による蝦夷地交易の拠点の一つにすぎなかった。しかし、今からちょうど150年前に日米修好通商条約が締結されると日本初の国際貿易港として開港され、洋館や教会を建築する中で外国文化をいち早く吸収していった。一方で、幕末動乱の舞台となった五稜郭も残っており、異国情緒溢れる街並みと日本の伝統的雰囲気の双方をあわせもつ函館は、日本の近代化とそれに密接に関わってきた日米両国の関係を捉えなおす最適な場と言える。それに留まらず、日米両国と国境を接するロシアを加えながら包括的に国際関係を、また、日本の漁業から世界の海洋資源を、アイヌ民族から世界の少数民族を、と日米の枠を出発点にしながら様々な社会問題を世界全体に敷衍して論じることを目指す。

長野

日本アルプス、八ヶ岳などの雄大な山々、松本城、善光寺といった多数の国宝、重要文化財が存在する長野には年間9000万人程の観光客が訪れる。暑い夏をさわやかに過ごせる避暑地、喧騒から離れて自然を謳歌する保養地などとしても名高い。しかしながら一方、少子高齢化、過疎化、大都市との格差など今日の地方が直面する課題も忘れてはならない。経済活性化に向けた高度技術産業促進、信州農業と魅力ある農村社会へのビジョンなど、地方県政の取り組みを知ることができる重要なサイトでもある。「ふるさと信州」の美しい風景と人々の暮らしを、ホームステイや地域住民の方々との積極的なコミュニケーションを通じて、都市では伝えきれない日本を体感したい。

京都

明治維新まで千年間、日本の都であった京都。足を踏み入れれば、その歴史を見守ってきた寺社仏閣の醸し出す雰囲気に包まれ、日本文化を肌で感じることができる。一方、多くの大学、ベンチャー企業、NGO、NPOが存在し、技術革新や市民活動の先端を担っている。また、京都議定書の採択に代表されるように多くの国際会議の開催地でもある。このように世界に開かれた都市として現在も発展を続ける原動力になっているのは、芸術や工芸などの成熟した伝統と新しい感性とが刺激し合う相乗効果であろう。私たちも、この都市、さらには国際社会を動かす新しい意見の一つとなることを目指して、第61回日米学生会議の1ヵ月にわたる議論の成果を発表する。

会議の過程

第60回日米学生会議の参加者から選出され、発足した実行委員会が、日本側の主催団体である財団法人国際教育振興会、米国側はISC, Inc.の協力の下、本会議開催のための準備活動を行う。4月に参加者決定後、所属分科会のテーマに関するレポートを作成し、講演会や勉強会、合宿などの事前準備を行い、夏の本会議に臨む。

本会議では、日米各36人、合計72名の学生が約1ヵ月に渡って共同生活を送る。本会議の主な活動として、討論が中心となる分科会、各種のフィールドトリップ、そして様々な社会活動、終盤に開催されるフォーラムなどが挙げられる。参加者は7つの分科会に別れ、第61回会議のテーマである「日常から世

界、日米から地球へ～国際社会を見据えた対話と発信～」の下、ディスカッションを行う。また、フィールドトリップでは、各自の視野を広げ、討論の充実化を図る。さらに、本会議では議論に止まらず、ホームステイやフォーラムなど積極的に地域の方々との交流を図っていく。また、フォーラムでは、分科会での討論の結果など本会議の成果を社会に向けて発信する。

本会議終了後には、参加者は会議の内容を報告書にまとめ、第61回日米学生会議の総括とする。各参加者は、本会議で得られた経験を胸に、社会へと巣立っていく。

会議中のプログラム

分科会

本会議においての活動の中心となる分科会は7つ設けられており、日米双方5名ずつの学生が、本会議期間中を通じて議論を重ねることとなる。事前活動に加え、本会議中もフィールドトリップで関連機関や専門家を訪問するなど、議論の質の向上を目指す努力が続けられる。なお、第61回会議における分科会は以下の通りである。

●地球市民教育
Educating a Global Citizenry: What is the ideal education for a globalizing society?
●国際開発と自立的発展～途上国と向き合う～
International Development: Searching For Real Solutions
●世界を動かす新興国～ BRICsの台頭と日米～
Globalizing Economies:The Rise of BRICs in Relation to Japan and the US
●世界の食糧安全保障～生産、流通、消費の再構築～
Food Security and the Future Accessibility of Edible Commodities
●現代社会と健康
Modernized Technology and Health Issues
●環境と持続可能な発展
Environment and Sustainable Development
●公と私：公共の利益は個人の権利と両立できるのか
Public Interest VS Individual Right

Field Trip

分科会の議題や各開催地に対する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO及び研究所などへの訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることができる貴重な機会であり、議論をより現実的視点から行うための礎とする。

Special Topics

限定された議題を扱う分科会とは異なり、参加者が個々の関心に沿った議題を自由に設定し、異なる視点からの議論を行うことを目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見及び議題設定能力を養うと同時により広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想の獲得により、会議をより充実させることも求められる。

Conference Wide Discussion

分科会では扱わないテーマを対象とし、日米学生会議アラムナイや専門家をゲストスピーカーとして招き、第61 回会議のテーマである「日常から世界、日米から地球へ」を掲げ、参加者の見識を広め、新たな課題や視点を発見することを目的とする。

Conference Wide Reflection

参加者が一同に集い、会議中に感じた悩み、不安、感動、喜びなど様々なことを自由に話し合う。自分の思いを全体に伝え、また他者と思いを共有することで、自己を振り返り、他の参加者との相互理解を促進することを目的とする。

Forum

各開催地のテーマに沿って随時行われる。第一線で活躍する専門家や有識者の講演、または学生を交えたパネルディスカッションなど、参加者に学術的経験を得てもらうことを目的とする。さらには、分科会の成果の発表を行い、現代社会が抱える問題とそれに対する学生なりの視点を来場者と共有することによって、第61回日米学生会議の成果を社会に発信することも目的としている。

第８章

日米学生会議にご協力いただいた方々

○第60回日米学生会議主催・後援団体

会議全般

主催：財団法人 国際教育振興会

後援：外務省、文部科学省、米国大使館、財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会、社団法人 日米協会、日米文化センター

ポートランドサイト

後援：Reed College

ロサンゼルスサイト

後援：University of California in Los Angeles、Terasaki Center at the University of California, Los Angeles

モンタナサイト

後援：University of Montana、The Maureen and Mike Mansfield Center, University of Montana

ボストンサイト

後援：Suffolk University、Harvard University、Reischauer Institute, Harvard University

○ご協力頂いた方々

会議全般

財団法人　国際教育振興会
　顧問　山室勇臣
　理事長　大井 孝
　参与　稲田 脩
　事務局　後藤明子
国際教育振興会賛助会
　名誉会長　高円宮妃殿下
　会長　椎名武雄
　副会長　南原 晃
　事務局長　伊部正信
　事務局　好中由紀恵
International Student Conferences, Inc.
　理事長　Robin L. White
　専務理事　Regina Dull
　事務局　Ashley Neeley
外務省
　広報文化交流部　部長　山本忠通
　大臣官房　参事官　廣木重之
　人物交流室長　津川貴久
　人物交流室　外務事務官　小山久子
文部科学省
　大臣官房　国際課　課長　吉尾啓介
　大臣官房　国際課　総務係長　平田純一
米国大使館
　文化担当官　John G. Moran
　広報・文化交流部　教育・人物交流担当官
　　Nini J. Forino
　広報・文化交流部　教育・人物交流室
　　松元美紀子
　広報・文化交流部　教育・人物交流室　大谷桂子
　広報・文化交流部　教育・人物交流室　落合安代
　東京アメリカンセンター
　　副館長　Kevin Olbrysh
　　畠山陽子
　　伊藤亜紀
財団法人　国際ビジネスコミュニケーション協会
　専務理事　吉澤誠司
　広報渉外部　部長　齋藤一彦
財団法人　世界平和研究所　理事長　大河原良雄
国際交流基金
　市民青少年交流課　課長　村上尚久
　　課長代理　日下部陽介
　市民交流課　課長　平野正樹
日本歯科医師会　常務理事　浅野正樹
財団法人　三菱銀行国際財団
　専務理事　須田英一
　企画部長　福田 一
日米教育委員会
　事務局長　David H. Satterwhite
　事務局長補佐　Marigold S. Holmes
社団法人　日米協会　専務理事　渡辺 隆
京王観光株式会社　東京南支店　主任　吉田和明
ブルーバンブー株式会社
　制作局　ディレクター　荒木遼太郎
　制作局　村山裕美子
株式会社千修　第四営業本部　営業第一部
　宇津木義彦
日本放送協会　放送総局　チーフ・プロデューサー
　宮本英樹

朝日新聞社　マーケティングセンター　高部恭子
いちごアセットマネジメント株式会社
　代表取締役社長　Scott Callon
　パートナー　清水早苗
伊藤忠商事株式会社
　総務部　社会対応チーム長　木島直人
　総務部　社会対応チーム(兼)総務部長付
　　石川恵美子
ヴィジョネア(株) 代表取締役社長　内古閑 宏
協和発酵工業株式会社
　コーポレートコミュニケーション部
　IR担当　マネージャー　本田健志郎
社団法人　大阪日米協会　事務局　重松澄広
オタフクソース株式会社
　マーケティング部販促グループ　坂本万佐子
株式会社公文教育研究会
　グループ広報室　東京広報デスク　小林聖佳
　グループ広報室　東京広報デスク　鈴木麻里子
　グループ広報室　東京広報デスク　伊藤美香
住友商事株式会社
　金融事業本部長　高井裕之
　ウェブビジネス事業企画部　出浦直子
　文書総務部　森中安昭

事前活動(分科会を除く)
独立行政法人
　国立オリンピック記念青少年総合センター
日本外国特派員協会
　オペレーションズアシスタントマネジャー
　　斎藤礼子
青山学院大学　客員教授　佐野光質
早稲田リンクス
衆議院議員　松原 仁
衆議院議員　塩崎恭久
同志社大学　法学部　教授　村田晃嗣
立命館大学
　衣笠セミナーハウス
　国際部衣笠国際教育課　課長補佐　田中清子
Youth Theatre Japan　広報部長　安宅 昇
　　長坂 守
Vital Japan　小田康之
国際教育交換協議会(CIEE)
　スタディーセンター・ディレクター
　　Steven Houghton
早稲田大学国際教養学部留学生の皆さん
Speech&Debate　井上敏之
KIPP Forum　パッカード啓子
Nano Japan Program 留学生の皆さん
在日米国大使館
　安全保障政策課　課長補佐　Sangmin Lee
在日米軍司令部(横田基地内)
　広報部長　Eric Schnaible
　広報部　渉外担当　江川淳子
Chandra Baby English
　ダーニング・舞子・シャンドラ
防衛大学校　校長　五百旗頭真
防衛大学校学生の皆さん
在日米海軍横須賀基地
　司令官　Daniel Weed
東京大学　検見川セミナーハウス

分科会事前活動
衆議院議員　小池百合子
衆議院議員　越智隆雄
関西電力株式会社　地球環境室　砥山浩司
株式会社電通　第8営業局　吉野次郎
株式会社電通　サッカー事業局　金 大鐘
日本テレビ放送網株式会社
　情報エンターテイメント局　秋山健一郎
　人事局人材育成部　関 健一
東京大学大学院工学系研究科原子力専攻
　准教授　木村 浩
株式会社ソニー・ピクチャーズエンタテインメント
　林 大介
　馬越彩子
骨董通り法律事務所
　弁護士・ニューヨーク州弁護士　福井健策
社団法人　日本経済団体連合会　社会第二本部
　企業・社会グループ副長　長沢恵美子

Nikkei America, Inc.
　Business Development & Advertising Senior Manager
　田邉 雄
東レ株式会社　CSR推進室長　松野健三
東レ株式会社　人事部　人事採用課長　小西明子
東京医科歯科大学　准教授　田中智彦
聖路加国際病院　理事長　日野原重明
日本二分脊椎症協会　会長　鈴木信行
東京大学　教授　班目春樹
自治医科大学　教授　Alan Lefor
岐阜大学 助教授　阿部恵子
岐阜大学　教授　塚田敬義
参議院議員　中山恭子
私立沖縄尚学高校の皆さん
京都府立桃山高校の皆さん
慶応大学経済学部　准教授　柏崎千佳子
早稲田大学国際教養学部　教授　岩渕功一
財団法人　自治体国際化協会(CLAIR)

ポートランドサイト

Consulate General of Japan in Portland
Japan-America Society of Washington, Inc
Mrs. Leila Wice
Mrs. Kiyo Endecott
Mr. Jim Tsugawa
Mrs.Brenda Benham
Mrs.Megan McElroy
Mr.Matthew Turner

ロサンゼルスサイト

Ball Corporation
Consulate General of Japan in Los Angeles
Greenberg Traurig, LLP
So Cal Computer Recyclers
Stewart Filmscreen Corporation
Marik Birdo
Mrs.Gina Nieto
Prof. Victor Bascara
Prof. Curtiss Takada Rooks
Prof. Edward Fowler
Prof. Teresa Williams-Leon
Mr.Sam Russell
Mr.Randy Lewis
Mr.Tom Stewart
Mr.Steven Macias
Mr.Ken Uriu
Mr.Ron Ohata
Mr.William Knox
Mr.Ron Quezon
Mr.Douglas Erber
Mr.Jerry London
Prof. Seth Jacobowitz
Prof. Mariko Tamanoi
Michael Pless
Mr.George Tanaka

モンタナサイト

Benefield, Gayla
Campus Inn
　Orser, Teri
CFRTAC
　Kustudia, Michael
Doubletree Hotel
Environmental Protection Agency
　Hammer, Diana
Holiday Inn Express
　Hungate, Mona
HomeWORD
International Choral Festival
Japan Friendship Club of Montana
Jeannette Rankin Peace Center
KPAX-TV
　Marquand, Ian
Libby High School
　Reckin, Gene
　Gruber, Jeff
MCT Center for Performing Arts
　Kukla, Don
Missoula Cultural Council
Missoula in Motion

Stokman, Alex
Missoula Institute of Sustainable Transportation
Giordano, Bob
Missoula International Friendship Program
Fluck, Udo
Missoula Mayor's Office
Engen, John
Coyle, Melani
MonTEC
Rocky Mountain Museum of Military History
Fort Missoula
Jones, Tate
Running, Steven
Smokejumpers Center
Cottrell, Daniel
The Maureen and Mike Mansfield Center
Weidner, Terry
Marlow, Christopher
The University of Montana
Dining Services
Events & Planning
Tucker Transportation
Western Montana Fair
Misbe, Eunice
Wilderness Watch
Women's Voices for the Earth

ホームステイをお引き受けいただいた皆様

Ayoub, Charyn
Barker, Judy and Hayes, Steve
Pruitt-Chapin, Kate
Coyle, Craig & Melani
Mulligan-Dague, Betsy & Rusty
Decker, Darryl & Mary
Dudden, Jennifer
Flanagan, Michael & Louise
Gessner, Stephen
Greenhoe, Shirley & Greg
Grimm, Karrie
Kelly, Mary
Little, Warren
Marquand, Ian
McArthur, Steve
McDonald, Ethel
Pulleyblank, Caitlin
Rosscup, Shawn
Marra, Nancy
Stokman, Dale
Woolhiser, Dale

ボストンサイト

Prof. Pharr Susan
Dr. Gilman Theodore
Mrs. Stacie Matsumoto
Mrs. Higo Montana
Mr. Peter Grilli
Mr. Geraldine M. Cuddyer
Mrs. Christina Andronico
Mrs. Julie Burns
Mrs. Anne Bragle

○日米学生会議アルムナイ協力者

天野順一、荒島由也、飯田智紀、市川裕康、井上敏之、井上雅章、井上裕太、岩崎洋一郎、梅崎 渉、江川響子、大高 巽、大原 学、金井 隆、木ノ上高章、小林悦子、小林規威、真田雄太、塩崎哲也、島村明子、杉田道子、住野 豪、竹内幸美、武田興欣、千代明弘、辻喜久子、出浦寛子、中瀬正一、中村信之、中山智夫、西田尚弘、乗竹亮治、ハナ・ハイネケン、波多野綾子、廣田良平、グレン・フクシマ、降旗健人、寶槻徹、細野恭平、源 飛輝、宮崎あゆみ、山田裕一朗、山室勇臣、山本東生、吉野次郎、吉原健吾、
第59回日米学生会議実行委員会／参加者一同

○賛助者・団体・企業

財団法人　国際ビジネスコミュニケーション協会
財団法人　日商岩井国際交流財団
財団法人　平和中島財団
財団法人　三菱UFJ国際財団
社団法人　日米協会
社団法人　大阪日米協会

アサヒビール株式会社
イオン株式会社
エアバス・ジャパン
株式会社オリエンタルランド
キッコーマン株式会社
株式会社三和
新日本製鐵株式会社
住友スリーエム株式会社
住友不動産株式会社
セコム株式会社
株式会社セブン＆アイ・ホールディングス
大成建設株式会社
株式会社竹中工務店
株式会社電通
東京海上日動火災保険株式会社
東京ガス株式会社
東京電力株式会社
トヨタ自動車株式会社
中辻産業株式会社
日産自動車株式会社
日本アイ・ビー・エム株式会社
野村ホールディングス株式会社
株式会社日立製作所
富士ゼロックス株式会社
富士通株式会社
本田技研工業株式会社
松下電器産業株式会社
三井不動産株式会社
三井物産株式会社
三菱地所株式会社
三菱重工業株式会社
三菱商事株式会社
株式会社三菱東京UFJ銀行
三菱UFJリース株式会社
メルシャン株式会社
橘・フクシマ・咲江
堤 清二
南原 晃
西田尚弘
橋本 徹

いちごアセットマネジメント株式会社
伊藤忠商事株式会社
ヴィジョネア株式会社
協和発酵工業株式会社
株式会社公文教育研究会
住友商事株式会社

編集後記

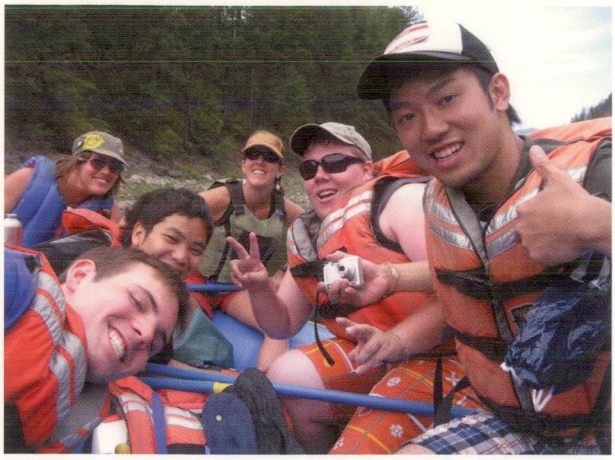
総ページ数163ページ、執筆担当者50人超、構想・執筆・校正にかかった延べ日数200日以上。このような巨大報告書制作プロジェクトに学生時代から携われることは、多大な喜びであると同時に大きな挑戦でもあった。限りある紙面をどのように配分するか、本会議終了後もいかに実効委員や参加者のモチベーションを維持するか、賛助者リストに間違いは無いか、字体や語調は統一されているかなどなど、数ある困難を乗り越えながらとうとう製本まで漕ぎ着けた。そして困難に直面した際には常に己の力の微力さを知り、仲間の協力の有難さを身に沁みて感じた。この場を借りて、報告書作りに携わってくれた参加者、実行委員にお礼を言いたい。

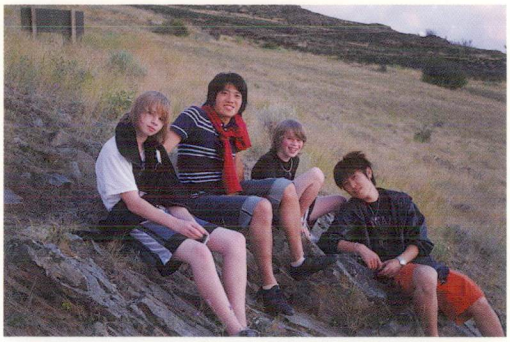
最後に、これまで日米学生会議をご支援いただいた全ての方々に、ここで改めて厚く御礼申し上げたいと思います。この報告書が皆様の目に留まり、日米学生会議へのご理解を深めていただければ幸いです。そして、どうぞ忌憚のないご意見を日米学生会議にお寄せください。この報告書が日米学生会議と支援者の皆様、そして日米学生会議へ興味をお持ちの学生の皆様との媒介となることを願いながら、第60冊目の報告書を世に送り出します。

第60回日米学生会議実行委員　廣田隆介
2008年11月29日

第60回日米学生会議実行委員

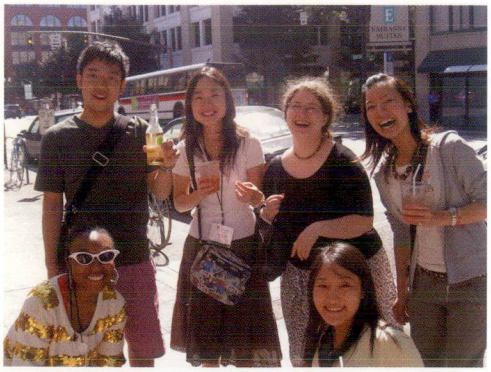
編集スタッフ
廣田隆介、松尾恵輔、伊藤昂介、神馬光滋、高畑乃枝、田中 豪、油井英孝
発行
財団法人 国際教育振興会
企画・編集
第60回日米学生会議実行委員会
〒160-0004 東京都新宿区四ツ谷1-21
http://www.jasc-japan.com/

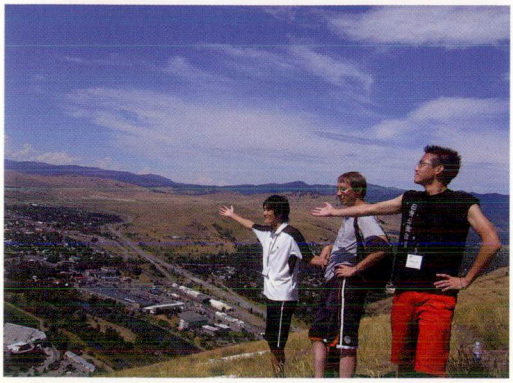


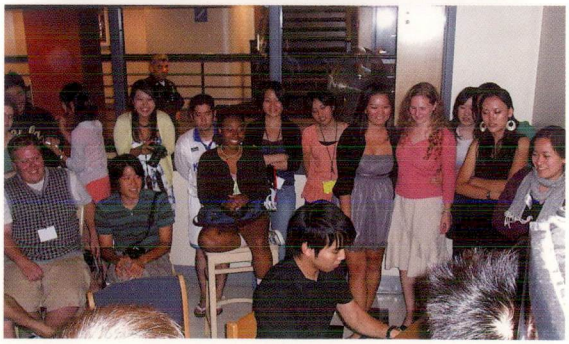


THE NORTH FACE
JASC

WELCOME TO
WCT'S







Japan-America Student Conference
Since 1934

主　　催　　財団法人国際教育振興会

INTERNATIONAL EDUCATION CENTER

企画・運営　　第60回日米学生会議実行委員会